

いちき串木野市
郷土史料集2
「金山編」



写真提供:三井串木野鉱山株式会社

いちき串木野市教育委員会

発刊のことば

本市は「人が輝き文化の薫る世界に拓かれたまち」を将来都市像に掲げ、市政を推進しております。

市内には指定文化財をはじめ、多くの史跡や歴史的な史料が眠っており、こうした史料等を掘り起こし、貴重な財産として後世に末永く残すべく、郷土史料集としてまとめることにいたしました。

そこで、平成 27 年度には第 1 集として市制施行 10 周年記念を兼ねて「民話・祭り編」を刊行いたしました。今回は前回に引き続き第 2 集として「金山編」を刊行することとなりました。

史料収集に際しては特に三井串木野鉱山株式会社から貴重な歴史史料の提供をはじめ、関係団体、市民の方々の多大なるご支援、ご協力賜り、深く感謝申し上げます。

調査で得た史料はすべては掲載できませんでしたが、皆様から提供いただいた史料については、それぞれの分野ごとに郷土史料集として発刊できるよう保存していきたいと存じます。本史料集が、市民をはじめ広く活用され、郷土への愛着と文化財の理解の一助になれば幸いに存じます。

最後になりましたが、本史料集をまとめるにあたり調査にご尽力いただきました郷土史料調査員の方々に対し、深く感謝申し上げます、発刊のことばといたします。

平成 30 年 3 月

いちき串木野市長 田 畑 誠 一

例 言

- 1 本書はいちき串木野市郷土史料集 2 である。
- 2 調査については、いちき串木野市教育委員会が主体となり、郷土史料調査員が実施した。
- 3 本書の執筆については、郷土史料調査員が行い、郷土史料編集員会で編集した。
- 4 古写真や図面等に関しては、三井串木野鉱山株式会社より多数提供していただいた。
- 5 各史料の解説は、郷土史料調査員の見解をもとに行った。
- 6 地名、人名、難読等については编者により適宜ふりがなを付記した。
- 7 方言についてはカタカナ表記で表記した。
- 8 指定文化財に関しては、登録名称で表記した。
- 9 参考文献、引用文献については文末に記した。
- 10 地名の表記については、登記上は大文字「ケ」で登記されてあるが、本書では古来より使用されている小文字「ヶ」で表記した。

いちき串木野市郷土史料編集の組織

調査の組織（平成28年度）

調査主体者	いちき串木野市教育委員会			
調査責任者	〃	教 育 長	有 村	孝
調査庶務	〃	社会教育課長	久木野	親 志
	〃	社会教育課長補佐	高 瀬	薫
	〃	主幹兼文化振興係長	新 町	正
	〃	主 任	富 岡	宗 平
	〃	史料収集調査員	中 島	朋 子
調査担当者	郷土史料編集委員会	郷土史料調査員	所 崎	平
	〃	〃	森 田	清 美
	〃	〃	石 堂	次 美
	〃	〃	徳 重	涼 子
	〃	〃	寺 田	緑

編集の組織（平成29年度）

編集主体者	いちき串木野市教育委員会			
編集責任者	〃	教 育 長	有 村	孝
編集庶務	〃	社会教育課長	久木野	親 志
	〃	社会教育課長補佐	高 瀬	薫
	〃	主幹兼文化振興係長	新 町	正
	〃	主 事 補	堀之内	元 気
	〃	史料収集調査員	中 島	朋 子
調査担当者	郷土史料編集委員会	郷土史料調査員	所 崎	平
	〃	〃	森 田	清 美
	〃	〃	石 堂	次 美
	〃	〃	徳 重	涼 子
	〃	〃	寺 田	緑

金山編 目次

1 概説	日本金山開発史のなかでの串木野金山の位置づけ	9
(1)	日本における金の採取	9
(2)	日本での金鉱山の開発のはじまり	10
(3)	金鉱山開発ブーム	12
(4)	薩摩藩における金山開発	13
(5)	芹ヶ野金山の開発	18
(6)	石臼の問題	20
(7)	製錬	23
(8)	役職と運営	23
(9)	金山の社会	25
(10)	遊郭の経済学的意味	25
(11)	犯罪と刑罰	26
(12)	明治以降の串木野金山	26
2 串木野鉱山の概要		30
(1)	はじめに	30
(2)	串木野鉱山の鉱脈群	30
(3)	串木野鉱山鉱脈一覧表	31
(4)	金山で使用された道具	32
	ア 水銀壺	
	イ 汰鉢(ゆりばち)	
	ウ 粉碎筒(左)と金床臼(右)	
	エ カタギン(肩衣)	
	オ ダッテゴ(金山テゴ)とテゴン子	
	カ 金山靴	
	キ 竹製マット	
(5)	鉱山臼	39
	ア 薩摩の鉱山臼の特徴	
3 現在の鉱業		43
(1)	三井串木野鉱山(株)の操業	43
	ア 貴金属精錬事業	
	イ リサイクル事業	
	ウ 全泥式青化製錬法の概要	

(2) 赤石鉱山	45
4 いちき串木野市内の各金山の概要	47
(1) 芹ヶ野金山	47
歴史	
ア 西山坑(一坑)	
イ 芹ヶ野坑(二坑)	
(2) 芹場金山	50
歴史 上名坑	
(3) 荒川金山	50
歴史	
ア 荒川鉱山について	
イ 鉱石ウセ(鉱石を馬や牛の背中に負わせること)	
ウ 三井の精錬所で利用する水を野元・平江の田圃の用水に生かす	
(4) 羽島金山	52
歴史	
ア 羽島坑	
イ 羽島鉱区	
5 言い伝え・由来など	54
(1) 1千戸集落	54
(2) 茶屋や風呂屋、料理屋などで大賑い	54
(3) 金を掘る人々の墓	54
(4) 法華谷の阿弥陀如来像が信仰されていた意味	55
(5) 冠岳で活躍した金山水車—冠岳に金が出るの?—	56
(6) 金山峠を越えた学者や歌人	57
ア 三井ヶ丘の、東シナ海の水平線に目を注ぐ福德観音	
イ 新原喜左衛門の墓	
(7) 金山よもやま話	57
ア 金鉱石を砕く水車小屋と山太郎ガニ	
イ ドベの入った田圃	
ウ 碾金の話	
(8) 自稼山(じかやま、じかせぎやま)	58
(9) 昔の金の採掘(トロッコで金鉱石を運んでいた頃の話)	60
(10) 馬の尻振りダンス—トロッコでの運搬	61
(11) 落盤事故などで死人が出たとき	62

【参考】永野金山のシキジロ

(12) 青年団修業の場、文友舎の思い出	64
(13) 水車が盛んに回っていた頃.....	64
(14) 労働者のために 8 時間労働制の画期的改革	66
(15) 串木野の発展を助けた金山.....	66
(16) 旭中学校建設の資金作りに金鉱石運び	66
(17) 金山に関する伝説一牛に化身した神一	67

【参考】赤牛と金山

(18) 山ヶ野金山の例	68
(19) 馬上金山の例	69
(20) 奥田栄之進経営の始良市蒲生町漆鉱区	69

6 資料..... 72

(1) 古文書	72
ア 芹ヶ野金山試掘日記について.....	72
(ア) 『森山太助芹ヶ野金山試掘日記』	
(イ) 『須木并芹ヶ野金山御試掘一件萬留』	
イ 近代化する芹ヶ野金山	83
ウ 『日記 水車詰中 市来氏 慶応 3 年丁卯 4 月～明治 2 年巳 4 月 23 日』より	90
エ 自稼山の移り変わり(明治 21 年～昭和 18 年)	95
オ 竹中幸之助(他 6 名)が交わした(蒲生金山試掘願)契約書	101
カ 福岡鑛山監督署の採掘権者と鉱山名(串木野部分)	105
キ 入来定穀の自稼山奮闘記.....	115
ク 『岩谷鉱山と荒川鉱山の売渡し記録』より	129
(2) 鹿児島県史料『薩摩藩法令史料集 1』意訳.....	137

7	用語解説.....	152
8	写真.....	154
9	図版.....	172

1 概説

日本金山開発史のなかでの串木野金山の位置づけ

鹿児島大学名誉教授 新田栄治

(1) 日本における金の採取

金は錆びず、美しい色と輝きを持ち、他の金属と比べてきわめて産出量が少ないため、古くから貴重な金属として扱われてきた。

現在見つかっている最も古い金製品は、前 5 千年紀のブルガリア・ヴァルナ遺跡で発見された墓の人骨に伴うボタンや円盤などの金製品である。古代エジプトや中国でも金製品や貨幣が使われていた。例えばツタンカーメン王(前 1370 頃～前 1352)の黄金のマスクや四川省・三星堆遺跡(前 2000 年ころ)の金箔を貼った青銅製人頭像、春秋・戦国時代・楚国の金貨である金版など、多くの金製品がある。また、世界初の金貨は前 640 年ころ現在のトルコ南西部にあったリュディアで作られたエレクトロン貨⁽¹⁾であった。このように、金はその特徴から装飾品、儀礼品、威儀を表す器物、貨幣等に使われてきた。

日本において金が現れるのは弥生時代からである。57 年に後漢・光武帝から下賜された 22 金の「漢委奴国王」金印をはじめ、青銅に金メッキを施した漢代の車馬具⁽²⁾などが弥生時代の遺跡から出土する。しかし、これらは日本で産出した金ではない。また古墳時代には埼玉県稲荷山古墳出土の金象嵌「辛亥」銘鉄剣(476 年)や、奈良県東大寺山古墳出土の金象嵌「中平」(後漢・靈帝の年号、184-189 年)銘鉄剣、金製や鍍金の装身具や儀器など、さまざまな金製品が古墳の副葬品として現れる。これらの金も日本産の金であるか明確ではなく、その多くは中国、朝鮮の金である。

日本においていつ頃から金が採取されたかについては、『扶桑略記』や『続日本紀』などの記録から 8 世紀頃とする伝承がある(眞保 2013)。前者には天平 21 年(749)正月の、后者では同年 2 月の記事の中に、陸奥国小田郡(現・宮城県遠田郡涌谷町小金迫)で金が発見され、陸奥守・百済王敬福は黄金 900 両(38kg)を政府に献納したことが記されている。その褒賞として敬福は従五位から従三位に、陸奥介従五位下佐伯宿禰全成を従五位上に昇格させたほか、他の関係者にも同様の褒賞を与えた。砂金採取に関係した人々は百済系氏族の人々であった。このほか、初期産金においては、百済や新羅からの渡来系氏族の人々が関与しており、朝鮮からの新しい技術や知識が重要な役割を果たした。

天平勝宝 4 年(752)2 月には陸奥国多賀郡以北の諸郡においては、調と庸として正丁 4 人に 1 両の金が課せられるようになり、陸奥国での産金が順調に推移したことを推定させ、奈良時代には陸奥国が金の産出地として重要な位置を占めていたことがわかる。これらの金は東大寺大仏建立に必要な鍍金用の金の需要に応じたものであろう。『東大

寺要録』によれば大仏建立のために必要な金は 440kg に上ったという。東大寺大仏は天平勝宝 4 年(752)に開眼したが、近江国や下野国などでの産金があったことを推定させる話が『扶桑略記』や『東大寺要録』などに出てくる。このように記録から見れば日本での金の初出は 8 世紀中ころ、陸奥国であった。これらの金はすべて砂金であった。

大仏完成後の金の最大の使用目的は遣唐使派遣費用であった。『続日本紀』によれば、承和 2 年(835)2 月、砂金を採る山に座しているとして下野国武茂神に従五位下を叙し、またその翌年には金産出量が数倍に達したため、産金地である八溝山のある八溝黄金神に封戸二烟を充てている。このように 9 世紀～10 世紀には下野国でも多くの金が産出されていた。

駿河国でも砂金が採れた。『続日本紀』天平勝宝 2 年(750)3 月に蘆原郡多胡浦で金が採れたこと、翌年にも金を得た人に対しての叙位と布や稲の報奨が与えられ、郡に対する田租の免除がなされた。

以上のように古代においては、陸奥と下野を重要産金地帯とし、それ以外にも各地に金を産するところがあった。当時の政府にとって金は貴重な財源の一つであり、産金を奨励し、叙位、封戸などの褒賞を行っていた。

(2) 日本での金鉱山の開発のはじまり

古代における金の採取は砂金採取であった。金鉱脈が風化して、露頭周辺に集まったものを「山金」、流れ落ちて河岸に堆積したものを「柴金」、川底に堆積したものを「川金」という。古代には「柴金」と「川金」の採取を行っていた。金の鉱脈を発見して、鉱脈の露頭を掘り、さらには坑道を掘って金鉱石を採掘するようになるのは 15 世紀末ころからである。当時、各地の戦国大名たちは軍事費財源確保のために、競って金銀鉱山の開発に熱をあげていた。尼子・大内・毛利氏が領有を争った石見銀山、天正 17 年(1589)に越後から佐渡に侵入して平定した上杉氏の佐渡金銀山(西三川砂金山、鶴子銀山)、佐竹氏の常陸の金銀山、今川氏の大井川流域の金銀山、武田氏の甲州金山など、多くの例がある。

初期の金鉱山の代表例が山梨県甲州市・黒川金山である(今村・桜井編 1997)。黒川金山は武田氏によって 16 世紀初めに開発された金山である。16 世紀中ころに産金のピークを迎え、武田信玄の軍資金を支えたともいわれる。しかし天正 5 年(1577)には「於金山黄金無出来」と記した文書が黒川金山衆の屋敷から見つかっており、また武田勝頼が天正 5 年に黒川金山の再興を願って鶏冠神社に奉納した鏡もある。したがって天正 5 年ころには枯渇しはじめたようである。高品位の鉱石を回転式石臼によって細粒化し、物理的に金を得る方法はここで始まった。石見銀山をはじめ、当時すでに行わ

れていた灰吹き法などの精錬を行う必要もなかった。黒川金山の特徴をなす「黒川型臼」は、回転軸を通す軸穴と金鉱石を挿入する供給口とが供用されているものであり、このタイプの石臼は黒川金山に従事していた金掘衆・黒川衆とともに全国に拡散した。武田遺領の金山支配の任にあった大久保長安が慶長 9 年(1604)に佐渡代官となり、黒川金山の金山衆や金山技術は、江戸時代になると天領となった佐渡金山の開発に向けられた。さらに各地の大名に招かれており、例えば水戸藩では黒川衆の長瀬半兵衛が山師として金山開発に関わっている(萩野谷 2013a)。このように、黒川金山の技術が近世日本の鉱山技術の原点となった。

同様に山梨県身延町・湯の奥金山(中山金山、茅小屋金山、内山金山の 3 金山の総称)でも 15 世紀末頃から金山開発が行われた(萩原編 1992)。武田氏一族である穴山氏の金山である。ここでは山金の露天掘りが中心であった。湯の奥金山では「黒川型臼」とは特徴を異にする「湯の奥型臼」が使用された。これは軸穴とは別個に供給口を設けた上臼であるが、現在までに確認された数はきわめて少なく、全国へ波及したものではない。

黒川型臼も湯の奥型臼も、下臼中央の穴に差し込まれた鉄製の棒が心棒であり、上臼の軸穴はこの鉄製心棒に挿入されるが、上臼軸穴の直径は心棒の直径よりもかなり大きいため、上臼が回転すると回転軸が不安定となり、頭振り運動をする。その結果、軸穴には心棒との接触・摩耗で生じた不規則な摩耗痕跡が残る。また、下臼には凹レンズ状の摩耗痕が生じ、粉成によってできた金鉱石の微粉末が流下しづらくなる。このような欠点を改善するために、17 世紀初めになると、「レンズ」₍₃₎ という、中央に穴をあけた長方形の板を上臼軸穴にはめこみ、レンズの穴に心棒をさしこむようになる(今村 1990)。レンズの採用により、臼の回転が効率的となった。

日本の貴金属生産において甲州は重要な役割を演じたが、鉱山技術だけでなく、江戸時代の貨幣制度のもととなったのも甲州金である。山梨県各地で出土している一定の重さ(平均 15g)を持った小判状の金「蛭藻金」、一定の重さ(13~15g)を持った碁石状の「碁石金」、さらに笛吹市春日居町下岩下出土の金大判(160g 前後)3 枚等がそれらの例である(今村 1997、萩原 2017a、2017b)。甲州においては 16 世紀の早い段階で金が貨幣化しており、貨幣単位も成立していった。また、甲州市勝沼町福寺遺跡出土の蛭藻金の表面には、江戸時代の小判と同じく槌目が残っており、蛭藻金から小判への道筋がたどれる。甲州金の貨幣制度は金貨での 1 両=4 分=16 朱という四進法の貨幣制度である。その起源は甲州にあったが、それを徳川幕府は引き継いだ。徳川幕府成立後、甲州金山の人員と技術は佐渡に移動し、さらに各地に拡散していった。

(3) 金鉱山開発ブーム

慶長～寛永年間、つまり 16 世紀末～17 世紀中ころにかけて日本では各地で金銀山開発が盛んに行われるようになった。戦国時代には軍事費捻出のために、戦国時代が終わると財政破綻した各大名家の財政再建のために、金銀山開発は喫緊の課題となった。

東日本では、佐竹氏、上杉氏が盛んに金山開発・経営を行った。上杉氏による越後黄金山金山(村上市)では 16 世紀後半から 17 世紀前半に開発と稼業が行われた。ここでは黒川型白が多数残っている(横山 2013)。いっぽう、16 世紀後半～17 世紀に開発された東日本の金山には、多くの場合、黒川型白は消え、リンズ白が一般的となる。水戸徳川家の領内にあった下津原金山(茨城県久慈郡太子町)や、栃原金山(茨城県久慈郡太子町)、木葉下金山(水戸市)、大内金山(栃木県那須郡那珂川町)などではすべてリンズ白を使っていた。また、白の側面を丁寧加工して、円柱状にしたものが一般的である(萩野谷 2013b-e)。

武田家の支配下にあった信濃国の金山でも、東日本と同様にリンズ白が用いられた。例えば梓久保金山(長野県南佐久郡川上村)では残存する白はすべてリンズ白である(長崎 2013)。梓久保金山では慶長通宝が出土したが、寛永通宝は全くなく、慶長通宝の発行年 1606 年ころと推定できる。したがって、17 世紀初頭にはすでにリンズ白が一般化していたことになる。

北陸においても、加賀前田家が金山経営を行った。松倉金山(魚津市)は加賀藩の財政基盤であった初期金山である(麻柄 2013a)。最盛期は慶長年間であり、残された白は側面を丁寧加工した円柱状のリンズ白である。また独特形状の物配り溝をもつ。同様の白は虎谷金山(魚津市)でも見つかっている。元和元年(1615)頃に発見された金山である(麻柄 2013b)。

九州では豊前小倉の細川氏、久留米の有馬氏、豊前中津の小笠原氏らが金山開発に注力する。細川氏による呼野金山(北九州市)(中村 2013a)は元和 7 年(1621)ころに開発が始まり、金山奉行として春木金太夫が任命された。採銅所金山(北九州市)は元和 8 年(1622)に開山した(中村 2013b)。いずれも細川氏直営の金山であった。採銅所金山の間歩のひとつ、百舌鳥原間歩では直径 2m にもなる大形の組み合わせ式白が出土した。この石白の性格は不明である。有馬氏が関与した星野金山(八女市)は寛永 20 年(1643)より採掘され、明暦元年(1655)に成績不良のために止めている(中村 2013c)。星野金山の白は独特の特徴を示しており、黒川型の特徴を持ち、形状は長方形、円形と、他にはない特徴を持っている。同様の方形白は草本金山(中津市)からも出土している。草本金山は小倉・細川氏、後に中津・小笠原氏、さらに幕府日田代官が関与している(中村 2013d)。寛永 5 年(1618)に開発がはじまったと推定できる。

以上のように 16 世紀～17 世紀中ころにかけて各地で金銀山開発が盛んに行われ、幕

府もそれを認めていた。鉱山開発には高度な知識、技術、経験が必要であり、16世紀には坑道掘り技術を応用した敵城破壊などの軍事技術との関係を保ちながら、先進地ではすでに確立されていた。1556年にドイツで出版された鉱業技術書『*De Re Metallica*』では、自然科学全般の知識、薬学、天文学、探査科学、算術、建築学、描画、法律の知識の8つの必要条件を記している(Agricola 1556)ように、鉱業は総合科学であった。

技術的な問題については、北陸～東日本と九州とでは上臼の特徴が大きく異なることである。北陸～東日本では、16世紀末～17世紀初めに、黒川型からリンズ臼への転換が済んでいた。ところが、九州では17世紀中頃においても黒川型臼が使われている。リンズ臼がまったくないわけではなく、きわめて少ないが、リンズ臼も残っている。越後黄金山金山では黒川型臼が使われており、薩摩藩の金山でも同様に黒川型臼を使っていた。また、九州では臼側面の加工・整形に注力されておらず、自然石の状態のままであったり、粗い加工だけにとどめたりする傾向がある。現時点では中国・四国地方での回転臼の調査がないため⁽⁴⁾、不明の点が多いが、九州は金山開発の時点で他地域とは異なった技術伝統をもっていたらしい。あるいは16世紀末～17世紀初めに黒川型臼が全国展開を見せたが、その後リンズ臼が東日本で作られ、中部、関東、加賀ではリンズ臼への転換が進んだが、その外隣の九州や、越後では黒川型臼がそのまま残ったのかもしれない。

(4) 薩摩藩における金山開発

薩摩藩は九州全土を支配下におさめる直前までいったように、戦国期の度重なる戦争による戦費の増大と領地が旧来の薩摩・大隅・日向の一部に限定されたことにより、『薩藩旧記雑録』によると17世紀初頭、初代藩主・家久の時代において家臣に半知を行うなど、すでに藩財政は破綻しており、膨大な借銀があった。その返済と藩財政の立て直しのために、新たな財源の確保は喫緊の課題であった。そのため貴金属鉱山の開発は藩の重要な政策となった。

17世紀前半は日本各地で貴金属鉱山の開発が活発に開始された時期であり、九州では有力大名らによって呼野金山、採銅所金山、星野金山、草本金山、鶴成金山などが開発された。薩摩藩も同様に金山開発の努力を行っていく。金山開発には高度な知識、技術、経験が必要であるが、当時の薩摩にはそれらはなかった。したがって、他所から経験豊富な山師を連れてくる必要があった。薩摩藩の金山開発初期に名前が出てくるのは、石見銀山系の内山予右衛門と肥後・宇土の笠伊兵衛尉⁽⁵⁾のふたりである。

近世に薩摩藩内において開発された金山は、山ヶ野金山(長野金山)(霧島市、さつま町、伊佐市)、芹ヶ野金山(いちき串木野市)、鹿籠金山(枕崎市)、神殿金山(南九州市)の4金山である。そのうち山ヶ野金山は最初に開発された最重要金山であった。開発

及び操業年代は以下のとおりである。

山ヶ野金山：開発 寛永 17 年(1640)。操業 寛永 19 年(1642)。再稼業 明暦 2 年(1656)～1965 年閉山。

芹ヶ野金山：開発 万治 3 年(1660)。操業 万治 3 年(1660)～天和 2 年(1682)、元禄 14 年(1701)～享保 2 年(1717)、寛政 5 年(1793)～慶応元年(1865)。1994 年閉山。

鹿籠金山：開発 天和 3 年(1683)。操業 天和 3 年(1683)～享和元年(1801)。以後一時再開。1943 年閉山。

山ヶ野金山の開山については幕末に筆記された 3 つの史料、幕府巡検使への想定問答集『金山にて御答可申上太概』(天保 9 年(1839))、『山ヶ野金山御取建之由緒』(弘化年間(1844～48))、『金山開基』(弘化 2 年(1845))、に共通した内容が記されており、一般にはそれが流布し、ほぼ事実とされてきた(以上 3 つの文書は、石川 1994 に所収)。東南アジア初期国家のひとつ「扶南」の建国神話に代表されるように、史料の成立順に簡略な記述から、より詳しい記述へと変化していることにみられるように、よくあることであるが、説明の内容は 3 史料の成立順にしだいに詳しい記述となっており、このことから開山説話にしだいに尾ひれがつき、整備されていったことが推定できる。成立がもっとも新しい『金山開基』はもっとも詳細に記している。上記 3 史料の記された山ヶ野金山開山の事情は次のようである。

開山にまつわる通説 (作られた伝説)

「長野山ヶ野金山の基は宮之城島津家の島津久通が家老になる(家老就任は正保 2 年(1645))以前のことである。久通の私領・宮之城佐志村の川の中で吉砂をとりあげた者がいた。この吉砂を調べると砂金であったので、この川の上流には金気があるだろうと考え、そのために石見銀山にいた内山与右衛門は肥後国宇土郡の半屋為右衛門を宮之城に派遣させ、2～3 年間、曾木、本城、長野あたりの山、谷、川を探索させた。寛永 17 年(1640)3 月 22 日、長野の宍焼谷の川から内山与右衛門が砂金を発見したので、土中を探索させた。そこで久通は試掘して得た砂金を、藩主光久が江戸にいたときに献上して事情を話したところ、光久はさらに試掘を継続するように命じた。そこで試掘を継続し、得られた砂金 300 匁(1,125g)を江戸に送ってお伺いをたてた。6 月 15 日、重臣の伊勢貞昌からさらに試掘を継続するように命じられたので、さらに試掘を継続した。寛永 18 年(1641)8 月 28 日、砂金 980 匁(3,675g)を献上した。寛永 19 年(1842)正月 14 日、幕府より金山の本格的開山の命令が下った。奉行の北郷久加(さつま川内市平佐の領主)は他国出身者 2 万人余を集め、本人も山ヶ野金山に滞在した。掘り出し

た金は数えることができないくらいの数量であった。道なりに 1 里余り、山坂を越えて大隅国桑原郡横川のうち、山ヶ野までひと囲みに柵で囲んで、その範囲内を掘った。」

この話に加えて、「久通が現地に出向いていると、光るものが見えた。それが金であった。その場所を沸き上がりという」というような話も付加されている。さつま町虎居にある宮之城島津家墓所にある久通の墓前には巨大墓碑があるが、この事績を誇らしげに刻している。このような金銀山発見譚は世界各地にある。石見銀山の発見者とされる博多の豪商・神谷寿貞が海上から陸地に光るものが見えた、それが石見銀山だったという石見銀山発見譚や、草本金山では山伏が夜の山中で光るものが見え、それが草本金山であったという話、呼野金山では細川忠利が参勤交代の際に、船中で金色に輝く正室・千代姫の夢を見たので、探索させて発見したという話などと似たような話である。もし、久通伝説が真実であれば、高純度の自然金の露頭、あるいは山金があったことになり、開発初期には相当量の高品位の金を得ることができたはずである。

開山の真実

開山に関する薩摩藩の公式見解と離れると、別のこともみえてくる。薩摩藩の記録類を集めた『薩藩旧記雑録』には上記史料とは異なる開山についての記録が残る。それは笠伊兵衛尉(前出の半屋為右衛門のこと)が寛永 21 年(1644)に薩摩藩に対しておこした契約不履行についての訴訟記事である(『旧記雑録』巻 97、No. 123 と No. 435 の同文の記事)。訴状は 5 条から成るが、第 1 条(開山に関する部分)を現代語にすると、以下のとおりである。

「私(笠伊兵衛尉)が山先に任じられた事情は次のとおりです。図書頭殿(島津久通)の知行所の清右衛門と嶋原の吉右衛門のふたりが肥後国へやってきて私に申すには、薩摩国内に金気あるところを、清右衛門の家来分の予右衛門が発見したので、経験豊富で上手な者を招聘して、金山仕立て人を連れてくれば、もし金山になれば山先役については伊兵衛尉に任せる、清右衛門と吉右衛門については言うに及ばず、予右衛門も山先役につきたいなどとはもちろん望んではない、ということを書面にして私に渡した。そこで、私は掘子たちを多数つれて薩摩国にやってきた。しかし、予右衛門が言うには、金気はないというので、しかたなく国許に帰った。ところが、図書頭殿の城下の宮之城の代官・餅田堅右衛門のところから、前述の清右衛門を使いにして、もう一度薩摩に来て、金山の見立て人を連れてきてくれという書状を持って来た。この間のことは図書頭殿もご存知で、私を招いたのである。これによって、ふたたび薩摩国にやってきた。金気がずいぶんあるところを長野、横川の 2 ヶ所を見つけて、立派な金山に仕立て、御忠節申しあげた。」

これが事実であることは、寛永 17 年(1640)4 月 26 日付の江戸家老(山田有栄・伊勢貞

昌・北郷久加)連名による鹿児島在住の重役に宛てた書状(『旧記雑録』巻 97、No. 122)に同内容が見えることから明らかである。さらに第 2 条では内山与右衛門が山先役に任じられ、金山の山先役に任じるという約束が履行されなかったこと、第 3 条では当時の九州では慣例となっていた 10%の成功報奨金が支払われなかったこと、及び自分が立て替えた開発経費を支払ってくれないこと、第 4 条では事情を関係者に通知したこと、第 5 条では薩摩藩が取り上げなかったので幕府評定所へ訴えようとしたが、主家である肥後・細川家より訴えるのは待てと命じられたことなどを記している。薩摩藩では相当慌てたらしく、金山奉行の北郷久加は金米による口封じ対策を行ってもうまくいかなかったために、藩重役に対応策を相談するとともに、島津久通の不手際に愚痴をこぼしている(『旧記雑録』巻 97、No. 437)。残念ながら、その後の顛末は不明である。

笠伊兵衛尉の来歴は不明である。細川家が豊前小倉の大名であったときに呼野金山や採銅所金山の開発を行っているので、あるいはそれらに関与した山師であろうか⁽⁶⁾。

内山与右衛門は幕府の採掘許可がおりる直前の寛永 18 年 12 月 22 日に死去し、墓は山神社にあったが、その後山神社が徳源社に合祀されたさいに行方不明となっていた。近年再発見され、永野金山胡麻目坑入口に移設された内山与右衛門の墓碑には「當金山元山先玉山剩金居士」と刻されており、結果的には内山与右衛門が初代山先役となったことがわかる。当初招聘された内山与右衛門があくまでもトップであり、笠伊兵衛尉の訴えはかなわなかったことになる(新田 2013)。

なお、「久通が金山開発に困難をきたしたために、豊後日出藩主・木下延俊にあてて豊後から金山の鉦山職人を派遣してほしいとの依頼の手紙を送り、その結果豊後から 30 人余が山ヶ野金山に来た。その子孫が現在も山ヶ野集落に居住している」(桐原 1973)との話があるが、典拠史料が不明である。これを引用して『日出町誌』(p. 813、1986)、『栗野町郷土誌』(p. 284、1995)に同じ記事がある。『日出町誌』が日出町に存在する古文書や史料によって論じるのであればともかく、鹿児島で出版された一般向け図書の典拠不明の記載を引用するのは不可解であるが、日出町には裏付ける史料がないのだろう。星野金山発見譚には正保 2 年(1645)建立の金山神社の旧記に「豊後の金掘りが薩摩へ行く途中に砂金を見つけた」とあり(中村 2013)、伝承の中には豊後との関係はよくでてくる。おそらく、開山当初ではなく、再開後の 18 世紀に豊後から多くの人々が薩摩に来たことが、これらの伝承の背景にあると考えられる。現実に自身の家の出自が豊後にあるとの伝承をもつ家が山ヶ野金山には多い。豊後との関係については、先年いちき串木野市の冠嶽園において豊後出身の人物が寄進した碑文が見つかっている。寛文 12 年(1673)夏吉日の紀年銘をもち、「豊後海部郡細村住人 久枝休太郎」と刻されている。寛文 12 年時点では山ヶ野金山も芹ヶ野金山もすでに開山して

おり、開山初期ではない。久枝休太郎がどのような人物であったのかは不明である。新町正氏は豊後の鉾山関係者と推定している(新町 2017)。

山ヶ野金山には多くの墓塔が残る(霧島市教育委員会 2013)。2012年の悉皆調査によって江戸時代の墓は55基が確認されている。最古のものは護念寺跡に残る明暦4年(1658)の銘があるものであり、その後は寛文11年(1671)以降のものである。また恩念寺跡墓地には江戸時代の墓碑が残るが、豊後出身者の最古の墓碑は18世紀のものである。墓塔からは開山に際して豊後出身者が関与したことを証するものはないが、墓塔に記された被葬者の出身地は大阪、佐賀、筑前、江戸、豊後、石見、安芸などさまざまであり、鉾山地の宿命であるが、17～18世紀の山ヶ野金山稼業中の当地には様々な地域からやってきた人々がいたことは明らかである。そのなかには、金掘りだけではなく、鉾山町に付随する様々な商売に従事する人たちもいた。『旧記雑録』では、島津氏と姻戚関係にあった伊予松山藩主・松平隠岐守⁽⁷⁾のところにいる佐渡金山で経験のある職人に教えを請うように、光久が家老に指示しており、佐渡金山からの技術移転があった可能性もある。

簡潔に言えば、山ヶ野金山は当初石見銀山の系統である内山予右衛門が招聘されて砂金の発見には至ったものの、金鉾脈の発見には至らなかった。そこで肥後・宇土の山師、笠伊兵衛尉を招いて鉾脈の探査にあたらせ、ついに寛永17年(1640)に開発された。寛永18年(1641)に幕府に報告して、操業許可を申請し、翌寛永19年(1642)正月2日、内山予右衛門の死後12日目に採掘許可が降りた。その後幕府は1年後に採掘中止を命じた。わずか1年間の操業であった。

再開したのは明暦2年(1656)である。明暦2年12月には間歩158口、人数4607人(うち間歩頭158人、金掘1580人)であった(鹿児島県 1940、495)。採掘再開後は大いに活気を取り戻し、万治2年(1659)には山ヶ野金山史上もっとも多い498貫299匁(約1868kg)を記録し、その後減少に向かった。最盛期の宝暦～文政年間(1751～1829)においては佐渡金山を上回る産金量を誇った。また明暦3年(1657)から貞享2年(1685)までの産金による藩の利潤は銀9382貫にのぼり、うち6446貫は借銀返済にあてられた(『山ヶ野金山御取建之由緒』)。薩摩藩にとり山ヶ野金山の価値は計り知れない。しかし、しだいに衰微し、幕末頃には山中の坑道総数47のうちわずかに18のみから金採掘を行うようになり、出金量も減少して9貫/年ほどになっていた(『金山にて御答可申上大概』)。

(5) 芹ヶ野金山の開発

開発と推移

芹ヶ野金山がある、いちき串木野市北部は中新世後期から鮮新世前期に活動した北薩火山群の名残であり、北薩安山岩類とよばれる安山岩から成る。400 万年前頃に、地下の熱水が上昇して鉱脈を作った。浅熱水金鉱床である。石英や方解石から成る鉱脈中に金、銀がエレクトラムやテルル化金として含まれている(浦島 1993、37-38)。

芹ヶ野金山は広義の串木野金山の一部である。寛永 17 年(1640)に山ヶ野金山の開発が始まり、多数の金掘り職人が山ヶ野金山に集まっていた。しかし寛永 19 年に幕府の許可が下りて僅か 1 年後の寛永 20 年(1643)に、飢饉を口実として幕府により山ヶ野金山の閉山命令が出されたため、薩摩藩としては余剰人員の活用と別途有望な金山開発が必要となった。その結果、串木野において、承応元年(1652)に鉱脈を発見、明暦元年(1655)から試掘がすすめられ、山ヶ野金山の支山として、万治 3 年(1660)より本格的な開発が始まる。現在の芹ヶ野坑(二坑)である。島津綱貴の命により、八木主水佑元信による開発といわれる。

寛文 7 年(1667)には山切 150~160 人、砕場 300 人ほどであり、産金量は平均 1 ヶ月 45 匁(168.75g)であったという(『鹿児島県史』2、499)。『芹ヶ野金山発起始終覚書』によれば、もっとも繁栄したときには 7,000 人の従事者がいたという。

その後衰微し、天和 2 年(1682)に休山となった。そのため余剰人員を鹿籠金山の開発に振り分けた。

元禄 11 年(1698)、勘定奉行・荻原重秀により、幕府が全国の金銀銅山の開発を指示したため、元禄 14 年(1701)に幕府から 2 万両を前借して芹ヶ野金山の再開発を行った。このときに神殿金山も開山した。しかし、しだいに産金量が減り、享保 2 年(1717)にまた休山した。『江戸玉金引替帳』の記載では、この間の産金量は玉金 20 貫 180 匁(75.675kg)、元禄 13 年(1700)の産金量は 1 貫 907 匁 8 分、元禄 17 年(1704)には 2 貫 788 匁 3 分 5 厘であった。幕府からの 2 万両の借金を返済するには到底及ばない産金量である。

天明 6 年(1786)に山ヶ野金山の吉田喜三次が試掘の免許を申請し、翌年許可されたが詳細不明。寛政 5 年(1793)には鹿児島・加治木の森山太助が試掘申請して稼業したが、坑内浸水がひどく、うまくいかなかった。

文政 10 年(1827)にも、島津家隠居や婦女子が居住する鶴丸城二の丸の経費捻出のためであろうか、二の丸御続料掛役が試掘したが成功にいたらなかった。さらに、嘉永 5 年(1852)には、物奉行・金山奉行の和田八之進が芹ヶ野金山の探鉱を命じられ、川内平、八木殿大切、炭焼ヶ谷、西山等一帯を探索したが、結局再興は断念した。

元治元年(1864)、島津久光の命により再興が計られる。背景には文久 3 年(1863)の

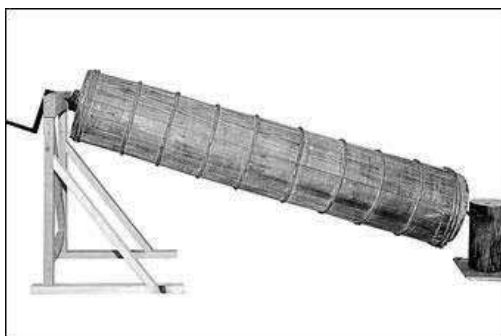
薩英戦争後に急増した膨大な軍事費を捻出するために、従来から行っていた銭の鑄造のほかに、さまざまな財源を必要としたからだろう⁽⁸⁾。慶應元年(1865)より山ヶ野金山山廻役・市来四郎太、山師主取・佐野伝右衛門、薩摩藩詰奉行・伊東仙太夫らが派遣されて再開発となった。この時に彼らが奉納した手水鉢、石燈籠が山神社に残っている。

もうひとつの重要鍾である串木野鉦山 1 号鍾(西山鍾)は、元禄元年(1688)あるいは元禄 2 年(1689)に川内の鍋商人・新原喜左衛門が 1 号鍾の露頭を発見し、稼業した。しかし浸水がひどく、廃業した。寛保 3 年(1743)に試掘を行い、玉金 10 匁を吹いたが、休業した。天明 7 年(1787)にも試掘が行われたが金はでなかった。

文政 11 年(1828)に調所笑左衛門が命じて、市来藤右衛門と富島仁衛門が串木野村野下の 1 号鍾を試掘し、玉金 2 匁 2 分を得たが、金気は少なく、再興は中止された。

上名坑は五反田川支流の芹場川流域の鉦山である。狭い谷の右岸に坑口が残っており、石臼も点在するが、いずれも黒川型臼である。近世金山によくある小字名が残っており、茶屋、法華谷、金蔵、風呂屋、女郎ヶ谷、金石、黄金穴などがある。万治3年(1683)に開山し、寛文から天和年間まで繁栄したらしい。芹場、芹ヶ野などの地名は、本来は「寄勝場(せりば)」に由来する地名ではないかと考えられ、金鉦石加工場との関係が深い地名である。

元禄年間の芹ヶ野金山では水抜きが重要課題となり、水上輪(すいしょうりん)(排水用のアルキメデス・ポンプ)(図 1)の導入を考慮するが、坑道が狭いことと費用の点から導入はしなかった。佐渡金山では水上輪が導入されたが(図 2)、ここでも故障の多発により放棄され、結局従来の水汲み職人による人力による排水作業へ後退している。芹ヶ野金山での水上輪の導入は大阪商人を經由して行われようとしたが、日本への導入から間もない時期に導入しようとしていることは、新技術の情報伝達の速さをうかがわせる。坑内排水が課題となった薩摩藩の金山であるが、人力による対応しかできなかったために、採掘を放棄せざるを得なくなったといえる。



(図 1) 水上輪



(図 2) 佐渡金山での水上輪の使用

芹ヶ野金山の金鉱石は金粒が微細であり、金粒の大きな鉱石よりも金の回収が難しかったこと、鉱山経費の減少に伴い、産金量が減少し、また坑内浸水を生じたために、芹ヶ野金山は衰微していった。総じて、技術の限界もあって幕末までには薩摩藩の金山は没落していた。再び活況を呈するのは明治以降になって、フランスからの新技術の導入と民間業者らによる経営が活発になってからのことである。明治以降の串木野金山については、五味篤による研究に詳しい(五味 2017)。

(6) 石臼の問題

山ヶ野金山には発掘によって出土した石臼のほかに、廃棄後に放置されたり、庭石や石垣などに転用されたりした石臼が多数残っている。これらの資料によって山ヶ野金山石臼の特徴を知ることができる(新田 2009, 2011a)。芹ヶ野金山の石臼も同様である。

山ヶ野金山の上臼の厚さは、6～12cmである。上臼は急激に磨耗するものなので、現状の厚さが新品臼の厚さを示すものではない。磨耗限界に達して、廃棄されたものが現在見ることができる上臼である。他の金山の上臼に比べ、山ヶ野金山の上臼はやや薄いつくりであった。山梨県・湯之奥金山では上臼未成品が出土しており、その厚さは15.5cmである(萩原編 1992, 106)。東北地方の南部にある真金山金山での粉成関係諸道具の形状と寸法を記録した『金山諸道具寸尺定方臼山築方臼の据様揃前銀鉢井替水配之事』に記載された臼の寸法では、上臼については磨面径1尺2寸～1尺4寸(36～42cm)、厚さ9寸～1尺3寸(27～39cm)とある(日本鉱業史料集刊行委員会 1988, 55)。臼の厚さは、金鉱石と臼の石材との関係によって決まるため、一律に厚さを規定することはできず、鉱山の特徴にあわせて調整を行っていたが、一般的な上臼の厚さは50～30cm程度であったと推定できる。

山ヶ野金山の臼は次の3種に分類できる。多数を占めるのは2類である。

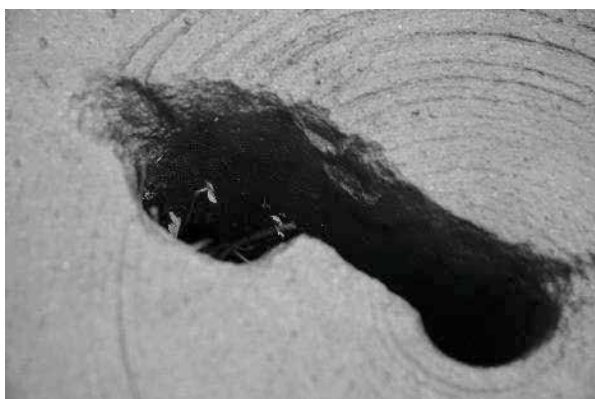
上臼 1 類：軸穴と供給孔とは別個に穿孔され、両者はつながっている。磨面は凸レンズ状で、もの配り溝がある

上臼 2 類：軸穴と供給孔を兼ねる。軸穴は円形ではなく、鉄製心棒との摩擦により、軸穴には磨耗痕が残っている。磨面は平らで、もの配り溝はない。いわゆる黒川型。

上臼 3 類：軸穴と供給孔を兼ねる。軸穴は円形。磨面は平らで、もの配り溝はない。

1 類の最大の特徴は磨面が凸レンズ状をしていることである。これは臼の回転運動が中心で固定されておらず、頭を振りながら回転した結果生じた現象である。当然対応する下臼には皿状の凹面が形成された。このような回転運動はレンズのない臼の場合に生じると考えられる。1 類は他の金山の上臼にはない特徴をもった上臼である。湯之

奥型の上臼にも軸穴とは別に供給孔があるが、茶臼のように供給孔は軸穴とは離れて別個に穿孔されている。軸穴と供給孔がつながっているのは山ヶ野金山 1 類上臼の特徴である(図 3)。山ヶ野金山 1 類上臼を「山ヶ野型」と命名する。2 類の特徴は、軸穴に回転によって生じた複数の穴がつながった痕跡があることである。このような痕跡はレンズがない場合に生じた結果である。いわゆる黒川型である(図 4)。3 類はレンズをもつ臼である。きわめてまれである。このように、山ヶ野金山の上臼にはレンズを持たない臼とレンズを持つ臼とがあり、レンズを持たない臼には供給孔を穿孔したもの(山ヶ野型)と、そうでないものがある。



(図 3) 山ヶ野型臼の軸穴と供給孔



(図 4) 黒川型臼の軸穴

下臼は以下の 4 タイプに分類できる。

下臼 1 類：軸山があり、磨面が凹面で周辺部が高くなった皿状をしているもの。

下臼 2 類：軸山はなく、磨面が凸状になっているもの。

下臼 3 類：軸山があり、磨面が凸状になっているもの。2009 年の発掘で出土した 2 点の下臼はこれである。もの配り溝のないものと、もの配り溝をもつものがある。

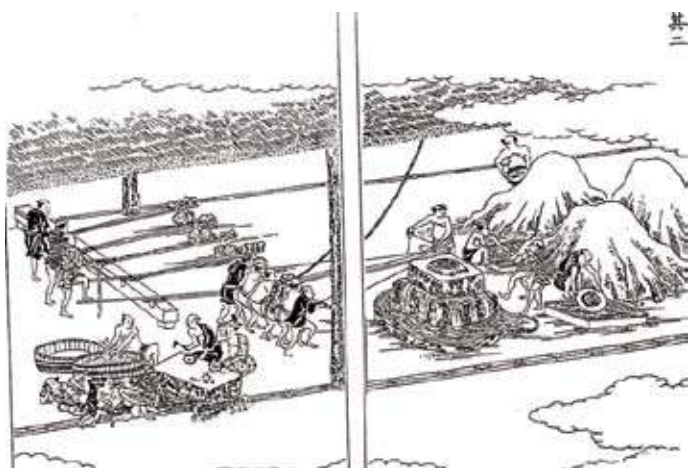
下臼 4 類：軸山がなく、磨面は平らなもの。

1 類のような形になると、どろどろになった微粉末を含む泥状の水が下臼に滞留し、臼の外側に流れていかなくなる。軸山はレンズを持つ上臼によっても形成される。2 類および 3 類は凸状磨面ができた、おそらく下臼より大きな直径をした上臼が頭振り運動をしたために生じた現象であろう。このような下臼は他の金山ではみられず、山ヶ野金山の下臼の特異な例といえる。4 類は大きさがほぼ同じ上下の臼が、レンズによって回転軸が固定されたために軸がぶれることなく回転した結果、平らな磨面が形成されたものである。したがって、4 類はレンズを持つ上臼と対応する。4 類には高さが高いものと低いものがある。下臼には高さが高いものと、盤状をした高さが低いものがある。高さが高いものは磨面が大きく、粉成(こなし)作業の効率化をめざし、生

産量を増加させるためであろう。

鉦山臼の画期的改良であるリンズの出現は慶長期(1596～1615)かそれよりやや下るころ、どんなに下っても17世紀中葉以前といわれる(今村1990,70)。長野県・梓久保金山ではリンズ臼が使われており、いっしょに出土した慶長通宝の発行年1606年頃と推定できる。17世紀初頭にはリンズは使われていた。薩摩の金山ではリンズのない臼とリンズのある臼とがある。また近世山ヶ野金山の稼動時期は、寛永17年(1640)3月～寛永20年(1643)末から寛永21年(1644)2月頃までの第1期、再開された明暦2(1656)年～幕末の第2期であるが、第1期にはリンズのない臼がまだ残存していた可能性がある。第2期にはすでにリンズのある臼が導入されていた可能性が高い。同時に下臼の大型化による作業効率化も図られている。以上のように、山ヶ野金山の稼動時期は鉦山臼の変革時期とも対応しているが、佐渡金山などに比べるとリンズのある臼への転換は遅れている。この点については、リンズについての知識はあったが、使いやすさから黒川型臼を使い続けたとする見解もある(新町2012,91)。

『三国名勝図会』には山ヶ野金山の作業風景の画があるが(図5)、そのなかに臼が表現されている。それによると側面をほとんど加工していない臼であり、考古資料の臼と一致する。また軸穴と供給孔とは同じものとして表現されているが、リンズの有無については『三国名勝図会』の画からは判断できない。画に描かれた臼は6人の男によって動かされている大型の臼である。遺跡で確認される臼はこれほど大きいものではなく、『三國名勝図絵』の山ヶ野金山での作業風景は、当時多数流布していた『佐渡金銀山絵巻』などを手本として描かれたものであろう。



(図5) 山ヶ野金山での作業風景

山ヶ野金山以外の3金山においても、臼の状況は同様であった。神殿金山については臼を未確認のために詳細は分からないが、芹ヶ野金山では基本的に黒川型が使われ、少数であるが上臼供給孔が真円の例があり、リンズを使用した臼があったことを示している(新町氏よりの私信、写真)。鹿籠金山では上臼2点、下臼3点しか確認していないが、上臼は黒川型であり、下臼は軸山が残り、鉄製心棒が残っているものが1点

ある。



芹ヶ野金山上臼(写真1)

(7) 製錬

関連資料が未発見のため、考古学的には不明であるが、灰吹による製錬であったことは間違いない。『金山萬留』に、貞享2年(1685)8月22～24日、藩主・綱貴が山ヶ野金山に視察に来たときのようすが記してある。綱貴は坑口を視察した後、ゆり物、ゆり出の体験をし、翌23日には相撲見物の後に砂金の吹金と金位鑑定の様子を視察している。このことから吹金を行っていたことは明らかである。『芹ヶ野金山森山太助試掘日記』(天明7年～寛政5年)の天明7年(1787)10～11月の記事の中に、芹ヶ野金山でとれた砂金1包を山ヶ野金山に送って、吹方に申し渡し、灰吹きして玉金8分5厘にしたという記載があることから、山ヶ野金山では灰吹き法によって金銀の分離を行っていたことが分かる。また、10月26日付・金見役より御手形所宛て書状には「玉金八分五厘、但七三」の記載があり、灰吹きの結果金位は70%にまで製錬されたことを示している(以上、徳永編1994)。また、金の品位を鑑定する役職があったことも示しているとともに、薩摩藩の金山においては、製錬から金位測定に至るまでの一連の工程において、山ヶ野金山に中枢的機能が集約されていたと推定できる。いっぽう、芹ヶ野金山について記した『芹ヶ野金一件抜書』(元禄年間)には各種の役職名がみえるが、そのなかに「金吹」という役職名がある。芹ヶ野金山においても一部は灰吹きによる製錬を行っていたのだろう。

吹金によってできた玉金をどのようにするかについては、幕末の記録であるが『金山にて御答可申上大概』(天保9年(1838))によると、玉金は京都に送られて小判と交換し、さらに小判を銀に両替して藩に持ち帰っていた。

(8) 役職と運営

薩摩藩では、金山の経営と管理は山ヶ野金山を中心的金山として位置づけ、他の金山も同様の経営・管理体制をとっていた。

金山経営に関連する文献史料はほとんど残っていないため、本格的な社会経済史的

研究はまだない。『金山萬留』によると、明暦以降の山ヶ野金山の経営体制では、金山奉行以下、山奉行、町奉行、横目、金銀保管蔵の上前蔵役人、米蔵管理の役人、山内の出入りを監視する入口屋と出口屋の役人、鉱山管理役兼課税役の鎖屋の役人など各種の役人が配置されていた。金山運営の実質的責任者である山先役は一人であり、その待遇は良かった。1ヶ月に玄米1石5斗と銀80匁、さらに年間玄米50石が俸給として与えられ、かつ年行司兼務であるためにさらに玄米6斗と銀20匁も与えられた(俸給については『山ヶ野金山御取建之由緒』による)。総収入は玄米68石6斗、銀100匁となり、薩摩藩の上士である寄合の家⁽⁹⁾でもこの程度の俸給の家があることを思えば、かなりの好待遇であった。

芹ヶ野金山の運営も山ヶ野金山と同様にさまざまな役人によって行われていた。最高責任者は金山奉行である。金山奉行は「金山奉行」と「山ヶ野詰金山奉行」とがあるが、「芹ヶ野詰金山奉行」はみられない。芹ヶ野金山に対しては双方から命令が出ている。このことは芹ヶ野金山が山ヶ野金山詰奉行の支配下にあったことを示すものである。これは薩摩の金山運営の中心が山ヶ野金山にあり、その他の金山は山ヶ野金山の支山と位置付けられていたからと考えられる。また、芹ヶ野金山詰山ヶ野山廻役や芹ヶ野金山詰蔵方目付といった役職もあり、前者は山ヶ野金山に籍を置いた芹ヶ野金山担当者、後者は芹ヶ野金山に籍を置いた担当者であろう。

芹ヶ野金山所在の山神社には奉納された石灯籠と手水鉢が残るが、慶応元年9月の紀年銘のある石灯籠には、左側面に「金山奉行勤 伊東仙太夫」、裏面に「金山書役 伊藤藤左衛門 山ヶ野金山山廻役 山口矢之助」の名があり、また手水鉢には左側面に「山ヶ野金山 山師主取 佐野傳右衛門 佐野佐〇〇」の2名の名前が刻されている(写真2)。山ヶ野金山の役人が芹ヶ野金山に出張し、神社に奉納をしていることから、幕末に至るまで、芹ヶ野金山は山ヶ野金山の支配下にあったと考えられる。



串木野金山山神社の手水鉢銘文(写真2)

『芹ヶ野金一件抜書』には役人の俸給表が出ているが、四石間見山、式石間見山、垣廻、口屋検者、口屋改役、直役、蔵役、横目、物奉行、筆者、手代、金見、金吹、山先、年行司、山廻役、山廻などの役職がみえる。垣廻や口屋検者の存在から、山ヶ

野金山同様に芹ヶ野金山でも周囲を柵で囲った閉鎖空間であった。

(9) 金山の社会

賃金・課税

山ヶ野金山の場合、金は品位によって上々金を最高として下々金までの 5 段階に区分された。金吹職人の賃金は出来高によって規定され、出来高 1 匁～5 匁の場合には 2 分、以降 100 匁の場合の 2 匁 5 分までの 6 段階に規定された。残念ながら、金掘の賃金については不明である。芹ヶ野金山をはじめ、後発の金山においても同様であったろう。

山内は柵で囲まれた閉鎖空間であった。柵の内外の出入りは厳重に管理されていた。そのため、特有の経済空間ができあがる。山内の消費物資と種々の座に対しては規定の税が課された。例えば味噌座運上は 1,000 斤につき銀 50 匁／月、塩座には銀 156 匁 7 分／月、麵類蕎麦切座には夏 4 ヶ月分として銀 160 匁と、あらゆる商売が課税対象とされた。さらに、遊女にも課税され、傾城やうどん屋女には料金の 1 割が課税された。山内での消費物資の量は相当なもので、味噌の年間消費量は 203,546 斤(763,297.5kg)、酒 424,584 盃、油 22,382 盃、塩 489 石 8 斗(11 か月分)、茶 4,320 斤(半年分)、醤油 1,732 盃(半年分)にもものぼっている。味噌だけでも、年間の運上金は銀 122,127.6 匁(2035.46 両)となり、味噌、酒、塩の消費量が多いことと、課税額が高いことは、過酷な鉱山労働のために塩分摂取が多くならざるを得ないこと、鉱山労働特有の若年死に対する恐怖からの大量飲酒の結果であり、税収もそれに応じて多額となる。このように鉱山から生じる金銀による収入とともに、外部との交通を遮断した閉鎖空間を作り上げることで、経済上の独占体制を維持できたことによる各種税収入も重要であったことが分かる(新田 2011b)。

(10) 遊郭の経済学的意味

山ヶ野金山南東部には田町遊郭があった。藤本箕山が全国の遊郭についてまとめた『色道大観』(1689 年間)(藤本 2006)に 8 軒の妓楼の地図と、4 階級の遊女の料金が記されている。藤本が記載している全国の代表的遊郭での料金は全国でほぼ共通している。江戸の吉原や京の島原のような大都市の遊郭が高額で、山ヶ野金山にあった田町のような地方のほうが高額というわけではない。田町遊郭には妓楼の名前から、以下の 3 種類に分類できる遊郭があった。他国から来た経営者によるらしい妓楼主の出身地をつけた妓楼(大坂屋、木津屋、小倉屋、土佐屋)、地元経営者らしい姓や屋号をつけた妓楼(平山、岩本、杵屋、俣屋)、それと西日本に特有の白人屋(しろうとや)と呼ばれる非公認売春宿がある(新田 2011b)。金山開発によるバブル景気が遊郭存立の背

景にあった。残念ながら芹ヶ野金山の遊郭についての記録はないが、鉾山につきものであった遊郭が芹ヶ野金山にも当然存立していたはずであり、女郎ヶ谷等の地名や遊女の墓等の伝承は残っている。

幕末の経済学者・佐藤信淵の祖父、佐藤信景は越後に女郎となる女性を買いに行く商売、女衞をしていたが、彼が記した鉾山経営の極意について述べた『抗場法律』によれば、金山のなかに遊郭、料理屋、賭場を設置して、金山の外から好色者、放蕩者らと呼ばせて散財させ、金をむしり取るのが金山経営にとってよい方法であると記している。まことに、「飲む」、「打つ」、「買う」ことこそが金山経営にとって重要であった。だからこそ全国各地から妓楼、遊女が集まってきた。

遊郭の料金の共通性、妓楼の名称、遊女の移動などから、全国ネットの情報、人の移動が頻繁にあったと考えられる。

(11) 犯罪と刑罰

刑罰の規定が定められ、強盗や殺人といった通常の犯罪以外に、金山特有の犯罪と刑罰があった。

金山特有の犯罪である「鉾山を隠れて掘る」、「金を隠して売買する」、に対しては、闕所(土地、住宅、農地等の没収)のうえ、禁獄の処罰がなされた。「山廻や山主と内談して鉾山を隠したこと」には山廻・山主と本人双方ともに闕所のうえ追放、「金鉾石を盗んで隠しておいたこと」には罰金として銀1枚、「封鎖された坑道の入り口を破って山稼ぎをした」罪には禁獄10日、「金を隠して出入り口から外に出た」罪には闕所のうえ禁獄、あるいはその軽重によって、口屋で曝すか追放に処した。以上のように金山特有の犯罪が規定され、その罰はひじょうに重かった。山ヶ野金山では牢屋跡とされる場所があり、金山再開後に江戸で無宿者狩によって捕縛され、薩摩に流された浮世草子作家の都の錦が入牢していた。

(12) 明治以降の串木野金山

鹿児島への近代的鉾山技術の導入は慶応3年(1867)年のことである。薩摩藩は、フランス、サン・テティエンヌ鉾山学校(École des Mines de Saint-Étienne)を卒業し、カリフォルニア等の金鉾山で働いた経験のあるジャン・フランシスク・コワニエ(Jean Fransisque Coignet)を招聘して、鉾山業の開発を図った。彼は翌年(1868)政府に請われて生野に移り、帝国主任技師として生野鉾山の近代化を推進した。火薬発破による鉾石採掘の効率化、運搬の効率化を図って機械化を進め、軌道や巻揚機を新設した。さらに日本各地の鉾山を調査し、1874年には日本最初の鉾山研究書『日本鉾物資源に関する覚書』(*Note sur la richesse minerale du Japon*)をつくるなど、日本の鉾業

近代化に貢献し、1877年に帝国主任技師の任を解かれた。

また、旧来の製錬法である灰吹法にかわって、^{こんこうほう}混汞法が導入され、製錬の効率化が進み、産金量が増大することになった。混汞法とは水銀に金銀を溶かして金銀アマルガムを作って鉱石中の金銀を抽出する方法である。日本での混汞法の始まりは、明治4年(1871)に生野銀山で樽混汞法が、また明治6年(1873)に佐渡で鍋混汞法が導入されたのを嚆矢とするが、鹿児島では明治9年(1876)にコワニエの後輩で、彼の後任として鹿児島に招聘されたフランス人技師、ポール・オジェ(Paul Ojet)が山ヶ野金山の谷頭に(谷頭搗鉱所)を建設し、蒸気動力による混汞搗鉱法を導入したのが最初である(岩崎 1901)。

明治元年(1868)12月、行政官布告第177号により鉱業は一般に開放された。さらに明治6年(1873)7月に太政官布告第259号に日本坑法が発布され、鉱物は政府の所有として、人民は借区して鉱業を行うことができるようになった。その結果、鹿児島県本土全域で金銀山開発が行われるようになった。鹿児島県内で明治以降に開山した金山は44にのぼる。

探鉱と金鉱山の発見は、幕末から明治初期にかけてすでに始まっているが、稼業については明治15年(1882)に本格的開発が行われた助代金山(日置市吹上町)がもっとも早い。鉱業権をもち、鉱山開発をおこなった人々は、在地の名望家という個人であり、稼業成績が良くないと、鉱業権はつぎつぎと移転され、最終的には鉱山会社に移るのが通例であった。

串木野鉱山西山坑では明治6年ころから島津家直轄経営になったようだが、成績不良で放棄された。その後明治18年(1885)年に田中龍太郎が混汞法によって稼業したが、これも中断した。その後も多くの個人が7稼業したが湧水量が多く、断念する事態になった。最終的に明治38年(1905)に三井合名会社が西山坑の調査を実施し、有望とみなして、明治39年(1906)6月に購入を決定し長谷川監示が初代所長となった。有望鉱区を統合して成功した例になった。

芹ヶ野坑では明治6年に島津家直轄事業となっただけで、明治22年(1888)まで島津家直轄事業であったが成績が上がらず、自稼制も導入した。明治37年(1904)になると島津家は近代化を図り、五代友厚の女婿・五代龍作を鉱業館長に任命して近代化を実現した。

明治～昭和、紆余曲折を経ながら事業は継続したが、アジア太平洋戦争勃発後、戦争継続のために必要な金属資源を得るため、昭和17年(1942)10月22日の「金鉱業及錫工業ノ整理ニ関スル件」(第1次閣議決定)、昭和18年(1943)1月22日の「金鉱業ノ整理ニ関スル件」(第2次閣議決定)を経て、昭和18年4月9日に商工省による「金鉱業整備ニ関スル方針要旨」によって、全国の金鉱山は休山、閉山となった。

註

1. エレクトロンは自然にできた金と銀の合金。金と銀とを分離する技術がない技術段階では、エレクトロンの状態であることが多い。
2. 馬車の傘の骨の先端部につける飾り金具(蓋弓帽)など。
3. リンズは英語である。
4. 石見銀山では鉱石の粉碎には回転式臼を使用していない。
5. 半屋為右衛門ともいう。笠が姓、半屋は屋号だろう。
6. 現在、宇土市には「笠」姓の家はないが、熊本県内に散在している。
7. 島津氏本宗家第8代・久豊の三男、豊後守・季久を始祖とする豊州家・島津家の島津豊後守朝久の娘が松平隠岐守定行の正室であった。朝久は朝鮮で病死している。『薩陽武鑑』による。
8. 琉球通宝の鑄造による巨利(101日間で232,152両余)(『鹿児島県史料忠義公史料第2巻』392-3)では不足。弘化2年(1845)～文久3年(1863)に集成館が製造した大小砲794門の製造費は192,823両にのぼる(『鹿児島県史料忠義公史料第2巻』445-8)。さらに、1863年8月の薩英戦争後、薩摩藩はイギリス艦隊の再来を予想し、軍備をそなえていた。破壊された台場の改修と新設、洋式大砲と小銃の充実、艦船の輸入など、膨大な経費が必要であった。
9. 薩摩藩の城下士は、一門家(4家)、一所持(30家)、一所持格(12家)、寄合(54家)、寄合並(7家)までは上士である。その下に、無格(2家)、小番(760家)、新番(24家)、御小姓與(3094家)と続く。

文献

- 石川 哲 1994 『山ヶ野金山古文集』私家版
- 今村啓爾 1990 鉱山臼から見た中・近世の貴金属鉱業の技術系統、「東京大学文学部考古学研究室紀要」9. 25-74
- 今村啓爾 1997 『戦後期金山伝説を掘る一甲斐黒川金山の足跡一』平凡社
- 今村啓爾・桜井英治編 1997 『甲斐黒川金山』塩山市教育委員会
- 岩崎重三 1901 『日本鉱石学 第2巻 金』内田老鶴園
- 浦島幸世 1993 『金山』春苑堂出版
- 鹿児島県編 1940 『鹿児島県史』鹿児島県
- 霧島市教育委員会編 2013 『山ヶ野金山現地調査報告書』霧島市教育委員会
- 桐原忠利 1973 『山ヶ野小学校90年史、金山300年史』山ヶ野小学校史編集委員会
- 五味 篤 2017、2018 製錬の歴史・串木野鉱山の技術発達史。「季刊・資源と技術」第2巻3-9号

- 眞保昌弘 2013 古代の産金遺跡. 萩原三雄編『日本の金銀山遺跡』31-46、高志書院
- 新町 正 2012 「薩摩における鉱山臼についてー山ヶ野金山及び芹ヶ野金山で使用された鉱山臼の特徴と分類ー」、『鹿児島考古』42、87-98
- 新町 正 2017 冠嶽園内にある石碑について. 「文化いちき」2017年3月
- 徳永 律編 1994 『芹ヶ野金山古文集』(上)、串木野古文書研究会
- 中村修身 a 2013 呼野金山. 萩原三雄編『日本の金銀山遺跡』354-57、高志書院
- 中村修身 b 2013 採銅所金山. 萩原三雄編『日本の金銀山遺跡』358-60、高志書院
- 中村修身 c 2013 星野金山. 萩原三雄編『日本の金銀山遺跡』361-63、高志書院
- 中村修身 d 2013 草本金山. 萩原三雄編『日本の金銀山遺跡』364-65、高志書院
- 長崎 治 2013 梓久保金山遺跡. 萩原三雄編『日本の金銀山遺跡』296-305、高志書院
- 新田栄治 2009 「山ヶ野金山の開山事情と鉱山技術」、『南の縄文・地域文化論考』下巻、21-40、南九州縄文研究会
- 新田栄治 2011a 「山ヶ野金山の開山事情と鉱山臼からみた鉱山技術」、『鹿児島県霧島市上ノ・山ヶ野金山作業場跡推定地発掘調査報告書』21-36
- 新田栄治 2011b 「田町遊廓が示す山ヶ野金山への社会経済的意味」、『鹿児島県霧島市上ノ・山ヶ野金山作業場跡推定地発掘調査報告書』37-40
- 新田栄治 2013 山ヶ野金山初代山先役・内山予右衛門とその墓碑. 「鹿大史学」60
- 日本鉱業史料集刊行委員会 1988 『真金山金山見聞之次第等』43-63、白亜書房
- 萩野谷悟 a 2013 瀬谷金山・町屋金山. 萩原三雄編『日本の金銀山遺跡』260-61、高志書院
- 萩野谷悟 b 2013 下津原金山. 萩原三雄編『日本の金銀山遺跡』250-51、高志書院
- 萩野谷悟 c 2013 栃原金山. 萩原三雄編『日本の金銀山遺跡』254-55、高志書院
- 萩野谷悟 d 2013 木葉下金山. 萩原三雄編『日本の金銀山遺跡』266-67、高志書院
- 萩野谷悟 e 2013 大内鉱山. 萩原三雄編『日本の金銀山遺跡』276-79、高志書院
- 萩原三雄 2017a 勝沼氏館跡の金工房跡といわゆる「基石金」に関する覚書. 「武田氏研究」55、20-31
- 萩原三雄 2017b 甲州金成立期の一過程. 「帝京大学文化財研究所研究報告」16、1-11
- 萩原三雄編 1992 『湯の奥金山遺跡の研究』湯の奥金山遺跡学術調査団
- 麻柄一志 2013a 松倉金山. 萩原三雄編『日本の金銀山遺跡』336-41、高志書院
- 麻柄一志 2013b 虎谷金山. 萩原三雄編『日本の金銀山遺跡』344-45、高志書院
- 横山勝栄 2013 越後国黄金山. 萩原三雄編『日本の金銀山遺跡』184-93、高志書院
- Agricola, Georgius 1556 *De Re Metallica* (Reprint in 1998 N.Y. of H.C. Hoover & L.H. Hoover's translated version 1912)

2 串木野鉦山の概要

(1)はじめに

串木野鉦山は、薩摩の三大鉦山に数えられ、300年以上の歴史を持つ国内有数の金山です。これまでの総産出金量は荒川鉦山と併せると約56tもあり、菱刈、佐渡、鴻の舞に次ぐ日本第4位の産金量を誇っています。

三井串木野鉦山(株)は現在、青化製煉工場を中心とした貴金属リサイクルを主な事業として展開していますが、南九州市にある赤石鉦山を支山として露天掘りで鉦石を採取しています。

(2)串木野鉦山の鉦脈群

串木野鉦山は主に、西山坑(一坑)、芹ヶ野坑(二坑)からなっており、この北西に位置する荒川鉦山、羽島鉦山と併せて広義の串木野鉦山と称し、これらの鉦脈群は東西12km、南北4kmの範囲に分布します。

(ア)西山坑：一坑と称した。串木野鉦山のチャンピオン脈である串木野1号鍾(V1)

を主体とする。狭義の串木野鉦山はこの西山坑のみを指す。元禄年間(1688～)に1号鍾東部の地表近くが採掘されたようだが、本格的採掘は明治になってからである。平成9年(1997)に採掘中止するまでは、LHD(ロードホールダンプ)やジャンボ削岩機などの自走重機を用いた近代的なトラックレス方式により採掘を行なった。串木野1号鍾は日本でも屈指の巨大鉦脈であり、総延長2,600m、脈幅3m～60m、上下連続450m以上を示す。過去の出鉦品位は金5～8g/t、銀はその約10倍であったが、富鉦体は金10～30g/tを示した(資源・素材学会, 1989)。

(イ)芹ヶ野坑：二坑と称した。串木野1号の南東部に位置し、15号鍾(V15)を始め多

数の鉦脈群からなる。最大の15号鍾は延長1,800m、脈幅0.3m～2.1m、上下連続280mを示す。出鉦品位は明治後半には金20g/t以上、大正年間には金8g/t内外、銀はその約10倍を示した(鹿児島県地下資源開発促進協会, 1972)。埋蔵鉦量減少のため、昭和50年代に採掘中止となった。

(ウ)荒川鉦山：串木野1号鍾の北西1kmに併走する。最大の荒川2号鍾(AV2)は、

延長1,200m、脈幅0.5m～15m、上下連続210m以上である。平均品位は金6g/t、銀40g/t前後である。平成元年に採掘を中止した。

(エ)羽島鉦山：西山坑の西4kmに位置する。羽島海岸に光瀬の露頭が認められ、

その東部延長は東シナ海に没している。鉦脈は数条あり東西系を示す。戦前まで断続的に稼行された。(中村廉 2004「串木野鉦山の概要」より引用)

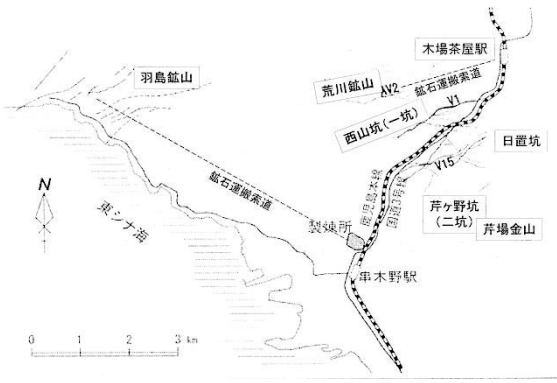


図6

串木野鉱山各坑分布図。JR串木野駅から北へ向い、製錬所は0.5km、西山坑・芹ヶ野坑は3～5kmに位置する。その北西の荒川鉱山、西の羽島鉱山と併せて広義の串木野鉱山と称する。

(3) 串木野鉱山鉱脈一覧表

三井串木野金山(株)より提供

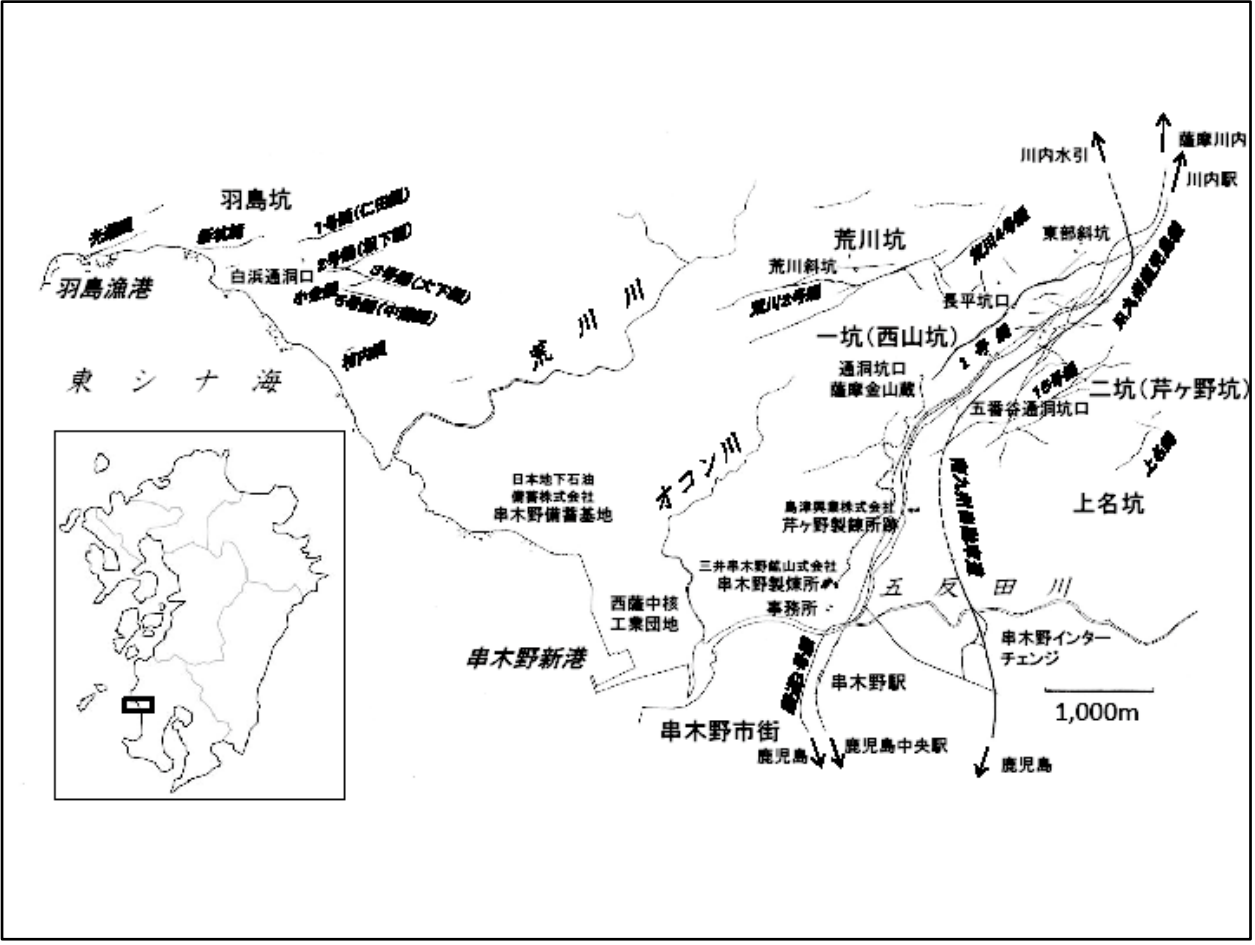


図 7

(4) 金山で使用された道具

ア 水銀壺



(写真 3)

明治時代に入るとフランスから招聘されたコワニエにより水銀を使ったアマルガム法が導入され、微細な金まで採取することが出来るようになりました。アマルガムとなった金と水銀の合金は、坩堝に入れ、加熱し水銀を飛ばすと青金となります。この水銀を入れていたのが水銀壺です。

イ 汰鉢



(写真 4)

砂金が入った土砂や磨臼で磨り潰された鉱石粉を水の中で揺り動かします。通称これをパンニングと言います。比重選鉱法により砂金だけに分離する手法で、この鉢はそれに用いるものです。直径約80cm。木製の汰鉢です。

ウ 粉碎筒(左)と金床臼(右)



(写真 5)

金床臼に小さくなった鉱石を入れ、粉碎筒で粉状になるまで更に磨り潰す道具です。

エ カタギン(肩衣)

カタギンは袖無しそで なとって裕あわせ(裏と表を合わせて作った着物)か綿入れでありました。

『鹿籠金山誌』(江口抱琴編 1915)には、金山鉱夫と農民を区別するために、薩摩藩が着せたのが始まりであると記されています。主に、自稼山で狭い坑道を鉱石を入れたダツテゴを背負って運ぶとき、重くて背中が痛いので、それをやわらげるために着るものでした。また、女の人たちが、鉱石を運搬するとき、寒さをしのぐために着たりしました。日常生活でも用いられ、寒い時など、母親や祖母が子供や孫に「カタギンを着らんか」と言うものでした。(鹿児島県立串木野高等学校 1997『生きた地域文化の体験学習 旭を体験して』)

オ ダツテゴ(金山テゴ)とテゴン子

ダツテゴは背負い籠のことです。自稼山で使ったのは、粗雑で、竹は太めのもので、紐は葛くずやウベ(アケビ)の蔓つるを用いたものでした。ウベの蔓は長持ちするといつて非常に重宝されていました。昔はダツと言っていて、ダツテゴとは呼んでいませんでした。それを金山テゴというようになったのは、金山地区の人々が日常生活で使用していたのを、周りの集落の人々が「ケスツテ(いたずらっぽく)」と呼んでいたからだといわれます。

ダツテゴを背負って鉱石を運ぶ仕事は、およそ7、8歳から14、15歳ぐらいの子どもがしており、家計を助けるために働いていました。そのような年少の者を「テゴ(手子)」と呼んでいました。そのころ学校に行く子どもは数える程しかおらず、ほとんどの子どもがテゴン子として、毎日鉱山で働いていました。

鉱口まで運び出された鉱石は、馬で水車小屋まで運ばれていました。この鉱石の運搬は、当時としては良い賃金でした。暗くて狭い坑道では鉱石を運ぶのは、大人より子どものほうが向いているとも言われていました。それでも坑内は、暗いうえに水が溜たまっていたりして、その中を歩くのが大変でした。大人は、ダツテゴを背負ったまま、トロッコに上手に鉱石を移し入れていました。ダツテゴに入れている鉱石をひっくり返して下ろすときは、かなりの熟練と要領が必要で、片方の葛ひもの紐の下の方を握って、片一方の手でダツテゴの底をそっと押し上げてひっくり返すのです。そうするとダツテゴに無理がきません。地面に逆さにひっくり返したダツテゴは、まっすぐ上の方にさっと抜きます。しかし、子どもは、トロッコの高い縁ふちに届きません。何か足場になる台を探してきてトロッコに入れました。

坑内で歩くのは、上り下りがあるって、下りに向かって歩くのは、籠の中の鉱石

が落ちたりするので、大変でした。一步踏み外したら、深い穴に落ちてしまいそうでヒヤヒヤするものでした。朝 7 時に坑内に入ると、午後の 3 時頃まで、一日に 30~40 回運びました。帰るときは、もうくたくたになっていました。金山地区の古老は「若いうちはテゴ(ダッテゴを坑内で背負い)に行つて難儀苦勞したものだ」と話してくれました。(鹿児島県立串木野高等学校 1997『生きた地域文化の体験学習 旭を体験して』。徳永律編 1994『芹ヶ野金山文書集(下)』串木野古文書研究会。)

カ 金山靴

昔は、金山で働く人は藁草履^{わらそうり}を履いていました。その後、布製の地下足袋^{じかたび}となり、昭和 3~5 年頃からゴム製の短靴が流行しました。これは、足が濡れないので、地下水のしみ出る坑内の労働者には重宝がられました。このゴム製の短靴にもサイズが大小あって、金山に勤める人の家では、小さい短靴は子供に履かせました。子供たちがその短靴で串木野の町に出かけると、町の子供たちから、からかわれたりするものでした。(鹿児島県立串木野高等学校 1997『生きた地域文化の体験学習 旭を体験して』)

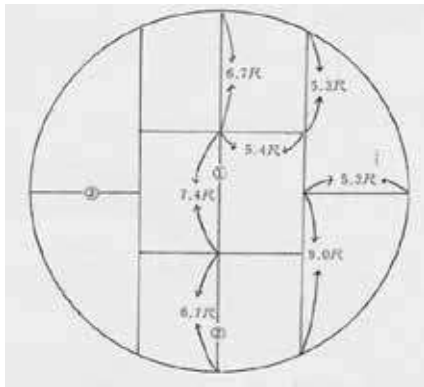
キ 竹製マット

三井金山で使用していた竹製の砂濾槽^{さろそう}用道具の一部で、現在は砂濾槽は下から箕子板^{すのこいた}、網、樹脂製マット、砂層(1m 程度)の順に重ねてあり、毎月上旬の砂 20cm 程度を入れ替えています。樹脂製マットを以前は竹マットで機能させていました。いつ頃竹製から樹脂マットに変わったのかはわかりません。

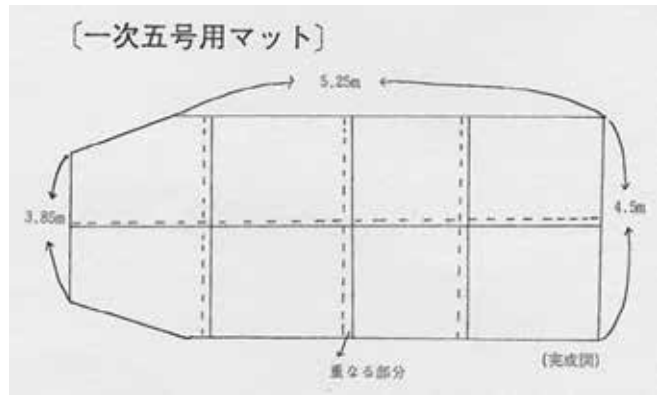
下に紹介する砂濾槽用マットは直径 21 尺(約 63.63cm)の大きなものです。これは通称「竹製マット」と呼んでいます。

1 つのマットを製作するのに普通の孟宗竹が 2 本半から 3 本は必要であり、相当な労力と時間を要する作業です。へぎ等一斉の準備をしておけば、マットは 1 日で編み上げます。マットは直径 7m 余の大きなマットですが、これを 10 の部分に分けて製作し(図 1)、三井金山まで馬車で運び、そこで組み立てて一枚のマットとして製品となります。

注文時に規格が定められており、へぎ幅 0.8cm で身半分となっています(写真 9 参照)。身半分とはへぎに竹の身の部分を半分、皮の部分を半分使用して交互に組み、編み上げます。



(図 8)

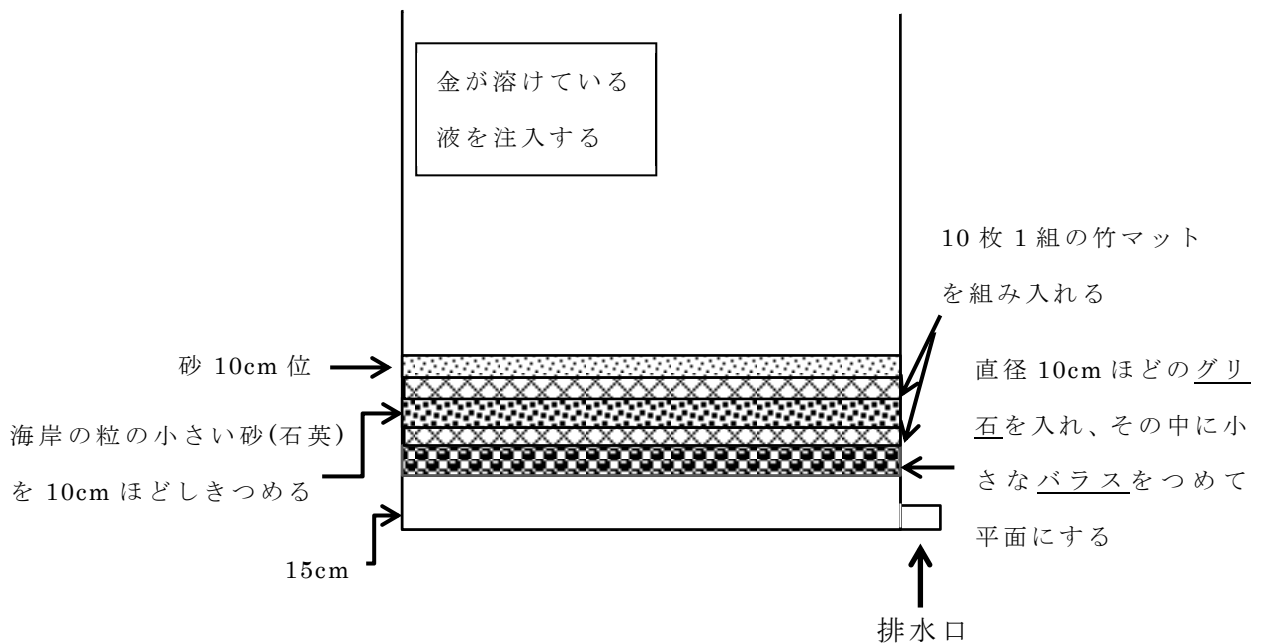


(図 9)

上の図は竹細工職人岩下高志氏が、三井金山から受注した竹製マットの設計図です。図 8 のようにマットを 10 の部分に細分して、部分的に編み上げていき、最終的には一つのマットに仕上げます。この他に一次 5 号用マット(図 9)というものがあり、これも部分的に編み上げて最終的に一つのマットに仕上げます。

このマットは 8 枚で一組になっていますが、使用目的は同じです。砂濾槽の形や大きさによってその型も違ってきます。液化した金(金を含んだ水)を砂濾槽で濾過し水の中の不純物を除去する装置で図 10 のような構造となっています。

【砂濾槽の構造】



〔直径 7m 床の円形の濾槽マット〕

(図 10)

グリ石…小さくてクリミたいな石
 バラス…グリ石よりもさらに小さな石

作業工程と用具



原材料となる孟宗竹は冠岳から購入して作業場の近くに保管して置きます。保管は直射日光を避け、日陰をえらび、さらに古いムシロなどで覆って直射日光を避けます。

(写真 6)



孟宗竹を選び出して鉋包丁で節を削りとります。

(写真 7)



サシ槌で竹を割ります。

(写真 8)



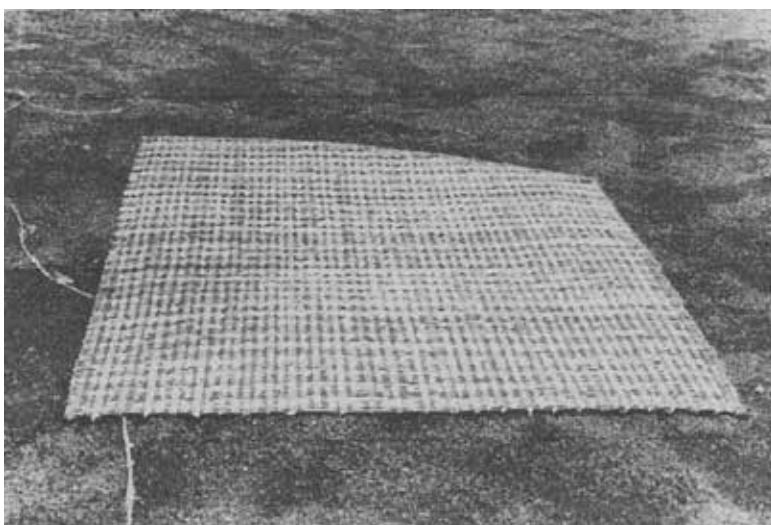
へギを取り、身の部分と皮の部分とに分けます。

(写真 9)



身と皮のへギを交互に組合わせ、一枚一枚編み上げます。

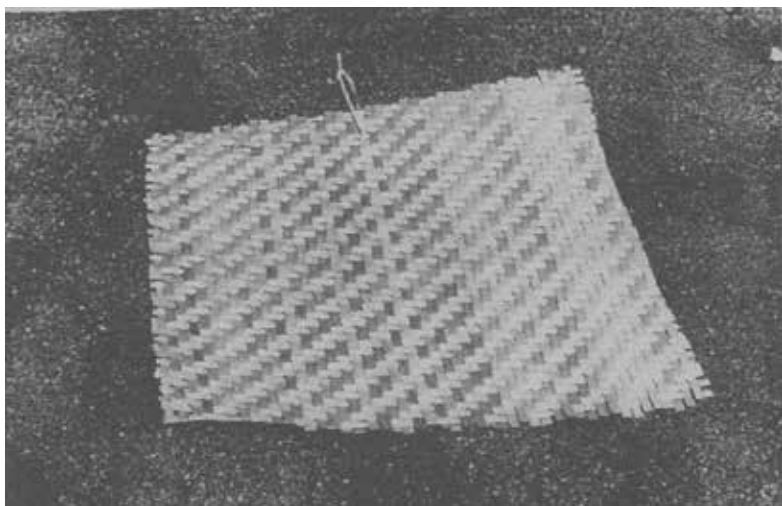
(写真 10)



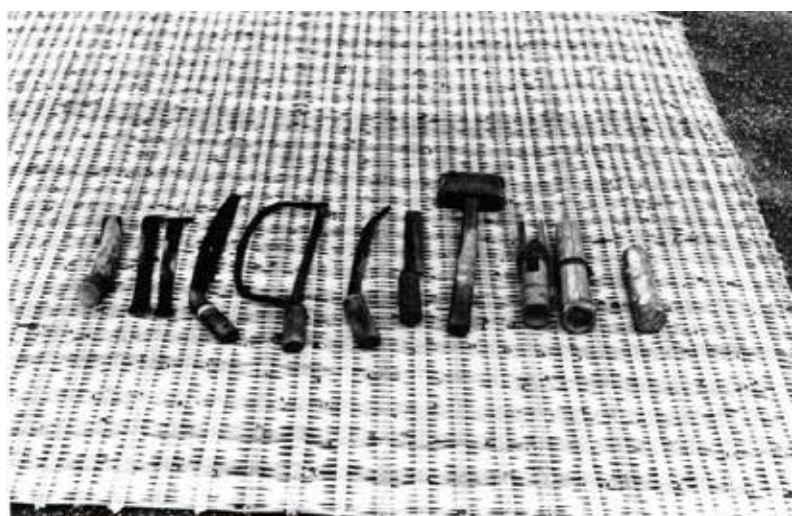
部分的、断片的に編み上げた竹製マットを金山まで運び組合わせて一つの大きなマットに仕上げます。

当時は馬車に積んで、現場まで運搬していました。

(写真 11)



(写真 12)



岩下氏が使用する竹細工用具。左から

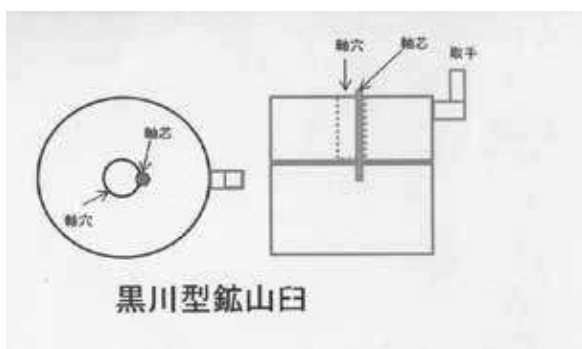
- ① 打ち棒
- ② 鉋包丁
- ③ 竹引き鋸
- ④ ツリカケ鋸
- ⑤ セン
- ⑥ 包丁
- ⑦ サシ槌
- ⑧ カラゴテ
- ⑨ カマセ棒

(写真 13)

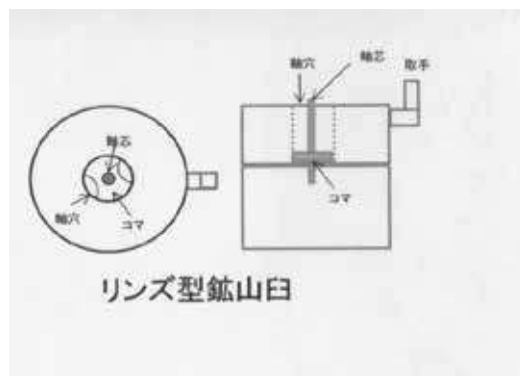
(5) 鉦山臼

薩摩の鉦山臼の特徴

初期の頃の鉦山では、採掘された金鉦石は、人力により小さな粒状になるまで搗鉦します。これを鉦山臼と呼ばれる臼に投入して、回転させながら粉末状にします。この粉末状のものを汰鉢と呼ばれる木製の皿に移して、比重選鉦法により金粒とそうでないドベとに分離します。この一連の行程で使用される鉦山臼は、古くは黒川型と呼ばれる臼を使用していましたが、改良され、湯之奥型やリンズ型といった様々な鉦山臼が使用されました。



(図 11)



(図 12)

ア いちき串木野市の鉦山臼

(ア) 磨り臼

磨り臼は、リンズ型ではない石臼と共伴関係にあると言われていています。(新田 2009)

新町の調査(新町 2012)では芹ヶ野金山の廃棄された石臼の上臼を磨り臼に転用している事例が多く確認されています。また、新町の別の報告(新町 2014)では、旭地区で写真 14 の磨り臼が確認されています。住民への聞き取りでは、住宅の庭の木を動かす際に地中から出たそうです。この住宅付近には坑道跡などもあり、鉦山跡を裏付ける資料です。

(イ) 石臼

現在確認できる石臼は、旭集落の民家石垣の上臼と山ノ神社手水鉢下に使われていた下臼があります。

写真 15 は、旭集落の民家石垣の上臼ですが、残念ながら大きく破損しており、磨面の観察などからリンズ型の上臼と思われます。また、山ノ神社境内の下臼(写真 16)は、軸山が形成されていない点、磨面の平坦さなどからリンズ型の下臼と考えられます。外面は自然石の状態を保っています。写真 17 は、中央公民館に前庭に展示されている黒川型下臼です。芹ヶ野鉦山で使用されて

いたと言われていています。写真 18～24 もすべて中央公民館前庭に展示されている石臼です。すべて黒川型石臼です。写真 25～29 は旭小学校玄関に展示されている石臼で、すべて黒川型石臼です。特記すべきは、写真 26 の石臼の供給孔に鉄の輪が装着されている点です。



写真 14 芹ヶ野集落 民家の磨り臼



写真 15 芹ヶ野集落 民家石垣の上臼



写真 16 芹ヶ野集落 山ノ神社境内下臼



写真 17 中央公民館の下臼



写真 18 中央公民館の上臼 1(表)

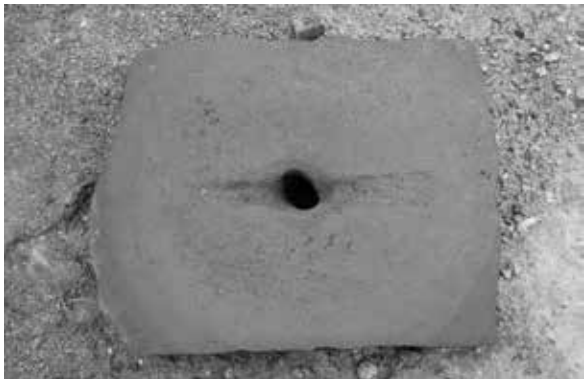


写真 19 中央公民館の上臼 1(裏)



写真 20 中央公民館の上臼 2(表)

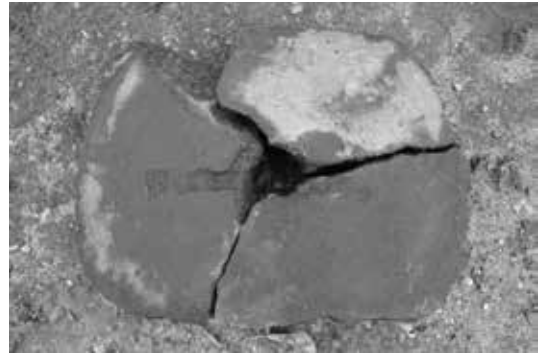


写真 21 中央公民館の上臼 2(裏)

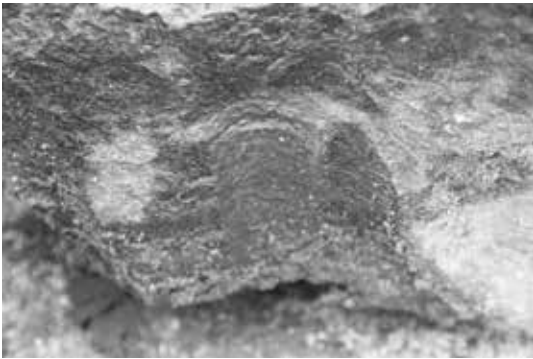


写真 22 中央公民館の上臼 2(軸穴)

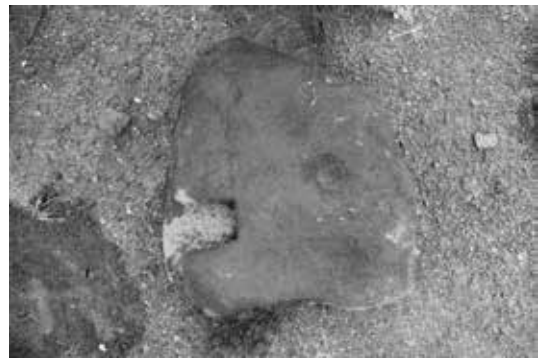


写真 23 中央公民館の上臼 3



写真 24 中央公民館の上臼 4



写真 25 旭小学校玄関の上臼(5・6)



写真 26 旭小学校玄関の上臼 5(表)



写真 27 旭小学校玄関の上臼 5(裏)



写真 28 旭小学校玄関の上臼 6(表)



写真 29 旭小学校玄関の上臼 6(裏)

ここで紹介した以外にも、旭小学校裏庭や生福の三反田川沿いには多くの石臼が散在しています。

【参考文献】

- 今村啓爾 1990「鉾山臼からみた中・近世貴金属工業の技術系統」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』9, 25-73
- 浦島幸世 1989『日本金山誌 第1編 九州』社団法人資源・素材学会
- 谷口一夫 2007『武田軍団を支えた甲州金―湯之奥金山―』新泉社
- 新田栄治 2009「山ヶ野金山の開山事情と鉾山技術―関係史料と考古資料から―」『南九州縄文通信No.20 南の縄文・地域文化論考 新東晃一代表還暦記念論文集』南九州縄文研究会 新東晃一代表還暦記念論文集刊行会
- 新町正 2012「薩摩における鉾山臼について―山ヶ野金山及び芹ヶ野金山で使用された鉾山臼の特長と分類―」『鹿児島考古第42号』鹿児島県考古学会
- 新町正 2014「薩摩で使用された鉾山臼に関する一考察」『鹿児島考古第44号』鹿児島県考古学会

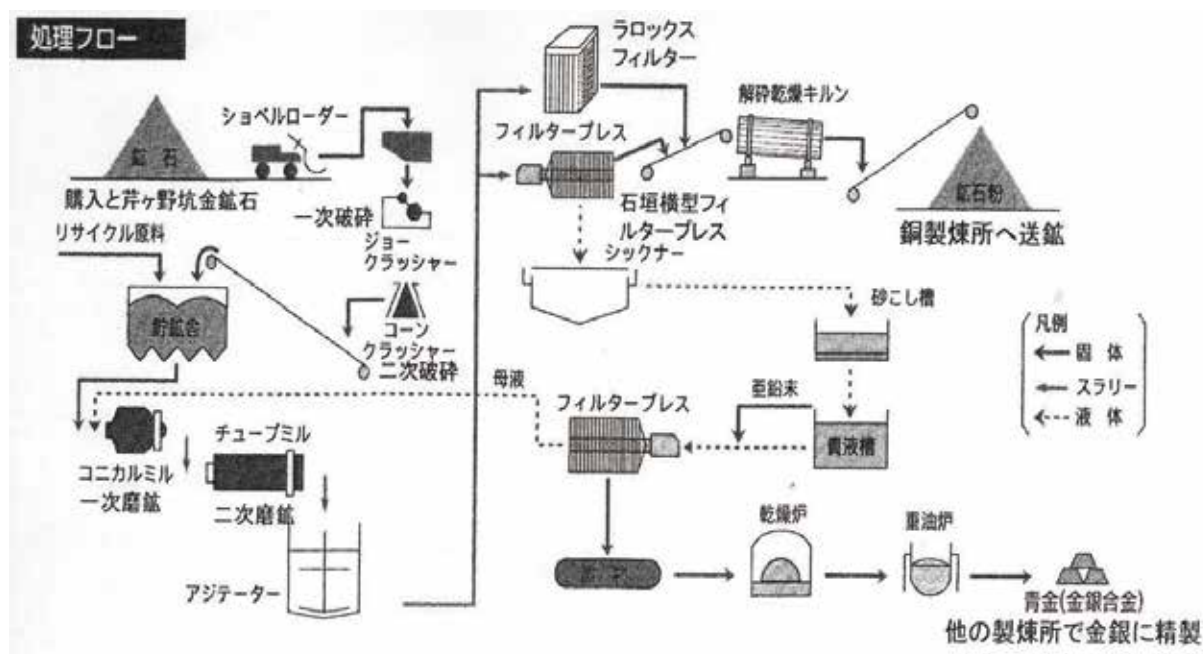
3 現在の鉱業

(1) 三井串木野鉱山(株)の操業

ア 貴金属精錬事業

五反田全泥青化精錬所では青化法(金鉱石中の金をシアン液で抽出する方法)が採用されています。

金鉱石を全て破碎し、シアン化ナトリウム液を加え磨鉱してスラリー状にし、アジテーターで空気を吹き込みながら、含まれる金を溶かしだして、金の溶けた液を濾過して回収し貴液とします。貴液に溶けている金の回収には、亜鉛末置換法(メリル・クロウ法)を採用しています。回収した金は重油炉で溶解し、青金として他の精錬所に送って、金を精製します。(いちき串木野市国民文化祭実行委員会編 2015『「シンポジウム金山の歴史」資料集』)



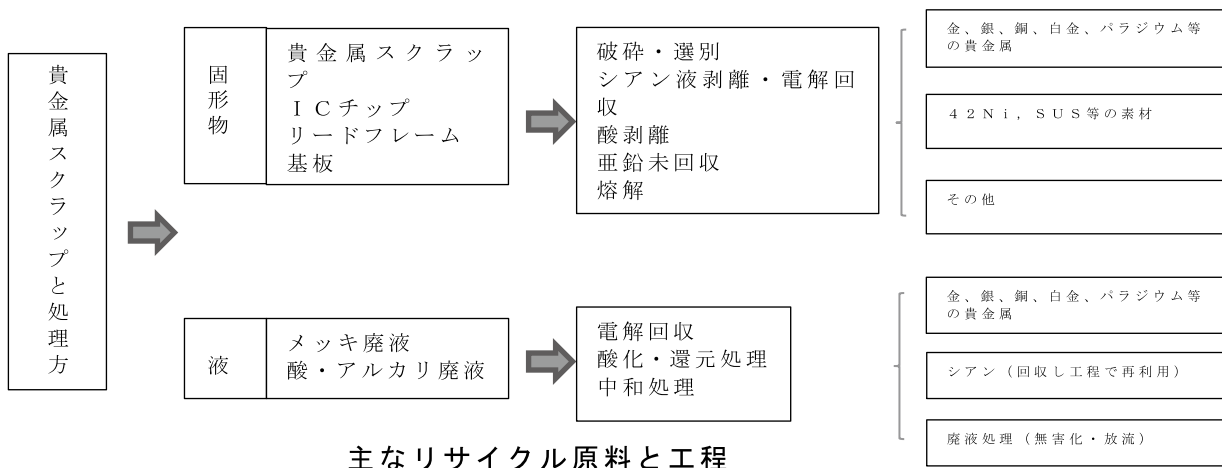
(図 13)

イ リサイクル事業

日本国内の再利用資源は意外に豊富にあり、生産工程で出る端材や使用済みになった製品をスクラップとして回収し、リサイクルしています。

主なリサイクル原料と工程

(いちき串木野市国民文化祭実行委員会編 2015『「シンポジウム金山の歴史」資料集』)



ウ 全泥式青化製錬法の概要

三井金属串木野鉱業所は、従業員 700 余名、一日に 650t の鉱石を掘り出す日本でも優秀な金山です。ここでとっている製錬法について、紹介します。まず、削岩機で、鉱脈の石に穴をあけて、これに爆薬をつめ、打ち壊します。砕かれた鉱石を近くのシュートに積み上げ、これを下の坑道から抜き出して鉄製の鉱車に積み、斜めになっている坑道を巻きあげ機によって、電車レールの敷かれてある二番坑道まで巻きあげます。巻きあげた鉱車は 25 台を一列車としてまとめ、4t の電車で、坑内を 2km、坑外を 3km、計 5km のレールを運ばれて、製錬工場に送られてきます。鉱石は精錬場の秤量^{びょうりょう}工場^{じょう}で、一鉱車ごとに量って、いよいよ製錬されるのです。昭和 58 年から、坑内は電車で運ぶが、坑外はトラック輸送になりました。

製錬工場は、明治 45 年から工事にかかり、大正 3 年から日本最初の全泥式青化製錬法を採用し仕事を始めました。その方法は、下記のとおりです。

① 破碎

電車で運ばれてきた鉱石は、破碎工場^{さいさくじょう}で、70 mm くらいの大きさに砕かれ、青化液で洗われてどろどろの泥を取り除いてから、40 mm の大きさに砕き、最後は 20 mm 以下の大きさに砕いて、貯鉱舎^{ちりょうしや}に蓄えておきます。

② 磨鉱

貯鉱舎の鉱石は、消石灰と一緒に一次磨鉱機と付属分級機という機械^{そくりゅう}で粟粒(35 メッシュ)以下にくだき、つぎに二次磨鉱機と付属分級機によって、メリケン粉粒(200 メッシュ)以下に砕いて、濃縮槽^{じゆうしやくそう}に入れます。「メッシュ」というのは、ある決まった広さにやっとなるつぶの大きさー残粒度を表す言葉です。35 メッシュといえば 1in(1 インチ)ー2.5cm 平方の広さを縦横 35 に等分したその広さに、やっとなることのできる粒度をいいます。

③ 濃縮攪拌

濃縮槽に入った細かく砕いた鉍泥は、比重 1.38 の鉍泥として、青化石炭とともに攪拌槽に入り、6 つの攪拌槽を 63 時間かかって流れていくうちに、金なら約 94%、銀なら約 84%が溶かされます。

④ 濾過沈殿

金や銀を十分に溶かし出した鉍泥は、ムーア濾過機で鉍泥と青化泥に分けられます。この濾過機で濾された液は、いろいろの設備にかけられてきれいな澄みきった液となります。これに亜鉛の粉末が加えられ、金や銀を沈ませながら、澱物濾過機にポンプで送ります。一方、用のなくなった鉍泥は沈澱池に送ってしまいます。

⑤ 澱物採取及び精製

澱物濾過機の内沈んで溜まったものは 2 週間ごとにはきとられて、精金所に送られ、ここで乾燥—溶解—精製の順序に従って銀白色の青金となる。この金・銀からなる青金は、広島県竹原精錬所に送られ、電気で分解されて純金と純銀になります。この青金の金・銀の純度は 99.4%で、一つが 5cm の鋳型にはめてつくられます。(串木野市教育委員会 1984『串木野郷土史 補遺改訂版』)

(2) 赤石鉍山

ア 位置・交通

当山は知覧町の市街地の東西 9km に所在し、枕崎市より知覧町に通ずる県道の北側 200m にあります。

イ 沿革

明治 23 年(1890)鹿児島県川辺郡川辺町の高良勇次郎が初めて探鉍に着手し、明治 36 年(1903)に田布施村の宮内敬二が鉍業権に共同加入し、同年現在稼行中の主脈露頭を発見し、赤石野岡鉍山と称しました。同 39 年(1906)宮内敬二の単独経営となり、同 45 年(1912)より赤石鉍山と改称し、第二次世界大戦の中期に重要鉍山に指定されました。大正 10 年(1921)宮内敬二が死亡したので、宮内敬太郎がこれを相続し、昭和 13 年(1938)採登第 14 号と第 207 号を合併して再登第 357 号として鉍区の登録替えを行いました。

昭和 18 年(1943)の金鉍業整備令に当たっても、珪酸鉍鉍山として存続を指定され、戦前、戦後を通じて継続稼業されました。

ウ 生産量

大正 12 年(1923)以前の生産量については明らかではありません。大正 7 年(1918)については産金量 60,161g の数字があります。

大正 13 年(1924)～昭和 12(1937)

金量 186,860g、別に尾鉱 10,086t

昭和 13 年(1938)～18 年(1943)

金量 236,242g、別に金銀鉱 6,955t、汰粉 199t

昭和 21 年(1946)～26 年(1951)

鉱量 1,806t、含有金量 21,567g

昭和 27 年(1952)～52 年(1977)

鉱量 148,958t、品位 Au 14.8g/t、Ag8.1g/t

昭和 53 年(1978)～57 年(1982)

鉱量 115,559t、品位 Au5.4g/t、Ag6.6g/t

(社団法人 資源・素材学会 1989『日本金山誌 第一編 九州』より引用)

4 いちき串木野市内の各金山の概要

(1) 芹ヶ野金山

歴史

ア 西山坑(一坑)

1号鍾(西山鍾)の発見は、万治年間(1658-1660)または鎌倉年間(1185-1333)とも言われています。元禄元年(1688)もしくは元禄2年(1689)に薩摩川内の鍋商人であった新原喜左衛門が藤沢付近に於いて1号鍾の露頭(西山ひよ鳥まふ)を発見し稼行したとされていますが、湧水量が増加したため止む無く廃業しました。

その後、寛保3年(1743)と天明7年(1787)に若干の試掘を行ったようですが、はっきりとした記録はありません。文政11年(1828)に島津重豪の指示により、調所笑左衛門広郷が市来藤右衛門と富島仁右衛門に串木野村野下の1号鍾の西南端を4か月間試掘させましたが、低品位で岩盤が堅く中止しました。

慶応元年(1865)から薩摩藩に代わって島津家の稼行となりましたが、鉱石に含まれる銀量が増加し混汞法による製錬に適さなくなったため、明治9年(1876)頃に稼行を中止しました。明治18年(1885)頃には田中龍太郎が兵庫県生野鉱山の分析課長永野七郎の推奨により同じく混汞法によって稼行しましたが、成績が良くなく間もなく中止となりました。

明治23年(1890)に日本鉱法が施行され、誰でも申請すると鉱区を取得できるようになったため、西山には小鉱区が乱立しました。

明治27年(1894)当時は、専ら昔に廃棄した鉱石を淘汰して金銀を回収することが主で、長平坑口から日野坑口に至る東部1番坑道と、長平坑口から宮之原坑口に至る西部1番坑道があり、1番坑準ないしは2番坑準付近までの富鉱部を稼行しました。宮之原鉱区(角石鉱山)では、明治27年(1894)に勾配に沿って6m掘り下がり、平均品位 Au 16g/t で採取していました。明治44年(1911)頃は日野鉱山全体では、水車搗鉱が50~60箇所あり、従業員数も300~400名ほどいて、50t/日を混汞法で処理していたようです。

しかし、次第に湧水量が増加して遂に揚水が困難となる状況に陥って、鉱業権者の間に全鉱区を統合して大資本に委ねたいという機運が持ち上がりました。この意向を受けて、鹿児島なごしけいじろの測量技師名越佳次郎は島津家と交渉しようとしたのですが、島津家は明治8年(1875)頃に稼行を放棄した経緯があったので適当ではないということになって、興業師おおきこかんい大迫貫為に取り纏めを依頼、三井鉱山合名会社に話を持ち込みました。その結果、何とか鉱区の取り纏めに成功しました。

明治38年(1905)に三井鉱山合名本店から山田文太郎主事、大坪一郎技士が予察

調査を実施して、結果、有望であったため、明治 38 年(1905)12 月 21 日に有望であれば買山するという買山仮契約を締結しました。明治 39 年(1906)1 月に本店から鉱務技士長谷川鑑示等 5 名が串木野に出張、6 か月間の本格調査によって有望と判断されたため、三井鉱山合名は明治 39 年(1906)6 月 18 日に買山を決定し、9 月 14 日付で長谷川鑑示は初代所長となりました。(五味 篤 2017、2018 製錬の歴史・串木野鉱山の技術発達史。「季刊・資源と技術」第 2 巻 3 - 9 号)

イ 芹ヶ野坑(二坑)

串木野において早くから知られていたのは芹ヶ野坑(二坑)です。発見の由来は明らかではありません。鎌倉年間(1185-1333)とも承応元年(1652)とも言われています。

幕府は、寛永 17 年(1640)3 月に薩摩藩によって開発が進められていた山ヶ野鉱山に対し、寛永 20 年(1643)、飢饉を理由に休山命令を出しました。当時薩摩藩金山奉行であった富島伝右衛門は豊後や筑前など様々な所から集めた鉱山技術者達を帰国させずに、芹ヶ野一帯を採鉱させました。その時に、承応元年(1652)、芹ヶ野鉱脈群が発見され、明暦元年(1655)年から試掘が開始されたのです。万治 3 年(1660)からは山ヶ野鉱山の支山として八木主水佑元信により本格的に開発されました。しかし、鉱況の悪化によって天和 2 年(1682)に休山し、坑夫らは枕崎にある鹿籠金山に移されました。

元禄 11 年(1698)幕府勘定奉行^{おぎわらしげひで}萩原重秀から全国の金銀銅鉱山の開発指示がなされたために、薩摩藩では元禄 14 年(1701)に幕府から二万両を拝借して再開発を行いました。

その後、天明 7 年(1787)より吉田喜三次が試掘申請許可を得て、寛政 5 年(1793)名代替えで森山太助が試掘申請許可を得て稼行しましたが坑内浸水で中断しました。

嘉永 5 年(1852)に和田八之進が藩命によって芹ヶ野金山の採鉱を命じられ、一帯を採鉱しましたが、いずれも再開されることはありませんでした。

元治元年(1864)、島津^{しまづひさみつ}久光が再興を命じて、翌慶応元年(1865)より山ヶ野金山廻役市来四郎太、山師主取佐野伝右衛門、薩摩藩詰奉行伊東仙太夫ら 70 名が派遣されて再開発となりました。慶応元年(1865)より薩摩藩に代わって島津家の稼行となり、長谷^{はせ}場^せ藤^{とう}蔵^{ぞう}が金山奉行を勤めました。元治元年(1864)から明治 3 年(1870)9 月頃までは戸切川(金山川)沿いの数ヶ所で、踏臼による粉砕と揺り鉢による淘汰で細粒の金の採取などが行われました。

明治 3 年(1870)12 月に水車の建設が始まり、明治 4 年(1871)に初めて小字水車

平と字大切(五番谷口)に水車各 1 台が完成して鉱石を乾式で砕いて粉鉱を回収しました。当初粉鉱は兵庫県にある生野鉱山の製錬法に従って塩化焙焼し混汞樽で 1 昼夜運転して金銀を採取する塩化焙焼混汞法によって処理しました。明治 19 年(1886)4 月には、これを水搗混汞法に改めて、尾鉱をさらに混汞樽で処理して金銀を回収するようになりました。

明治 21 年(1888)まで島津家直轄で稼行を継続しましたが、なかなか採算が採れず、一般に自稼制を許可して採掘を継続しました。主な自稼請負人としては田尻善右衛門、内田善右衛門、平石仁兵衛、松田宗次(上倉谷、大峰など)、佐藤吉太郎・三太兄弟(下倉谷)、有馬栄之進(法華谷、大峰など)、有馬孝治、大藪平介、宮之原重、中尾助市(山木ヶ平)などがいました。

明治 27 年(1894)当時、島津家の芹ヶ野鉱山とは別に、明治 22 年(1889)10 月に奥田栄之進が上名の五番谷上流で稼行を開始した薩摩山鉱山の他に、奥田栄之進、内田善右衛門、平石仁兵衛の茅野鉱山、大峰鉱山などが稼行されていました。

明治 37 年(1904)、島津家では芹ヶ野鉱山が有望であると判断して、直轄事業として近代化を図ることとなりました。そこで五代龍作を鉱業館長に任用して、資本金 55 万円 wp 出資し、開坑と製錬所新築を計画、技師田中悟を開坑主任として明治 39 年(1906)8 月に通洞開削、十里塚坑と六番谷坑の改修に着手、技師川関等光を工事主任として搗鉱・青化製錬所を建設し、明治 42 年(1909)5 月に竣工、同月 30 日に操業を開始しました。

青化製錬所に電力を供給するために、明治 40 年(1907)6 月に工事主任川関等光、副主任鈴川貫一によって、日置市伊集院町大田の神之川水系轟滝下に 250kW 大田水力発電所の建設に着手し、芹ヶ野鉱山に至る旧出水街道筋沿い 15.5km に電柱 404 本を建てて明治 41 年(1908)12 月から送電を開始しました。

さらに、島津家では明治 41 年(1908)10 月に奥田栄之進から薩摩山鉱山、上名製錬所(水車 9 台、杵 90 本、青化樽 12 個)、戸切川製錬所(水車 3 台、杵 27 本、青化樽 6 個)を 3 万円で買収し、芹ヶ野鉱山に合併して操業しました。

五代龍作は山ヶ野鉱山と芹ヶ野鉱山の全工事を完了後、明治 44 年(1911)8 月に、後任を西郷菊次郎に譲りました。

大正年間には鉱石品位 Au 7.5g/t、Ag 35g/t、製錬処理能力 40t/日で操業、年間 400kg 前後の青金の生産を続けました。

当時、芹ヶ野鉱山には自稼請負人が 62 名も登録して、附属坑夫 550 名、水車 202 台、杵数 2,612 本もあり搗鉱混汞法で採金しました。

大正 5 年頃より鉱況不振で経営困難となり、大正 11 年 1 月には鉱業館と島津家各事業(山ヶ野鑛業館、芹ヶ野鉱業所、吉野植林所)を薩摩興業(株)に改組して探鉱

に努めましたが、出鉱は不振でした。

昭和2年(1927)1月に薩摩興業(株)社長和田世民と串木野鉱山所長佐藤壽雄との間で売鉱契約を締結、3月から串木野製煉所に鉱石(200t/月、Au 8g/t)の売鉱を開始しました。同年2年(1927)に金融恐慌の影響によって取引銀行の十五銀行が経営破綻したために、薩摩興業(株)は休山せざるを得なくなりました。

そこで、三井鉱山合名会社は薩摩興業(株)社長和田世民と親交のあった近藤龍三郎に買収の斡旋を依頼して、同氏の尽力で昭和3年(1928)2月に三井鉱山合名会社に鉱区譲渡が決まりました。大田発電所は同年2月に日本水力発電(株)に譲渡されました。(五味 篤 2017、2018 製錬の歴史・串木野鉱山の技術発達史。「季刊・資源と技術」第2巻3-9号)

(2) 芹場金山

歴史 上名坑

五反田川支流芹場川(三反田川)周辺には、金山に関わると思われる地名(茶屋、金蔵、法華谷、風呂屋、女郎ヶ谷、上倉谷、金石、黄金穴など)が多く見られます。

芹場金山は万治3年(1683年)に始まり寛文から天和の初めにかけて23年間繁栄し、7,000人も集まったとされています。

明治22、3年(1889、1890)頃は廃鉱石(Au 50~60g/t以上)を地元の人々が水車および青化法によって再処理し、明治42、3年(1909、1910)頃まで継続されていたそうです。茅野鉱山は往時の芹場金山の廃鉱石を回収して混汞法で処理され、大峰鉱山でも廃鉱石を処理したが高品位の鍾も採掘されていました。大峰鉱山と茅野鉱山は奥田栄之進、内田善右衛門、平石仁兵衛が共同で稼行していましたが、明治35年(1902)から大正5年(1916)まで赤字であったとされます。

昭和10年(1935)頃までは、山木ヶ平鉱区を宮之原重・山野田一成・中村作太郎、上倉谷鉱区を松田宗次・竹田ひさ・下倉谷鉱区を佐藤三太郎、法華谷鉱区を山岡国利、犬殺鉱区を鹿島正伸、大峰鉱区などを有馬英之進が所有していました。

三井鉱山(株)は昭和10年(1935)から11年(1936)にかけて鉱区を買収し、昭和11年(1936)~13年(1938)に二坑6番坑準から坑道探鉱しましたが、目立った成果は上がりませんでした。(五味 篤 2017、2018 製錬の歴史・串木野鉱山の技術発達史。「季刊・資源と技術」第2巻3-9号)

(3) 荒川金山

ア 荒川鉱山について

荒川鉱山が発見された時代は明らかではありませんが、明治37、8年から40年

代にかけて、当時の薩摩郡高江村(現薩摩川内市高江町)の家村幸助により、採鉱・掘削が行われました。後に荒川鉱山の1号路頭付近および、本鉱1号鍾の富鉱部付近で、自家製錬を行っていた時の責任者は満留次郎です。最盛期には3、40人の人が働いておりました。採掘した鉱石を水車で砕いて、青酸カリなどの薬物を加え、鋼板こうばんに流し込んで、金銀を取るという方法でした。したがって、回収率が低いので、鉱石をハンマーで割って品位の高い部分だけを使っていたようです。その当時の鉱道は今でも残っています。

大正3年(『串木野郷土史』では大正2年)に、現在の日本鉱業の前身である久原鉱業株式会社が買収し、しばらくの間採掘しましたが、後に休山しました。その後、日本鉱業株式会社がこれを引き継ぎ、昭和7年に掘り始め、昭和15年から本格的な採鉱に入りました。しかし、第二次世界大戦中に、金山整備令により、停止されました。

終戦後、昭和21年から復旧に着手され、25年の9月には、2,000tを処理する全泥浮遊選鉱場ぜんでいふゆうせんこうじょうが完成して、荒川の産業振興に大きな貢献をしました。しかし、粗鉱そこうの品位が低下したこと、その他の理由により昭和34年4月には休山となりました。当時の従業員は180人であったということです。

荒川鉱山が、盛んに操業していた頃は、荒川は非常に活気づいていました。人々は専業として、あるいは農業のかたわら鉱山で働き、また外部からたくさんの従業員が入り込み人口も増加していました。

昭和21年に荒川鉱山が開かれましたが、それと同時に生徒数も急に増え、荒川小学校の児童数は昭和25年が最も多く300人を超えました。昭和29年には中学校の荒川分校は独立し、串木野市立荒川中学校として出発しました。また、産業教育振興法による研究協力校にも指定され、学校が発展していきました。しかし、昭和30年に荒川鉱山が閉鎖されると同時に生徒数は減少していきました。(浜屋新編集委員長1970『荒川郷土誌』)

イ 鉱石ウセ(鉱石を馬や牛の背中に負わせること)

荒川鉱山が盛んな頃は、荒川川の流れにそって、鉱石を砕く水車小屋がたくさん建っていました。これは個人経営の自稼山そうらで、草良おおかわちから大河内集落など急流のところには多く建っていて、松尾神社付近まつのお(中向集落にある旧松尾神社)まで見られました。全盛時代は十数軒あり、砕いた鉱石粉のため川は、米のとぎ汁のように白く濁っていたと言われています。この鉱石運搬の仕事は、荒川の若い男女の貴重な賃仕事でした。毎朝、暗いうちに一人で一頭か二頭の牛馬を引いて西山坑に行き、鉱石をカガイ(綱で編んで作った入れ物)に入れ、水車小屋まで運ぶ

のが日課でした。明治の頃は、一駄^{いちだ}(1頭1回の運び料)が、10銭から15銭と距離によって賃金は違っていました。しかし、明治の末ごろから水車小屋もなくなり、それとともに仕事もなくなりました。

ウ 三井の精錬所で利用する水を野元・平江の田圃の用水に生かす

いちき串木野市の野元・平江地区は、昔は(第二次世界大戦前)、三井の製錬所で利用する水の一部を、パイプで平江の田圃に送ってもらっていました。終戦後まで、お礼として田圃でとれた米を上納米(水田用水の使用料としての米)として納めていました。

昭和41年からの記録簿を見ると、1反(約991平方m)あたり、1000円、1畝(1反の10分の1)あたり100円、1歩(1畝の30分の1)あたり30円の使用料となっています。

「水掛粃徴収」(水掛けのための粃徴収)として、その年の12月20日に、水路委員が平江・野元の農家から集めました。合計粃60kgを三井鉱山に納めています。

水路委員は、三井水路の清掃、ビニールパイプの補修、水守、三井水量の増減の交渉などを行っています。水守というのは、水が順調に流れているか、盗まれていないかなどを監視する仕事、およびその係の人のことです。(橋之口篤實2002『私たちの野平地区(含む深田上)』)

(4) 羽島金山

ア 歴史 羽島坑

羽島坑は豊臣氏の時勢に稼行されたと言い伝えがあり、慶応2年(1866)5月に薩摩藩が再興したと言われています。慶応2年(1866)山口矢之助、山師新太郎が試掘しましたが、明治10年(1877)西南の役で休止されました。明治4年3月には発破(爆薬)が使用されました。明治7年から17年までは五代友厚^{ごだいともあつ}が所有して、^{はとういんしげゆき}萩答院重之が探鉱を行っています。明治16年(1883)には水車2台を設置して、中鶴鍾(5号鍾)、坂ノ下鍾(2号鍾)、仁田鍾(1号鍾)、馬道鍾(4号鍾)、白浜鍾を稼行しました。明治23年(1890)には岐阜組羽島鉱山(渡辺甚吉、児島呉一郎)の経営となって10万円を投資しましたが成功しませんでした。明治33年(1900)には生島嘉蔵が所有しましたが稼行に至りませんでした。明治37年(1904)堀之内庄右衛門がこの地方で最初の青化製錬所を建設し、大規模に経営しました。この時に大規模に探鉱と採鉱を行っています。明治40年(1907)末に青化製錬所を焼失して以降、急速に産出量が減りました。明治21年(1888)から同41年(1908)

までに産出粗鉍量 9,705.5t (品位 Au 8.16g/t, Ag 29.75g/t)、含有金量 79.223kg、含有銀量 288.709kg を採掘しています。(五味 篤 2017、2018 製錬の歴史・串木野鉍山の技術発達史。「季刊・資源と技術」第 2 巻 3 - 9 号)

5 言い伝え・由来など

(1) 1千戸集落

いちき串木野市の川崎集落と福菌集落の間を流れる川を芹場川といますが、その流域を芹場迫と呼んでいます。この辺一帯は、芹場金山があった所で、1千戸集落と呼ばれ、たくさんの鉱夫がいたと言われています。家は小さな茅葺きで、これらの家が無数に並んでいました。採掘に来た人々は、ほとんどが外部から来たと言われています。1千戸集落というのは、山ヶ野金山(薩摩郡さつま町にあった金や銀の鉱山)では、千軒と言われ、千戸の家が密集していたという意味です。1戸あたりの間口が狭く、作業小屋程度の家が連なっていました。ということは、それほど産金量の多い鉱山だったということの意味します。そこに住む鉱夫が一人暮らしだったとしたら 1,000 人の鉱夫がいたということです。とにかく多くの人々がひしめいていた集落だったのです。(鹿児島県立串木野高等学校 1998『生きた地域文化の体験学習 生福・冠岳を体験して』)

(2) 茶屋や風呂屋、料理屋などで大賑い

長尾山を右に見て芹場迫を上がれば、ここから 4km の地にある「じょろうが谷」に至るあたりが、昔の芹場金山のあった跡のようです。茶屋、内田の木戸、金蔵、法華谷、風呂やの鼻先、女郎が谷、上倉谷、金石、黄金穴など、金山の跡をしのぼせるにふさわしい地名が現在も残っています。茶屋は、茶や食事を提供する所ではありますが、ここでは代金を精算したりする役割もしました。内田の木戸は、1千戸集落の木戸で、そこは開き戸があったと言います。金蔵は、金を買い入れ貯蔵していた所です。このほか、そのころの鉱石をすりつぶすための石の臼が、芹場川の清い流れの飛び石とされていたり、田圃のあぜの石垣の中に組み込まれているのが見られます。その光景は、今から 300 年以上前の昔をしのばせてくれます。

「女郎が谷」は、「づいやが谷」とも言われ、料理屋があり、女性たちが給仕をしてくれた所と思われます。「づいや」というのは、料理屋が鹿児島の方言になったものです。(串木野市教育委員会 1984『串木野郷土史 補遺改訂版』)

(3) 金を掘る人々の墓

長尾山の雑木や竹やぶの中に、当時の「しつのもん」達の墓が点々とあります。しつのもんと言うのは金山坑内で働く者の意味です。坑道はしつとか

しっと呼ばれていました。

墓には、寛文 11 年(1671)に亡くなった「吉兵衛の母」と刻んだものがあります。同 12 年(1672)の墓の戒名に「上座」と書かれたものもあります。上座というのは徳のある僧侶に用いられる戒名で、「心」があるので禅宗の僧侶と考えられます。戒名というのは使者に対して与えられる名前のことで法名とも言います。2 つの墓とも芹場金山開発初期に亡くなった人の墓です。

福園の入口に、次のような銘の入った墓があります。

吹田屋吉兵衛

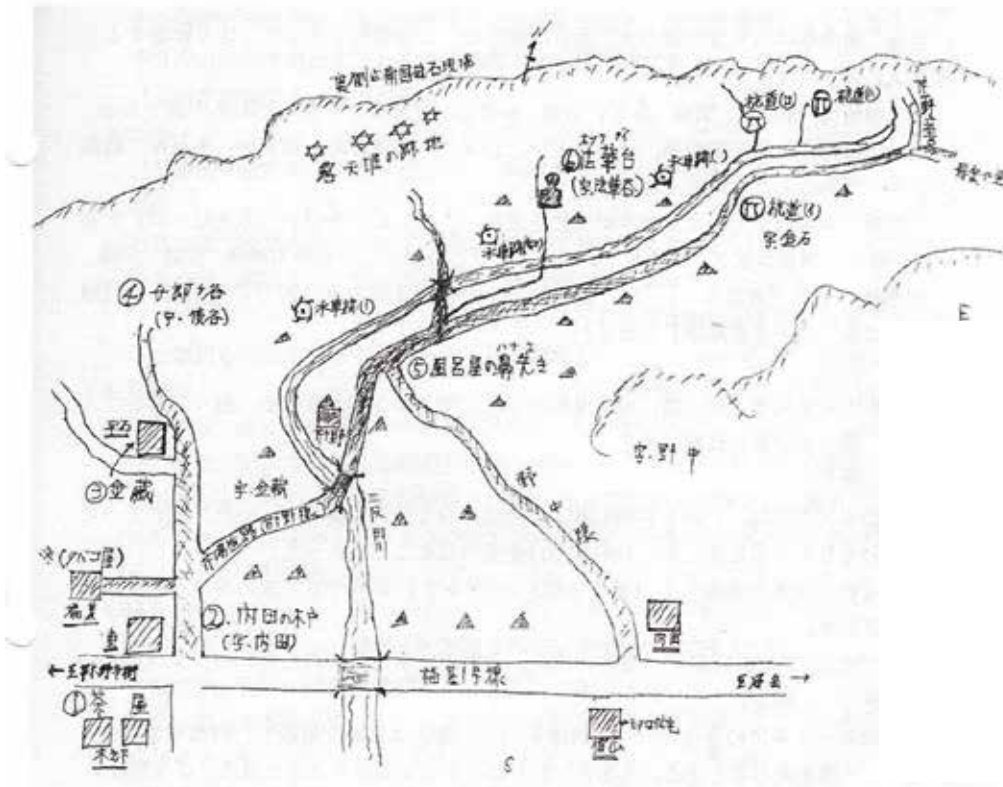
天和三癸亥年 正月二十六日

天和 3 年は西暦で 1683 年です。吹田屋は吹分の職、金吹屋のことは、金吹屋というのは、金を吹くこと、すなわち金を精錬し、又は鑄造する家、あるいはその人を言います。天和 3 年は、芹場金山が休山する年です。(串木野市教育委員会 1984『串木野郷土史 補遺改訂版』)

(4) 法華谷の阿弥陀如来像が信仰されていた意味

法華谷にある阿弥陀如来像がありますが、その傍らの供養塔によりますと、「天和三年癸亥六月五日」の銘があります。この年は、芹場金山から枕崎の鹿籠金山に移っていった翌年です。法華宗を信じる人たちが残していったものでしょう。この阿弥陀如来像は、仏像の高さが約 80cm、幅約 60cm、蓮華台座が 54cm あり、合わせて 134cm の高さがあります。法華宗は日蓮宗の別称ですが、天台宗の別称でもあります。中国から伝わり、日本では最澄が平安時代に日本天台宗を始めました。後に浄土教も説きました。そうすると、この法華谷の阿弥陀如来像は、天台浄土教の教えを受けた人々によって建てられたことが考えられます。これまで、鉱山で亡くなった人々を供養し、同時に自分たちの極楽に往生することを願ったのです。彼らは、天台系の山伏に教えを受けたことが考えられます。山伏は、金を発見したり精錬したりする技術に長けていました。(串木野市教育委員会 1984『串木野郷土史 補遺改訂版』)

下の「芹場迫の金鉱石採掘跡地図」は、いちき串木野市生福の東純一氏に、1998年に画いていただいたものです。今では貴重な芹場迫の史跡地図とされています。(鹿児島県立串木野高等学校 1998『生きた地域文化の体験学習 生福・冠岳を体験して』)



(図 13) 芹場迫の金鉱石採掘跡地図(別名一千戸集落ともいわれた)

(5) 冠岳で活躍した金山水車 一冠岳に金が出るの？一

最後の金山水車は、薩摩山の旧道にかかる山伏橋の北 200m の、旧道と川の間には挟まれた石田どん(殿)の水車です。時々荷馬車で国道下の空き地に、どこからともなく鉱石が運ばれてきていました。しかし、昭和 6 年にはこの水車も消えて、芹ヶ野金山の水車搗鉱(水車で鉱石を搗き砕くこと)は 60 年の幕を閉じました。ところがこの水車がこの地を離れて、再び活躍する日がきました。それは、冠岳の西岳下五反田川をせき止めて作った大六野ダムの堤防のところでした。そこには小さな谷間で高さ 20~30m はあると思われる滝があり、水は五反田川に落ちています。この滝の中ほどに、昭和 5、6 年の頃山師(やまし)がきて、旧坑口を開けて金の採掘をしました。芹ヶ野に最後まで残っていた水車を買って受けて、水車で鉱石を砕き、製錬までしました。しかし、見込んだほどの鉱石が出ず、1、2 年で止めてしまいました。今は、その水車は消え去り、その跡地さえも分からないようになっています。(竹中武夫 1991『芹ヶ

(6) 金山峠を越えた学者や歌人

ア 三井ヶ丘の、東シナ海の水平線に目を注ぐ福德観音

この観音は日本芸術会員吉田三郎によって刻まれました。「人々を救う大きな慈悲の尊厳ある容^{かたち}」で表し、金銀が湧き出す三井ヶ丘の台地に建てられました。しかし、昭和 18 年に第二次世界大戦が始まり、国に接収されました。その後、再建を願う声が高まり、当時の三井鉱山株式会社社長有田貞二郎氏が、鉱山の安全繁栄と地域とのかけはしとなることを願って建てられ、同時に公園も作られました。故吉田三郎とは子弟の間柄である日展評議員伊藤^{いとう}五百亀^{いおき}によって、再現されました。(串木野市教育委員会 1984『串木野郷土史補遺改訂版』)

イ 新原喜左衛門の墓

国道 3 号線から旭小学校の脇の道を歩いて行くと十分足らずで、西山集落に着きます。そのはずれの杉木立の中の墓地の一角に、石柱で囲われた新原喜左衛門の墓があります。喜左衛門は、川内(現薩摩川内市)^{なべ}の鍋商人として知られた人で、元禄 2 年(1689)、串木野市下名藤沢付近で、西山鉱を発見し、採掘を始めたと言われていています。この墓は、大正 14 年(1925)、西山金山の長久を祈り、新原喜左衛門に感謝の気持ちを込めて、西山集落の人々が建てました。新原喜左衛門は、元禄 13 年(1700)2 月 9 日に亡くなりました。戒名は「法山傳阿居士」と刻まれています。(串木野市教育委員会 1984『串木野郷土史補遺改訂版』)

(7) 金山よもやま話

ア 金鉱石を砕く水車小屋と山太郎ガニ

金鉱石を砕く水車小屋のある溝には、旧暦の 8 月になり、小雨が降ると産卵のために八月ツガネ(山太郎ガニ)が下ってきます。八月ツガネは、生まれた後、川口から川上に上り、成長します。秋になると生まれ故郷である、川下の真水と海水が混じり合う所に下っていきます。水車番は、水車を止め、ヤナを水の出口に張り、中に入ってくるツガネを捕まえます。ヤナというのは、ニガダケ(メダケ)を編んだむしろ状のものでせき止め、入口を開けておいて、流れ出てきたツガネをすくい取るための装置です。用意した籠や桶に、捕っては入れ、捕っては入れと、面白いほど捕れるのです。準備した大きな

鍋の中にツガネを入れて煮えたぎらせ、塩を入れて味をつけます。新鮮で脂肪がのり、肉付きのよい川の幸で、実にうまいものでした。(竹中武夫 1984「金山こぼれ話」『串木野文化 第6号』)

イ ドベの入った^{たんぼ}田圃

捨てられたドベは、田圃に入れたり、ドベ自体を田圃にしたりしました。そこには米や麦を植えました。水の利便は良いのですが、石の粉が主で土壌分が少ないので、やせていて、普通の田圃の半分も収穫出来ませんでした。隣にある普通の田圃はたわわに稲の穂が稔り、垂れ下がっていますが、ドベの田は背丈も低く、小さい穂先は、垂れるどころか天を向いている状況です。色合いも悪く、やっと生きていますと訴えているようです。そんな田圃は、金山川や芹ヶ野川、三反田川、荒川川の^{きこだ}迫田(谷間に作られている田)などに見られました。今でも耕すと、ドベの田の跡だとはっきり分かり、金山の名残を残しています。

ドベが流れ込んだ田圃で田植えをするのは、大変でした。土を柔らかくするための代^{しろか}掻きをしたら、すぐ植えないといけません。田にドベが沈着し固まるからです。その時は、苗を担ってきた山オコという棒を突き刺し、穴を開けます。その穴に、すかさず苗を差し込みます。代掻きというのは、田植え前の田圃に水を満たし、鍬などで土を砕き、田圃の表面を平にすることです。ドベのたまった田圃には、土や堆肥を大量に入れて土壌改良します。普通の田圃にするためには数十年もかかるものでした。(竹中武夫 1984「金山こぼれ話」『串木野文化 第6号』)

ウ ^{とじきん}碾金の話

碾金というのは、目に見えるぐらい自然金の付いた特上の金鉱石のことです。串木野金山の富鉱帯でも、目に見える碾金が出たといわれています。しかし昔、芹場迫の全盛期の頃は、あまりにも見事な碾金が出ましたので、それを喜んで掘り出しました。そのお祝いに三味線を弾きながら登ったという三味線坂と呼ばれる坂が残っています。(竹中武夫 1984「金山こぼれ話」『串木野文化 第6号』)

(8) ^{じかやま}自稼山(「じかせぎやま」ともいう)

自稼山は、下請け採掘者の間で行われていた薩摩藩独特の制度であります。経営資金を持った人が島津鉱業から鉱区を買い受け、採掘権を得て金鉱石を掘

ったのが始まりです。

三井鉱山になってからも自稼山の制度はありましたが、主として会社経営上、採算の合わない鉱区が許可されました。自稼山業者は会社から、ハンマーや石当などの諸道具を譲ってもらって採掘しました。自稼山で大もうけをして現在、大実業家に出世した人もいます。しかし、概して、条件の悪い鉱区にあたって大損をし、自分の田畑を投げ出した人が大多数でした。自稼山で大金持ちになった家評して「西の海の潮は減ってもお金は減らない」とか「夏は札東に蚊帳を張って土用干しをした」等といわれています。

自稼山で採掘する時は、金鉱石と土砂を選鉱します。場所は川の近くで、豊富な水のあるところであればなりません。それは、金鉱石についている粘土を洗い落とさなければならなかったからです。

水洗いした金鉱石のうち、小さい鉱石は石当で、大きなものは大型のハンマーで叩き割り、直径 5~6cm ぐらいの鉱石にします。石当とハンマーの柄はぐみの木が良いとされました。そのように小さく割った方が、三井鉱山に出荷するとき、含有量の多いものが均分化され、品位検査の際、有利になったからです。

水車で鉱石を砕くときは、出来るだけ小さく割りました。水車小屋まではその鉱石を葛や棕櫚縄で編んだカガイに入れ、馬に負わせて行きました。

鉱夫が鉱石を掘り出したものは、テゴカリ(ダッテゴを負う人)が運び、馬や馬車に載せます。後にはトラックが運ぶようになりました。

運ばれてきた鉱石は臼に入りやすいように、鎚で細かに砕きます。それを臼に入れます。水車小屋では、臼で鉱石をさらに細かく砕きます。大きい鉱石はさらに細かに取り出して小さく砕きます。その工程を数回繰り返します。臼に入れる必要のないぐらい小さな鉱石は、金網の篩(粉または粒状のものをその大きさによって選り分ける用具)にかけて選り分けます。これを挽き臼で粉にします。水車臼で細かくなったものを篩にかけます。こうして粉になったものを華粉(花粉)といいます。この華粉を塩を入れた釜で煮ます。それを水で冷やして混汞桶に入れて水銀を加えます。これは水銀と、金・銀を接触させ、合金(アマルガム)にすることで、これを混汞法といいます。そして合金にならなかった華粉は捨てます。これをドベといいます。それを近くの土地に置いていましたが、そこをドベセイカといっていました。今でも芹ヶ野には、ドベセイカの跡があちこちに残っています。

さて、そのアマルガムを和紙 4 枚又は鹿皮に包んで絞ると水銀はにじみ出てアマルガムが残ります。アマルガムは、ルツボに入れて焼きます。そうすると

水銀が蒸発して、金銀の丸い粒(青金)が出来ます。

混汞法が導入されるまでは椀かけをして金を掘り出しました。これは、鉱石を細かく砕き、椀の中に入れて時々水を混ぜながら揺り動かす比重選鉱の方法です。(徳永律編 1994『芹ヶ野金山文書集(下)』串木野古文書研究会)

(9) 昔の金の採掘(トロッコで金鉱石を運んでいた頃の話)

金を掘るときは、ノミを石当で叩き、金鉱石にくい込ませました。柄が八角形になっているノミを手の親指で少しずつ回しながら石当で叩きました。石当がノミに当たった反動で返し、さらに力を入れて叩きます。ノミで開ける穴は、上部を上げ穴、下部を下げ穴といいます。下げ穴を掘るときの方が手が疲れます。上げ穴は、1尺5寸ぐらい掘り進んで、その中に火薬を詰めて爆破します。主に尻をすえて穴を掘るので、鉱夫は縄で作った丸いシリスケ(尻敷き)を敷いていました。この頃、歌われたのが石当節です。

ダイナマイトが破裂した直後は、坑道の中に煙が充満して、息苦しいので煙が収まってから、また仕事にかかりました。

坑内で仕事をするときには、必ずマスクなどをしなければなりません。マスクはゴム製のもので弁がついており、粉塵を吸い込むことが少なく、公害病であるヘッペ(珪肺)にかかるとのを防いでいました。

坑内で裸で仕事をしたり、マスクなどをつけていない者は、保安員から注意を受けました。その注意に従わない場合は、保安員はその氏名を福岡保安監督署に報告しました。

大正末期頃に空気圧縮を利用した削岩機が採用され、能率が上がるようになりました。この頃から付属品や部品名として「エアー」「ピストン」「コンプレッサー」「ウォーター」などの専門技術用語を鉱夫は覚えなければなりません。削岩機は手の振動が激しいので白蠟病(はくろうびょう)になる者もいました。この病気は、手足の血管が収縮することでおこる血管性の運動障害をおこすもので、血行不良のため指が白蠟のように白くなるものです。しびれや激しい痛みが生じたりします。

後には改良されて、台に固定して使用出来る削岩機が登場してきたので、白蠟病になるのを防げるようになりました。削岩機を使用するときにはマスクをかけ、水を使うきまりになっていました。しかし、水が十分でないときや、戦時中の増産時には、水を使わないで「カラ掘り」をする者もいました。そうしてヘッペになる率が高まってきました。大体 30~40 歳ぐらいになるとヘッペで苦しむようになり、死亡する人が多くいました。

さて、坑内での作業は 8 時間二交代で、一の方(「いちのかた」または「いっの番」)で発破して砕いた鉱石を、二の方(「にのかた」または「にの番」)でトロッコに積みました。トロッコに運び入れる用具はハネブリといって、竹製のザルを用いました。これが後には鉄製になって重くなりました。金鉱石をツルハシとマエブリで集めてハネブリに入れました。

坑内では、鉱脈を探すことを専門にする技師もいました。そして、坑道を補強するために支柱を立てる支柱夫もいました。これらの人々は、鉱石を掘る鉱夫よりも上と見られていました。(鹿児島県立串木野高等学校 1997『生きた地域文化の体験学習 旭を体験して』)

(10) 馬の尻振りダンス ートロッコでの運搬ー

金鉱山の坑内で掘った鉱石はトロッコに積んで製錬所まで運ばれました。トロッコというのは運搬作業用の車で、レールの上を走る軽くて便利な台がついた四輪の車のことです。厚い木材を使用しており、鉄製の車輪が 2 か所ついていました。トロッコは、横が開くもの、前が開くものなどがあります。1 回に 8 車から 10 車をつないで馬が引き、一日に何回も往復します。トロッコが発車する所までは、ダッテゴ(金山テゴ)を背負ったテゴカリ(テゴを背負った人)が鉱石を運んだり、馬に負わせて運搬しました。

トロッコのレールは、島津鉱業が経営した時代は、坑内から薩摩山の製錬所まで、その後、三井鉱山(株)が経営した時代は西山の立坑から五反田の製錬所まで敷かれていました。トロッコの中継所は二通洞という所で、トロッコの車輪がなめらかに回転するように注油をしていました。馬には坑内と坑外を専用とするものがありました。暗い坑内で働く馬は視力が弱り、坑外に出したら、目が見えにくくなって、長くは使えませんでした。馬使いの職人である親方おやかたは、馬を何匹も馬小屋に飼っていました。馬に餌えさを与える馬食わせと呼ばれる人を雇っていました。栄養分の多い、馬の好きなものを食べさせていたようです。歩ける間は精一杯、愛情をかけていました。馬を扱う人を馬丁ばていと呼んでいます。馬は、農作業や馬車引き業で使いものにならなくなった安い馬を買い集めてきていました。

坑外作業につく馬は、尻がとがり肩の肉も落ち、やせた馬が多くいました。足取りが重く、疲れたら止まってしまいます。すると馬丁が大声をはり上げてムチで激しく叩きます。痛さに耐えかねた馬は悲鳴を上げ、尻を左右に振りながら、よろめく足で、ゆっくりと歩み始めるのです。それは、馬の尻振りダンスと言われていました。

製錬所に着くとトロッコを切り離し、手押ししてクラッシャーの受け入れ口に前倒しにして鉱石を移し入れました。クラッシャーというのは、鉱石を砕く機械のことです。

帰りは、空のトロッコになりますが、時には、採鉱用具などを積んだりしました。

三井鉱山(株)では、昭和10年ごろから馬の姿が消え、電気機関車に切り替えられました。トロッコも鉄製のものに代わり、木製の頃は、1台500～600kgぐらいしか鉱石を積みませんでした。その数十倍、数百倍の量を運べ、一日には、500～600tも運搬出来るようになりました。

芹ヶ野金山を三井鉱山(株)が島津鉱業から買い取った後、1927年式のシボレーのトラックで運びました。周囲の人々は、荷馬車の3～4台分も積んで走るその威力に驚かされました。(鹿児島県立串木野高等学校1997『生きた地域文化の体験学習 旭を体験して』。竹中武夫1998「金山意外史」『くしきの12号』串木野郷土史研究会)

(11) 落盤事故などで死人が出たとき

落盤事故や、坑道の中で上から下に落ちたりして死人が出たときは、直ちに現場監督を呼び、原因などの調査をしてもらいました。鉱夫が死体を坑外に運び出した時には、死人に声をかけます。これは、死んだ人の^{れいこん}霊魂が坑内から外に出てきたことを確かめるためです。霊魂が坑内に残っていたら、坑内で働く人々に^{おんりょう}怨霊となって、落盤事故を起こしたり、怪我をさせたりして、悪さをすると信じられていたからです。

坑内で命を落とした場合は、このように死体を運ぶだけでなく、霊魂出し、すなわち、「シキジロ出し(敷死霊出し)」をしました。シキというのは坑内のこと。ジロは坑内に残る死霊、すなわち、亡くなった人の霊ということになります。シキジロ出しをするのは、坑内にシキジロが残っていたらをしないようにするためです。

坑内では、鉱夫が一行に並び、先頭の者が、両手にノミを一本ずつ持ち、後ろにまわしてノミの頭を打ち合わせながら、「来るか」と大声で言いながら前進します。この時は、絶対に後ろを振り返ってはいけません。後ろを振り返るとするのは亡くなった人の霊魂を見てしまうからです。

行列では、死体を持つ人が続き、列の最後の者が、「来る、来る」と大声でノミを打ち合わせます。これを静粛に繰り返しながら坑内を出て行き、坑外に運び出します。

坑内で新米の鉋夫がノミの頭で打ち合わせでもしようものなら、先輩の鉋夫から大声で叱られるものでした。シキジロを呼び寄せることになるとか、緊急の場合の救助要請の合図と見なされ、忌みごととして嫌われたからです。忌みごとというのは、嫌い避けるべきことと言う意味です。(徳永律編 1994『串木野郷史資料集 3 芹ヶ野金山文書集(上)』串木野古文書研究会。薩摩町郷土誌編さん委員会 1998『薩摩町郷土誌』薩摩町。)

【参考】 永野金山のシキジロ

大正5年2月19日の午前1時頃、ある現場監督が夜勤^{やきん}の見廻りに坑内に入り、一人で巡回していました。すると、もの凄^{こわ}い落盤の響きが聞こえました。これは大事故だと切羽^{きりは}の方へ走って行ってみましたが、どこも崩れていません。切羽^{きりは}というのは、坑内で採掘をする現場、あるいは、掘り進んで行くところの掘削面^{くつさくめん}を言います。不思議に思って耳をすましていると、人の騒ぐ気配がします。また、何事か叫ぶ声まで聞こえるのです。それは、崩れ止め作業をしているらしい7人の声のようです。これはシキジロだと思った瞬間、背中に冷や水をかけられたような悪寒^{おかん}がし、恐ろしくて身震いがしてきました。急いで坑内の事務所に走り込みました。一息ついてから事務所の人に、この話をしましたが信じてもらえません。

その日は何事もなく帰宅しましたが、どうもこのことが気になって仕方ありません。かねてから物知りと言われていた父親にこのことを話しました。聞き終えて伊勢神宮で発行している伊勢暦を見ていた父親は「ああ、そうか、今日は正月16日だ」と言って次のような話をしました。

慶応2年(1866)旧暦1月15日夜、佐野善左衛門ほか6人は、晒三坑道^{さらしさんこうどう}で午前1時頃、突然の大崩壊にあって死んでしまいました。山の神を祭ってある大山祇神社^{おおやまつみ}の別当^{べつどう}、三島本蔵院という神官が落盤事故のあった現場で鎮魂祭を行いました。そして神官は「この7名の靈魂は、この竹筒に納めた」と言い、竹筒を持ち、坑外に出るために、行列を組んで坑口に向かいました。ところが四つ留にさしかかると、その竹筒が異様な音を立てて割れてしまいました。三島別当は「ああ、この靈魂は坑内に留まった」と歎き驚いた^{なげ}といひます。今日は、その50年忌にあたる日なので、その靈魂のしわざだということでした。

金山では、正・5・9・11月の16日は入坑を深く戒めています。山神祭をして、仕事の安全を願い、犠牲者の冥福を祈ってきました。このような話は、いちき串木野市の芹ヶ野金山でも語られていたと、ある古老が話してくれます。(薩摩町郷土誌編さん委員会 1998『薩摩町郷土誌』薩摩町)

(12) 青年団修行の場、文友舎の思い出

別名、夜学校やがっこうと言われていました。そこは、広さ 30 坪(約 99 平方 m)の板の間で頑丈な長机と長椅子が、勉強用に供えてありました。柔道や剣道の稽古をする時は、これらの机と椅子は片隅に積み重ねられました。電灯はついてないので、石油ランプが数個ぶら下がっていました。ここは、夜の青少年たちの修行に役立っていました。質実剛健しつじつこうけんを主とする青少年養成学校です。金山の景気が良い頃は、この文友舎の活動が活発でした。15 歳から 25 歳までの青年団員からなり、青年団長は文友舎長を兼ね、すべての経営の責任者となっていました。文友舎長の上には、青年を終えた先輩がいつも数名、顧問として指導の役をしていたのです。

文友舎では、日曜の夜を除いて、毎晩、学科と柔道・剣道を一日ごとに行っていました。そんな中で礼儀作法は特に厳しく、目上の人に対しての挨拶や、それを怠ったりすると、厳しい制裁が待っていました。

また、討論会というのがあって、二組に分かれて、文友舎長が出す題目について討論しあいます。題目は簡単なもので、意見を発表する訓練となったのです。他に、嫌な行事がありました。それは、肝だめしきもです。真っ暗な夜、恐い墓地に一人ずつ、何かしるしになる物を持って行くのです。恐いからということで、行きたくないとは言えません。

体育関係では、相撲の稽古や鉄棒、体操などのほか、柔道と剣道がありました。先輩が指導するのですが、厳しい先輩の時は、ふるえながら指導を受けたものでした。討論会の時も同じように厳しいでした。

年に 2 回ぐらい反省会があります。家庭での生活や社会生活、対人関係、自分の努力不足、社会奉仕などについて、反省するべき点はないかを発表します。そして、悪いと思った場合、以後は、そのようなことをしないように誓います。

舎長や先輩たちから、舎生として良くないと見られたら、厳しい制裁が行われました。文友舎や青年団を脱退することは許されません。こうして金山で働く青年たちは心身共に鍛えられ、金の採掘に貢献していたのです。(旭小学校創立百二十年記念誌編集委員会 2001『旭小学校創立百二十年記念誌』)

(13) 水車が盛んに回っていた頃

島津興業から三井鉱山操業開始の頃が、最も水車を利用した時代です。金鉱石を砕くために、水車 200 台以上、杵数 2,600 本が動いていたといわれています。いちき串木野市の旧串木野村ではありません。薩摩川内市の隈之城くまのじょう・

平佐・永利・百次、いちき串木野市の市来、日置市東市来の上床水車など多くを数えました。回転する車を太鼓と言いますが、その直径が10尺(約3m)から16尺(約4.8m)まであります。鉱石を搗く杵の数も8本とか12本、16本などがあり、水量が多くなるほど杵の数が増えました。

昔式の水車が最後まであったのは、はたもん場(昔の処刑場)の旧三井製錬試験所北隣の石田どん(殿)水車でした。大正の末期まで新というおじさん夫婦が、汰鉢でゆったり、干し場でドベを乾かしザルを引き、引いては寄せていました。それを大きな木の桶に入れ、昔の方法で金を採っていたのです。

水車には、上掛水車と胸掛水車、下掛水車の三種がありますが、金山の水車は、殆どが上掛水車でした。上掛水車というのは、上射式水車ともいい、水車の使い手の上の方から滝のような勢いで水を落として水車を回転させるものです。胸式水車は、水車の中央部に水流を当てて、回転させるもので、中射式水車とも言います。下掛水車は、車輪の下に水流を当てて回転させるもので下射式水車とも言います。(竹中武夫「水車の思い出」『旭小学校創立百周年記念誌』)



明治時代末期から大正時代初期の水車の位置とトロッコ軌道など(竹中武夫氏 図 『旭小学校創立百周年記念誌』より)

(図 14)

(14) 労働者のために 8 時間労働制の画期的改革

金鉱山での労働時間は長く、健康を害する労働者が多くいました。そこで、大正 15 年には初めて坑内を 8 時間二交代制とし、毎月決まった日に 2 回の休みを設けるようにしました。この決まりは、三井鉱山としても画期的で、会社の英断だったとされています。今では労働時間 8 時間というのは当たり前のことになっていますが、すでに大正 15 年には、健康を害する労働者を少なくするように会社が努力している姿が分かります。(三井串木野鉱山株式会社 1970『串木野鉱山沿革史』六 労務 1)

(15) 串木野の発展を助けた金山

金山景気

明治 23 年、24 年以降、あるいは明治 27 年、28 年以降、串木野では次々と鉱山が開かれています。これは、日清戦争(明治 27 年～明治 28 年)を前に、金山景気となり、われもわれもと採鉱を始めたからです。日清戦争というのは、当時の中国の王朝政府である清と日本との戦いのことです。日本が勝ち、下関条約が結ばれました。

そのころ、旭地区の金山集落には枕崎の鹿籠金山から、たくさんの人々が移住して、地元の人々と仲良く暮らしてきました。したがって、今でも枕崎の風習が金山集落には残っているそうです。

(16) 旭中学校建設の資金作りに金鉱石運び

当時は、串木野中学校分校で、教室は小学校の一部を借りていましたが、三井鉱山の最盛期で生徒数も多く、60 名を越す学年もあり、教室はすし詰め状態でした。旭中学校としての校舎が新築されることになり、現在コミュニティーセンターがある所の岡を平地に整地することになりました。授業より整地作業が面白く、皆トロッコを押したがっていました。脱線、転覆、よくやりましたが、怪我はあまりなかったように思います。

旭中学校建設の資金づくりに、六番口の山(現在の中馬採石のある所)で鉱石運びをしました。一人で、やっと抱えられるほどの重い鉱石を山の中から車の来る所まで運ぶのです。全校生徒が一行に並び、懸命に運びました。おやつにコッペパンが一切れずつ与えられましたが、それが美味しかったことが思い出に残っています。(略)自分たちが作った旭中学校、そんな気もする中学校は串木野西中学校に統合され、校舎もなくなりました。ただ、旭小学校の楠の木だけが 120 年の歴史をしっかりと見つめています。(旭小学校創立百

(17) 金山に関する伝説 一牛に化身した神一

昔、島津の殿様が金峰山の神様に金を所望し、祈願しました。何日か過ぎたある日、厳かな神の声で、「金峰山にも金はあるがそれは神のものです。串木野の芹ヶ野というところへ案内しましょう。」と言って、神は牛の姿に化身して案内しました。金峰山の神は、串木野へ着くと、金色に光り輝く金のありかを教えてくださいました。(原話 南さつま市金峰町 松山忠雄氏)

昔から金峰山と冠岳との修験者(山伏)の交流はありました。麓の奥田家の先祖は、金峰山の山麓にある尾下集落から江戸時代のはじめに移って来たと言われています。おそらくこの話は、金の発見に長けた修験者たちの間で語られた話と思われる。また、牛は、昔から神聖視されており、神が牛に化身したという話は南九州には多く残っています。

金の話は、金峰山麓では次のようなしきたりがあると言われています。

金峰山に登山した金峰町大野の人々は、山頂から下山してくると「せいといの川」で、ワラジを脱ぎ捨てました。それは、金峰山の金がワラジにくっついているので、ここで神様にお返しするためだと言われているからです。「せい」というのは山の神に供える神聖な砂のことです。この地域の人々は、貝殻に「せいとい(採り)の川」の砂を盛り、登頂して金峰山の神に供える習わしがあります。また、同町の大坂の方に下山する人々は、ワラジを登り口に建っている鳥居のところで脱ぎ捨てました。ここで、金をお返しするのだと言われています。

【参考】赤牛と金山

『三国名勝図会』によりますと、山ヶ野金山は、寛永 17 年(1640)、島津家第十九代光久のとき、宮之城領主第十三代圖書久通が永野「宍焼谷」で金鉱石を見つけたのに始まると記されています。最盛期には佐渡の金山をしのぐほどの勢いでした。

この伝説に登場する老翁は、中国道教の影響を受けた仙人であり、また紫尾権現そのものであります。権現というのは、仏が仮に神の姿になってこの世に現れたものです。ここには次のような伝説が伝わっています。

寛永 17 年(1640)3 月朔日、宮之城領主 3 代島津久通が紫尾三所権現に詣り、21 日の間、お籠もりをしていました。金を与えてくださいますようにお祈りをしていました。21 日目の満願の日(祈願の間の最後の日)、夢うつつの中

で、神殿の方から、これより辰巳^{たつみ}の方(南東の方)5里(1里を約4kmとしたら20km)、木の根に因^{ちな}む土地を尋ねて行くようにとの神のお告げがありました。目が覚めた久通は家来を引きつれて永野の方に向かいました。永野にたどりつく^{しろうぶ}と川の中に入り、菖蒲の根をかき分けて、その下の川泥をすくい、「椀かけ」の法によって砂の中に砂金を見つけました。菖蒲は別の話では石菖蒲だったとも言われています。どちらもサトイモ科の多年生草です。菖蒲は川の下流に多く、石菖蒲は流れの強い川岸に生えていますので、ここでは石菖蒲が正しいのではないのでしょうか。そこで、石菖蒲を引き抜いて砂を集め「椀かけ法」により砂金を採取します。

そこで、川をさかのぼると、一人の老翁が「宍焼谷」の川べりで猪の肉を焼いて食べていました。久通が、この辺に木の根に因^ねむ土地はないか、と尋ねますと、この東およそ半道(半里)の所を木の根越^{ねごえ}というが、この東の山に黄金があります、と教えてくれました。そこに尋ねていくと、かなたに大きな岩石^{ゆうひ}が夕陽を受けて光り輝いていました。そのうち日が暮れましたので、大木の根がからみあっている所で夜を過ごすことにしました。ところが、その夜、夢の中で神のお告げがありました。山の中腹に赤牛の寝姿に似て、光を放つ石があります、それが黄金であります、と。

翌朝、山に登った久通は、そこで赤牛の寝姿に似た、異様に光り輝く岩を見つけたのです。願いがかなった久通は早速、紫尾三所権現^{ようはい}を遙^{よう}拝し(遙かに遠い所から拝み)、神に感謝しました。その後、黄金のありかを教えてくれた老翁を探しましたが、その姿を再び見ることは出来ませんでした。(山ヶ野小学校 1973年『山ヶ野金山誌』)

紫尾三所権現は、昔から金を授けてくれる神として、人々から厚く信仰されてきました。この金^{いっかくせんきん}の話^{いっかくせんきん}を聞いた鉦山師たちは、一攫千金(大金を一つかみで取ること)を夢見て権現への燈籠や金鉦石^{けんじょう}の献上を繰り返してきたといわれています。牛が神の化身となり金のありかを教えてくれた伝説は芹ヶ野金山とも共通します。ただ、露出した金鉦石は赤牛の寝た姿に見えるのが多いのだそうです。老人は山の神だったのでしょうか。(森田清美 1996『かごしま文庫 35 さつま山伏』春苑堂)

(18) 山ヶ野金山の例

山ヶ野(永野)金山では、昭和7年頃、枕崎の鹿籠金山とともに、碾金の密売が横行し、検挙者が多数出て大事件となりました。会社の鉦区で発見された物は、個人のものではなく会社のものです。しかし、所長の伊地知清彦は、

会社の運営に支障がないように全員釈放するように警察に働きかけ、それが実現しました。

その頃、碾金を入れる大金庫がありましたが、あまりにも多く発見されるため、その中には入りきれませんでした。そのため、昼夜監視員を置き見張っていました。その碾金の鉦脈は^{ひはば}鑊巾(鉦脈の巾)15cm、走行6mのものもあり、100m先から山吹色が見分けられました。この事件の起こりは、好奇心も手伝ってか、目の前に掘り出された山吹色に惹かれて、鉦夫全員が弁当箱に入れたり、作業衣のポケットに忍ばせたりしたことからです。会社の取り締まりが厳しくなると、直接飲み込んで腹の中に納めたりしました。便が出ると、それを洗い出して拾い取りました。

明暦2年(1656)、山ヶ野金山再開許可後、高木という所にある二筋の日光に当たっている鑊では、1日1升の砂金が採れ、鉦夫たちは日夜、遊びにふけていました。トイレの踏み板には草履に付いていた金が、塗り付いて光っていたといえます。(竹中武夫 1984「金山こぼれ話」『串木野文化 第6号』)

(19) ^{ばじょう}馬上金山の例

大分県杵築市の馬上金山では、福沢諭吉の塾生である成清博愛が、金山で稼ごうと思って、前の鉦主が見込みなしと投げ出した金山を買いました。その金山で切れ目になっている鉦脈を掘り進んでいくうち、再び広がった碾金の脈に当たりました。再び馬上金山が隆盛に向かったのです。成清はまた、奥田栄之進が経営していた始良市蒲生町漆の高嶺金山を引き継ぎ、5、6年の間操業しました。そこでも成功し、人々に時価50万円もする純金の牛の置物を見せて、驚かせていたようです。

大正の初めの頃は串木野の鉦夫たちも馬上金山に働きに行っていました。そのうちの1人が巧妙に碾金を隠して持ち帰り、それをもとにして商売を始めたそうです。しかし、商売は失敗し、その人の末路は悲惨なものでした。碾金を隠し持ってきたという悪い噂話を知る人々は、天罰だと言って眉をひそめていたそうです。鉦脈の表面に金粉を吹き付けて碾金のサンプルとして見せつけ、その鉦脈を騙して売ろうとする山師もいました。それに騙された人も多かったようです。(竹中武夫 1984「金山こぼれ話」『串木野の文化 第6号』)

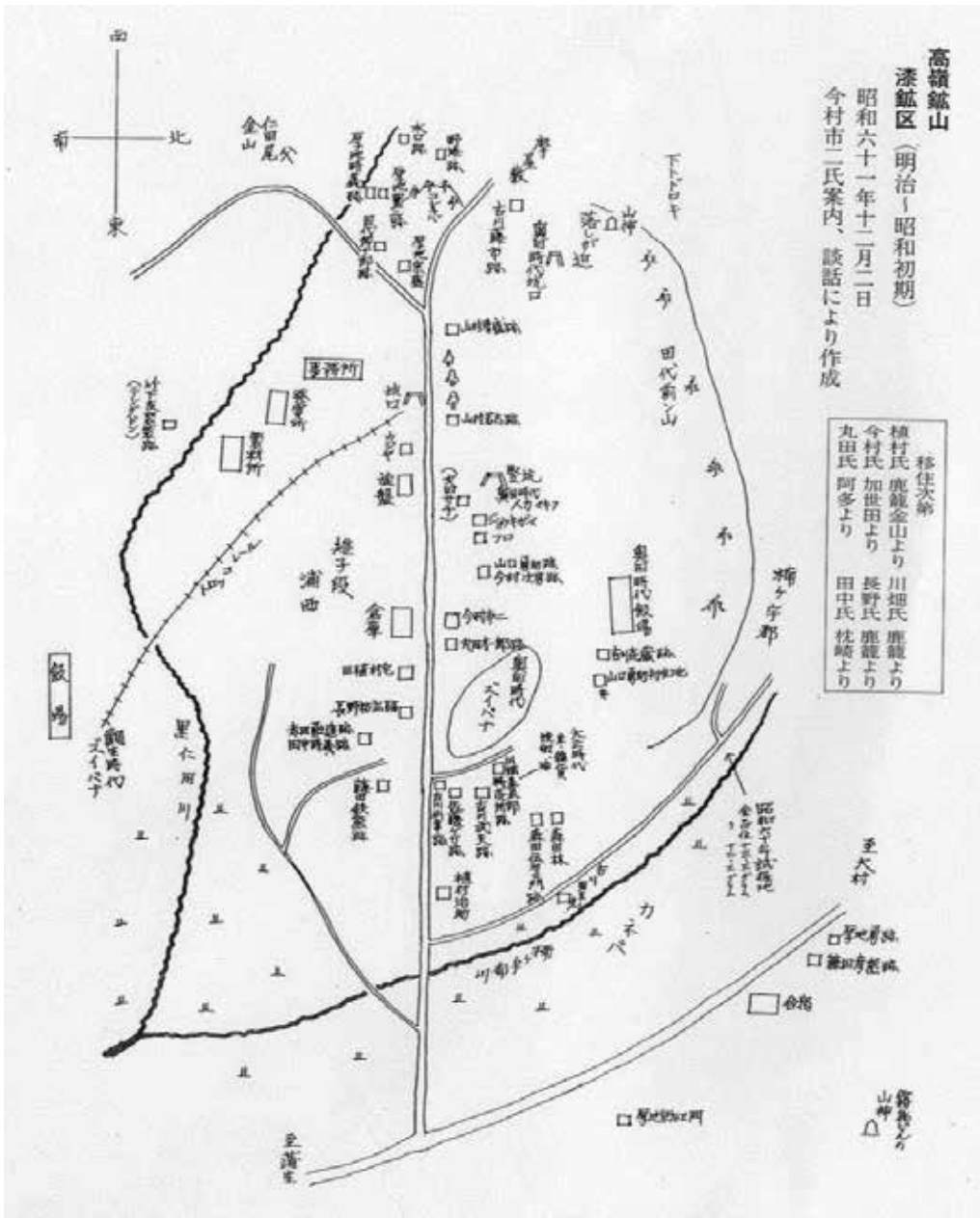
(20) 奥田栄之進経営の始良市蒲生町漆鉦区

大村の牧田源吾が経営。明治40年(1907)ごろから串木野の奥田栄之進が経営し、「^{おと}落しが^{きこ}迫」というところに良鉦を得ました。

明治 39 年(1906)11 月、奥田ら 6 名の鉱主によって山神が建てられました。明治 35 年(1902)から年 100t の出鉱がみられました。明治 39～40 年のころにかけて、「落しが迫」の富鉱に着眼して、この両年で 5,000t 余の元鉱から有化精錬によって 50kg の金と 130kg の銀を得、南九州における優良鉱山の一つに数えられました。これから大正 5 年(1916)まで、年 30～50kg の産金を続けていましたが、下部の湧水と品位低下により次第に衰えていきました。

昭和 9 年(1934)5 月に鯛生産業が買収しました。4 つの坑道を掘り、努力して、実績を上げました。鉱区は 175 万坪(1 坪を 3.3 平方 m とすると、78ha) 坑夫 109 人、合宿、飯場、発電所、製材所、事務所、倉庫などが設けられました。また、東方「霧島どん」の山に山神を祭り、色電球も参道につるしました。

鉱石は、奥田時代は、蒲生漆から山崎まで馬車、山崎から串木野まで貨車で運んでいました。しかし、鯛生時代になると、蒲生漆から山崎までトラック、山崎から大口の希計ほけいや牛尾との連絡には伝書鳩も使いました。金の品位は 1t 当たり 7～8g でした。(松永守道 1992 『蒲生町漆集落史』)



(図 15)

高嶺鉦山漆鉦区「奥田時代ズイバナ」の場所が描かれています。
 (松永守道 1992『蒲生町漆集落史』自家板)

6 資料

(1) 古文書

ア 芹ヶ野金山試掘日記について

解説 編集委員 所崎平

(ア) 『森山太助芹ヶ野金山試掘日記』

はじめに

薩摩藩の借金が膨らんで、どうしようもなくなる時代です。それで、金山を掘り、金が出てきて、藩の財政を潤すことを期待しています。そこに金が出た、それも有望だ、となれば飛びつきたい。そこへ吉田喜三次からの報告があり、期待が高まっていったのでしょう。

この時代、甕島銀山吟味に出かけていますし、他に、阿久根銅山・国分銅山・綾金山などを調べています。この中、国分銅山と綾金山は実働していたようです。

最初、川内平・五番ヶ谷・^{せいがんじ}芥岩寺・茅野谷・南平に金鉱石が見つかり、試掘したいと申し込んできたのは、山ヶ野金山に属する出雲国(島根)の吉田喜三次です。少しの金が出たので、それをうまく誘導して、内縁の者として、森山太助に自費で試掘するというように持っていったようです。ここから吉田喜三次に代わって、森山太助がすべてを仕切っていきます。

森山太助は加治木^{まち}町の人です。加治木町には3家の森山氏があり、鋳物業・薬種業・新田開発・商品貿易などに関わり、手広く商売をしていました。鋳物業に関わったといわれるのが、屋号「山二=△」の森山家だと思われます。鋳物を手掛けるので、^{たんぞう}鍛造の^{のみ}鑿や^{たがね}鑿などの金山用具を造るのもできたのでしょう。川内の^{にいほら}新原家も鋳物業です。森山家は国道10号線から海岸側へ少し入ったところで、黒川に近いです。

多分、名前が知られていて、藩との接触があったので、ある程度の信頼はあったのだと思われます。そこで、森山太助がすんなり、吉田喜三次と交代したのかもしれない。

結論から言うと、この試掘は失敗ではないかと思われます。この記録が最後まであればよくわかるのですが、途中で切れています。水抜き穴掘り費用に、長い間多くの米を使っているのが、藩の方としては森山太助の経営にシビレを切らす手前までの記録です。この記録は尚古集成館にあります。

① 自費開発の時期

天明7年(1787)未正月27日に提出した文書は、文面が擦り切れていて、正確ではありませんが、金が出るので採掘を許可してほしい、と願い出た者へ

の返事だと思われます。御勝手方取次の小笠原郷左衛門が署名をしています。御勝手方というのは、会計を扱う役所です。

嘉永5年(1852)子8月の『金山舊記 芹ヶ野金山發起始終覚書』金山方という藩の正式な記録によると、「天明6年午12月」に「試掘願」を出し、翌7年未正月「御免(許可)」された、とあるので、この擦り切れた文書は「許可」されたときの文書だと思われます。

吉田喜三次は、川内平を含め5か所に金鉱が見つかったので、試掘したいという願書を郡奉行と金山奉行両所宛てに出しました。両奉行所からは、山や田地に差し障りがないようにして掘るように、という達しを串木野郷士年寄へ出しています。薩摩山の中で、御建山(藩が主の鉱山)であれば許可できないなどを、山奉行から金山奉行へ出しています。それに対し、金山奉行が吉田喜三次にそのように申しつける、と答えています。

天明7年2月20日には、吉田喜三次から森山太助へ引き継ぐことを串木野郷の行司野元源兵衛と年寄入来七郎右衛門へ届け出たので、金山奉行へ報告しています。また、4月5日には3人で採掘しています。かなりよい様子だと、年寄長谷場戸右衛門に報告し、金山奉行へ届けています。8月9日には、よい金鉱が見つかり春から試掘しており、少々の出金があります。

甕島銀山を吟味するために、山ヶ野金山の山師1人(坂元喜七)を派遣しています。甕島銀山も吉田喜三次が山主です。

ところが、川内平の坑内は水が溜まり、金を取り出すのが困難で、水抜き落としができるならば金が採れる、と金山奉行へ届けています。金気(金が採れる見込み)の有無を詳しく調べ報告せよ、と串木野郷士年寄へ命令を出します。その後、10月11日に、年寄の長与藤兵衛が、「とじわく(金鉱石が見えている)」の辺まで水溜りで、水抜き的人数が少なく金を採掘できないが、鉱脈はずいぶんよいと、答えています。10月22日、砂金少々を添えて、金山奉行へ出しています。

これと同様の記録が、嘉永5年(1852)子8月『金山舊記 芹ヶ野金山發起始終覚書』金山方の記録にあり、それによると、「川内平 惣冠水抜、『芹ヶ野金一件抜書』」とあります。最初から鉱脈の上まで水が溜っていて掘っていないので、水底に金脈があることを予想していたのだと思われます。

② 藩から役人が来て監視する

採掘の様子を串木野郷の横目に見回りをするように命じています。

次に、派遣する者への待遇を例をあげてみます。阿久根銅山試掘のことは、

「田舎勤め」なので、1日真米^{まごめ}2升5合、3人分。金山ならば、1日真米1升5合に銀6分です。今回は、先2升5合(先杵の2升5合、現在と同じ杵。起杵は1升2合5勺に当る)だが、金が出た場合です。詰所は近所の家を借ります。ある程度の出金があれば山主が木屋を造ります。詰所には3か月交代で金山奉行が決めて派遣します。今までの記録では長く勤める者もいます。綾金山に米を出しているときは、蔵方目付1人、金山間歩^{まぶ}見廻役・山廻役の内1人を派遣しました。米をやらないときは、取締りの者は出していません。国分銅山へは蔵方目付1人(扶持米・送人馬^{おくりじんば}・船賃などは御物蔵から)。以後、山主から銀を送らせました。

10月末日には、玉金8分5厘(約3.2g)になりました。芹ヶ野金山で試掘した砂金を山ヶ野で処理してもらいます。金山奉行は後で、山ヶ野で玉金を買ってもらえ、と指示しています。

また、坑内に薬種「石黄水^{せきおうすい}」というものがある、と申し出ています。「石黄水」は絵の具に使われたり、まれには化粧用になったりするもので、黄色っぽいものです。ただし、ここだけの記述なので、少ししか出なかったのだと思われま。森山家は薬種も扱う家系なので、気づいたのでしょう。

寛政2年戌正月、銀5匁4分(約20g)、砂金42匁(158g)が出ました。それで、蔵方目付が派遣されます。3か月交代です。給与は1日真米2升5合・送人馬料も付きます。

③ 水溜りを藩費で除いて金掘りを続ける

水吹(水抜き)ができれば、100匁(375g)の金はすぐ採れると、山ヶ野金山奉行も保障しています。まず、煙廻(煙抜き=空気の循環をよくするため)を考えます。4月から始めて7月ぐらいまでに終わりました。

「流金丁場^{ながれきんちやうば}」御免を出す。川の中の砂金を取ることを「流金丁場」といいます。「丁場」とは稼ぎ場・仕事場の意味です。

報告は約1か月置きごとにします。天明8年8月分は金25匁6分・銀土部砂16匁。9月は砂金53匁2分・銀土部砂57匁4分出ていますが、これが最高で、11月7日にはせっかく金筋に切り達したのに、「水敷=水に浸かった坑内」になったので、自力では掘り出せない、と言い出します。11月29日には、砂金1匁8分・銀砂53匁4分。検査をして、よい鉱脈であることを証明してもらい、12月19日には川内平敷(坑内)に水溜りがあり、これを吹子6丁立(ポンプ)で水を引き落として、採鉱しようと計画します。

見積もりは次のようです。

場所は「駒の跡」という外側の山裾から水溜りの内部まで掘るようです。元治元年(1864)の大々的に開発するとき、地元の人に場所を確かめたところ、「駒の跡」でなく「駒の足形」と言う場所だ、と言っています。

間数^{びんすう}380 尋 2 尺 5 寸(1 尋を 1.8m とすれば、約 685m) 煙廻しは 330 尋 2 尺 5 寸と煙廻し抜き合い 16 尋。切位(石の堅さ)は鶴中石(鶴嘴＝ツルハシで中の堅さの石。堅さは柔らかい方からツルハシ→タガネ→ノミ→火入れ、となります。)。期間は 49 か月(4 年 1 か月、月に 15 尋)、人数は 20 人真米 490 石、1 人に 1 か月 5 斗ずつ、と芹ヶ野金山詰・山ヶ野山廻役の三嶋大光院が計算しています。付け加えて、石の堅さも変わるし、煙廻りは古い坑道もあるので、うまくいけば、49 か月はかからないかもしれない、とかなり楽観的な考えを示しています。

④ 出金量

天明 8 年申 3 月～寛政元年酉 12 月の吹金した玉金を納めた記録があります。七三玉金 1 匁 5 分 5 厘などとありますが、七三は金の品質のことです。(小葉田淳説)

天明 8 年申	3 月 4 日	七三玉金	1 匁 5 分 5 厘
寛政元年酉	4 月 14 日	同	4 分
〃	5 月 15 日	同	3 匁 4 分 5 厘
〃	6 月晦日	同	4 分 5 厘
〃	同	七六同	1 匁 8 分 5 厘
〃	〃	〃	〃
〃	11 月 29 日	七六同	72 匁 2 分
〃	同	七三同	3 匁 4 分
〃	同	七一同	21 匁 2 分

と寛政元年 11 月からは飛躍的な出金量となっていますが、明治 3 年の『芹ヶ野金山日帳』と比べると 1 日分でしかありません。

合計は 540 匁 1 分(2,025.4g)で、約 2kg の出金量です。丁場金が 43 匁 5 分(163.1g)となっています。

⑤ 証文なしの山稼人―豊後国の平八

寛政 3 年亥 2 月 1 日に、証文無しで豊後国から山稼ぎ人が来ていたことが発覚しました。そこで、芹ヶ野詰蔵方目付の木原甚七が藩の金山奉行へ報告します。それによると、天明 7 年未から芹ヶ野金山へ居付いていることが分かりました。豊後国の「往来証文」と「加久藤改証文」は持っています。最初からいたようだが、ごたごたして様子分からないときだったので手続きをしてないのだろう、と届を出しています。豊後国の「往来証文」は次のようです。

写

一 往来証文 禅宗 平八

年五拾歳

右は其御元山方稼として差越申候間諸所御番所無異
議御通可被下候以上

豊後国

高松御領大庄屋

喜左エ門 印

天明丁未五月二日

諸所御番所

付状

覚 豊後國高松村之

平 八

一 年五拾歳

一 着替入 平包一ツ

一 良拾匁

一 分三百文

右國所証文路良持来為稼入来鹿児島表へ罷越候由今日爰元午ノ刻相改差通候条中途一宿之外無滞罷通鹿児島九州問屋へ致参見候間可被申付候以上

未五月廿五日 加久藤改所 印

西田源左エ門 印

西田助左エ門

道筋諸所 郷士年寄衆中

役人 衆中

鹿児島九州問屋

往来証文 禅宗 平八

一 年 50 歳

右はその御元(行き先の)山方稼として行くので、諸所の番所は異議なくお通してください。

豊後国高松御領大庄屋 喜左エ門 印

天明丁未5月2日 【註 丁未=7年(1787)】

諸所御番所

付状

覚 豊後国高松村の 平八

- 一 年 50 歳
- 一 着替え入れ 平包(風呂敷か)1つ
- 一 銀 10 匁
- 一 錢 300 文

右の者は国と所の証文と路銀(旅費)を持って、稼ぎに鹿児島表へ行くとのこと。今日ここで午後0時に改め通した。途中は1泊だけで、急いで鹿児島の九州問屋へ行き、証文を見せるようにせよ。

未 5 月 25 日 加久藤改所 印
西田源左エ門 印
西田助左エ門

道筋諸所 郷土年寄衆中
役人 衆中
鹿児島九州問屋

とありますが、九州問屋へは行っていません。

病気になったが、やっと元気になったので帰らせるよう、芹ヶ野詰蔵方目付の木原甚七へ頼んでいます。これより後に書類は何も出てこないの、無事帰ったのだと思われま。

⑥ 水抜きの実態

有望な金山とみたから、水抜きをして、出金を増大しようと考え、20人体制で水抜きの穴掘りを始めます。

水は6~7尺(2mほど)あり、水揚げ夫を増しても採掘夫が少なく、1か月に50~60匁の出金では、賃金だけが増大してうまくいくとは思えない、と芹ヶ野詰蔵方目付の木原甚八が金山奉行に報告しています。

山模様がよく、金が出るので、水抜き掘方を太助に命じろ、と返答が来ます。「太助自力では掘り方叶わず」「お米(資本金)が入ると、出金もある」と蔵方目付の木原甚七が金山奉行へ出します。

水抜きは、最初の計画の4年1か月から3年1か月と1年間短くいい、また、4か年余ともいっています。1か月に15尋(22.5mか27mか)ほど掘ります。1か月1人真米5斗は前の計画通りです。つまり1か月10石ずつの藩の

資本を入れます。これは蔵方目付の木原甚七の命令で、近くの下代蔵から取り入れます。串木野下代蔵(正確には、伊集院与串木野御蔵くみという)がよいです。串木野蔵が払底はらてい(米がなくなる)ならば、隈之城与(組)下代蔵や羽島蔵(中取蔵=中間貯蔵する蔵。串木野蔵へ船で運ぶ)へ頼むよう命じました。

役人が泊る木屋を造ることが始まります。また、20人の水抜き煙廻りを掘る鉦夫の木屋も造ります。木屋は3日でできました。

ところが、鉦夫は少なく20人もいません。鉦夫は14人しかいませんでしたが、20人の実名まで書いて、20人いることを強調しています。また、10人が穴を掘って、10人の跡向きには、12~13歳の者もいます。給料は3斗の者もいます。差額をはっきりせよ、と言われ、是正します。朝六つから暮六つまで働きます。冬は12時間以内(最短10時間ちょっと)夏場は12時間を越えます(最長14時間ほど)。木屋を建てるには、地面見分をします。また、木や竹・ワラなどがいるので、その手当てをします。

坑内の崩れそうなところに矢留木という木や板で支えをしました。木の手当てに隈之城青山平あおやまびらや都平鹿倉みやこびらかくらから切り出したい、との願いを出します。矢留木が少なくなり、百次鹿倉の三ツ峯を申し出ます。年間500本ほどです。雑木の1尺内外回り(直径10cmほど)。まず、椎の木50本・樫50本を申し込みました。

実際に掘った穴の長さは、寛政3年5月18日~5月29日まで12日間で、12長(1長=6尺=1尋=1間=1.82mなので、21.84m弱となる。1日に1.82m掘ったことになります。小葉田淳による。)掘りました。

寛政3年8月水抜きは6長・煙廻り5長半・ツルハシ中石

10月 6長・ 4長・ 同

4年5月 2長・ 3長・ 同

と、はかどりません。

石の堅さがツルハシ中だったのが、寛政4年2月には堅石かたいしになり、その上、向田敷の方へ金掘りかなほに行かされ、水抜きの方は3分の1になり、はかどらなくなります。火入れをしようと考えましたが、隙間から水が染み出ているので、火入れはできない、などと報告します。水抜き穴を掘るだけでは、費用ばかりかかって金が出ない、と藩の方から中断を言われるからだと思われま

す。金産出より水抜きの記録ばかりが中心となります。

⑦ 薪伐り方下札

薪や矢留木を伐るために、下札 16 枚を渡されていましたが、この内、12 枚を使い、残り 4 枚となっていました。森山太助は、今後更に枚数が必要になったら増やしてもらおうよう、願い出ていました。しかし、結局は森山太助の名代森山治右エ門が、下札 12 枚の届け出を藩に差し出しました。

このように、だんだん負担がかさむようになりますが、それでも金は細々ながら出しています。

⑧ 向田敷の崩れ

向田敷は通道・水抜き方が崩れて埋まっているので、調査をして掘る者や土砂運び者の人数、土砂を一時保存する場所があるか、広さ、留木や鉄松油(不明)・賃金や飯米の数などを金山奉行が調べるように達しをします。

『芹ヶ野金一件抜書』には、『森山太助試掘日記』以外の文書があります。最後の方なので、途中からなくなった部分だと思われます。それには、「すいしやうれん」という水引揚げ道具ができた、という風説(うわさ)がありますが、金山奉行がその寸法を示せ、狭い穴に通るのか、などと質問しています。

「すいしやうれん」というのは、佐渡金山で使われていたもので、佐渡では「水上輪(すいしょうりん)」といいました。一抱えもある 10m ほどの桶の中に、螺旋の薄板が下から上まであり、上にある中央の取っ手を回すと水が揚ってきます。しかし、大きすぎるので使うのをやめたのではないかと思われます。

⑨ 水抜きの報告

寛政 5 年 7 月 10 日に、「延口当座帳留」には 8 月～10 月の水抜きの記録と寛政 5 年の 5、6 月分の水抜きの記録がないので、急な用があるからすぐ送れ、という通達が来ます。それで、13 日に返事を詰山廻役と詰横目が出します。

寛政 3 年 8 月中	水抜き方	6 長	ツルハシ中石切
同	煙廻し方	5 長半	同
10 月中	水抜き方	6 長	中タガネ切
同	煙廻し方	4 長	同
寛政 5 年 5 月中	水抜き方	2 長	中タガネ切
6 月中	水抜き方	3 長	同

同時に、水抜き方は 1 か月に 20 人体制で米 10 石ずつ注ぎ込んでいますが、20 人いないこともあり、何月は幾人不足で、いくら残していたかを調べて報

告せよ、とのことで、次のように報告します。

寛政 3 年 5 月から同 5 年 7 月まで 28 か月に、
真米 271 石 5 斗先(先枘)

この内真米 6 石 3 斗 4 升 7 合先(9 月 10 月、稼子不足の残米)

6 月に金を取上げた所夫(芹ヶ野在住の人夫)へ賃米(報酬)として払った。

真米 4 石 5 斗

寛政 4 年正月～4 月まで、16 人ずつ、4 月は 17 人稼ぎで太助が取込み(自分のもの)にした。それは山子(人夫か)を住ませる木屋を整備したり、物入りだったので、その経費として太助が取り込んだ。

など理由を書き、20 人稼ぎで月 10 石は必要だ、と詰役 2 人が回答しています。

また、水抜きに関して、寛政 3 年 5 月 18 日から寛政 5 年 6 月まで 405 尋(607.5m か 729m)を、月数 27 か月で、1 か月に 15 尋ずつ、257 尋掘り抜き、残り 148 尋残っています。

⑩ 出金量と相場

寛政 5 年 9 月 23 日付の金山奉行宮内源右エ門と福山平太夫の出した通達は、山ヶ野金山詰の海老原喜助を芹ヶ野詰にするといいます。前役の芹ヶ野詰役は長崎正次郎です。誰が報告したか分かりませんが、芹ヶ野金山の玉金の記録があり、42 匁という出金です。また、同記録では、金見役の市来弥八郎が芹ヶ野金山の出金量 42 匁 2 分を鑑定しています。寛政 5 年 10 月 19 日付の同記録では、48 匁 1 分の出金報告があります。

⑪ 中止の判断は？

寛政 5 年 7 月 21 日の報告に、だいたい次のようなことが書かれています。森山太助が天明 7 年(1787)に試掘を始め、寛政 2 年(1790)水抜きを藩に申込み、金山奉行の宮内源右エ門が見分(検査)して、水抜きをすればずいぶんよい金気だ、ということで、水抜きと煙廻込で 736 尋、月に 15 尋延で月数 49 か月、稼ぎ人数 20 人、月 1 人 5 斗、総高 490 石で、御益(藩の利益)になると、宮内源右エ門が言っています。

太助には寛政 3 年 3 月 18 日許可証文が出たので、5 月 18 日から水抜きを始めました。最初の見積もりは、ツルハシか下タガネの堅さでしたが、だんだん堅石になり、上ノミ・中タガネの堅さで、最初の計画より遅れています。今から先、50 か月かかり、500 石ほど必要になり、うまくいくか疑わしいです。表方(藩の役員)から水底の金気の厚薄を試験します。水抜きは当分取止

めに仰せつけられました。金気の多少では、続けるか中止か、吟味次第だ、とあります。

寛政5年8月4日には、5、6月は水抜きはできないので、山子へ申渡し、調べてみて、堅石でむずかしいと山子も答えています。

『芹ヶ野金一件抜書』には「7月、江戸から金掘り3人が来て、水抜きの試験」のため、「水引用松箱樋(水を流す松の木の箱の樋)」を準備しています。それでも水抜きはうまくいかず、「中休み」したいと、12月19日頃に藩へ提出しています。

どうやら水抜きは失敗し、寛政5年12月には、「中休み」を言い渡されましたが、太助は「自稼(自分負担で掘る)」の願いを出し、翌6年正月、許されています。

嘉永5年(1852)子8月の『金山舊記 芹ヶ野金山發起始終覚書』金山方(藩の正式な役所)の記録によると、「寛政7年の頃までで休山したのではないか」とあり、「玉金1貫222匁余」の記録があり、「全部の出金高の細かいことはわからない」としています。

『元禄年間 芹ヶ野金一件抜書』では、寛政9年頃まではかなり稼ぐつもりだと結んでいます。

はっきりはしませんが、寛政7年頃で終わったのではないかと思います。

時代は、藩の財政がひっ迫してくる時代となってきます。

(イ)野下鉦山試掘失敗(文政10年8月から)

記録によると、宮崎県須木金山をまず試掘し、金気等が見当たらなければ、次に芹ヶ野金山を掘ろうと記載されています。ここでいう芹ヶ野金山は野下鉦山のことです。

文政10年(1827)8月から芹ヶ野金山(野下鉦山)が計画されましたが、実際に動き出すのは翌11年3月からです。記録によれば、串木野の古い金山と鉦脈は続いています。よい金山ではないが、夏になれば草木が繁茂するので早く、とのことで、資本金50両ほどを御隠居の方から出す、と記載されています。50両は当時5,000万円ほどでしょうか。御隠居とは島津斉興のことで、大御隠居の徒目付かちめつけも入っているのです。重豪も加わっているかもしれません。

山廻り役には宿の手当ても5軒、荷運びの馬なども付け、優遇されましたが、実際は、病気になってしまった、錫山へ行っている、川が荒れたので、などという理由で遅れています。着任が遅れるので、正規の給金から返金しなければいけません。

野下を試掘してみると、よい鉦脈でない、砂金も取らないとやっていけない、と報告しています。

翌 11 年 8 月 26 日には、野下の鉦脈はダメで、石も堅く、見切りをつけて中止(御引取り)した方がよい、と結論を出し、9 月には全員引揚げたようです。多分、山師の判断が甘く、もう少しずれるとよい鉦脈があったのでした。

たった、1 年余の試掘で終わりました。

イ 近代化する芹ヶ野金山

解説 編集委員 所崎平

慶応二年(1866)寅正月とある、芹ヶ野金山詰の市来四郎太の『日記』によりますと、最初に11人の山師^{ぬしどり}主取の名前が載っています。これは同年5月2日に詰奉行伊東仙太夫から命じられた者だと思われまます。

伊東仙太夫は、現在の鹿児島市清水町^{つづらほら}黒葛原橋近くの生まれで、出水地頭をした後に芹ヶ野金山詰の奉行として赴任しました。芹ヶ野金山の基礎は彼が作った、と言ってよいでしょう。

芹ヶ野金山は元治2年(慶応元年(1865))2月から掘り始めたらしく、元治2年丑12月までの出金高に、

砂金 21 匁 8 分

とあります。11か月間の出金高としては少ない方でしょう。

出金高に続いて、上々山師 27 人、上山師 11 人、中山師 3 人、下山師 1 人、下々山師 10 人、上跡向 2 人、下々跡向 2 人の名前が書かれています。山師だけで 52 人、跡向が 4 人、総勢 56 人です。芹ヶ野金山に力を入れて開発しようという意気込みが見えます。

辰正月 8 日に奉行衆 7 人に銭 15 貫 748 文(1 人分 2 貫 250 文)、書役衆^{かきやくしゅう} 6 人には 6 貫 748 文(1 人分 1 貫 125 文)、徒目付衆^{かちめつけしゅう} 1 人には 1 貫 118 文、人馬賃 銭払いに 976 文、旅籠料^{はたごりよう}払いに 14 貫文、日用代払いに 1 貫 124 文を出しています。他に土産代として、上茶 1 斤代(4 貫文)、玉子(卵)代に 1 貫 664 文を使わずに返却しています。

また、水車方詰に長崎正蔵が詰めています、最初から水車は作っているのだと思われまます。しかし、慶応元年辰閏 4 月 8 日から、とあります。

したがって、元治 2 年(慶応元年辰)から基礎を固めて、金山稼ぎを始めたのは正月の末ではないかと思われまます。26 日には交代に詰役の山口矢之助が山師 9 人を連れて、宮之城で一泊しています。翌日 27 日の夜五つ(8 時頃)に到着し、仁右エ門の家に住むことになります。

他に、給料が山師主取 1 人、1 升 7 合と 48 文など 12 の役職へ支払われたこと、必要経費が、炭焼きや大工・桶結いに百田紙 5 帖・汰鉢^{ゆりぼち} 5 枚・焼酎 8 盃(2 升)・茶家^{ちよか} 1・鉄地金・唐竹 12 本・鎖^{くさり}(鉦石)下し馬 393 疋(延べか)など品代が記してあります。

28 日には、向田敷と十里塚敷水抜きと六番敷谷の検査に出掛けています。29 日には、山師を連れて「羽^は鴛^{しま}金山」の試掘に行っています。

2 月 3 日、浜浦(御蔵山あたりか)へ松節^{まつぶし}(たいまつ用か)取りと船大工の野元金助へ水揚げ道具(ポンプか)を造らせているので、調査に行っています。

2 月 4 日から六番谷の砂金の記録が始まります。

2 月 6 日、山之神(神社)のために 2 人で 20 本ずつ 40 本の杉を植えました。

もちろん、差杉です。差杉とは若い杉の枝 60cm ほどを直接地面に差し込むことです。あとに雑草を取ると、種子より 3 年ほど早く成長します。この差杉は宮之城領主島津久通公が奨励した、と言われていています。山之神神社の境内を守るためと再建用とを兼ねています。

2 月 15 日、休日、一番鶏が鳴く頃から八つ時(午後 2 時)まで仕事をして休みとなります。

2 月 16・18 日に猪狩りをし、仕留めた猪の解体を御手形所でしています。

2 月 19 日、山伏三嶋存良院みしまぞんりょういんが水神お祓いをしました。金山は地下深くなると水抜きが大事だからです。

2 月 20 日、馬 13 頭、内 4 頭は病馬とあるので、これらの馬はかなり年取った馬(20~25 歳)ばかりのようです。鉱石運搬用だと思われます。また、水車方掛りの役名があり、水車も回っています。

6 日後の 26 日には、水車方稼方(鉱石を臼に入れ、水車を動かして、杵で搗いて鉱石を粉にする仕事)の休み時間は 2 度あるが、稼働して長くなるので、七つ時(午後 4 時ごろ)タバコ休みに変える、としています。それまでは食事休み時間だったと思われます。タバコ休みは 20 分、食事の時間は 40 分ほどです。食事は線香 2 本が燃え切る間、タバコ休みは線香 1 本分です。

2 月 26 日、当時歌われたのでしょうか。歌詞があります。(註：萩＝長州藩、葵＝徳川家、⊕(くつわ)＝薩摩藩、梅＝朝廷)

- 一 萩は二度咲く 葵は枯るる
薩州天下で しちゃねか しちゃねか
- 一 いかな会津の 荒駒とても
⊕(くつわ)一つで 引き止むる
- 一 梅は盛ゆる 葵はすたる
西に ⊕(くつわ)の 音がする
葵すたれば ⊕(くつわ)が光るよ
ひちやなか ひちやなか

砂金量は 2 月 4 日から、鉱石のことは 2 月 11 日から記録してあります。砂金 1 匁(六番谷＝産出鉱床名)・砂金 9 分(向田敷)と 2 つの鉱床が書いていますが、あとは鉱床の名前は書いていません。あるいは、2 つの鉱床の合計かも知れません。

2 月 29 日、砂金 141 匁 5 分、青金として 117 匁 8 分、これは 2 月 2~28 日までの出金・吹き調べ高としています。それで、毎日の記録をしている砂金量を合計すると 110 匁 7 分となり、合いません。

2 月 11 日に、鎖 20 駄届と馬 1 頭で運んだ量が 20 頭分あると記録していま

す。3月1日まで12～24駄の間で16回記録されています。1駄とは、鉾石の入ったカガイ2つを馬の背に乗せたものです。鉾石はカガイ1つでもかなり重いものです。

2月2日～3月1日まで163匁3分・玉172匁、内、藤兵衛与(組)が砂金72匁2分・玉63匁6分、助次郎与が74匁6分・玉58匁2分。土部(ドベ=絞るかす)が砂金16匁5分、留灰金が玉金36匁8分とあります。

3月5日、物奉行の中江仲之丞の金山掛(係)の役料米は米30俵です。ここまでが慶応元年です。この後、記録者の市来氏は、おそらく永野金山、芹ヶ野金山を移動していったのだと思われます。

慶応4年戊辰2月に飛んでいます、中には前の事例の慶応2年寅や元治元年子のものも入っています。山ヶ野へ転勤になったり芹ヶ野へ来たりだったのでしょう。

2月7日、初酉で休日、一番鶏の鳴くころに仕事を始め、八つ時に終わって、その後、休日となったのだと思われます。つまり、午前3時ごろから昼2時ごろまで仕事して、それから休みでしょうか。初酉の祭がありました。

2月9日、必要品名が3年前と少しずつ変わります。鉄・鋼・百田紙3帖・わら^{むしろ}筵15枚・金摺鉢8・夫馬3疋・鉛・白炭4俵・灰1升・延馬428疋・6～7寸廻唐竹14本・正中(焼酎)34.5盃が上がっています。

6月9日から数日置きに浜浦・小瀬、駒之跡上へ松明割りに行っています。この後は「松取」といって、最初は2人ずつ、途中からは4人ずつ行っています。

炭焼きは6月23日から出てきます。最初は1人ですが、後には2人になります。実際に炭を焼くのか、炭取りに行くのか不明です。白炭は鍛冶屋で使う、火力の強い炭です。磯集成館の反射炉も白炭を使って高熱にします。

6月12日、実際に掘っている場所は、「六番谷・向田鋪・山岡ヶ平」の3か所で、道具の数は、鶴嘴3・山鎚^{つるはし}3・鑿^{やまつち}5・小斧^{のみ}1・大斧^{こおの}1・前かき^{おおおの}1などと3か所ごとに出ています。また、共通の道具や、碎場^{せりば}や鍛冶屋道具があります。たとえば、碎場には汰鉢3・金摺鉢3・丹荷2・汰溜桶^{たんご}・鎖手洗桶^{ゆりどめおけ}2と碎場でどのようにして汰鉢^{ゆり}で金分を取るかが想像できます。

6月13日、向田鋪は中通に水溜り手前の天井によい鎖を探し出した、というように、あちこちの金鉾脈を探しています。とくに、前に掘った鉾脈を再度探索しています。姥敷(うば・うべ・うんぼ敷)を10数回探しています。

6月16日、山之神神社の六月灯があり、山師が銘々灯籠を寄進し、市来氏は西瓜灯籠を作っています。

6月18日、戊辰戦争前ですが、城下士の高20石以上は3升、寺社も3升、外城郷士などは5石以上は重^{かさみ}(追加)をします、これは、海陸軍兵士の扶持米(給料)にする、と命令がありました。

6月19日、小平谷の水溜りの水引揚げに取り付けます。

6月21日、小平谷の尾根から小島が見えます。これは草島(久多島)権現社で、野間岳も見える、と記録されています。

6月24日、川内の向田町で市^{いち}が立っていますので、山師2人が市見物に休んで行っています。

6月25日には、出金が少ないので、たくさん出した者へ褒美を出すようにしています。あちこち再度金鉱脈探しをしています。

6月27日、ウナギ取りのため、山椒を伐って、休みの向田組が取りに行きました。翌日は、雪の茶屋前の川からウナギを取っています。

7月3日、金探しは主に古い鉱脈を中心に3か所ほど回っています。

7月5日、長州に渕脇喜右エ門が今日出陣、横川集合で、計6人が出陣。

7月14日、疱瘡の治療薬として、処方箋が書かれています。これを塗ると、軽くなるのだと思われます。桃枝・牛蒡子^{ごぼうし}・陳皮^{ちんぴ}・枳殼^{きこく}・紅花^{べにばな}・青と黒大豆・小豆などを3升の水で煮詰めるとあります。この処方箋は大慈院(齊宣)様・御隠居(重豪)様が写し、それを人々が写すように伊東仙太夫が命じられたのです。

7月16日、市来氏は横川町にある安良神社に参詣しています。

7月23日、吹子^{ふいご}のぶちのした(鞭の舌)を持ってきます。多分、皮製でしょう。

7月24日、坑内の竹がなくなり、唐竹を30本伐る届を出します。

7月26日、ハンドポンプ(水揚げ道具)の図面があります。皮で作ったホースで、ホースとホースをつなぐ部分はネジ継ぎとあります。水の出口は直径4cmほど、ブチの弁が付いているはずですが、はっきりしません。

木場茶屋から麓の五反田橋までの間に松の木を内見(内々に調べ)、19本を見積もっています。ちなみに、現在は国道に五反田橋がありますが、戦後のことで、それまでは坂元橋とっていました。松の木は坑内で、留木か水回りに使うのだと思われます。特に街道の松は古くて直径60~70cmはあるものです。

上名村前藺門の氏神(内神)のご神体がトジ石(金)らしいという話も記載されています。調べに行っていない。

この日は朝七つ(5時)~夕方七つ(5時)まで1日休暇でした。隈之城と串

木野麓である太鼓踊の見物のためです。実際に山師は見に行っています。多分、麓の諏訪神社(現在の南方神社)の祭礼日(旧 7 月 28 日が最終日の本祭)のためだと思われます。

8 月 1 日、山木ヶ平鉱を中止にしよう、向田敷の水廊下の溝掃除をします。そして、8 月 10 日には、山木ヶ平鉱はついに休止にします。

8 月 3 日、向田敷の水廊下の内の鎖切刃(採掘現場)の水が強くなり、吹子(水抜き筒)で水を引き揚げ、八つ(午後 4 時頃)水が引いて、鎖(鉱石)を取上げました。

8 月 8 日、向田敷に苦勞するので、姥敷の方を再開発しようとして探し始めます。10 月 5 日まで 15 回も必死になって探しています。山師だけでなく、古いことを知っている 73 歳の山伏や、67 歳の村人、串木野役人の長谷場藤蔵・奥田清次郎も引き出します。また、姥敷には「念が残っている」ので、麓の良福寺の僧に水施餓鬼を頼んでいます。その「念」が邪魔して在りかを示さない、と考えています。姥敷は現在の十里塚より野下側 200m ほどの右側になります。

8 月 13 日、向田敷の鎖(鉱石)5 り(厘か)廻。16 鉢華粉、6 鉢肌、砂金 1 匁 1 分と初めて「華粉・肌」が出てきます。「華粉」は鉱石の粉で、「肌」はきめ細かな鉱石の粉でしょうか。この頃は、向田敷と六番谷の 2 か所を採掘しています。

8 月 15 日、休日になっています。昨年も休日だ、といっていますが、理由はわかりません。休日なので、市来湊のあたりや島平の寺島(照島)の松尾大明神へ 参詣、浜浦まで見物に行っています。

8 月 21 日、奉行は苗代川の焼物所を見物し、法智山妙円寺参詣、湊町に 1 泊しています。

8 月 22 日、「上山師」の万膳源八が「不埒の訳」があり、今日から「中山師」に降格されています。

8 月 28 日に慶応 2 年寅、真米^{まごめ}を 36 石 7 斗 4 升起^{おこし}(現在の枡で 1 升 1 合 6 勺)を山師飯料(食べる飯)用として受取っています。

元治元年子 5 月 29 日、真米 36 石起を帖佐与(組、藩で使う蔵)方御蔵入の収納米を山師飯料に貰っています。最初から藩の費用で経営していることがわかります。しかし、実際に出しているのは隈之城与向田下代衆^{げだい}(下代=郷士の石高を出す係)へ差し出しているのです、できるだけ近い蔵から出して、運搬費を節約しているのでしょう。

9 月 12 日、古瀬戸の留木山で鍛冶炭焼きを始めています。

9月16日、旧式の山之神祭なので、休日です。「旧式」と言っているのは、廃仏毀釈が始まることわかっているの、「旧式」と言ったのでしょうか。山之神祭は正・5・9月の16日と年3回するのが習わしです。現在は正月16日に行う地域が多くあります。

9月17日、製鉄所掛(係)の長崎出身で集成官(館)にいる者2人が来ています。

所役の長谷場藤蔵が^{ところやく}出役しているの、この頃から長谷場藤蔵は金山へ深く関わっていくのしょう。

9月20日、向田敷の水が湧く所の天井煙廻しの取明け方を始めます。向田敷は水に悩まされる坑道が多いです。

山之神(神社)の脇に「水神」を立て、^{かいげん}開眼供養を山伏奥田善行院がしています。現在、神社の右にある水神だと考えられます。年号が入っていませんが、この記事から慶応2年9月20日に建てたことがわかります。

9月23日、川内の向田町で角力(すもう)があるため、お役人が出かけています。

9月27日、どういう訳か、西郷吉之助(隆盛)のことが出ています。大目付で役料高200石、勤め方はこれまでどおり、陸軍掛と変わった、席順が関山糺の次になった、ということ帯刀(桂久武)が通達しています。

10月12日、向田敷の水抜きに吹子20~30立と水抜きに懸命です。

10月21日、山役の市来氏は芹ヶ野金山を四ツ時(昼十二時)出発して、樋脇を通り、山崎の町へ日入り前に過ぎ、宮之城の町に一泊しています。7~8時間かかっています。それから山ヶ野へ行っています。

明治3年午4月14日、去(明治2年)秋、全国不作で米価が非常に高くなりました。売り米がなくなり、庶民が難儀しているの、常平倉から千石だけ市中や近隣へ放出しました。すぐ食い尽くすので、粥や雑穀類を食べるように触れが金山まで来ています。

慶応3年卯8月2日、大原村の万助方へ西瓜を取りに行っています。また、自分で作った和歌と思われるものが書かれています。

- 1 我が恋は薩摩山の向田敷 金取ろう計^{けい}稼ぐ若様
- 2 今年より栄え出^いず向田敷 昔の水わく鎖劣らん
- 3 百の鼻天狗の鼻とは云いながら 冠岳よりも高くなりけり
- 4 この鎖碎き方 念を入れてくれ 頼む碎場の山師ども哉
- 5 我が恋は芹ヶ野山の奥なれば思う人もなければ遇う人もなし
- 6 この川辺分けて蛍や住^すらくらん 乱れて燃ゆる水の面影

- 7 薩摩山西に見えし浜先に 松間にちらつく弓張りの月
- 8 月を見て勇とすれば押し隠す 白浜先の村雲の町
- 9 村雲は一度は晴れよ楽しみに 雲の透き間に若の姿なり
- 10 この春より情けを掛けて通いけん 今秋逢いし姫の小松に
- 11 小松風逢し嬉しき言の葉も 靡いてくれよ柳春風
- 12 悪しきなや薩摩郡山田越え道も 崩れて哀れこの里

2の歌からは、向田敷の金がよく出ていることがわかります。昔から水が溜っていたのです。3では、それを天狗の鼻のように自慢しています。冠岳には天狗伝説があります。4では、鉾石の砕き方にも念を入れるように願っています。6からは蛍が飛んでいたこと、薩摩山から海岸や町が見えること、などが歌われています。

慶応2年寅12月晦日、浦之谷の上高塚鍾は19人半で稼いでいますが、5人の相合(あいあい=共有)山があります。高塚鍾・下高塚鍾は串木野でなく山ヶ野でしょう。早くから共有山があることがわかります。寅7月から始めたとあります。

ウ 『日記 水車詰中 市来氏

慶応3年丁卯4月～明治2年巳4月23日』より

解説 編集委員 所崎平

この日記は、市来四郎太が山ヶ野(長野)在勤のときに書いた日記で、直接、芹ヶ野金山とは関係ありませんが、同じ金山なので共通点があります。

慶応3年卯4月1日の書き出しの前に描かれた部分に、

金1寸(3.03cm)四方の重さ176匁(660g)、

銀1寸四方(525g)

朝飯の時間は線香2本(1本燃えるのが約20分程)

九つ(12時頃)のタバコは線香1本

昼飯は線香2本(少し残りとなるので、朝食時間よりやや短い)

七つ(4時頃)のタバコは線香1本

前4度の休み時間は朝六つ～暮六つまで(日の出から日の入りまで)

水車方に山師26人、内主取1人が日記所番

下晒方に山師44人、内主取2人(下晒は鉦脈の名前)

4月1日は交代の時期で、市来氏は今日から水車方へ勤めることとなります。4月1日が交代時期といいますが、4月27日にも交代しているので、標準が4月1日で、病気や看病やままならぬことで交代が遅れたり、途中で交代ということもあるのだと思われます。

4月2日から女夫11人が来る、とあり、5月2日まで4人～11人までが来ています。5月2日の賃金を見ると、日数30日間で、上女夫・中女夫とあり、上が1人約10文、ただ女夫が何をしたのかははっきりしません。今までの例からすると、鉦石の選鉦に携わっていたのでしょう。また、煙草1斤代2貫800文とあります。

4月8日は休みで、豊後国2人と鹿児島島の芸者と3人の5人で「術」を天神神社でしました。見物人が多いでした。

4月11日、雨が降り、山道が滑って馬が使えず、跡向が背負って鎖(鉦石)を下しました。その後も数回跡向が下ろしています。

それでもかもしれませんが、4月17日に、雷除けの呪文が載っています。東に「阿伽多(あかた)」、南に「利帝魯(りてろ)」、西に「須陀光(すだこう)」、北に「蘇陀摩尼(そだまに)」と唱えます。または、東西南北の柱に張ります。雷だけでなく、あらゆる災難、地震や火災などの災い除けに使われました。

4月20日、ゑぶぎる箆(器)を作る。2つ作った、とあります。ゑぶ箆とは何であるかわかりません。

4月22日、馬5頭が病馬で鎖(鉱石)下ろしに役に立たない、といます。他に1頭は病馬であるが、三才馬で役に立たない、とあります。若い馬も弱々しい馬を出したのでしょうか。

大建馬像鍾(鉱脈名)の山主3人が規則違反か何かをして問見米が中止されていましたが、今回許された、とあります。山持ちは自分の山に金が出ると分かると、自分たちで掘るために資金を出してもらっていました。

4月24日、帖佐の鉄山へ鉄取りに行っています。鉄を持ってきて、ノミやタガネを作ったのでしょうか。26日には「鉄取入れ方」に行っています。「鉄地金」の購入もあります。

4月25日、水車を取り付けるのに慶応元年9月9日～同12月19日と3か月と10日かかっています。芹ヶ野も最初から水車を入れたのだと思われます。

大工は慶応元年丑12月20日に鹿児島へ帰った、とあります。

大工が造った家は、「水車家1軒、9間7敷(間口が9間、奥行きが7間)」、「日記所1軒、4間3尺、6敷(間口4間半、奥行き6間)」、「^{せりば}砕場木屋1軒、間口5間、奥行き6間」、「山師休木屋1軒、間口5間、奥行き5間」と、それぞれに合わせて、大きな家を造っています。

4月26日、鹿籠金山の山師俣野利左衛門が大口の牛尾金山へ金があると夢想し、畠の角で坪1つトジ石などを掘り出し、砂金47匁4分、トジ石1つは大口地頭所へ差し出しました。珍しいことだ、とあります。

卯5月1日、に4月中1か月分の水車方山師の賃米銭やその他の品代に、
真米19石6斗3升
銭889貫874文
支払われています。

山役の昼飯に真米1斗5升30日分。1日分が5合なので、1人分だと思われます。主取60人分まとめて真米6斗と銭30貫文。つまり1人1日分真米1合と銭500文です。人数は、1か月に働いた延べ人数なので、主取が60人というのは、2人が30日間働いた分、という意味です。

他に、主取助30人・敷先頭60人・上々山師332人・上山師290人・中山師169人・下山師90人・下々山師444人・上跡向49人・下跡向6人・上女夫76人・中女夫155人・下女夫(銭だけ)が真米と銭を貰っています。

慶応3年卯9月3日へ飛んで、5月3日から9月2日まで記述がないのは、他の金山へ勤めたためでしょう。9月3日に転勤になった訳は、山師たちの賃銭払い(給金)の算面(計算)があるので、1日にまとめ、2日に払い、3日に

転勤となったからだとあります。

山ヶ野金山には「助次郎与(くみ=組)水車方南 12 人(武士のみ)」「藤衛与水車方北 12 人(武士のみ)」「1 人どべ砕方 1 人(武士)」「助次郎与した晒方 14 人(町人・百姓か)」「藤衛与した晒方 14 人(町人・百姓か)」「十蔵与土部方 5 人(町人・百姓か)」「直八与土部方 5 人(町人・百姓か)」と別れて取り組んでいます。「助次郎与」「藤衛方」といいますが、記載されている名前に助次郎や藤衛がないので、最初に取り組んだ人の名がそのまま残っているのだと思われる。

これを見ると、水車が南と北に 2 組あり、水車は武士が扱い、晒方とどべ方は町人か百姓が担当、特別に「どべ砕き」が 1 人います。水車→晒方→どべが 1 チームとしてあります。「1 人どべ砕方」が両方の大きい「どべ」を砕くのだと思われます。「どべ砕き方」までが士族であるのは、金分が多いので、くすねられないようにでしょうか。

9 月 2 日、下晒は敷(坑道)内の仕事を中止。山師は矢留木と松取を取りに、跡向は鎖(鉱石)下ろしに行かせました。

水車の矢木が壊れたので、木挽きが修繕用に山之神山へ松 1 本取りに行きました。水車のスポークに当たる部分が壊れたのは、杵の負担が大きかったか、水量の関係でしょう。5 日か 6 日に修繕しています。9 月 25 日にも水車が壊れた、というので、大工 3 人を雇い、修繕しています。

9 月 5 日、山伏の存良院が来て、水神前と砕場地のお祓いをしました。雨が降り、敷内の仕事も中止、水車も壊れる、鎖(鉱石)を馬で運べないからでしょうか。砕場も水がないと、ユリ(汰鉢)で金と雑物と分けることができなくなるからです。

9 月 8 日、明日 9 日「一番鶏稼ぎ」を鉱夫から申し出があり、許可しています。兼ねては夜は掘っていないのでしょうか。午前 3 時頃から七つ(午後 4 時頃)までの仕事です。

9 月 14 日、

三寸(約 9cm)釘 950 本

矢木(2 寸 3 分=約 7cm、星 1 つに 3 本ずつ)120 本

箱板用 5 つ分(厚さ 9 分=約 2.8cm の板 8 枚、星 1 つに 1 枚ずつ)

計 星 48、星 1 つに 2 貫 800 文

三寸釘は、現在のような丸い釘でなく、どちらかといえば、四角に近いもので、頭も四角で、1 本 1 本を鍛冶屋が作ったもので、現在の釘より丈夫でした。それらの釘を集めてもう一度溶かして、鉄としても使えるものであり

ました。

9月15日、当所(水車所)とした晒所の山師1人につき焼酎半盃(1盃は2合5勺)ずつ「封切御直し酒料=仕切り直しの酒料」をくだされました。

9月16日、休日。山之神祭だからです。

9月17日、9月3日~15日までに、砂金45匁3分5厘出ています。主取が金吹きに山ヶ野へ行っているのです、水車場は永野にあるのでしょうか。

9月26日、矢木15本、山之神山、とあるので、補修のための矢木を取って来ています。

10月2日に9月17日~10月2日までの玉金47匁3分ありました。内16匁は助次郎与・21匁6分は藤衛与・5匁1分は土部・4匁6分は留灰とあります。土部は金をゆった後のいわゆるドベから再度、金を取り出したもので、留灰は恐らく、灰吹き法の灰中の不純物の中から、再度、金を取り出したものかもしれません。

慶応3年卯10月3日、卯9月1日~29日までの経営費用の真米17石3斗5升5合と銭1,075貫577文が出ています。これは、山役の昼食代1斗4升5合(日数29日分、1日5合)、以下、山師主取~下々跡向までの働いた延べ人数2,378人の真米と銭が書いてあります。1日82人働いている勘定になります。休んでいた人もいるので、82人以上いたと思われます。また、備品や消耗品があります。百田紙・汰鉢・ワラ筵(山師木屋敷き用)・焼酎・油・唐竹・鉛・起炭・灰があり、鎖下し馬代(582疋、1疋に61文6字)・鉄地金、水車の壊れ修繕の大工代もあります。

12月7日であろう、フランス人土質学の者の記事があります。次の8・9日にも調査し、宮之城へ行きました。もちろん、山師2人が同行しています。名前がわかったのは12日で、レヤウ(レオン・シスレー(Leon Sisley)か)とコンレイ(ジャン・フランシスク・コワニエ(Jean Francisque Coignet)か)と2人いました。

12月10日、水神のお祓いを三嶋存良院がしました。

フラチリナ(プラチナ)が下晒鍾に出ました。金より10割ぐらいよい金属だ、とあります。箱鍾の樋口1尺4寸5分(約44cm)・水深7分(約2.1cm)、水落とし口の内計1尺2寸(約40cm)・水深8分(2.5cm)とあるので、丁場稼ぎの箱は小さいものであす。長さははっきりしませんが、抱えて桶に金を入れる物なので、長くて70cmほどだと思われます。

12月13日、肌鉢数30鉢・鎖鉢数50鉢・引物鉢数80鉢と書かれています。肌と鎖、引物は鉱石の種類でしょうか。

12月16日、冬季の就業時間が短くなったので、朝食・昼食時間が線香2本

から1本半に、タバコ休みは「引取る」とあります。

唐臼華粉 65 臼と水車搗き臼だけでなく、昔から使っている唐臼でも華粉を造っています。唐臼というのは、シーソーのように軸があり、杵先の地面下に臼、軸の後ろから人が片足で踏むと杵が上がり、はずすと杵が臼の中に落ちる仕組みで、鉄の杵先で鉱石を砕いて細かくするものです。足で踏むので、踏臼とも言われます。

12月21日、当分稼ぎ子68人とあります。

慶応4年辰7月3日、フランス人1人が長崎生まれの通訳付きで来ます。6日、川筋を見ます。13～14日に永野から山ヶ野へ出発、鹿児島へ帰っています。

7月7日、川丁場試し場所に箱を据え付けます。9日、広橋から佐志(現さつま町)の西之藪まで調査し、西之藪瀬・仮屋瀬・おこた瀬の3か所を決めます。10日、広橋村川筋に箱を据え付けます。11日も据え付け、12日から砂流しを始めます。これはフランス人から教えられた方法(伝法)とあります。

7月21日、猫板の尻(猫流しか)を試験しています。2策に3～4金(粒)が見えたので、砕り上げてみると12～13金(粒)見えたとあります。

7月29日、長野(永野)村の諏訪神社で太鼓踊があるので、未明から仕事を始め、7つ(午後4時頃)止め、見物に行きます。

9月晦日、箱樋8つの上流側の3つを取り出しました。1番が肌頭3匁・同引物3分・2番同1匁・同引物2分5り・3番同3分・同引物1分・メ4匁9分5り、他にトジ石6匁9分5厘と1匁5分位を見積もり、合計13匁4分出ました。明治2年巳4月21日、広橋川筋の猫板は、梅雨中は休みで、引き揚げます。箱樋と猫板は同じ物のようです。

4月22日、黒鳥^{くろとり}村前川丁場稼ぎ場へ猫板を陸地から運ぼうとしましたが、川が満水だったので、川を使って、黒鳥まで運びました。黒鳥も砂金を取る場所で、県道を挟んで上の方に徳源神社があり、今でもユリ鉢を飾っています。

4月23日、猫板を日差しから保護するために、麦ガラ9占(束)・直竹1束・半縄5房・小唐竹2束・長木10本を買い、夫2人を使いました。

記録の月日はばらばらですが、当時の発達していく金山の様子がわかってきます。特に、箱樋(猫板)の様子がよくわかります。

エ 自稼山の移り変わり（明治 21 年～昭和 18 年）

解説 編集委員 所崎平

自稼山(じかやま・じかせぎやま)とは一般人(個人・グループ)や会社などが島津家の許可を受けて金銀(錫・鉄・銅)の鉱山を経営することをいいます。明治 20 年になって、島津家が自稼山を奨励しましたので、すぐ飛びついたようです。県内だけでなく全国誰でもよかったらしい。『児玉宗之丞日記 下』明治 20 年正月 3 日に年頭祝いに淵辺氏へ行き、金鉱山のことを勧めるつもりが、すでに決めていた、とありますので、19 年ごろから県下に自稼山のこと広まっていたのでしょう。宗之丞は 2 か月後の 4 月 10 日、山ヶ野へ 1 週間泊まり込んで、見学に行っています。多分、自分も自稼山に参加する意思があったのだと思われそうですが、結局は自分に向かないと思って、止めています。淵辺氏は自稼山の経営が順調に進んでいるようです。

串木野では最初の自稼山経営者は麓の加藤彦十郎です。墓には「明治 20 年相地芹ヶ野創鑛業 本村士族經營鑛業 實以先考為嚆矢」と記されています。「嚆矢」というのは、「ものごとの最初。はじまり」という意味です。加藤彦十郎が明治 20 年に鉱業を経営した最初だ、ということを示しています。実際は、同 21 年 5 月出願許可があり、10 月から始めています。



(写真 20) 加藤彦十郎の墓

最初から水車搗鉱(水車で鉱石を搗いて粉にする)を取り入れています。水車建設は水田への邪魔にならないようにして、水路筋を決め、図面を付け県知事の許可が必要でした。

加藤どん舗は旭小学校の横を抜けて、新原喜左衛門の墓の奥の方、西山坑にありました。加藤家が鉱山経営を始めて、経営はうまく行ったのでしょう。同 22 年 10 月には奥田栄之進が薩摩山鉱山、同 23 年宮之原重が角石(地名)、同 24 年長卯七郎が長平と勝利山、鹿児島荒田の園田実徳が西山湯牟礼を営営しました。その後、ゴールドラッシュの夢を求めて、いろいろな人々が次々に参加しました。個人経営は心構えが違い、成果が上がりました。採掘法も改善、搗鉱製錬の技術改良工夫、混汞法・青化加里法と採金率も上がりました。

加藤家は同 36 年頃、藤沢吉也という人に譲っています。もうかったときもあります。内田善右衛門と平石仁兵衛の共同経営は日清戦

争の明治 37 年ごろは金の出る部分(富鉱帯)に当りました。しかし、5 年ぐらいで他人に売り、1 年後、また富鉱帯になったので、売り値の 2 倍で買戻し、内田・平石・奥田の共有にしました。同 33~34 年には月に 3 万円の産金があったようです。湧水を 18 個の竹ポンプで排水しましたがダメで、同 41 年、竹田ひさ(福岡県直方市)に 1 万 5 千円で売りました。竹田は 25 馬力のボイラーで排水しましたがうまくいかず、2 年で中止、同 44 年にはまた、内田善右衛門が買取り、大正 7 年まで続けて終わりました。最後は損失が大きかったのでしょう。

自稼山の一例として、奥田・内田・松田・平石の 4 人共同の倉ン谷の大峯(おおみね)と山木ヶ平の加屋野(茅野)鉱山の資料から見てみます。共同で経営するのは、出資金や損失の負担を少なくするためだったからでしょう。経営に危険性があることがわかっていたからです。奥田は麓、内田・松田は生福、平石は大藪の人です。明治 34 年から大正 5 年まで、15 年間経営しました。

内田家の「大峯・茅野鉱山経費調」明治 33 年正月~大正 5 年度末の詳しい記録を見てみますと、33 年度は毎月 500~600 円台の出費で、この時代は 1 円が現在では 6 万円ほどに当るとして、年間 3,000 万円ほどを使っています。その内の最大の出費が駄賃(馬で鉱石を運ぶ賃金)で、22~65 円台を出しています。明治 34 年度には鉱業税を 15 円 56 銭払っています。明治 33~37 年まで支出は 1 万 3,899 円余で、収入が 812 円 96 銭、損高が 5,886 円余あり、その 3 割、1,962 円 23 銭を内田家が負担しています。

明治 33 年 1 月「大峯・加屋野鉱山 共同事業費計算帳」には、駄賃以外の細かい品物が書かれています。例えば賃金以外では、坑内が崩れないように枠を作るための木材の留木とめぎや矢木やぎ、水車の杵の木、その先に付ける杵先の鉄、木の臼の底に、鉄板を敷いて、鉱石を粉になるまで搗くための杵木・杵先・臼底。アマルガムを作るための水銀。坑道内で鉱石を崩すためのダイナマイトや火道(ひどう=導火線)。33 年度の鉱業税 32 円 60 銭などが目立ちます。

明治 34 年 1 月には、山神祭用の焼酎と鶏代に 3 円 56 銭。鉱業税 15 円 56 銭。その他、「トラシ(フルイ=鉱石の小さいものを通す)・ブイ(鉱石をすくって運ぶ)・ダツ(鉱石を背中に背負う籠)」の道具類。種子油・石油の坑内の灯火用や機械油。鍛冶屋用の炭。「ダイクワン・メダイ」など、よくわからない物も出てきます。不足(赤字)は内田氏が 4 円 45 銭 8 厘を出したり、奥田氏が出したり、3 人で出したりしています。黒字のときもありますが、全体を通して見てみますと、赤字で終わっているようです。一人前の損失負担金が 8 円ほどであれば大したことはありませんが、20~30 円となると、個人の負

担は大きかったようです。

明治 35 年には台風があったのか、水車宅地や水路・道路などに損害を受け、各自が受持ちのものを修理して、それぞれがお金を出しています。全体で 19 円 (600 万円ほど) かかっています。場所を見ると、楮山・内田・^{うしろくちだに}后口谷 (今の生福地区) で、鉱石をここまで運んで、水車で搗いていたと考えられます。水車は 36 年度には 4 つあって、回田水車・中之水車・内田下水車・楮山水車という名前が見られます。鍛冶屋はそれぞれの坑道入口近くにあって、道具の修理をし、^{とこあげ}床上では、アマルガムを焼いて金銀をビー玉のようにしたと思われま

す。税金は、鉱区税 (国か)・県税・村税と 3 つに別れています。36 年度では鉱区税と県税 13 円 23 銭、村税 2 円 40 銭、合計 15 円 63 銭を払っています。大正 5 年度では合計 23 円 78 銭です。このように税金も高額でした。

経費を見ると、大峯鉱山では明治 33 年度は、出費 6,382 円 66 銭、利益 3,555 円 66 銭で、損失は 2,826 円 99 銭で 34・35・36 年度もすべて赤字で、経営者がそれぞれ負担しています。加屋野鉱山の方は、そうでもなかったのでしょうか。記録はありませんが利益を出していたのでしょうか。損失だけでは、すぐ経営はダメになったのでしょうか、15 年間続いたことですので、ぎりぎりの経営ではなかったかと思えます。

別の例です。竹中幸之助は鹿籠金山からやって来て、鉱山経営に参加しました。明治 41 年 3 月 17 日の始良郡蒲生村大字西浦の金銀鉱試掘願があります。これは 7 人で出願しています。田中・竹中・前田・山下・三浦・長野・星原で、主に旭地区の人が中心です。許可されたかどうかははっきりしません。

竹中幸之助は角石川筋と西山川筋の 500m ほどに砂金採取願を出しています。実際に砂金も出たのでしょうか、竹中幸之助は品位の高い鉱石などが捨てられていたので、それを目当てにしています。また、30 年前の水車ができた頃のドベが溜ったところをねらった、と述べています。初期、水銀アマルガム法が未熟な時代のドベは金を多分に含んでいたもので、楽に金銀が採れたようです。そういう工夫をしたので、鉱山経営を続けて行けたのでしょうか。

大部分はよい成績ではなかったようです。それでも自稼山の最盛期の明治 42 年には水車が全体で 202 台、杵数が 2,612 本あったといわれています。自稼人 62 名、自稼附属坑夫数 550 名とにぎわっていたようです。

かなりの数の自稼山があったようですが、小さい自稼山はほとんど露天掘

りで、掘り出した鉱石はカガイに入れ、馬に背負わせて、水車小屋まで運びました。馬の駄賃は大正の頃は、金山山から 6 番迫までが 1 回 60 銭ほどで、馬 1 頭の値段が 20 円ぐらいのころで、農家のよい収入になりました。

福岡鉱山監督署の提出書類には、場所・採掘者などに芹ヶ野金山関係で串木野居住の採掘権者は明治 44 年度には 15 人が載っています。14 年後の大正 14 年には 6 人に減ってきています。昭和 12 年には 1 人になり、昭和 13 年からは芹ヶ野金山の大部分は三井金山になります。つまり、串木野の人たちは三井金山に移った、ということになります。

しかし、下甕島の鉄山は肝付篤志、枕崎桜ヶ谷の金山は宮之原重が昭和 17 年までは所有者として、福岡鉱山監督局の記録に残っています。

自稼山を三井に売却するのは昭和 13 年までかかりますが、実際に稼いでいるのはずっと前です。最後の水車は山伏橋の北 200m にあった石田どんの水車で、昭和 6 年です。

第二次世界大戦が始まって、昭和 18 年 10 月 18 日に政府から統制会社令が出され、多くの会社や企業が閉鎖されました。三井金山や自稼山もそのためにやめさせられました。自稼山の最後もこの時でしょう。このころには、芹ヶ野金山には串木野村関係者は 1 人もいなくて、町外・県外の人たちだけでした。芹ヶ野金山以外の鉱山の自稼山を持っていたのは肝付篤志や宮之原重がいますので、昭和 18 年まで最後の金鉱山関係の串木野の人は何人かいたと思われるます。

水抜き(地底からの排水)

金銀山だけでなく、錫山や銅山、炭鉱などの鉱山は地底深くなればなるほど、湧いてくる水との戦いです。水抜き(排水)は苦労の連続です。溜る水を抜けなくて、試掘に失敗した例として加治木の町人森山太助がいます。出雲から山ヶ野金山へ来ていた吉田喜三次から引き継いで、天明 7 年(1787)～寛政 5 年(1793)まで、川内平や西山・堂之越、駒之跡などを試掘しました。吹子 7 人でもダメで、100m の水抜きトンネルを掘ろうとしましたが、半分も行かないうちに、堅い石にぶつかって、藩が停止を命じました。藩から補助を受けていたからです。

天明のころは吹子という太い竹の節を全部抜いて、先と手前に弁(舌)があり、井戸の手押しポンプと同じで、水が入るときは弁が開き、水を吸い上げるものでした。これでもだいたい進んだ水揚げ道具でした。

吹子での水抜きの以前は、人が上から桶を投げ込んで、手の力で引き揚げました。井戸のように、天井に車輪が付いて、ぐるぐる綱を引っ張って、水

を汲めるところは、ずっと楽になります。浅い地底ならすぐ地上へ汲み出せますが、深くなると、階段のようにして水溜の桶か水槽を置き、1階の人、2階の人が順々に汲み上げて、水を地上に出していました。

誰が発明したかわかりませんが、スイショウレンという直径 50cm ほどの木の胴(細長い桶で、10m ほど、胴を締める輪が 10 ほどある)の中に、薄い木の板を連続して回転しながら上まで続いているのが入っています。上に回転軸があって、人が力いっぱい回すと、水が揚がってきます。それを順々に地上へと送り出します。

「芹ヶ野金一件抜書」には寛政 5 年丑正月 23 日に金山奉行が「すいしょうれんとやら水引揚げ道具ができた、といううわさ(風説)があるが……」と知っているのも、実際はどういうものか知らないままでした。実際にはスイショウレン(水上輪)は入っていません。

慶応 2 年 7 月 22 日には、ハンドポンプの図が描いてあり、それは現在の消防の手押しポンプによく似ています。明治 6 年正月にはハンドポンプを使っている記事があります。明治 6 年以前には芹ヶ野金山に入っていたに違いありません。

発電機

明治 26 年、禰答院重義が喜入生見金山で県下初の坑内照明に水力発電を利用。同 31 年、小山田発電所を建設、一般電力として営業。同 37 年、五代龍作が鉱業館長に就任し、永野と芹ヶ野の近代化を勧め、永野には国分水天淵に、芹ヶ野には伊集院大田に発電所の建設を始めました。芹ヶ野金山では同 41 年 12 月に水力発電が伊集院大田轟滝下に完成、木製電柱 400 本を旧街道の 16km に立てて送電しました。そこで、水車搗鉦を止め、電力で杵も大きく、水車の 15cm ほどから 5~6 倍の杵が 30 本で搗きました。昭和 2 年まで 25 年間続きました。工場では電灯がともって、別世界でしたが、一般の家は相変わらずで、種油のコトボシという皿に油を注ぎ、ジン(芯=藺草の芯)に火をともしのが普通で、よい家が石油ランプでした。それもできない家ではイロリの薪の焚火^{たきび}でした。串木野市内に火力発電ができたのは大正元年で、10 燭光か 16 燭光で現在の豆球より暗く、しかも、夜間だけで昼間は発電しないし、それに停電が多いので、電灯はつけていても石油ランプを備えていました。精米や製材所は夜中の 12 時以後の使用でした。場所は現在の鹿児島銀行の南側です。金山地区では昭和 9 年になって、ようやく電灯がともりました。

大正 2 年には、五反田製錬所の現在の赤レンガ講堂の中に、4 機の火力発

電機を据え付けました。石炭を使用しました。

水車発電の初めは鹿児島市の仙巖園で、案内板にある就成所のアーク灯を灯したようです。その後、明治 25 年に水力発電機を設置し、室内灯に使用しました。『児玉宗之丞日記 下』同 25 年 3 月 5 日に「磯御邸へ梅見物に行き、電気などの機械まで、内野氏の案内で見物し」とあり、電灯と発電機を見物しています。水力発電が普及するきっかけを作っています。

役所跡(明治初)

旭コミュニティーセンターの下あたりに、御座(慶応元年 12 月完成)という立派な金山役所があった、といわれています。日記所だとすると、間口が 4 間半、奥行きが 6 間の家です。当時としては瓦葺きの豪華な造りですが、日記だけの記録所で、その隣には御座所があったものと思われます。

北口屋橋の口屋の言い方は、鉾山のモガリ(先を槍のようにトガした竹の柵)があって、坑口へ続く入口のことです。その近くにあった橋を北口屋橋と言ったはずですが、そこを入れて北口屋があったはずですが。口屋には、郷士 2 人と改役(改め役=出入りの鉾夫や商人などの不正がないように改める役人)が 2 人の計 4 人がいたようです。

水車小屋(茅葺き、慶応元年 12 月完成)は間口 9 間、奥行き 7 間の家です。

砕場木屋(慶応元年 12 月完成)は間口 5 間、奥行き 6 間です。砕場は鉾石の粉をユリ鉢に入れて、水と一緒にユリ動かして金を採る場所でしょう。

山師休木屋(慶応元年 12 月完成)は間口 5 間、奥行き 5 間の四角な家です。監督をする山師が休憩する家でしょう。

他に、御蔵(明治 3 年 12 月完成)・御蔵日記所(明治 4 年 4 月棟上げ)・奉行詰所(明治 4 年 2 月棟上げ)〔役所などは瓦葺き〕・米蔵(明治 3 年 12 月完成)は茅屋根・水車(明治 4 年 3 月 11 日完成)・水車方日記所(明治 4 年 3 月完成)・鍛冶屋・水車方焼竈所(鎖焼き)木屋 6 畳敷(明治 4 年 4 月造り始め)などを造ります。これ以外もまだまだ造ります。本格稼働は明治 4 年 4 月 23 日からです。板倉 6 畳敷 3 尺戸つき(明治 4 年 5 月完成)・水車場木屋〔水車場は 23 間 8 合×8 間 6 合 2 勺=6 畝 25 歩(縦長の土地)〕・主取出張所・居木屋・鉾夫住居木屋(物置木屋がある家も)・水蔵などを造ります。

瓦は、明治 4 年 2 月に、棧瓦^{きんがわら} 4,620 枚(1 坪につき 17 貫文ずつ)・棧袖瓦^{きんそで} 300 枚(1 枚 600 文)・棧唐草瓦^{きんからくさ} 328 枚(1 枚 600 文)・角木瓦^{すみぎ} 2 組(1 組 1 貫 800 文)・棧袖唐草瓦 22 枚(1 枚 1 貫文)・丸瓦^{まる} 145 枚(1 枚 348 文)・平瓦^{ひら} 374 枚(300 文)・丸巴瓦^{まるともえ} 20 枚(1 枚 1 貫文)を隈之城尾賀に注文しています。

オ 竹中幸之助(他 6 名)が交わした(金山試掘願)契約書

解説 編集委員 所崎平

割印(4 個?)

契約証

鹿児島縣薩广国始良郡蒲生村大字西浦ノ内金銀鑛試堀(掘の誤)

願此面積四拾萬貳千百四拾坪明治四拾壹年三月拾七日出願

右者今般田中傳次郎竹中幸之助前田直次郎山下三之助

三浦覺蔵長野才二星原新之助□□□同ニテ出願致ベキノ処都合

ニ抛り田中傳次郎竹中幸之助兩名義ニテ出願致候ニ

付テハ左ノ件ヲ契約ス

一出願ノ権利ハ田中傳次郎星原新之助ハ拾貳分ノ壹ヅ、他五名ハ拾貳分ノ貳ヅ、

一許可濟ノ上ハ探鉱費並ニ雜費ハ各自部分ニ應シ負

擔スル勢

右同案七通ヲ製シ各自壹通ヅ、ヲ領シ他日ノ証ニ供スルモノトス

鹿児島縣日置郡串木野村下名八百

八拾五番戸 田中傳次郎 ㊟

全縣全郡全村全壹万三千五百三拾七番地

明治四拾壹年三月拾七日

竹中幸之助 ㊟

全縣全郡全村全壹万三千八百九拾番地

前田直次郎 ㊟

全縣全郡全村全九百壹番戸寄留

山下三之助 ㊟

全縣全郡全村全壹万三千八百九拾壹番地

三浦覺蔵

全縣全郡全村全壹万三千八百八拾五番地

永野才二 ㊟

全縣全郡全村全壹万三千三百八拾番地

星原新之助 ㊟

割印(7 個)

砂金鉱区を願ひ出た文書の控

竹中幸之助が水車業をした明治 37 年、角石川一帯を田中栄蔵と共同で砂金鉱区の出願所が残っています。田んぼに散乱した川鉱石を買った売渡証です。この川鉱石こそ間違いなく^{みてし}角石の捨てた鉱石といえます。売った野田金

太郎はこの鉱石の識別に経験豊かであり、大水で流されたのを拾ったという
確証です。

下名小字最風 丸田佐吉の地内にある川鉱石
代金十一円五十銭
但鉱石見積高百七十個位
明治三十九年十月一日 野田金太郎
竹中幸之助殿

奥田氏が譲渡した鉱区目録

奥田氏鉱區ニ付屬スル地所及建物

一 鑛區内ノ土地

田 壹畝貳歩

畑 壹畝拾貳歩

山林 壹町六反貳畝歩

一 鑛區内ニ附屬スル物品一切

一 上名製煉場監督家屋 壹棟

一 上名水車九台 杵九十本

金皿 四十八個 青化樽十貳個

一 戸切川製煉場監督家屋 壹棟

一 戸切川水車三台 杵貳十七本

金皿 六個 青化樽六個

一 製煉場附屬品 一切

以上

(図があるが略す)

『明治十六年改 願達指令 願伺届留 定穀』3/3、140 枚目

承諾書

今般日置郡串木野村大字下名壹万

三千八百六拾壹番壹万三千八百六拾貳番口

号小字岩坂へ金銀搗鑛ノ為メ水車

建設セラル、ニ於ケル隣地用水ホ江

障害ヲ与ヘサル限リハ拙者共ニ

於テ故障無之仍テ為後日承

諾書一札如件

日置郡串木野村大字上名

奥田栄之進

入来定穀

長直四郎

吉武良太郎

明治廿一年 石川精二

八月 大浦景口

中島市之助

下名丸田加之助

植屋三五郎

植屋三左エ門

中屋与次郎

水車建設の承諾書(3/3 142 枚目)

永山万左エ門

右者金山ノ田中岩知水車

建設ニ付承諾書へ捺印

呉候様相談ニより捺印

候事

水車建設願(3/3 147 枚目)

水車建設願

日置郡串木野村大字下名

壹万五千三百五十七番

小字前馬場

一水車場壹ヶ所

右場所へ金銀搗鑛ノ為メ水

車建設願致度候間御許可

ヒ成下度尤御許可之上御規則

之趣遵守可致仍而図面及び水

路筋人民承諾書相添此段奉

願候也

但別紙承諾書之外他ニ關係之

場所ニ無之候

日置郡串木野村大字下名

千式拾式番戸

願人 龍園新兵衛印

全郡全村大字上名

地主 入来定穀印

明治廿二年八月

鹿兒島縣知事渡辺千秋殿

函面畧ス

カ 福岡鑛山監督署の採掘権者と鉱山名(串木野部分)

解説 編集委員 所崎平

福岡鑛山監督署編 1911、1912『福岡鉱山監督署管内鉱区一覽』、福岡鉱務署編 1924『福岡鉱山監督署管内鉱区一覽』、福岡鉱山監督局編 1926、1935、1936、1940、1943『福岡鉱山監督局管内鉱区一覽』より抜粋

登録 番号	鉱山 名称	鉱 種	鉱区 坪数	鉱産 額	鉱業 権者
<u>明治 44 年 9 月 3 日 (14)</u>					
65	羽島鉱山	金銀	158,150 坪	金 30 匁・銀 74 匁	金丸孫左衛門外 1 串木野村羽島 116
73	同	同	19,980 坪	金 124 匁・銀 245 匁	長直四郎 串木野村上名
74	敷ヶ迫鉱山	金銀	46,900 坪	金 506 匁・銀 1,684 匁	宮之原重外 2 串木野村下名 1324
99	同	同	117,860 坪		有馬栄之進 串木野村上名 130
100	同	同	110,250 坪		大久保嘉市 串木野村下名 1605
114	薩摩山鉱山	同	7,990 坪	34 匁・銀 231 匁	宮之原重 串木野村下名 1324
156	同	同	35,020 坪		猪之鼻莊太外 1 串木野村羽島 70
210	同	同	26,850 坪		中尾助市 串木野村下名 8649
211	芹場鉱山	同	30,755 坪	金 32 匁・銀 65 匁	内田善右衛門外 1 串木野村上名 484
221	同	同	31,870 坪	金 15 匁・銀 30 匁	松田宗次外 1 串木野村
222	茅野鉱山	同	3,087 坪	金 17 匁・銀 34 匁	有馬孝治外 1 串木野村上名 120
251	山木ヶ平鉱山	同	17,850 坪	金 68 匁・銀 117 匁	入来定穀外 1 串木野村上名
273	旭鉱山	同	26,450 坪	金 20 匁・銀 54 匁	奥田栄之進 串木野村上名
95	永野	同	20,000 坪		田中龍太郎 串木野村下名 923
167	下甌	鐵	84,525 坪		肝付篤志 串木野村下名 1374
168	同	鐵	53,360 坪		同 同
<u>大正元年 8 月 5 日 (10)</u>					
65	羽島鉱山	金銀	158,150 坪	金 21 匁・銀 43 匁	長谷川監示 串木野村
73	同	同	19,980 坪	金 80 匁・銀 186 匁	長直四郎 串木野村上名
74	敷ヶ迫鉱山	同	46,900 坪	金 441 匁・銀 1,474 匁	宮之原重 2 串木野村下名 1324
92	同	同	37,090 坪		長谷川監示 串木野村

93	同	同	39,450 坪	金 826 匁・銀 3542 匁(3 か所分)	同	同
94	同	同	363,400 坪		同	同
99	同	同	117,860 坪		有馬榮之進	串木野村上名 130
100	同	同	110,250 坪		長谷川監示	串木野村
114	薩摩山鉦山	同	7,990 坪	金 32 匁・銀 205 匁	宮之原重	串木野村下名 1324
135	知島鐵山	金銀鐵	218,820 坪	金銀鑛 5,800 匁	長谷川監示	串木野村
210	芹ヶ野鉦山	金銀	26,850 坪	金 7 匁・銀 14 匁	中尾助市	串木野村下名 8649
211	芹場鉦山	同	31,000 坪		内田善右衛門外 1	串木野村上名 484
221	同	同	31,870 坪		松田宗次外 1	串木野村
222	茅野鉦山	同	3,087 坪	金 9 匁・銀 20 匁	有馬孝治外 1	串木野村上名 120
251	山木ヶ平鉦山	同	17,850 坪	金 46 匁・銀 116 匁	入来定穀外 1	串木野村上名
273	旭鉦山	同	26,450 坪	金 10 匁・銀 25 匁	奥田栄之進	串木野村上名
282	同	同	149,300 坪		長谷川監示	串木野村
95	永野	同	20,000 坪		田中龍太郎	串木野村下名 923

大正 2 年 7 月 29 日(11)

65	羽島鉦山	金銀	158,150 坪		長谷川監示	串木野村下名
73	同	同	19,980 坪		長直四郎	串木野村上名 151
74	敷ヶ迫鉦山	同	46,900 坪	金 289 匁・銀 1,216 匁		宮之原重外 2 串木野村下名 1324
92	同	同	44,660 坪		長谷川監示	串木野村下名
93	同	同	39,450 坪		同	同
94	同	同	363,400 坪		同	同
99	同	同	117,860 坪		有馬榮之進	串木野村上名 130
100	同	同	137,650 坪		長谷川監示	串木野村下名
114	薩摩山鉦山	同	7,990 坪	金銀鑛 4,425 匁	宮之原重	串木野村下名 1324
135	知島鉦山	金銀	218,820 坪		長谷川監示	串木野村下名
210	芹ヶ野鉦山	金銀	26,850 坪		中尾助市	串木野村下名 8649
211	芹場鉦山	同	31,000 坪		内田善右衛門外 1	串木野村上名 484
221	同	同	31,870 坪		松田宗次外 1	串木野村上名
222	茅野鉦山	同	3,087 坪		有馬孝治外 1	串木野村上名 120
251	山木ヶ平鉦山	同	17,850 坪	金 46 匁・銀 108 匁	入来定穀外 1	串木野村上名
273	旭鉦山	同	26,450 坪		奥田栄之進	串木野村上名
282	旭鉦山	同	152,400 坪		長谷川監示	串木野村下名
95	永野	同	20,000 坪		田中龍太郎	串木野村下名 923

大正 3 年 7 月 25 日 (9)

65	羽島鉦山	金銀	158,150 坪	長谷川監示	串木野村下名三井鉦山社宅 1
66	同	同	53,420 坪	坂元佐一郎外 2	串木野村下名串木野 57
92	敷ヶ迫鉦山	同	44,660 坪	長谷川監示	串木野村下名三井鉦山社宅 1
93	同	同	39,450 坪	同	同
94	同	同	363,400 坪	同	同
99	同	同	117,860 坪	有馬榮之進	串木野村上名 130
100	同	同	137,650 坪	谷川監示	串木野村下名三井鉦山社宅 1
135	知島鉦山	金銀	218,820 坪	長谷川監示	串木野村下名三井鉦山社宅 1
210	芹ヶ野鉦山	金銀	26,850 坪	中尾助市	串木野村下名 8649
211	芹場鉦山	同	31,000 坪	内田善右衛外 1	串木野村上名 484
221	同	同	31,870 坪	松田宗次外 1	串木野村上名
222	茅野鉦山	同	3,087 坪	有馬孝治外 1	串木野村上名 125
251	山木ヶ平鉦山	同	17,850 坪	金 52 匁・銀 114 匁	入来定穀外 1 串木野村上名
273	旭鉦山	同	26,450 坪	奥田栄之進	串木野村上名
282	旭鉦山	同	152,400 坪	長谷川監示	串木野村下名

大正 4 年 7 月 25 日 (9)

66	上名鉦山	同	53,420 坪	坂元佐一郎外 2	串木野村大字串木野 57
99	敷ヶ迫鉦山	同	117,860 坪	有馬榮之進	串木野村上名 130
210	芹ヶ野鉦山	金銀	26,850 坪	中尾助市	串木野村下名 8649
211	芹場鉦山	同	31,000 坪	内田善右衛門外 1	串木野村上名 484
221	同	同	31,870 坪	松田宗次外 1	串木野村上名
222	茅野鉦山	同	3,087 坪	有馬孝治外 1	串木野村上名 125
251	山木ヶ平鉦山	同	17,850 坪	金 55 匁・銀 100 匁	入来定穀外 1 串木野村上名
373	旭鉦山	同	26,450 坪	奥田栄之進	串木野村上名
167	下甌手打鉦山	同	84,525 坪	肝付篤志	串木野村下名 1374
168	同	同	584,161 坪	同	同

大正 5 年 7 月 25 日 (8)

66	上名鉦山	同	52,420 坪	坂元佐一郎外 2	串木野村大字串木野 57
99	敷ヶ迫鉦山	同	117,860 坪	有馬榮之進	串木野村上名 130
210	芹ヶ野鉦山	金銀	26,850 坪	中尾助市	串木野村下名 8649
211	芹場鉦山	同	31,000 坪	内田善右衛門外 1	串木野村上名 484
221	同	同	31,870 坪	松田宗次外 1	串木野村上名
251	山木ヶ平鉦山	同	17,850 坪	金 56 匁・銀 101 匁	入来定穀外 1 串木野村上名

273 旭鉦山	同	26,450 坪			奥田栄之進	串木野村上名
167 下甑手打鉦山	鐵	84,525 坪			肝付篤志	串木野村下名 1374
168 同	鐵	584,161 坪			同	同

大正 6 年 7 月 31 日 (6)

66 上名鉦山	同	53,420 坪			坂元佐一郎外 2	串木野村大字串木野 57
99 敷ヶ迫鉦山	同	117,860 坪			有馬榮之進	串木野村上名 130
210 芹ヶ野鉦山	金銀	26,850 坪			中尾助市	串木野村下名 8649
211 芹場鉦山	同	31,000 坪			内田善右衛門外 1	串木野村上名 484
221 同	同	31,870 坪			松田宗次外 1	串木野村上名
251 山木ヶ平	同	17,850 坪	金 47 匁	銀 85 匁	宮之原重外 1	串木野村下名 1324
273 旭鉦山	同	26,450 坪			奥田栄之進	串木野村上名

大正 7 年 8 月 29 日 (7)

66 上名鉦山	同	53,420 坪			坂元佐一郎外 2	串木野村大字串木野 57
99 敷ヶ迫鉦山	同	117,860 坪			有馬榮之進	串木野村上名 130
210 芹ヶ野鉦山	金銀	26,850 坪			中尾助市	串木野村下名 8649
211 大峯鉦山	同	31,000 坪			内田善右衛門外 1	串木野村上名 484
221 同	同	31,870 坪			松田宗次外 1	串木野村上名
251 山木ヶ平鉦山	同	17,850 坪	金 44 匁	銀 78 匁		宮之原重外 1 串木野村下名 1324
273 旭鉦山	同	26,450 坪			奥田栄之進	串木野村上名

大正 8 年 9 月 17 日 (6)

66 上名鉦山	同	53,420 坪			坂元佐一郎外 2	串木野村串木野 57
99 敷ヶ迫鉦山	同	117,860 坪			有馬榮之進	串木野村上名 130
210 日之出	金銀	26,850 坪			中尾助市	串木野村下名 8649
221 大峯	同	31,870 坪			松田宗次外 1	串木野村上名
251 山木ヶ平鉦山	同	17,850 坪			宮之原重外 1	串木野村下名 1324
273 旭鉦山	同	26,450 坪			奥田栄之進	串木野村上名

大正 9 年 8 月 23 日 (4)

66 上名鉦山	同	53,420 坪			坂元佐一郎外 2	串木野村大字串木野 57
99 敷ヶ迫鉦山	同	117,860 坪			有馬榮之進	串木野村上名 130
221 大峯	同	31,870 坪			松田宗次外 1	串木野村上名
251 山木ヶ平鉦山	同	17,850 坪			宮之原重外 1	串木野村下名 1324
273 旭鉦山	同	26,450 坪			奥田栄之進	串木野村上名

大正 10 年 9 月 3 日 (6)

66 上名鉦山 同 53,420 坪
99 敷ヶ迫鉦山 同 117,860 坪
221 大峯 同 31,870 坪
251 山木ヶ平鉦山 同 17,850 坪
273 旭鉦山 同 26,450 坪
168 下甌 鐵 121,000 坪

大正 11 年 10 月 9 日 (6)

66 上名鉦山 同 53,420 坪
99 敷ヶ迫鉦山 同 117,860 坪
221 大峯 同 31,870 坪
251 山木ヶ平鉦山 同 17,850 坪
273 旭鉦山 同 26,450 坪
168 下甌 鐵 121,000 坪

大正 12 年 12 月 30 日 (6)

66 上名鉦山 同 53,420 坪
99 敷ヶ迫鉦山 同 117,860 坪
221 大峯 同 31,870 坪
251 山木ヶ平鉦山 同 17,850 坪
273 旭鉦山 同 26,450 坪
168 下甌 鐵 121,000 坪

大正 13 年 8 月 30 日 (7)

66 上名鉦山 同 53,420 坪
99 敷ヶ迫鉦山 同 117,860 坪
210 日之出 同 26,850 坪
221 大峯 同 31,870 坪
251 山木ヶ平鉦山 同 17,850 坪
273 旭鉦山 同 26,450 坪
168 下甌 鐵 121,000 坪

大正 14 年 10 月 1 日 (6)

66 上名鉦山 同 53,420 坪
99 敷ヶ迫鉦山 同 117,860 坪
210 寶傳 同 26,850 坪
221 大峯 同 31,870 坪
251 山木ヶ平鉦山 同 17,850 坪

坂元佐一郎外 2 串木野村大字串木野 57
有馬榮之進 串木野村上名 130
松田宗次外 1 串木野村上名
宮之原重外 1 串木野村下名 1324
奥田栄之進 串木野村上名
加藤彦七郎 串木野村下名 1367-1

坂元佐一郎外 2 串木野村串木野 57
有馬榮之進 串木野村上名 130
松田宗次外 1 串木野村上名
宮之原重外 1 串木野村下名 1324
奥田栄之進 串木野村上名
加藤彦七郎 串木野村下名 1367-1

坂元佐一郎外 2 串木野村串木野 57
有馬榮之進 串木野村上名 130
松田宗次外 1 串木野村上名
宮之原重外 1 串木野村下名 1324
奥田栄之進 串木野村上名
加藤彦七郎 串木野村下名 1367-1

坂元佐一郎外 2 串木野村串木野 57
有馬榮之進 串木野村上名 130
中尾ミツ 串木野村下名 10026
松田宗次外 1 串木野村上名
宮之原重外 1 串木野村下名 1324
奥田栄之進 串木野村上名
加藤彦七郎 串木野村下名 1367-1

坂元佐一郎外 2 串木野村串木野 57
有馬榮之進 串木野村上名 130
中尾ミツ 串木野村下名 10026
松田宗次外 1 串木野村上名
宮之原重外 1 串木野村下 1324

273 旭鉦山	同	26,450 坪	奥田栄之進 串木野村上名
<u>大正 15 年 8 月 20 日</u>			
66 上名鉦山	同	53,420 坪	坂元佐一郎外 2 串木野村串木野 57
99 敷ヶ迫鉦山	同	117,860 坪	有馬榮之進 串木野村上名 130
210 寶傳	同	26,850 坪	中尾ミツ 串木野村下名 10026
211 大峯	同	31,000 坪	竹田ひさ 福岡県鞍手郡直方町山部 210
221 大峯	同	31,870 坪	松田宗次外 1 串木野村上名
251 山木ヶ平鉦山	同	17,850 坪	宮之原重外 1 串木野村下名 1324
273 旭鉦山	同	26,450 坪	奥田栄之進 串木野村上名
<u>昭和 2 年 8 月 10 日</u>			
66 上名鉦山	同	53,420 坪	坂元佐一郎外 2 串木野村串木野 57
99 敷ヶ迫鉦山	同	117,860 坪	有馬榮之進 串木野村上名 130
210 寶傳	同	26,850 坪	中尾ミツ 串木野村下名 10026
211 大峯鉦山	同	31,000 坪	竹田ひさ 福岡県鞍手郡直方町山辺 210
221 大峯	同	31,870 坪	松田宗次外 1 串木野村上名
251 山木ヶ平鉦山	同	17,850 坪	宮之原重外 1 串木野村下名 1324
273 旭鉦山	同	26,450 坪	奥田栄之進 串木野村上名
168 下甌	鐵	121,000 坪	加藤彦七郎 串木野村下名 1367-1
<u>昭和 3 年 8 月 15 日</u>			
66 上名鉦山	同	53,420 坪	坂元佐一郎外 2 串木野村串木野 57
99 敷ヶ迫鉦山	同	117,860 坪	有馬榮之進 串木野村上名 130
210 寶傳	同	26,850 坪	中尾ミツ 串木野村下名 10026
211 大峯鉦山	同	31,000 坪	竹田ひさ 福岡県鞍手郡直方町山辺 210
221 大峯	同	31,870 坪	松田宗次外 1 串木野村上名
251 山木ヶ平鉦山	同	17,850 坪	宮之原重外 1 串木野村下名 1324
273 旭鉦山	同	26,450 坪	奥田栄之進 串木野村上名
168 下甌	鐵	121,000 坪	加藤彦七郎 串木野村下名 1367-1
<u>昭和 4 年 8 月 15 日</u>			
66 上名鉦山	同	53,420 坪	坂元佐一郎外 2 串木野村串木野 57
99 敷ヶ迫鉦山	同	117,860 坪	有馬榮之進 串木野村上名 130
210 寶傳	同	26,850 坪	中尾ミツ 串木野村下名 10026
211 大峯鉦山	同	31,000 坪	竹田ひさ 福岡県鞍手郡直方町山辺 210
221 大峯	同	31,870 坪	松田宗次外 1 串木野村上名
251 山木ヶ平鉦山	同	17,850 坪	宮之原重外 1 串木野村下名 1324

273 旭鉾山	同	26,450 坪	奥田栄之進 串木野村上名
168 下甑	鐵	121,000 坪	加藤彦七郎 串木野村下名 1367-1
303 藺牟田蒲生	金銀	139,000 坪	宮之原良平 串木野村下名 9570

昭和 5 年 8 月 15 日

66 上名鉾山	同	53,420 坪	坂元佐一郎外 2 串木野村串木野 57
99 敷ヶ迫鉾山	同	117,860 坪	有馬榮之進 串木野村上名 130
210 寶傳	同	26,850 坪	中尾ミツ 串木野村下名 10026
211 大峯鉾山	同	31,000 坪	竹田ひさ 福岡県鞍手郡直方町山部 210
221 大峯	同	31,870 坪	松田宗次外 1 串木野村上名
251 山木ヶ平鉾山	同	17,850 坪	宮之原重外 1 串木野村下名 1324
273 旭鉾山	同	26,450 坪	奥田栄之進 串木野村上名
168 下甑	鐵	121,000 坪	加藤彦七郎 串木野村下名 1367-1
303 藺牟田蒲生	金銀	139,000 坪	宮之原良平 串木野村下名 9570

昭和 6 年 8 月 15 日

66 上名鉾山	同	53,420 坪	坂元佐一郎外 2 串木野村串木野 57
99 敷ヶ迫鉾山	同	117,860 坪	有馬榮之進 串木野村上名 130
210 寶傳	同	26,850 坪	中尾ミツ 串木野村下名 10026
211 大峯鉾山	同	31,000 坪	竹田ひさ 福岡県直方市山部 210
221 大峯	同	31,870 坪	松田宗次外 1 串木野村上名
251 山木ヶ平鉾山	同	17,850 坪	宮之原重外 1 串木野村下名 1324
168 下甑	鐵	121,000 坪	加藤彦七郎 串木野村下名 1367-1
303 藺牟田蒲生	金銀	139,000 坪	宮之原良平 串木野村下名 9570

昭和 7 年 8 月 15 日

66 上名鉾山	同	53,420 坪	坂元佐一郎外 2 串木野村串木野 57
99 敷ヶ迫鉾山	同	117,860 坪	有馬榮之進 串木野村上名 130
210 寶傳	同	26,850 坪	中尾ミツ 串木野村下名 10026
211 大峯鉾山	同	31,000 坪	竹田ひさ 福岡県直方市山部 210
221 大峯	同	31,870 坪	松田宗次外 1 串木野村上名
251 山木ヶ平鉾山	同	17,850 坪	宮之原重外 1 串木野村下名 1324
168 下甑	鐵	118,800 坪	加藤彦七郎 串木野村下名 1367-1
303 藺牟田蒲生	金銀	139,000 坪	宮之原良平 串木野村下名 9570

昭和 8 年 8 月 15 日

66 上名鉾山	同	53,420 坪	坂元佐一郎外 2 串木野村串木野 57
99 敷ヶ迫鉾山	同	117,860 坪	有馬榮之進 串木野村上名 130

210 寶傳	同	26,850 坪	佐藤三太郎	串木野村下名 13135
211 大峯鉦山	同	31,000 坪	竹田ひさ	福岡県直方市山部 210
221 大峯	同	31,870 坪	松田宗次外 1	串木野村上名
251 山木ヶ平鉦山	同	17,850 坪	宮之原重外 1	串木野村下名 1324
168 下甑	鐵	118,800 坪	加藤彦七郎	串木野村下名 1367-1
303 藺牟田蒲生	金銀	139,000 坪	宮之原良平	串木野村下名 9570

昭和 9 年 8 月 15 日

66 上名鉦山	同	53,420 坪	坂元佐一郎外 2	串木野村串木野 57
99 敷ヶ迫鉦山	同	117,860 坪	有馬榮之進	串木野村上名 130
210 寶傳	同	26,850 坪	佐藤三太郎	串木野村下名 13135
211 大峯鉦山	同	31,000 坪	竹田ひさ	福岡県直方市山部 210
221 大峯	同	31,870 坪	松田宗次外 1	串木野村上名
251 山木ヶ平鉦山	同	17,850 坪	宮之原重外 1	串木野村下名 1324
168 下甑	鐵	121,000 坪	加藤彦七郎	串木野村下名 1367-1
303 藺牟田蒲生	金銀	139,000 坪	宮之原良平	串木野村下名 9570

昭和 10 年 8 月 15 日

66 上名鉦山	同	53,420 坪	坂元佐一郎外 2	串木野村串木野 57
99 敷ヶ迫鉦山	同	117,860 坪	有馬榮之進	串木野村上名 130
210 寶傳	同	26,850 坪	佐藤三太郎	串木野村下名 13135
211 大峯鉦山	同	31,000 坪	竹田ひさ	福岡県直方市山部 210
221 大峯	同	31,870 坪	松田宗次外 1	串木野村上名
251 山木ヶ平鉦山	同	17,850 坪	宮之原重	串木野村下名 1324
168 下甑	鐵	118,800 坪	肝付篤志	串木野村下名 1374
303 藺牟田蒲生	金銀	139,000 坪	宮之原良平	串木野村下名 9570

昭和 11 年 8 月 15 日

66 上名鉦山	同	53,420 坪	鹿島将輝外 1	串木野町上名 6721
99 敷ヶ迫鉦山	同	117,860 坪	有馬榮之進	串木野村上名 130
210 寶傳	同	26,850 坪	三井鉦山株	東京市日本橋区室町 2-1-1
211 大峯鉦山	同	31,000 坪	三井鉦山株	東京市日本橋区室町 2-1-1
221 大峯	同	31,870 坪	松田宗次外 1	串木野町上名
251 山木ヶ平鉦山	同	17,850 坪	三井鉦山株	東京市日本橋区室町 2-1-1
168 下甑	鐵	118,800 坪	肝付篤志	串木野町下名 1374
303 藺牟田蒲生	金銀	139,000 坪	宮之原良平	串木野町下名 9570

昭和 12 年 8 月 15 日

66 上名鉾山	同	53,420 坪	三井鉾山株	東京市日本橋区室町 2-1-1
99 敷ヶ迫鉾山	同	117,860 坪	三井鉾山株	東京市日本橋区室町 2-1-1
210 寶傳	同	26,850 坪	三井鉾山株	東京市日本橋区室町 2-1-1
211 大峯鉾山	同	31,000 坪	三井鉾山株	東京市日本橋区室町 2-1-1
221 大峯	同	31,870 坪	三井鉾山株	東京市日本橋区室町 2-1-1
251 山木ヶ平鉾山	同	17,850 坪	三井鉾山株	東京市日本橋区室町 2-1-1
168 下甑	鐵	118,800 坪	肝付篤志	串木野町下名 1374
303 藺牟田蒲生	金銀	139,000 坪	折田正雄外 1	鹿児島市下龍尾町 37

昭和 13 年 8 月 15 日

269 枕崎桜ヶ谷	金銀	18,342 坪	宮之原重外 1	串木野町下名 1324
66・99・210・211・221・251			三井鉾山株	東京市日本橋区室町 2-1-1
168 下甑	鐵	118,800 坪	肝付篤志	串木野町下名 1374
303 藺牟田蒲生	金銀	139,000 坪	折田正雄外 1	鹿児島市下龍尾町 37

昭和 14 年 10 月 29 日

269 枕崎桜ヶ谷	金銀	18,342 坪	宮之原重外 1	串木野町下名 1324
168 下甑	鐵	118,800 坪	肝付篤志	串木野町下名 1374
303 藺牟田蒲生	金銀	139,000 坪	折田正雄外 1	鹿児島市下龍尾町 37

昭和 15 年 10 月 23 日

168 下甑	鐵	118,800 坪	肝付篤志	串木野町下名 1374
--------	---	-----------	------	-------------

昭和 16 年 9 月 27 日

168 下甑	鐵	118,800 坪	肝付篤志	串木野町下名 1374
--------	---	-----------	------	-------------

昭和 17 年 10 月 20 日

168 下甑	鐵	118,800 坪	肝付篤志	串木野町下名 1374
--------	---	-----------	------	-------------

昭和 18 年 11 月 30 日

168 下甑	鐵	118,800 坪	肝付篤志	串木野町下名 1374
--------	---	-----------	------	-------------

(桂市之助 1911 『福岡鉾山監督署管内鉾区一覽』 福岡鉾山監督署、

” 1912 『 ” 』 ” 、

” 1913 『福岡鉾務署管内鉾区一覽』 福岡鉾務署編纂、

” 1914 『 ” 』 ” 、

” 1915 『福岡鉾務署管内鉾区一覽』 福岡鉾務署、

” 1916 『 ” 』 ” 、

三田尾松太郎 1917 『 ” 』 農商務省鉾山局編纂、

” 1918 『 ” 』 ” 、

” 1919 『 ” 』 ” 、

" 1920 『 " 』 " 、
 " 1921 『 " 』 " 、
 " 1922 『 " 』 " 、
 納屋久 1923 『 " 』 福岡鉱務署編纂、
 " 1924 『 " 』 " 、
 小野彌之助 1925 『福岡鉱山監督局管内鉱区一覽』 福岡鉱山監督局編纂、
 納屋久 1926 『 " 』 " 、
 " 1927 『 " 』 " 、
 " 1928 『 " 』 " 、
 " 1929 『 " 』 " 、
 " 1930 『 " 』 " 、
 " 1931 『 " 』 " 、
 石井利吉 1932 『 " 』 " 、
 " 1933 『 " 』 " 、
 納屋久 1934 『 " 』 " 、
 " 1935 『 " 』 " 、
 " 1936 『 " 』 " 、
 " 1937 『 " 』 " 、
 " 1938 『 " 』 " 、
 " 1939 『 " 』 " 、
 " 1940 『 " 』 " 、
 " 1941 『 " 』 " 、
 " 1942 『 " 』 " 、
 " 1943 『 " 』 ")

はじめに

定穀が金山の経営に乗り出すのは、明治 25 年 11 月 14 日からです。しかし、どういう訳で金山の経営を始めるかという話は何 1 つ残っていません。

想像すると、定穀が日記を書く明治 17 年ごろからは、蚕が中心です。士族(武士)は、武士としての仕事を失くし、収入がなくなって、生活が苦しかったため、鹿児島県が、彼らを救うために、養蚕の仕事で自活の道を開くことを勧めました。定穀も妹のシモ(霜)を蚕の講習所(学校)に入れて、技術を習わせ、自分も蚕を育てることにしました。

麓には、自稼山に関係する人が多く、金山の話や実際に水車や水車への水路などで自分の土地内を通るので、どうしても金山に触れないわけにはいけなかったこともあります。自然に金山のことが目についたことでしょう。

明治 19 年 12 月 18 日、芹ヶ野金山へ島津^{ただよし}忠義が来ています。同 20 年から自稼山が始まります。

同 20 年 4 月に、定穀は水車用板を使用人に取りに行かせたり、水車溝を造りに使用人が行っています。

同 22 年 1 月には踏臼^{ふみうす}を作っています。金山では鉱石を搗いて粉にするものに使いました。

同 22 年 3 月には定穀の土地、芹ヶ野の前馬場の田を水車地に貸してくれというので、1 年に貸し料を 4 円で貸すことに決めています。また、同じ土地に水車を作ります。

同 22 年 11 月には、金山のある人が、野下の田に掛かる井手^{いで}(用水路)から水を引き、水車を作るということで、承諾書に印鑑を押しています。このように、水車や金山に関係することがどんどん増えてきます。

同 24 年には本家筋の内村(内村郷中)の入来氏も自稼山に参加し、水車が完成して、その祝い^{いわ}まであり、出席しています。

(ア)入来定穀、いよいよ自稼山に参入(準備から最初の水車を動かすまで。

明治 26 年)

このように、自稼山のことを見たり聞いたりして、自然に金山を掘る夢が実現したのでしょう。明治 25 年 11 月 14 日に、芹ヶ野の前馬場の田を測量して、借区願いを出すことになります。戸切川(金山川)へ水車を造ると同時

に、福岡鉱山監督署へ鉱山借区願書を出しています。水車の心木(心棒)にする松を浜ヶ城へ探しに行き、松の木3本を21円10銭(211,000円)で買っています。試掘地の境界に杭を打ち、水車道具、杵先を作り、鶴ハシ・ゲンノウ(カナヅチ)・前カキを作ります。親戚の宮之原重が鉱山買入れの金がないので、金を貸してくれ、というので、金禄公債の500円券を貸し、それを担保にします。

同26年1月7日から戸切川に水車造りを始め、柱を削り、木屋も建てます。

1月13日には、県庁の鉱山監督署へ行き、試掘願書がなぜ却下されたかを問うと、願書はまだ取調べ中であるとの返事で、早くしてくれと頼んでいます。まだ、正式な許可がおりる前から着々と準備をしています。20日には、県庁から水車場検査に来て、図面の訂正をして、すぐ差出しています。23日には、龍園新兵衛と試掘の境界を決め、杭を立て、水車の心木を取り付けていますので、あとは杵や臼、屋根を付けると、でき上がりになります。27日に試掘願書の認可書が来ました。30日に水車は大体でき上がり。そこで、鉱石1駄分を試運転したところ、好結果だったので、安心したのでしょうか、大工5人と人夫7人で成就祝いをしています。

鉱石採りを始め、馬や牛で鉱石を石置場まで運んで鉱石を広げて干しています。2月9日から13日までの4日分の床揚げをして、ユリ鉢で金を取り出しています。床揚げというのは、水車の搗き臼で粉にした鉱石を取り出すことです。

絞り金は10匁3分あったようです。絞っていますから、水銀アマルガムです。

2月19日には混合樽の台を造ります。混合樽とは混汞樽のことです。浜桶も作ります。浜桶はたぶん塩を入れる桶でしょう。使って劣化した水銀を活性化するために、塩や梅酢などを使ったと思われます。

2月25日には4昼夜分を絞って7匁です。水が枯れていたからです。水銀を85匁も使い、水銀の減り方がひどい、と定穀はボヤいています。まだなれないからでしょう。また、金目ヶ宇都へ鉱脈を見に行き、試験をしますが上皮なのに金分が少ない、と言っています。上皮とは上鑪という意味で、上等な鉱脈ということです。

2月28日、裏木から水頭まで試掘の測量をします。試掘図を借りて図面調製をします。3月1日には、試掘願書を仕上げます。2日は床揚げで、10匁3分ありました。4～5日置きに床揚げをしています。

3日は西岳の前平を試掘し、出願するつもりで出かけます。4日は西岳試掘地の図面と願書を書いて、書留で出します。また、混合樽に金棒(鉄の心棒)を通し、回転できるようになりました。5日も草谷から西岳まで試掘願地の測量に行くのですが、よくわからないので、児玉小源太の使用人に尋ねて図面を描きます。水車までの道造りや混合樽の樋造りもします。ここでの樋は華粉や水銀を入れる樋でしょう。8日の床揚げは19匁4分。13日、14匁。18日、13匁。23日、16匁5分。31日、ユリ鉢でユリ、水銀は800匁強を絞り、金26匁4分ありました。絞り金は、搗き初めが12月9日の最初から10回揚げて、118匁。水銀は1貫280匁使っています。

4月11日、木場茶屋から水銀4斤、硝酸2斤などを買いました。

5~9月は蚕が忙しい。6月12日、川内鍋屋が来て、杵先の鉄を売り込みに来ます。川内鍋屋は新原鍋屋のことです。14日は水銀を498匁4分入れています。樽に入れているのだらうと思います。4~5月の絞り金と6月15日までの樽絞り分とを水銀焼き離しをしました。ルツボで焼いて水銀を蒸発させたのでしょ。

6月30日には、杵修繕で、杵先なども替えています。杵は6か月ちょっとでダメになるようです。3日かかって修繕しました。川内鍋屋へ10日後、鉄の杵先5丁代を払っています。8月24日には、杵になる木を買います。堅い木で、ユス4本、櫛1本を選んでいきます。26日には、水銀と硝酸を買っています。4月11日に買ってからです、4か月余経っています。

前年の12月9日から8月まで、各月の集計があり、全部で697匁3分採れたとあります。

9月6日には、早馬へ行き、水車場の見積りをし、翌日は武田勇蔵方へ行き、承諾書をもらうようにしています。12日には、水車の杵と杵の修繕をしています。

10月4日、武田勇蔵が早馬水車場の承諾書に捺印したものを持って来ます。児玉小源太が鹿児島に行くので、35銭を渡して鉛の買入れを頼んでいます。鉛は焼いて純金にするときに使います。14日、大風(台風)が来て、粟・ソバ・稲など作物は大損害。水車は、昨晚から浸水して回らない。水車の溝に土が流れ込み、床場の泥揚げをしています。19日、早馬の水車場願書を出します。20日に水車場の溝まで全部整備が済みました。台風のため1週間、操業停止でした。25~26日には、ブリ(ブイ)と砂洗い道具(不明)を竹細工師に頼んで作っています。27日は、混合樽の帯を入れ直しています。

11月9日午後8時ごろ、水車が失火、焼け残りは水車と心木床回りで、そ

の他は役に立ちません。原因はランプから火が移ったと番人から報告がありました。翌日は巡査が検視(検査)するので、実印を持って来い、という通知があり、午前 10 時過ぎに行き、検視書へ印鑑をつき、午後 1 時過ぎに終わりました。水車と心木と床回りはよくて、杵などは半焼けで使い物になりません。翌 11 日は片付けをしました。12 日は、材木などが届いたが、松材 2 本が届いていなくて、翌 13 日は杵の木を割って作り、14 日に水車を造り始め、17 日から鉦石搗き方が始まりました。27 日には分析をします。28 日、水車営業届を出しています。たぶん、役場に出したのでしょう。29 日、野下へ兎狩りに行き、兎を蒸気水車の上へ追い出した、……という記事がありますので、島津家の搗鉦所とうこうしよのことでしょう。12 月 1 日にも、蒸気機械の上、裏山とどろきで兎 1 羽を獲ったとあります。

12 月 6 日、長卯七郎方へ行き、水車の名前替えて、印鑑を押してもらっています。卯七郎には定穀の妹霜(しも)が嫁いでいます。

12 月 13 日は岡の試掘地へ行き、採鉦して試験しましたが、よくありません。もう 1 度掘ってみることにします。その結果は記事に出てないので、ダメだったのでしょう。17 日、鉦石採り用のショケ(ザル)を作っています。21 日には試掘願書を藤崎長次郎に頼み、翌 22 日、芹ヶ野試掘継願書を郵便書留で送っています。25 日、水車の溝を修繕します。

鉦石を採ってくるのはしょっちゅうで、その中心は使用人です。露天掘りか坑内から掘り出しているのかはよくわかりませんが、露天掘りが多かったようです。月の半分は使用人か雇人 2~3 人一緒に行って採ってきます。鉦石がないと水車が回っても無駄になるからです。水車は 24 時間回っています。そこで、水車番がいて、見守っています。

(イ) 自稼山まっしぐら(明治 27 年)

同 27 年 1 月 5 日には、宮之原重が鉦山を買入れるために銀行からの借金のため、抵当にする公債を貸してくれというので、金禄公債 500 円券を渡します。娘婿ですから。また、この日に採鉦用のツルハシ・ゲンノウ(石当)・前かきができてきます。10 日が床揚げの日だったので、行ってみると、ユリ鉢を栗山戸助へ貸していたので、中止しました。ユル人を川子かわこと言っています。川の中で仕事をしていたからでしょう。21 日には、今屋四右衛門から水車地売渡証が来たので、3 円渡しています。その登記を 26 日に済ませました。25 日、村役場へ水車製錬高届を出します。29 日、定穀が児玉小源太おおかわうちの大川内の田へ水車建設をしたい、と頼むときに、大藪平助も同じ相談で来ていました。

平助から定穀へ「水車建設をするのかしないのか」と問われました。「まだ試掘もせず、鉱石の善悪も判らないので、水車は建てるつもりだが、自分へ貸すか貸さないかは、小源太の胸にあるので、平助とどちらか利益のある方へ貸すだろう」と答えました。小源太は平助とも話合い、水車地も実際に見ているように伺われ、欲に目のない世の中であるので、わざとそのように答えておいた、と書いています。

2月8日、金吹きで吹いたのに、分析鉢がないので、分析はしませんでした。11日、奥田氏から分析鉢を借り、翌12日は1日中分析をしましたが、よくできず、し直さなくてはならないということで、まだまだ慣れてないようです。13日から早馬水車建設にかかり、23日には水車金物は全部でき(金山の鍛冶屋で6円28銭)、24日、心木揚げ、3月22日、井手堰を仕上げ、溝ができ、翌23日に搗き始め、床夫(水車番)が泊り込み、24日で成就。水車大工や溝掘りなどの仕明人合同で祝いをします。大工の久木山新平には反物1反、他の大工には手拭い1本をやりました。約1か月半かかっています。その間、2月22～24日、岡・轟木谷・草谷の奥田氏山への探鉱、25日はどこかわからない場所の探鉱に行っています。

3月11～12日に奥田栄之進が分析をしてくれました。まだ定穀は自信がないようです。20日には、定穀が宮之原重に水銀を配ってくれと依頼、その代金40円13銭を受取りました。25日には釜小屋を造り、悪い杵の取替えなどを行っています。たぶん、岩坂水車のことでしょう。29日、宮之原重が硝酸を配りました。

4月3日、分析をしました。自分でしているようです。17日、岩坂水車の釜小屋ができました。30日、藤崎長次郎が役場へ辞表を出してきました。長次郎は、願書や図面作成、測量などができる優れた人なので、入来家の専属にしました。

5月10～14日にかけて、草谷の試掘をし、17日には草谷と岡試掘願継続願書を書留で出します。26日、古穴を見つけ出した、と言いますが、場所は書いていません。

6月12日、トラブル発生。定穀所有の郷田字の田の中を金山の某が水車用の溝を断りなく掘ったと謝りに来て、「今日も仕事をしているので、仕事をさせてくれ」というので、「仕事を止めよというのではない、私の地所を掘るのは止めよ。元のようにしなさい」と言うと、「元のようにします」と答えた。次の13日、謝りに来て、溝だけでなく、道も通すつもりだ、と言い、14日承諾し、損料を決めることにしました。15日、長次郎は西岳試掘図を写しま

した。19日、山の神祭で、鉦夫や手子の常などを連れ、島平へ行き、中島の鼻で吹き方をしてから祝いをしました。吹き方はルツボにアマルガムを入れて水銀を飛ばし、金銀の合金にしたことでしょうか。手子の常というのは12～3歳の女の子です。20日、湊郵便局から西岳試掘願書を書留で出しました。27日、混合樽の心木替えと杵の修繕をしました。

7月3日、御田踊り(棒踊)があったので、使用人も見に行きました。11日、硝酸を使って分析しました。19日、岡の探鉦、21日、岡試掘探鉦、22日、西岳試掘地へ探鉦、長次郎は試掘地の製図をしました。23日、加七郎と与次が屋久島へ金鉦試掘の売り物があるので話し合い、場合によっては買入れることにしました。けれども、その後立消えになっています。26日～8月2日まで岡試掘、岡試掘探鉦場、採鉦場に行って、2日は初めて破裂を用いた、とあります。破裂は発破のことで、50cmほどの穴を掘り、中に火薬を入れ、爆破して鉦石を砕くことです。そのため、8月8日に、破裂ノミ造りを自分でしています。長いノミです。

8月6日、芹ヶ野試掘図を長次郎が描きました。9日には、吉武^{やぐま}熊氏の試掘製図を長次郎が描いています。17日、定穀が長次郎に川内の片野泰助に測量の仕方を習うように命じ、18日に習い、20日に測量の稽古、21日は屋敷を測量し、製図をしました。

9月7日、水車へ行き、ドベ砂片づけをします。15日、長次郎^{およ}助が荒川に水車を建設させてくれ、との相談で、聞き届けます。戸切川の古水車1台を定穀が移設するか、次郎助が買うことにしました。また、加七郎が来て、種子島鉦山の話聞きます。16～21日の間に戸切川の水車を解いて崩しました。19～27日、混合樽造り。21日には混合樽用のボート(ボルト)を3本、中馬治平から買います。27日、シラベ皮(松の一種の皮、松脂が多い、杵の掛木にはって滑りをよくするため)のことで川内へ、などと着々水車造りは進みます。また、シラベ皮代用の^{おなわ}苧縄(麻縄)作りもしています。31日も同様。29日、杵輪と杵杵締め用のボート(ボルト)が川内の鶴田鍛冶屋から来ました。28～30日、浜桶(塩桶)を造ります。29日、^{いずるは}出葉の谷へ鉦脈探しです。滝ツボ(水車から出てくる水を落とす所)を作ります。元水車へ詰めた砂利に水が掛り、カマツチも流れ、水車は運転できなくなりました。それで、踏臼へ鉦石を詰め、人力で鉦石砕きをしました。岩坂の水車造りを9月29日～11月21日まで約2か月かかりました。川内の大工に頼みましたが、池下辰治たち(他3人)は癖の悪い大工で、高額の前借りや仕事に来なかつたりしません。10月6日には心木揚げをしているのに、13日には、池下辰治は何かの

嫌疑で鹿児島へ拘束されます。18日には長次郎を面会にやり、辰治の様子を見に鹿児島へ行きます。21日に帰り、辰治とは面会できなかった、と報告を受けます。30日には、水車の運転のことで辰治の弟子たちと口論(口ゲンカ)を始め、定穀が出向いて仲裁をしますが、帰ってしまう。それで、大工喜三太と手伝い3人で、心木をはめ、大車をはめました。他に太鼓巻もあります。

31日、福岡鉱山監督署から岡試掘境界のことで、村役場へ集合とのハガキが来たので、行きました。その後、金山峠の茶屋に行きました。そこから実地測量を開始しましたが、定穀の分は、今日中に済まないのので、田尻善右衛門などとの境界に異常がなければ、書面で申し出せと言われます。帰りに境界関係の吉武良太郎と大藪平助の立会いで、異変がないと確認されたので、同意を得ました。

11月2日、池下辰治の妻の母が来て、池下から買ったシラベ皮代を私が代りに払ったので、私へ皮代16円と他に4円ほどの合計20円だけ貸してくれ、と言います。金の都合が悪く、15日ほど待ってくれ、辰治も出獄するので、わかってくるから、と答え、払いませんでした。3日には、長次郎が川内の池下家へ行き、皮代の件を話してきました。

3日は天長節^{てんちようまつ}なので、大工などの親睦のため、鶏の料理で飲み方をしました。6日は杵立て、屋根も南北だけは済みました。7日、辰治は、重禁錮6か月、罰金12円になりました。17日、荒川水車場の試験をしました。18日、川内の皮細工人が池下家内から皮代10円を貸してくれ、と言われて来た、皮は返してくれというので、皮代はすでに払っているから、と答えました。19日、樽台を据え付けるために土持ちをする。樋^との修繕をし、米搗き杵などを立てるけれど、動かなかった。20日、雨が降り、昨日まで回らなかった岩坂水車も回り始めました。松脂^{まつやに}をシラベ皮に付けたところ、20丁全部回転して好結果でした。21日、樽据え付け、成就祝いをしました。22日、米搗き場を造りました。23日、岩坂水車の混合樽の流し樋造り、早馬水車の混合樽据え付けをしました(24日まで)。川内のシラベ皮細工人の古賀喜代吉と辰治の妻の母がシラベ皮2筋持ってきて、手間料2筋分14円42銭を2人へ渡したところ、辰治妻母が金は受取って帰りました。27日、西水引村砂岳の上村某が鉱石を持って来て、仲間で試掘したいと言うので、明日、長次郎が測量することになりました。京泊へ行き、試掘願には、利益配分を上村親子に5割、甥の雇人に1割、定穀4割として、測量器を持って行きます。しかし、鉱石が思わしくないのので、試掘願いは出さないことにしました。

12月1日、岩坂水車は苧縄が切れていました。3日、長次郎は種子島へ調

査、25日帰宅。報告がないので、ダメだったのでしょうか。23日、試掘地の占いなどをしてもらうために、冠岳の田代氏(神官)の所へ息子の重彦をやりました。28日、京泊の網津^{あうづ}試掘願書を出しました。29日、西岳試掘は甑島の橋口某が先願した、期限内に不頓着で、今になり「臍^{はら}を噛む」も及ばず、草谷試掘も松田宗次に先取りされました。30日、岡試掘願書を出しました。

27年のまとめがあって、42歳で年ガラが悪いとか、水車の造り替えに400円ぐらいを捨てた、種子島の鉾山を見にやったが、よくない。西岳・草谷・岡の試掘は期限を過ぎたので、西岳・草谷は松田宗次に奪われ、ようやく岡だけが残った、風邪を引いて他人に先んじられた、とボヤいています。

(ウ) 28年一芹ヶ野以外の鉾山へ進出

1月4日、試掘地一覧表を借ります。昨年末は油断している間に、他人に鉾区を取られてしまったので、試掘していないところを探すつもりかもしれませんが。7日、網津の鉾石がある山へ行きますが、見込みがありません。砂岳^{すなだけ}の採鉾場へ行き、掘って、ゴキ掛けをしますが金分は出ませんでした。9日、市来湊警察署から荒川水車の建設願について尋問され、溝の下のため、地主の承諾書を取って出すことを承知しました。18日、田尻善右衛門と他3人出資の借区を買ってくれと頼まれます。全山1,500円を1,400円に見積り、自分1人分4分の1を350円でどうか、と言いますが、確答はしません。長次郎は宮之原氏の借区(境)界調査、他使用人2人は金目^{きんめ}ヶ宇都の試掘をしています。翌19日、岡試掘地へ行きます。長静雄殿の所有山なので、試掘をすると許可をもらっておきました。23日、入来村副田の山下兼貞殿が借金に来て、定穀が300円を貸します。抵当に金銀鉾の特許証を受取ります。28日、幹樋^{みきひ}の掛け替え、岩坂の杵を替えます。30日、有馬孝治が所有の鉾山を売りに来ました。定穀が鉾山を買おうという姿勢が見えているからでしょう。また、定穀の妹カノが考治の妻です。2月2日には長次郎が有馬鉾山の買入れを交渉し、3日は本人が来ています。しかし、交渉がまとまった気配はありません。

2月1日、清太郎は早馬水車へ鉾石10箱ほど運んでいます。4日、長次郎は宮之原重の官地借地願書の保証人の印を、留守中かってに取出し、捺印しています。6日、使用人徳の父の喜三右衛門が徳の給料を決めに来ました。父親にいくらにしたらよいかと尋ねると、年間8円と言うので、その通りにし、年末に辞めると言わないように言いつけ、承知させました。

7日、長次郎は市来の松山氏へ試掘地測量に行きます。翌8日、松山氏と

宮之原重と金山の角石^{かてし}へ行き、坑内の実測をしました。9日、長次郎は市来遠見番岡試掘実測図を描き、松山氏へ渡します。吉武三次郎は長次郎へ測量の教授に来ました。11日、有馬孝治の茅野などの借区を実際に見て、帰りに岡試掘をひと通り見ました。17日、宮之原重へ市来試掘仲間負担金1円45銭を渡しました。24日、川内慶田猪之助の所へ床夫の直曠に比重計を借りに行かせました。26日～3月2日、早馬水車の崎橋の修繕、3日、心木が壊れ、今晚は水を止め、昼間だけ回すことにします。あちこち修繕が絶えません。4日、水銀焼き離しをし、6日、銀の吹き方をしました。

4月1日、金次郎は京泊試掘へ行きました。4日、山口氏へ純金13匁8分を托し、売ってくれるように頼みました。11日、長次郎と金次郎は岡試掘山へ行き、14日、岡試掘地を本格的に掘ることにしました。17日、京泊へ長次郎と中馬清八が行き、鉍石の良否を鑑定しましたが、見込みがないので断念しました。20日、岡試掘の試し摺りをすると、金分がなかったので、掘るのを止めました。

4月29日、指宿の今和泉の試掘地買入れの調査に行かせます。5月3日、鉍石を持って帰りました。中馬清八が鑑定をします(4日)。今和泉鉍山を買入れるつもりで、長次郎・宮之原重・中馬清八と今和泉へ行き(6日)、今和泉鉍山を750円で買う約束をして、10日に帰ります。15日、長次郎が今和泉に行き、鉍山代金400円のうち、200円を持たせました。銀行から200円を借り、抵当は公債100円券3枚、300円でした。今和泉鉍山特許証書図を描き(30日)、今和泉鉍山特許出願を向田郵便局で出して(6月5日)、所有することになりました。

5月11日、入来たづ殿が、養子の加七郎の借金が多くなったので、堂徳田字の水車を敷地と田地まで売るつもりだ、と言います。定穀に引受けてくれとの相談で、資力の及ぶ限り引受ける、と答えました。

6月11日、水が出て、水車は休み。14日、長次郎へ4・5・6月分15円を払いました。月5円は当時としては高い給料です。当時の県庁臨時職員と同じ給料です。

22日、入来村副田の山下兼貞氏が定穀へ預けていた鉍山の特許証を写して、売却のため川内へ行きました。

29～7月1日まで、芹ヶ野前馬場の石採り跡を開墾して、農地にしました。

7月9日、薩摩山蒸気器械の見物に行きました。島津氏の搗鉍所などを見に行ったのでしょうか。24日、夜明けから風が吹き、水車はあちこち壊れ、午後から搗くのは止めました。30日に水車破損の修理をしています。

8月17日、出し牛(山中から木を運ぶ牛、ここでは鉱石の箱を運んだ)の休助へ60箱分の賃金を1円74銭(19掛=19回か)払います。1箱で1銭5厘ほどでしょうか。20日、採鉱賃を3名に3円6銭支払いました。1人につき1円2銭です。24日、床夫畷市の給料は年間18円です。1か月1円50銭払っていると思われます。27日、池田鉱山用の道具造りに島平の鍛冶屋へ、9月1日には取りに行っています。

9月1日、川内平島の川畑奎太郎は前から鉱石採りに来ていましたので、長次郎が平島を辞めて、こちらに奉公するよう交渉をします。平島で年4円だったので、ここでは4円50銭で、と長次郎が決めたので、月割で払うことにしました。7日、水が多くて水車が回りませんでした。15日には、逆に水が少なく、片方の杵も水が弱いので、明日から混合樽だけ回すことにしました。8日、福岡鉱山監督署から今和泉鉱山願地は他と重なっていないかを申し出よ、と連絡が来ました。9月21日、今和泉鉱山の図面を描いて、次の日、湊郵便局から出します。

10月4日、早馬の井手堰を見に行きます。井手の調子が悪いのでしょうか。8日、早馬水車は搗き始めます。5~7日まで水車は動かなかったのでしょうか。

24日、アラビヤゴムの粉末を持って来ました。ノリにして、シラベ皮をはるのでしょうか。25日、芹ヶ野へ穴ランプを買いに行きます。坑内用の石油ランプでしょう。27日、古混合樽が崩れた、というので、混合樽も修理が必要になって来ています。29日は水車も修理しています。

11月6日、「穎娃行き」は朝10時、地藏角(天文館)から馬車で喜入町まで(馬車賃25銭)。五位野で昼食。荷物持ちを35銭で雇い、荒平を越え、知覧街道に出て、夜、穎娃の牧之内を通り、提灯を買い、案内人に10銭を出し、9時ごろ谷場の長次郎の宿泊所へ着きました。翌朝、宮之原重・長次郎・畷次郎と2か所の採鉱場を見て、開鉱すると言って、宿で昼食、奥田直之助もいっしょに水車場を見積り、位置を決めて宿へ帰りました。翌8日、穎娃村長の阿野甚五郎殿へ水車を建設するときはお世話になることもあるので、よろしく頼むと挨拶をし、奥田氏と別れました。奥田氏は知覧へまた行きました。9日、中馬正兵衛・宮之原重・定穀3人で谷場を出発しますが、定穀は足痛で馬35銭に乗り、喜入町まで。本日は定穀の特許地の脇を越え、今和泉の野川に出て、喜入町へ12時ごろ着き、12銭の馬車で鹿児島島へ行き、宿泊しました。10日、今和泉の前の持ち主、中馬正兵衛・道上岩右衛門・岡熊次郎の3人が来て、山代金の不足代350円を払って終り、領収書を受け取りました。前に取り交した約定証の印をお互いに切取って、以後関係がないよう

にしました。15日、今和泉池田鉦山鉦区税7円80銭の半分の3円90銭を出し、18日、知覧収税部へ納付するようになりました。22日、宮之原重は池田鉦山総代届を描いて持って来たので、印を押して渡しました。

11月26日、木挽きが水車の杵の材木を割って(ノコで丸太を建てに引いて)柱にしました。29日～12月1日まで3日間、水車の修理です。

12月11日、山木ヶ平鉦山を所有している中尾の富宿庄右衛門が定穀と仲間になり、5人持ちで探鉦費240円を出してくれ、と言うので、それはあんまりだ、と断った。だが、……。

(エ) だんだん手に負えなくなってくる—明治29年

1月3日、長次郎を明日今和泉へいかせるので、宮之原氏と水車場の件を話し合い、長次郎へ30円渡しました。2月22日、今和泉鉦山を買いたい人が「売る気があるか」と尋ねるので、「値段によっては売ってもよい」と答えます。

4日、山木ヶ平の富宿庄右衛門が所有する部分を330円で買ってこれ、というのを315円で買い、15日から定穀所有にする取決めをし、翌5日に掘り口を実際に見に行きました。15日、山木ヶ平鉦区売渡書を受取り、23日に315円の内、257円と残りは米で明日渡すことにしました。翌24日は祝いに庄右衛門が牛肉とイカ・酒を持参し、飲み方をしました。実際に米を渡したのは2月5日で12日間も遅れ、残金58円分として20俵渡しています。しかし、登記替えはまだ行われていません。23～26日までに長次郎が山木ヶ平の坑内実測図を作り、27日に出しました。3月15日、星原仲次郎が山木ヶ平鉦山名義書換願書を書いて、川内ですすために、定穀は登記印紙代2円50銭と書留料5銭を渡しました。同30日、山木ヶ平名面替願書を湊郵便局から書留で出しました。これで山木ヶ平が1つにまとまりました。

1月10日、平の口の甚五へ早馬水車へ3回・岩坂水車へ5回の運鉦荷車賃1円79銭を払いました。同14日、水車を持っている人へ水車規則のことを蚕室で集会をする。多人数集まりました。水車規則運動費は20銭です。2月12日、芹ヶ野採鉦夫3人に11日分の賃金3円30銭渡します。1日1人、10銭です。同21日、水車場の営業札を自分で書いて、役場の証明をもらいました。

3月4日、早馬水車の先日替えた杵が折れ、6日には同水車の太鼓板を川内の矢野木屋へ注文。15日早馬水車の修繕。16日は岩坂水車も修繕しました。4月18日、床夫の直叡が筑後の奥田氏所有の鉦山へ行きたいと暇を申し出ま

した。

4月30日、早馬水車は本日までで休むことにしました。

5月26日、緒方巡査は鉾山特許地が上名にどのくらいあるか、と尋ねに来ました。岩坂・早馬水車を私の名前に預け替えの手続きをしてくれ、と長次郎に頼みました。

6月11日、長次郎は今和泉鉾山売払いの件で宮之原重と来たので、1800円の一時受取りであれば売払うことに決め、一切を委任しました。同14日、1000円のうち、名面替えを済まして400円、6か月経って、山の見込みがあれば400円払うという約定証が長次郎から来ました。その後、宮之原重と話し合い、亮介氏とも話し合いの上、助五郎を今和泉へ遣わすことを決めました。同27日、宮之原重は今和泉鉾山代第1回払込み金、1000円の内500円を持参したので、受取りました。

(オ) 今和泉鉾山を売り、岡鉾山を止める—明治30年

1月8日、明日、宮之原重が今和泉鉾山代を受取りに鹿児島へ行くので、実印と純金25匁3分を持って行かせました。16日、長次郎と重2人が今和泉鉾山を売払って、3回目の受取り金400円の半分200円ずつ受取り、全部済みしました。

1月15日、池田吉二・野元謙介・星原仲次郎、3人所有の山木ヶ平鉾山を私に引受けてくれとのことで、1,030円の内500円を旧12月まで、530円を特許証書替が済んでから支払う約束をしました。それが21日、池田吉二が1,030円で買う約束の山木ヶ平鉾山を、別な人が買うと言ってきたので、1,100円で買うと答えました。翌22日、中尾の富宿庄右衛門が山木ヶ平鉾山を売ってくれと相談に来ましたが、売りませんでした。28日、宮之原重が山木ヶ平鉾山代350円余と名面替の諸書類を持参、池田吉二方へ受取りに来るよう通知しました。翌29日、池田吉二・野元謙介・星原仲次郎が山木ヶ平鉾山代金を受取りにきました。約定書などの諸書類に調印を済まし、第1回払込金550円を3名へ渡しました。翌30日、調印した山木ヶ平29年度明細書と名面書換え願いを湊郵便局から書留で送りました。2月20日、長次郎は山木ヶ平へ実測図書きに行き、池田吉二方から調印をしてもらい、明日提出することにしました。27日、山木ヶ平の鉾区□1山の有馬氏分を私が買入れ、山の損料4円を毎年旧3月10日に花見費として山人数で出すことにしました。3月18日、山木ヶ平鉾業明細表を福岡鉾山監督署へ書留で出しました。23日、宮之原重が山木ヶ平鉾山代の2回目支払い分366円61銭7厘を

受取り、定穀分を加え、翌 24 日、星原仲次郎へ 550 円渡しました。

5 月 2 日、長次郎は重・栗助(?)と水車を見に行き、大藪平助所有の水車 2 台を 60 円ずつ 120 円で買うことに田尻善右衛門と話し合ってきました。16 日、七ツ枝水車の売買取引を大藪平助と田尻善右衛門が来て、売渡証などを受取り、代金は明日吉武良太郎方へ渡すと決めました。翌 17 日、七ツ枝水車代(宮之原重が 60 円出す)120 円を長次郎が吉武良太郎方へ持って行きました。

6 月 16 日、宮之原重が同家の鉱夫宗太と定穀家の長次郎を連れて、山木ヶ平へ行き、採鉱場所を決めました。それから岡鉱山へ行き、採鉱場の良し悪しを念入りに調べ、今のところ良鉱は出ないと判断して、取止めることにしました。

7 月 11 日、林巡査へ七ツ枝水車の銅盤板をはずして、水銀を盗まれた、と届出しました。

(カ) 養蚕が主になる一明治 31 年・32 年

ほとんどが養蚕のことに変わってきますが、省略します。

1 月 21 日、七ツ枝水車敷地料 5 円 86 銭 7 厘を大藪長次郎へ渡しています。

2 月 18 日、宮之原重と一緒に山木ヶ平へ採鉱の調査に行きました。22 日、第 2 期田税と水車舟の村税を納めています。

3 月 18 日、早馬水車片付け、4 月 12 日には、水車や採掘も鉱夫 1 人、手子 1 人を置き、他は解雇します。

6 月 25 日、岡試掘地が長野県の藤田七太郎所有の土地と境界が重複している、というので、実地測量をしました。7 月 22 日、山木ヶ平鉱山坑内実測図を福岡鉱山監督署へ提出します。

9 月 12 日、足尾銅山の鉱石が届きます。11 月 2 日には、助五郎が上京するので、山木ヶ平の鉱石を足尾銅山山詰の江口氏へ差上げるために持って行かせます。

9 月 17 日、山木ヶ平の採鉱道具を取寄せています。29 日には水車道具を燥穀蔵ヲロシ(サシカケ屋根)から馬屋ヲロシへ運んで片付けました。30 日、水車税の 1 期の届をし、早馬水車は廃業しました。10 月 6 日、山木ヶ平と岡の山に買い手がいるので、鉱石が欲しいと、坂元郷九郎が言ってきましたが、山木ヶ平の分しかないので、これをあげました。

明治 32 年 1 月 31 日、鉱業明細書へ実印を押しました。水車舟の村税を納めました。

2月14日、長次郎が岩坂水車立直し場所の測量に行きました。27日、坑内実測図の調印を宮之原重へ持って行きました。7月22日、勝田藤八が岩坂水車税の旧5月分を持って来ました。30日、植村藤七は水車混合樽の修繕のことで来ました。8月3日、宮之原重は水車勘定金のことで来て、そして、坑内実測図の調印を持って行きました。

さいごに

明治31年6月16日に岡鉦山を取止め、9月30日には早馬水車の廃業のことが見えるので、鉦山経営を縮小していることがわかります。山木ヶ平鉦山だけは経営しています。

明治32年度は鉦山経営のことは少しだけになります。大部縮小したようです。しかし、大正5年までは山木ヶ平鉦山を入来定穀他1名で経営していますが、翌大正6年からは宮之原重他1名となっています。定穀は大正6年1月に亡くなったからです。65歳でした。それでも宮之原重は昭和10年まで山木ヶ平鉦山を経営しています。昭和11年度からは三井鉦山所有になっていますので、昭和10年度に売買契約を結んだのでしょう。宮之原重は昭和13年度に枕崎桜ヶ谷の鉦山を経営しています。宮之原重他1名となっています。その後ははっきりしませんが、昭和18年度の統制令までですから、長くても昭和18年度まで経営したことでしょう。

ク『岩谷鉦山と荒川鉦山の売渡し記録』

解説 編集委員 所崎平

はじめに

所崎与次郎所持品の中に、明治 35 年 6 月 2 日～同 39 年 5 月 16 日まで約 4 年間弱の「荒川鉦山」と「岩谷鉦山」の譲渡、売却、規則などの書類があります。38 枚の綴りです。なぜ、私の父が、この書類を持っていたのかはナゾで、有馬氏らとの関係が今一つはっきりしません。有馬栄之進と吉武良太郎・中尾彦次郎 3 人で経営し、代表が有馬栄之進でした。この資料は捨てがたいものだったので、捨てようというのを父が貰ったのかもしれない。

現在の吉武良太郎氏(祖父の名を継いだため)に資料はないか尋ねると、長兄が片付けて、何もないとのこと。金銀を計る小さなチキリ(計量機で、竿秤)は見ましたが、現在はありません。また、最風(もかぜ=戸切川兩岸と国道 3 号線の間地名、現高浜蒲鉾店のあたり)に土地がなかったか、尋ねると、2 筆の田があったようだが、長兄が売ったようだ、とのこと。役所で調べてもらいましたが、不明。私の記憶では、昭和 50 年代、そこは田んぼで、光明真言の祠があったが、工場の跡地らしき形跡はありませんでした。

有馬栄之進・吉武良太郎・中尾彦次郎から中馬清八・松元彦熊へ売り渡しています。これは荒川鉦山です。第 3698 号鉦区のこと。

時代は明治 38 年ですが、下名と上名の境の岩谷鉦山(特許第 7380 号金銀鉦区)は有馬栄之進が筆頭で 3 人が共有しています。有馬栄之進は麓士族で、明治 35 年では数えの 32 歳、吉武良太郎氏も麓出身です。

中馬清八は、現在麓に住んでいる中馬氏の祖先であろうか。松元彦熊については、はっきりしません。

荒川鉦山の明治年間の記録は、「宮之城(現さつま町)の家村氏が 1 号脈を採掘」とあり、すぐ、大正 2 年になって、「久原工業株式会社(後の日本鉦業株式会社、現在の J X 日鉦日石金属株式会社)が買収、資本金 20 万円で採掘開始」と、かごしま国文祭資料集「シンポジウム 金山の歴史」五味篤「近代と現代のいちき串木野市の金山」p17 にあります。

「宮之城(現さつま町)の家村氏が 1 号脈を採掘」とありますが、「高江村(現薩摩川内市)の家村氏」の間違ひではないでしょうか。この資料では、有馬栄之進(代表)から中馬清八へ売り、中馬は高江村の家村幸助へ売っています。また、家村幸助は鹿児島島の藤田正兵衛へ売った、とありますが、藤田と久原工業株式会社とのつながりがあったのかがはっきりしません。

1 岩谷鉦山

有馬栄之進代表の岩谷鉦山は明治 35 年 6 月 2 日に「採掘願い」を出しました。すぐに福岡鉦山監督署から、「鉦物標本」を 6 月 30 日までに出せ、と命令が来ました。これは出したのだと思われま。

次に、明治 36 年 8 月 27 日、自分たちで「金銀の分析」を専門家に頼んで確認しています。採掘願いを出してから 1 年以上たっています。

明治 36 年 11 月 20 日に「製錬場新設願い」が不備なので、修正して出せ、と命令が来ます。

明治 37 年 1 月 31 日は「鉦業明細表」が出せない理由を見ると、まだ、事業の準備ができていないので、製錬していないと届けています。製錬場もまだできていないからです。

明治 37 年 3 月 2 日には「製錬場の实地調査」をするので、出張員をそちらへやる、と手紙が来ます。

同年 4 月 13 日には「製錬場新設願い」の「設計書と図面」が不完全なので、「修正書」を出せ、と福岡鉦山監督署から催促がきます。製錬場を造るどころではありません。本気で造る気があるのかどうか。それともすぐ売却するつもりでいるから、時間を伸ばしているのか、が疑われます。同 7 月 25 日には、「修正書」を出してない理由に「設計書と図面を依頼した人(児玉仲吉)が陸軍に入隊したからだ」と言い訳をしています。

3 か月後には、「製錬場設置願書却下願い」を出そうとしています。岩谷鉦山は字喧嘩田という場所です。採鉦中というが、実際はたった 1 人が採掘しているだけで、成長する鉦山ではなさそうだと、見切りをつけているのかもしれない。

だが、一応「設計書」を書きます。1 樽に 100 貫入れ、月に 2 回あるから、200 貫目。青酸カリを使い金を取ります。捨てる鉦石(ズリ)は四角な穴を掘り、満杯になったら別に造るなど、予定であって、実際にはしていません。

明治 38 年 7 月 30 日「労役規則・扶助規則」は鉦業法施行細則を基本に作成します。6 回ほど案を練り、不備を言われながら、再提出を繰り返しています。

規則は資料に譲りますが、働く人は、男は 15~50 歳、女は 18~50 歳、就業時間は最初は 12 時間交替であったが、10 時間に直されています。

ところが、2 か月半経って、「諸願提出の延期願い」は認められない、と嚴重注意が来ます。これに対して、「藤田正兵衛」へ連絡し、「請願届書類は調整中」なので、できているものを送る、として、「鉦夫使役規則と扶助規則」を

同年 10 月 22 日に提出しています。次に「定期書類」も休業中で、何も書くものがないから提出しないと出します。

明治 39 年 5 月 31 日までに「承認書」を出さないと無効になると監督署からの手紙に岩谷鉦山(11 万 5 千 925 坪=約 386ha)を奥田栄之進に 1 万 5 千円で売り渡す、とあるが、本当なのかどうか。奥田家はあちこちに自稼山を持っていたので、売る相談をただけなのか、奥田家が受けたのか、はっきりしません。

岩谷鉦山は、たいした稼ぎもないまま、有馬栄之進氏は売り渡したかどうかしたのでしょうか。時期は明治 35 年 6 月 2 日に「採掘願い」をだしてから明治 39 年 5 月あたりで終わりに近づいているので、4 年ほど岩谷鉦山に関わったことになると思われます。ほんとに鉦山経営をやろうという意欲が見られません。

2 荒川鉦山

記録としては、明治 37 年 2 月 22 日に「鉦業明細表調整届」をだせ、という命令があるので、岩谷鉦山より 1 年半ほど遅れて手がけようとしていることが分かります。岩谷鉦山の製錬場の件未提出の頃で、こちらも岩谷鉦山と同じ頃に手がけたのではないかと思われます。しかし、こちらは最初から採掘する気がなく、投機的な感じで、同 38 年 4 月 15 日の頃には、中馬清八へ売渡したようです。中馬はすぐ薩摩川内市高江の家村幸助に売り、それから鹿児島市平ノ町藤田正兵衛へ売渡した、とありますので、荒川鉦山は転々と採掘権が移っていることになります。

また、明治 39 年 1 月 21 日には、荒川鉦山と岩谷鉦山を藤田正兵衛へ譲渡した、という記録がありますが、荒川鉦山は直接的には中馬清八へ売りました。

岩谷鉦山は明治 38 年 12 月には翌 39 年 5 月 31 日までに 1 万 5 千円で買わないときは無効になる、とありますので、譲渡人の奥田栄之進が本当に買ったのかどうかははっきりしません。明治 38 年 12 月 30 日付でも奥田栄之進へ委任状を出しています。売る鉦山は岩谷鉦山と「金銀鉦区福試第 10958 号試掘許可地」です。「10958 号」には番地がないので、場所を特定することができません。ここに初めて現れる「試掘鉦」です。とにかく、奥田栄之進へ売るつもりで進めています。

ところが、荒川鉦山については、中馬清八・松元彦熊へ「無償譲渡証書 1 通」を渡すような契約書があり、中馬・松元の印鑑も押しています。明治 38

年は書いていますが、4 通とも「月日」が空欄なので、正式な書類ではありません。

資料(重要と思われる資料を抜粋)

(ア) 金銀鑛(鉍)採掘特許願(福鑛達第 27 号 1)

明治 35 年 6 月 2 日に金銀の採掘願(岩谷鉍山か)を有馬栄之進が出したのに対し、「鑛物標本と存在証明書を 6 月 30 日までに出せ。もし期日を過ぎると、本願を却下すべし」と福岡鉍山監督署長の工藤英一が命令しています。多分荒川鉍山の採掘願いだと思われます。注意に「1 鉍物標品は 1~3 寸角を箱詰、箱の内外に採取地名・出願年月日、願人氏名を明記」「2 鉍物が流動体のときは 3 勺~1 合を封装して出す」「3 証明書や標品箱には 35 年第 27 号を朱書」とあります。

福岡鉍山監督署は、経済産業省の沿革表によると、明治 25 年 6 月に、「鉍御宇条例の移行に伴い、工業に関する警察事務を行う機関として福岡鉍山監督署を設置」とあります。

(イ) (金銀分析の)報告

明治 36 年 8 月 27 日、これは岩谷鉍山の品位分析で、ロ号の金は千分の 1、銀は千分の 4、ハ号の金は千分の 3、銀は千分の 1 と日置裏門通(現鹿児島市旧タカプラの裏側)の工手学校採鉍冶金科卒業で、坂元分析所主の坂元淳が分析しています。

イ号がないが、それも分析したのだと思われるので、3 個の鉍石の見本を分析したと思われます。

千分の 1 だと 1t 中 1g で、採算ベースに合いません。

出願後、1 年余りたって、やっと金銀分析を専門家に頼んでいます。

(ウ) 特許第 7380 号(岩谷)金銀鉍区付属製煉場新設願

明治 36 年 11 月 20 日、出願の別紙図面が不完全、修正の上、さらに 3 枚を 12 月 5 日までに出せ。延期する時は本願却下しなさい、と福岡鉍山監督署から命令がきました。

- ① 図面は実測の上、精細に。縮尺を明示。
- ② 製錬場付近、300 間以内の地勢を精細に図示。
- ③ 製錬場の各隅に杭を。方位・間数を明示。
- ④ 建物・土灰捨場・残地の坪数を細かに記す。

- ⑤ 土灰捨場堤防の延長、厚さ・高さを記す。
- ⑥ 製錬場隣地所有者の氏名を表示。
- ⑦ 特第 7380 号鉱区採鉱場から鉱石運搬の道路・里程を明示。
- ⑧ 図面に測量者の氏名・住所・捺印を要す。

岩谷鉱山の製錬場新設を出願したが、書類が不備だったから、15 日以内に出せ、期限内に出せなかったら、取り下げよ、という命令です。かなり詳細な図面の提出を求めています。

(エ) 36 年度の鉱業明細表を出せない理由

明治 37 年 1 月 31 日、「第 7380 号鉱区(岩谷鉱山)」の事業の準備がまだできないので、製錬していません。それで、36 年度の鉱業明細表を出せない、と有馬栄之進が届けています。

岩谷鉱山は、まだ準備段階のようです。

(オ) (岩谷)製錬所新設願いを实地調査する

明治 37 年 3 月 2 日、出願地の实地調査に 3 月 9 日鉱山監督官補の伊藤芳三郎が出張するので、立ち会うように。当日午前 9 時、串木野村役場に集合、出張員の指揮を受けよ。

いよいよ製錬所を作る場所の調査になったようです。

(カ) (岩谷)製錬場新設願の設計書と図面が不完全、修正書を提出するように

明治 37 年 4 月 13 日、鉱石搗砕の項目がないので、搗鉱～混汞後の鉱尾を製錬すると認められないので、明治 37 年 3 月 22 日福鉱達第 319 号の注意書の趣旨項目に準じて修正の上、4 月 30 日までに 3 枚提出せよ。

製錬場がないと、金銀を生産できないので、設計書を出したが、不備を言われました。有馬栄之進は鉱山経営については素人であることがわかります。次の資料 7 を見ると、3 月 14 日に提出したことがわかります。採鉱はしていますが、まだ、製錬までいかないのでは却下願いを出すことになります。それが、次の「却下願」です。

(キ) 製錬場設置願書却下願(控)

明治 37 年 7 月 23 日、「特(特許)第 7380 号岩谷鉱山金銀鉱区」の製錬場位置は下名 13401 番民有田 1 畝 11 歩と、小字が喧嘩田 13408 番民有田 7 畝 12 歩計 8 畝 23 歩の「37 年 3 月 14 日に製錬場設置願を出していたが、採鉱中で、まだ製錬する見込みがないので、却下願いを出す」といっています。

製錬場所は、喧嘩田という小字名で、山伏橋の下流辺りです。

(ク) 始末書(製錬場設置の修正書未提出)

明治 37 年 7 月 25 日、「許(特許)第 7380 号鉍区(岩谷鉍山)」の製錬所願修正が提出できなかった理由は、36 年 11 月提出か、37 年 3 月のものか分からない上に、設計書と図面を書いた児玉仲吉が陸軍に入隊したので、と言い訳しています。

(ケ) 仕様(仕事の内容・扱い方)設計書

仕様設計書については、次の通りです。

- ① 1 樽 1 回に入れる量は約 100 貫目。
- ② 1 か月、約 2 回で 1 樽 200 貫目、10 個で平均 2000 貫目。
- ③ 青酸カリの原液は 40～50%。その青酸カリを千分の 2 程度に薄めて使う。
- ④ ③の原液の用量は原料の 2 分の 1。
- ⑤ 洗浄水は原液の 1 割の清水を計 3 回。薄まった液は戻して、捨てることなし。
- ⑥ 捨て鉍尾場は地下 10 尺(3.3m)、堤防は 5 尺(1.6m)。満杯になったら、別に作る。
- ⑦ 石灰は原料の 100 分の 1。
- ⑧ 特許第 7380 号(岩谷鉍山)の 1 日平均採鉍量は 50 貫目。最低金含有量 100 分中、0.00012 付 採鉍高は精錬高と比べると不足するが、2 回までは製錬する予定。

右から別紙の図通り、新設する。 有馬栄之進

と、記載されてあります。

(コ) 鉍夫雇い備え及び労役規則及び扶助規則認可願

上名・下名の小字岩谷他 6 字内、特許証第 7380 号岩谷鉍山の鉍夫雇用・労役規則・婦女規則を鉍業法施行細則に基づき別紙の通り定め、施行したいので、認めて欲しい、と明治 38 年 7 月 30 日付で鉍山監督署長へ出しています。6 回ほど案を練り、提出して不備を言われ、再提出を繰り返しています。

「鉍夫雇備及労役規則及扶助規則」と「鉍夫扶助規則」によると、男は 15～50 歳、女は 18～50 歳を使用する。就業時間は 12 時間以内、製錬鉍夫も 12 時間以内の交代。休日は毎月末に 1 回・大祭日・鉍山祭(旧暦 16 日)。

賃金の前借は禁止で、9条で終わっている。残された他の記録を見てみると、10条までであるので、前者も10条あったと思われます。また、終業時間が午前7時～午後5時の10時間になっているのと、給料は鉱夫の等級で違うなどが大きな違いです。12時間労働を10時間労働に代えさせています。その後、監督署から内容が不完全なので、修正しろと同年9月27日に命令がきています。

同年10月16日には、「9月30日にだした諸願届提出の期限延期願は認められないので、すぐ手続きを完了させなさい。もし期限を越えると処罰されることがあるので、注意せよ」とあります。

これに対し、「すぐ藤田正兵衛へ知らせ、同人からは請願届書類は調整中なので、でき次第送るが、とりあえず、できている分を送付する」「鉱夫使役規則と扶助規則」を送る、とあります。同年10月22日と6日後に出します。

(サ) 「定期書類提出について」

年度内に提出する書類や図は、「鉱業施業案認可願・前期坑内実測図・月限りの金銀産出額限報告書」の3通ですが、休業中なので、「届出す書類はないので提出しない」と出します。

(シ) 特許第3698号(荒川鉱山)の鉱業明細表調整を命じる

明治37年2月22日、中尾彦次郎に対し、明治36年分の荒川鉱山の鉱業明細表調整届を2月29日までにだせ。期日までにだせなければ、仮に同年中の金銀の産出額を出せ。届出る事項がない場合は、その理由を届出せと命じています。この時点では中尾彦次郎が鉱業主と思われます。

(ス) 御届(福岡鉱山監督署へ有馬家番頭より提出)控

明治38年4月15日、4月12日付「福鉱発第388号」命令は了承しましたが、3698号鉱区(荒川鉱山)は7～8年前、有馬栄之進たちが中馬清八へ売渡しました。中馬は薩摩郡高江村家村幸助へ売りましたが、届出書類・税金までは中馬清八の手を経て処理してきており、家村には会ったことはないが、家村留守宅からは鹿児島市平ノ町藤田正兵衛へ売渡したと通知がきました。藤田は上坂留守中^{じょうはん}で連絡取れず。このようなことなので、私共には3698号鉱区(荒川鉱山)の申請は全くわかりませんが、おそらく数年前に休業していたのではないかと思われます。

もし、8年前だと明治30年、有馬栄之進は27歳です。

(セ) 「明治38年度鉱業休業願」38年10月22日

明治29年3月24日の特許第3698号、つまり、荒川鉱山は「降雨の支障」と「事業拡大のため設計準備中」なので、38年度は休業したいと荒川鉱山採掘権代表・岩谷鉱山採掘権者の有馬栄之進が岩谷鉱山の休業願と共に、福岡鉱山監督署へ出しています。

(2) 鹿児島県史料『薩摩藩法令史料集 1』 意訳

はじめに

鹿児島県史料「薩摩藩法令史料集 1」の中で金山に関係する部分の抜粋をしてみました。意訳については、一部、削除及び加筆などをして、解釈を試みました。

以下、鹿児島県史料『薩摩藩法令史料集 1』より抜粋

518 (金山) 意訳

- 一 長野山ヶ野金山の基は、島津図書久通御家老職以前、私領祁答院宮之城の内佐志村の川中で真砂を取揚げた者が、真砂をゆらせたところ砂金があったので、この川上には金気があると思い、石見銀山にいた内山與右衛門と肥後国宇土郡半台為右衛門(判屋為右衛門)を宮之城に止め置いて、2~3年の間、曾木・本城・長野辺りの山谷川までも経歴させたところ、寛永 17 年(1640)3 月 22 日長野内宍焼谷川中で為(與)右衛門が金□□(碾石か)が土中から見えていたので、太守光久が江戸へ行くときに、図書が掘り出した砂金を持参して申し上げた。それで、なお掘るよという事で、砂金 300 両を幕府へ差上げられ伺ったところ、6 月 25 日伊勢兵武帝昌を召され、猶々掘るよという事で段々これを掘った。同 18 年(1641)8 月 28 日砂金 980 両余り献上した。翌 19 年(1642)正月 14 日金山を掘る許可をもらえた。そこで、奉行北郷佐渡久加が自他国の人数 2 万人余人を集め、佐渡に勝るくらいの金を掘り出した。道程壱里余り、山坂を越え、大隅桑原郡横川の内山ヶ野まで 1 囲いに柵を結び、その中を掘った。これにより、薩州の長野、隅州の山ヶ野両国境白仁田という所に境木がある。
- 一 寛永 20 年春、天下飢饉で人民が悩んでいたもので、金山掘りの事は止められるように、と幕府から命ぜられた。そうしたところ、借銀は 2 万貫目に及び返済の方便もないので、再び金山御免の願いを松平隠岐守・神尾備前守の取り持ちを通じて申し上げたところ、明暦 2 申年(1656)5 月島津市正忠廣・鎌田源左衛門政有を江戸城に召し出され許可するとの事だったので、同年 11 月より再び掘られるようになった。この時から寛文年間まで、奉行は島津図書久通で、後に島津中務久茂・島津帯刀久元・新納又左衛門久了・肝付主殿久兼・島津大学忠守・平田新左衛門宗正・祢寝丹波清雄・新納市正久珍・川上式部久重・種子島弾正伊時・堀四郎太夫興昌が勤めた。
- 一 長野西田の地を掘り、金が出たので、宮之城佐志村まで掘潰した。宝は納めたけれども、御朱印の田地が潰れたのを久通は嘆き、その替地として新田を開発した。金山玉金代の内 5 部銀(文書 519 参照)という、御領山で金掘りをする御礼銀である。壱当銀(文書 520 参照)というのは、山師が山を開くときに米を下されその返金である。この壱当銀の余った分で国分の郷中で流れたり、地が潰れたりしているところ

を凶書(久通)の見立てで新川を掘る費用に大部分を払った。それにつき古川が田地に成り、5,000石余ができた。今は金山の出金が減り、壺当銀を以て山師へ下される米の用意が出来ず、5部銀も加えるけれども足りない。しかし、右新田はこれ以前壺当銀の中で出来た納め米がたくさんあるので、損はないと思っている。また、元禄12年(1699)の頃までは金山の利潤銀で時々銀30貫目くらいずつ右の借銀を返済しているので、残り少なくはなっている。そのうちしだいに山も衰え、正徳3年巳(1713)7月から同6年申(1716)6月まで3ヶ年分割払いにして、1か年に銀5貫920目余を返済に充てた。

519

(518号行間朱書)

一 5部銀は、玉金1貫目に付銀500匁、玉金100匁に付銀50匁ずつ、山師達より支払われる山運上銀(税金)である。

520

(518号行間朱書)

一 壺当銀は、最初山仕込み(開発費用)として壺ヶ月に米40石ずつ山子(山で働く人)の飯料を下された。これを問見米とよみまいと云う。この返済として、玉金壺貫目に付銀10匁ずつ御物蔵へ上納した。これを壺当銀と云う。

521

(518号行間朱書)

一 問見米は、山師達へ掘り方の手付米として1ヶ月に40石ずつ下された。金の有無を問い試す事を申し立てることから、問見米と唱えたと云う。当分は、1か月に15石ずつに減らされた。

522

一 長野山ヶ野金山は、正徳年間(1711~1715)以来藩が投資を続けたので、延享4卯年(1747)より少しづつ出金が増し、宝暦4戌年(1754)7月より宝暦5亥年(1755)6月まで出金6貫226匁9分5厘有り、御利潤銀は56貫741匁2分余あった。

523

一 芹ヶ野金山の儀は、万治3年の頃、問見米掘りを仰せ付けられ山が立てられた。山が繁栄の時分は凡そ人数が7千人に及んだと伝えられている。しかし次第に山が衰え、天和3亥年(1683)に至り畳んでしまった。

524

一 鹿籠金山の問見米は天和3亥年(1683)より始まった。また、芹ヶ野も元禄11寅年(1698)再金山を掘るように仰せ出され、あちこちから召し出された。これは諸国山掘りをするようにと公儀より仰せ渡しがあり、きつく仰せ付けられたのである。

525

- 一 鹿籠金山・芹ヶ野金山は、これ以前と変わって掘り出す砂金がわずかだった。次第に山が衰え、正徳3巳年(1713)7月より同6申年(1716)6月まで、鹿籠金山は3か年の分割払いにして、1か年96貫900目余、芹ヶ野金山は54貫290目余引いた。芹ヶ野金山休山の願いを幕府へ申し入れ、享保2年(1717)の冬より休山になった。

526

- 一 鹿籠金山は、採算の目途がたち、宝暦4戌年(1754)7月より宝暦5亥年(1755)6月まで出金941匁4分有り、引入銀は8貫656匁余あった。

527

- 一 川辺の内神殿金山は、金気が過分にある場所で御物より掘方を命ぜられていたが、水敷(水に浸かった切羽)になって、それ以降たびたび掘り方を命ぜられたが掘り続けられず、休山になっていたところ、享保17子年(1732)5月試し掘りを命じられたが掘り続けられなかった。寛延元辰年(1787)9月掘り方を許され、吹金100匁余を吹き出したが、当分はわずかばかりの掘子が掘っている。

528

- 一 大口の内牛尾浦金山は、享保13申年(1726)8月より試し掘りを命じられ、元文4未年(1739)12月山床に取揚げを命ぜられた。

529

- 一 田代の内前目高塚金山は、享保15戌年(1730)8月試し掘りを命じられたが、掘り主が亡くなり、宝暦4戌年(1754)4月に山床取揚げを命ぜられた。

530

- 一 大口の内大平金山は、金気有り、享保15戌年8月試し掘りを命じられたが、金気の場所へとどかず、山床を返したいと願い出た。

531

- 一 坊泊の内廣大寺金山は、享保20卯年(1735)8月から試し掘りを許されたが、掘り主が亡くなり、宝暦4戌年4月に山床取揚げを藩が命ぜられた。

532

- 一 阿多の内水無川原金山は、享保13申年12月試し掘りを命じられ、金9匁余吹き出したが、それ以降稼ぎ方はなく、今もそのままになっている。

533

- 一 綾浦中尾大森金山は、元文2巳年(1745)11月より試し掘りを命じられ、元文4未年(1739)正月山床を御取揚げ仰せ付けられ、延享2丑年(1745)4月に再び試し掘りを命じられたが、本手に困り、寛延元辰年(1748)3月山床取揚げを命じられた。

534

一 馬越山田村の内山仮屋金山は、寛延 3 午年(1750)11 月に試し掘りを命じられた。

535

一 串木野西岳の内唯鉞^{本ノママ}は、金気があり、寛保 3 亥年(1743)2 月試し掘りを命じられ、正金 10 匁計吹調^{ふきととのえ}たが、その後山床取揚げを命じられた。

536

一 恒吉御牧内鷹鳥は金気があり、寛保 2 戌年(1742)2 月試し掘りを命じられたが本手に困り それ以降山床取揚げを命じられた。

537

寛政元年上使御答書の内(幕府巡見使への答え方集)

一 金山の事をお尋ねの時は、当国金山の初めは寛永・明暦年間に金筋のある所があり、公儀(幕府)の許可を得て掘らせた。その頃は相応に出金の山もあったが、次第に衰山になったので、出金が少なくなり、当分は山ヶ野金山の出金が年中 800~900 目の内外である。鹿籠金山の出金は 1 貫目余である。この他にも先年試掘御免の枝山(支山)があるけれども、これもまた猶出金は少なく採算が取れないので、お届け申し上げて休んでいるところであると、お答え申し上げるべきである。

考えると、当分山ヶ野の出金は 1 か月 1 貫目位、年中では 12 貫目程度、鹿籠の出金は 1 か月 50 貫目位である。玉金は京都の後藤方へ送り、大抵 1 貫目に付代小判金 230 両に引き替えて、年間の諸雑費を差引き、金 35~36 貫目位の利潤がある。

544

(金山之事写「金山萬留」)

宝永御答書

一 薩州伊佐郡長野村の山中で金山を掘り出し、寛永 17 年(1640)3 月 22 日に稼ぎ御免となり、同 18 年・19 年・20 年の春まで稼いでいたところ、止められてしまった。

一 その後訴訟によって明暦 2 年(1656)6 月 26 日に国中にいる者を以て稼ぐことを許された。但し、寛永金山では長野に奉行役所があり、明暦の取立てには長野・山ヶ野両所に役所があったが、鹿児島への順路が良かったので、近年は山ヶ野の役所で勤めている。然しながら、公儀では長野金山である。

一 寛文 2 寅年、地元の人・他国の者も一緒に掘ってよいと言い渡された。

一 長野山の他に国中で金が出る所があるはずなので、試しに掘らせたいと松平隠岐守・神尾備前守から老中へ申し上げた。そこで、あまりたくさん掘らせないようにと明暦 4 戌年(1658)6 月 25 日に言い渡された。万治 3 子年より薩摩郡串木野村芹ヶ野山で試掘を申し付け、長野の枝山にして稼ぐように命じたけれども、それほどでもなかった。それで休山にし、天和 3 亥年(1683)4 月から薩州川辺郡鹿籠村の山中に芹ヶ野の人数を移して掘らせた。

一 元禄 11 寅年、金銀銅山を掘らせるように言い渡されたので、芹ヶ野山もまた取立てて今も稼がしている。川辺郡神殿山も金山稼ぎを命じ、3、4 年掘らせたところ、金高 50 貫目程出たが、水山になったので休山している。

一 長野金山

西は薩州伊佐郡長野村の内東は隅州桑原郡山ヶ野村の内

当分の出金高 22 貫目程

但し、1 月に 1 貫 800~900 目ほど

人数僅かになり 1390 人余

家数 405 軒

洗濯女 16 人

但し、傾城同前の者

一 鹿籠金山

当分の出金年中 15、16 貫目

但し、1 月に 1 貫 100~200 目ほど

人数 300 人余

一 芹ヶ野金山

当分の出金年中 6 貫目余ほど

但し、1 月 500 目ほど

人数 250 人余

右の通りであるが、家数人数は大まかに申し上げ、委しく尋ねられたら申し上げるべきである。

一 金山の利潤を尋ねられたら、切山は山師の掘取に命じ、両替の節に 5 部の納め方と口屋より持ち入れの諸物の 10 部の 1 を取っている。徳分(取り分)または米に少しの値段増しの払いがあり、取合は 1 月に 1 貫 500~600 文(目)であった。しかし、旅人が住んでいるので治安が悪くならないように土分共を多く使っているので、扶持米(給与)を出している所以利潤はない。土中の宝を掘り出すのは大変であるが、金が能くできるようになったら利潤もあるので稼ぎを申し付けている。

但し、壺当銀があるけれども、これは山師の救い米になり当分は足りない。特別なものである。

一 山中請座の事、金山掘子の者が用物を買置きすることはならないので、座元を申し付け置き、時々請座へ用意をして置いている。他国から請座の者が入ることは、先年御免になった。

一 宗体改めの儀は、他国者は国証文を見届け、その上荷物は入口屋で改めて通している。その上山中で正月・7 月の両度の改めを申し付け、男女共に面々提札を渡して

いる。自国者は手札元元より引合わせがあり、改めに緩みはない。他国者が居るので別けて念を入れるように申し付けている。

- 一 金山は、掘尽しているわけではない。費用をかけたらもっと出る筈である。当分は費用が少なく出金も少しなので、金山は今は飢饉である旨を、山方(鉱山役人)の者からご挨拶を申し上げる筈である。委細をお尋ねになったら、今までの書面的ようにお尋ねに応じ、大方はご返答申し上げるように金山へ書付を渡した。心得のために、この1冊にも書き載せて置く。金山の儀については、この12か条までで済むであろう。左の数か条は必要ない筈である。
- 一 長野金山が初めて見つかったときの子細は、長野から5里川下の宮之城の内まで段々川筋に流金があり、宮之城の領主島津図書久通が金山を開く者に申し付け、川筋を残らず探したところ、長野村の山中穴焼口という所で菖蒲(石菖蒲)の根から金を見つけ出したようである。これは寛永17年(1640)3月22日のことで、今も長野の山神を祭っている。早速試掘して、金目100両余り取って江戸(幕府)へ差し上げ、阿部対馬守へ大隅守光久からお願いし、金山稼ぎを許された。寛永18年(1641)から同20年まで稼いだところ中止させられ、山中の人々を追い出し、間歩(坑口)には封印をさせ、見張り番を置いた。金を目指していたので、稼ぎに来た者は帰国せず、当国の内に農商の仕事をしながら時節を待っていた。大隅守は財政が苦しく借銀が大きくなったので、それ以降幕府へ訴えて、明暦2申年(1656)6月に金山稼ぎを許されたので、早速人数を集めて稼ぎをした。寛永の金山で掘った金は相当なもので、この金山が出来てから日本の金は多くなったということである。明暦に掘った金は出るには出たけれども、それまで休止していたので急には掘られず、2、3か年経てやっと出金高が増え、万治2亥年(1659)中には金高にして10万両余り出た。それから段々出金高が減少し、寛文2寅年(1662)にはまた栄えて、亥年よりも賑わっていた。
- 一 右の時節には他国から費用を持って来て稼ぐ者もいて、費用を過分にかけたので、稼ぎも多く出金もたくさんであった。しかし、近年は費用を持ってくるものはないのに、自然にたくさん金を掘り出して銀子を持って帰国する者がいる。稼ぎの費用は藩の蔵方からは出さないで、金を切り出すこともなく、余り稼ぎがない。年中の出金高は340貫目程やっと稼いでいる状態である。
- 一 元禄11寅年に金銀銅山を掘るようにと命じられた。金山は費用をかけたら出金はある筈であるが、多額の費用をかけることは出来ないで、費用を出してくれるように幕府の老中へお願い申し上げたところ、先ず自分で掘るようにとのことであった。しかし、萩原近江守からのお達しもあり、費用を掛けて稼ぐように申し付け、薩摩の内芹ヶ野という休山でも稼いだ。鹿籠金山にも費用を増やし出金高が増えて

きて、年中の出金高は 50 貫目に及んだので、元禄 14 巳年に再び幕府へ訴えて、費用 2 万両を出してもらい、長野山ヶ野で年中 1 口費用 72 石・48 石・24 石、それぞれの山に応じて 50 口の切山を申し付け、鹿籠金山にも 20 口余り、芹ヶ野にも 10 余口費用を申し付けて稼がせた。川辺郡神殿という山も取り立てた。4 か所を御免になり、午未年には段々出金高が増え、宝永元申年(1704)の年には出金高 100 貫目余に及んだ。右の玉金は宝永 7 寅年(1710)以降は江戸の後藤方で引き替えた。申年からは幕府の萩原近江方へ御断りして、京都で引き替えた。いずれも引き替えた金高は時々萩原近江守へ申し上げてきた。宝永元申年、出金が多いときは 1 度の引き替えに 1,000 両余ある事もあり、年中には多額になった。2 万両の金子に薩摩守蔵方から(銀)米を多く添えて稼がせたけれども、引き替え金の内から 2 万両の返納金もあり、近年は薩摩守の財政が苦しく、金山に過分の費用をかけられない。この時は試掘の費用のみで、山師共が掘る金子の吹き立て代銀を取らせることも時々差し支えるので、強いて稼ぐ者も少ない。金筋の儀は、切通の弦筋に節々があり、その金節は 2 尋 3 尋で金気がとぎれてまた出る。40 尋 50 尋の底下は確かにあるが、水が出て稼ぐことができず、遙々山中から水抜き切をするので費用がかかる。山ヶ野山先山の下、岩永宇土という間歩は、先年稼いだので多くの金があり、井戸の様に掘り下げて水を大分出し、どのようにしても汲み干すことが出来なかった。そこで山ヶ野口屋辺りから水抜き水道を打ち立て、役所の前で間歩を結び真直に切行くことは石楯がかたくてできないので、北の方へ廻って切らなければならず、費用が多くかかり、数年の間に土中 3 町(約 300m)余は切った。あと 1 町余りもあるのではないかということだが、当時は大きな費用はかけられないので、年中の米 48 石を吉田五郎左衛門へ申し付け、自分の費用をも少々加えて稼ぎをしているが、多人数の稼ぎが出来ず、はかばかしくない。長野出木山という所で、金目 10 万両も出たという所については、前々から費用をかけているけれども、これも過分の費用はかけられないので切達はなりがたい。その他、淡路谷・羽府(衣)谷・九郎太郎という所も右同様で、費用が乏しく切達していない。山中の儀は金子が出たらすぐ賑い立ち、暮らし向きもよくなる。昨日まで着る物もなく、食べ物も仕度出来ないような者が、思いがけず金を掘り出せば、俄に小袖を着て、お歴々のようになり、食べ物も値の張るものを自由に調べ、栄えているものである。当分は費用が乏しいので稼ぎがなく、良い金筋を切り出せず、郷中でも不作の年は飢饉があるように、金山においては飢饉のようになり、別けて見苦しい風体であるけれども、毎月の支配米を 100 石づつ申し付けているので、少々稼ぎ出している金を代銀に加えているので飢える者はなく、時節を待っているところである。何とか費用をかけて稼がせ、大金を切り出させたいところであるが、力が及ばない状態である。

- 一 鹿籠・芹ヶ野の金山も長野の枝山であるが、有望な所があり、時には大量の金子を切り出すこともあり、今でも多くの費用をかけている。川辺の神殿山は一時は出金が多かったが、水山になり、水抜き切場(坑道)が遠く大変になり、仕方なく止めた。長野山ヶ野は以前は稼ぎは申し付けていず、以前洗い崩れなどで佐司村宮之城村まで5里の川筋に流れ埋まった金があり、40年余り丁場稼ぎをし、取上げた金高さ大分あったので、長野山ヶ野は今でも金は尽きない山である。
- 一 卯辰巳午未年まで5か年多くの費用をかけ、右5か年で掘った金を代銀で計算し、現在までの経費は長野山ヶ野に13,595両、鹿籠に4,902両、芹ヶ野に7,865両余、合わせ26,362両、このように経費をかけた年には出来高が100貫目余りあり、宝永元年酉年(1751)までは大体同様の出来高であったが、費用が減少したので次第に稼ぎが少なくなり、出金が減った。金は水気の所にできるので水を防いだり水抜きの坑道を掘るなどへ多くの費用がかかるのである。
- 一 元禄11寅年(1698)から宝永6丑年(1709)まで凡そ玉金650貫目程、小判金にして11万2,600両余、内8万6,600両余位付代金、2万6,000両余3割増、(新金は5割増)の由である。この方へは3割増で渡して、2割増しの積もりでしたら、1万7千両余は薩摩金山から公儀へ納める考えになる。その訳は長野の玉金を萩原近江守様から江戸の小判座へ見せて、古小判で何程、新小判で何程と値段を付、禰寝丹波へ下し置かれた書付を以て考えた結果である。金子を多く掘り出せば、引替について、公儀へも納める金高は増えると思われる。

解説

計算式	$86,600 \times 1.3 = \underline{112,580} (\doteq 112,600)$
	$86,600 \times 1.5 = \underline{129,900}$
	$129900 - 112,580 = \underline{17,320} (\doteq 17,000)$

以上

(この1条「金山萬留」になし)

- 一 山ヶ野金山へ山横目として一人置き、4か月交代を言い渡す、
明和元年 宝曆^(ママ)13年 申7月5日

545

享和3亥年(1803)3月御記録方添え役の相良太郎太が山ヶ野金山へ来た時、由緒などのことを以下のように書いて出した。

山ヶ野金山御取立之由緒

- 一 当山のことは、宮之城川筋に流金があったので、図書(島津久通)が金山を掘る者

へ試し掘りを言い付けたところ、長野村の内宍焼口という所で石菖蒲の根から金を見付けたということである。これは寛永 17 年(1640)3 月 22 日のことだったという。そして試掘をし、金目 100 両余を江戸へ持って行き、金山稼ぎの願いをして、許されたので同 18 年から同 20 年まで 3 ヶ年稼いだところ、幕府から止められ、山中で稼いでいた切山には封印するよう言われ、すべての人々は山中から出された。しかしながら金を見掛けていたので、当国の内諸所へ居て時節を待っていたということである。その後稼ぎ方の願いをして、明暦 2 申年(1656)6 月 26 日金山を開くように言われ、同年 9 月から金山の取建てがあり、当亥年まで 148 年になり、およそ出金高は 6,311 貫 250 目余である。

但し、中断していたのは寛永 20 未年(1643)から明暦 2 年まで、14 年目に再開された。

一 明暦 2 年に許された時は領内の者だけで稼ぎ方をするように言われたが、寛文 2 寅年(1662)からはどこの国の者でも自由に入れて稼ぎ方をするように、江戸で稲葉美濃守から言われ、自他国の者が入り込んで稼いでいる。

一 金山境内のことは大垣から遠近があり、大垣から半里程(約 2km)もある所がある。惣廻りは大抵 7 里程(約 28km)もあり、前々から支配している敷内は諸木が多く必要であるので、山運上として出金 1 匁につき銀 4 分づつ、5 部銀と名付けて上納して来た。

一 大垣の惣廻りは大抵 3 里(約 12 km)ある。先年は 2 重垣で、大垣 60 間掛り諸人を寄せ付けることをきびしく禁じている。その後諸木を伐るのに 30 間掛り寄せ付けないように図書から言い渡された。

但し、右の 2 重垣の内にゲスノ木(カラタチ)を植えてあるという。

一 垣廻り番所と木口屋番所は 17 か所あったそうであるが、当分は 2 ヶ所立てられている。

一 口屋 2 か所

但し、前々から当分まで 2 か所ある。13 か所はお引き取り。

一 諸役所 15 ヶ所

一 御蔵 2 か所

但し、当分は上前蔵 1 か所、3 か所お引き取り。

一 制札 8 ヶ所、銘々所書略す。

一 金山作法に反する者の取扱いを言い渡された日調留がある。

但し、牢屋とお仕置者場など建ててあったそうであるが、牢屋などを取除いた年間はわからない。

一 出金両替我吉市郎右衛門江戸糸屋京都小判座が罷り下って、金子 100 貫目につき

銀 193 目運上で明暦 3 年酉 (1657) 4 月から万治元戊 (1658) 6 月まで両替をした。それから当分まで藩で両替をするように言い付けられている。

- 一 金山出金の利潤で、明暦 3 年から貞享 2 年 (1685) の間大抵以下の通り藩へ支払いがあった。

合銀 9,382 貫目余り

上記の利潤で、高 1,360 石余買い入れられ、帖佐与高になった。

- 一 上記の利潤銀の内から、寛文 2 寅年 (1662) 9 月 28 日金山祝として御城 (鹿児島城) で金山から御膳を進上し、延宝 6 午年 (1678) 4 月御城で薩州 (島津綱貴) へ金山から御膳を進上した。
 - 一 金山万規は凶書が究め置いた。凶書が山へ来た時真米 1,000 石を山師などへ与えた。その後 500 石を与えたと申し伝えている。凶書の後、支配家老衆が多々山師などへ銀米を与え、平田新左衛門が山へ来た時も土産米を与えたそうで、その数はわからない。
 - 一 金山奉行を兩人言い付けられ、主従は 13 人で、町奉行と同格で交代で越山し、山中を通行の時は山中役目の中から先払い (先に行って準備をすること) をし、夜に入ったら家々で提灯などを出しているということである。
 - 一 金山奉行が越山の時は当分まで具足箱を持たせて来た。
 - 一 町奉行・物奉行・山奉行は主従 8 人で取り建ての時から定詰めで、永野・山ヶ野の両所に役所を立てて詰めていた。その後お引き取りになった。
 - 一 金山を取建てた時から支配米 100 石または 100 石の内外を山師などへ与えられ、切山を構えたけれども、段々石高を減少するように言われ、近来は月々 40 石ずつ数十年与えられてきたが、去る酉年 (天和元年 (1781) か?) 9 月省略するに付今年限り 40 石を取り揚げるよう言い付けられた。もっとも米を与えられる運上として出金 1 匁につき銀 8 分ずつ上納してきている。
 - 一 年々家 1 軒から差杉を 40 本ずつを調べ、御用取下などにもなっている。山中の諸人が申し受ける時は山運上 5 部銀の他に木代銀を御法の通り上納し、松の生やし方を年々して来た。申し受け方は同様である。
 - 一 山稼ぎの旅人が入って来た時は、国所の証文並びに宗旨の寺証文を見届けの上、当山根帳に記帳して稼ぎ方を申し付け、支配米として飯料を下されて来たが、当分は下されない。
 - 一 旅人のことは前々から 7 月 7 日に宗門改方を言い付け置かれ、今も改め方をして
- いる。
- 一 出金が有るべき国々の領主が取り計らいをしない場所は、幕府の山師が見分の上取り計らいになるという申し伝えがある。

- 一 山中の諸職屋運上銀は、当分までして来た。
- 一 山中の畠作は、年々見掛け上納している。
- 一 これ以前山が栄えていた時は人体^{にんてい}1万人余、谷数16程、切山数500口程、山ヶ野町数27丁程あった。
但し、当分山ヶ野町数5町、人体800人余、谷数7谷、切山数8口程で稼いでいる。
- 一 当分出金は、1か月1貫200目内外である。
- 一 これ以前山中役目人数並びに下され方と当分役目は、おおよそ以下の通り。
- 一 金山奉行2人、主従11人賦、乗馬1疋馬飼料渡し。
但し、当分は6人賦
- 一 与力2人
但し、当分は引き取り
- 一 奉行座書役2人、真米5石年中1人分
但し、当分は真米4斗5升、銀8匁
- 一 同使番2人
但し、当分は引き取り
- 一 物・町・山奉行4人、主従8人賦
但し、当分は引き取り
- 一 同書役4人
但し、当分は引き取り
- 一 同座使番2人
但し、当分は引き取り
- 一 町奉行所書役4人
但し、同断
- 一 同座使番2人
但し、同断
- 一 札場2人
但し、1人減、当分は1人、年中真米4石。
- 一 山ヶ野永野横目4人
内、3人減、当分は1人、1ヶ月に真米4斗5升、銀18匁。
- 一 山ヶ野米蔵役人3人、当分は引き取り。
- 一 同手伝3人、当分は引き取り
- 一 上前蔵役人3人、当分2人
但し、年中真米4石つつ下される。

- 一 同手伝 2 人、当分まで 2 人
但し、年中 1 石 8 斗 づつ。
- 一 山ヶ野入口屋改役 3 人
- 一 同手伝 4 人
- 一 同出口屋改役 3 人
- 一 同手伝 3 人
右 4 人は引き取りで、当分は勤め方口屋検者 1 人、1 ヶ月真米 4 斗 5 升、銀 48 匁
- 一 口屋直付役 1 人、1 ヶ月真米 3 斗、銀 12 匁
- 一 普請方^{ふしん}検者 2 人、当分は引き取り
- 一 同取払役人 2 人、当分は引き取り
- 一 同手伝 1 人、当分は引き取り
- 一 同使番 1 人、当分は引き取り
- 一 同口銭入夫 7 人
内、6 人減らして当分は 1 人、1 日赤米 7 合 5 勺、銀 6 厘 6 毛、外に真米 5 斗夏
冬の仕着せ料
- 一 山横目 4 人、当分は引き取り
- 一 永野町奉行座書役 3 人、当分は引き取り
- 一 同使番 2 人、当分は引き取り
- 一 同札場 1 人、当分は引き取り
- 一 同米蔵役人 3 人、当分は引き取り
- 一 同手伝 3 人、当分は引き取り
- 一 永野口屋改役 2 人
内、1 人減らして、当分検者 1 人。
但し、下され方は山ヶ野と同じ。
- 一 同口屋手伝 2 人
内、1 人減らして当分は直付 1 人。
但し、下され方は山ヶ野と同じ。
- 一 鉄口屋 2 ヶ所、当分は引き取り
- 一 外横目 4 人、当分は引き取り
- 一 木口屋・垣廻 34 人
内、30 人減らして当分は 4 人、1 ヶ月 1 人に付真米 3 斗、銀 7 匁 づつ。
- 一 同手伝 5 人、当分は引き取り
- 一 新丁場口屋改番並びに垣廻 2 人、当分は引き取り
- 一 同手伝 1 人、当分は引き取り

- 一 御物大切山検者 5 人、当分は引き取り
- 一 山先役 1 人、主従 10 人賦、1 ヶ月真赤米 1 石 5 斗、銀 80 目、外に年中真米 50 石
当分は山先役 1 人。
但し、年行司兼務、1 ヶ月真米 6 斗、銀 20 目。
- 一 同手伝 2 人、当分は引き取り
- 一 永野町年行司 1 人、主従 3 人賦
外に年中 4 石づつ、当分 1 人年中真米 4 石
- 一 山ヶ野永野年行司所手伝 6 人、当分は引き取り
- 一 山廻役 3 人、1 ヶ月真米 3 斗、銀 40 目
内、1 人減らして当分は山見廻 2 人、1 ヶ月真米 3 斗、銀 18 匁
- 一 当分間歩見廻役 2 人
但し、下され方は山役と同じ、右の時分までは間歩見廻役はなかったと思われる。
- 一 山頭 4 人、当分は引き取り
- 一 小廻 22 人、当分は引き取り
- 一 金見究 1 人、主従 6 人、1 ヶ月真米 9 斗、銀 48 匁、年中小判金 20 両、当分金見役
1 人、1 ヶ月真米 4 斗 5 升、銀 11 匁
- 一 金見 2 人、1 ヶ月 1 人前真米 3 斗、銀 48 匁 6 分、年中銀 100 目、真米 1 石 8 斗、
当分金見稽古 2 人、1 ヶ月に 1 人前下され方は真米 3 斗、銀 16 匁 5 分。
- 一 山ヶ野山之神座主、年中真米 6 斗
餅米 2 斗、但し、正月神前祝物。
真米 3 斗、銭 500 文、百田紙 2 帖、小豆 2 升。
正・5・9 月並びに 11 月御祭料、外に御祈念料がある筈。
当分座主、年中真米 3 石 6 斗、餅米 2 斗、真米 2 斗 2 升 4 合、銭 3 貫文、百田紙 2
帖
- 一 永野山ノ神座主、年中真米 3 石 6 斗、
外に銀 1 枚、但し、正・5・9 月御祈禱料。
その外正・5・9 月 11 月御祭料山ヶ野と同じ。
外に真 2 石、銭 1 貫文、百田紙、小豆 2 升。
右 4 行、3 月 22 日御祭料、山掛が出る銘日でこのようである。
餅米 2 斗、正月神前へ祝物。
当分座主、年中 3 石 6 斗。
正・5・9 月 11 月御祭料山ヶ野と同じ。
銭 1 貫 500 文、真米 3 斗 2 升。

3月22日御祭料。

餅米2斗、正月神前へ祝物。

- 一 永野安養院、年中3石6斗、当分1石8斗
- 一 久昌寺、年中3石6斗、当分1石8斗
- 一 床屋(火床屋)・両替所役人5人、当分は引き取り
- 一 同手伝5人、同じく引き取り
- 一 医師1人、同じく引き取り
- 一 普請大工1人、同じく引き取り
- 一 口屋から新入り引き付け1人、同じく引き取り
- 一 御道具衆2人、同じく引き取り
- 一 同じく賄い夫2人、同じく引き取り
- 一 足輕を置かれていた由、何人居たか又はいつ頃から引き取りになったかはわからない。
- 一 公義の流人を居させた由である。
- 一 金山惣囲いの絵図を手形所に格護(保管)している。
- 一 山中の景気や何かに付いて詩歌発句並びに古文書等を所持している者はいない。
- 一 金山を召し立てられる以前古戦場、古陣場、御先祖様方の由緒がある地、また名将勇士その外古人の墳墓所などはない。
- 一 外財金山根元記
これを前々から持っている者がいる。
- 一 寺社10社、前々から立って居り、今も変わっていない。
- 一 永野山ノ神1社
但し、本地弥陀・薬師・観音3体。
- 一 山ノ神勧請のことは、宮之城主の島津図書頭久通が試し掘りをさせたところ、寛永17辰年(1640)3月22日始めて金を掘り出したので、万治元年戊中秋に建立した。開山座主は良秀院が勤めたと棟札にある。それから良秀院の子孫が勤めた訳は知れていない。当別当は先祖代六代が勤めている。
但し、当分別当の御扶持米は1日に真米1升づつ下されている。
神領高・寄付高などはない。
- 一 御祭1か年5度、正・5・9・11月16日が御祭で、別当から経・神楽を勤めている。
3月22日の御祭は当山開基初めの御祭。
- 一 御祈祷1か年3度、正・5・9月の月初めに般若心経1千巻を勤めている。もっとも御祭・御祈祷共に供物を渡している。
- 一 山ヶ野山ノ神1社

但し、本地弥陀・薬師・観音 3 体。

- 一 山ノ神勧請のことは分からない。万治 2 年(1659)亥年に立てた由。
- 一 開山は大泉坊子孫から勤めたのか、2 代目から 4 代目まで名前は分からない。5 代目は国分郷土津曲金蔵院が勤め、6 代目当別当先祖救仁郷長楽院が勤め、当代まで 4 代になる。

但し、当分別当の扶持米は 1 日真米 1 升づつ下されている。

- 一 御祭 1 か年に 4 度、正・5・9・11 月 16 日

但し、横川から太夫 1 人・社人 1 人が来て、神楽があり、別当も勤めている。

- 一 巨宝山久昌寺、禅宗、開山福昌寺 31 世嶺室和尚、建立年間は不詳
 - 一 琴月様(島津家久)御牌が安置してあり、嶺室 2 世山月和尚の代に安置した由。
 - 一 当分は 1 か月真米 5 升づつ御仏餉米を渡している。
 - 一 飛龍正観音堂 1 宇、2 世山月和尚建立
 - 一 金嶺山安養院、禅宗、本尊釈迦
 - 一 観音堂 1 宇
 - 一 島津図書位牌、法名当山開基湛水院殿徳源道智大居士
 - 一 真米 1 斗 5 升づつ御賦方として月々渡している。
 - 一 妙雲山^{えん本ノマ}遠活寺、法花宗、本尊釈迦、延宝 3 卯年(1675)建立、開山取要院日当
 - 一 薬師堂 1 宇、勧請年月は不詳、木像の背に永禄 4 辛亥年(1561)6 月 12 日入道並壽玉敬白とある。
 - 一 恵比寿堂 1 宇
 - 一 庚申堂 1 宇
 - 一 愛宕堂 1 宇
- 右はいずれも建立年月は不詳。
- 一 来迎山護念寺、浄土宗、本尊阿弥陀如来、開山宅誉上人から当代まで 7 世ばかりにもなるであろうか。
 - 一 天神社 1 宇勧幣、安永 4 年(1707)未 11 月から建立
 - 一 山ノ神 1 宇、九郎太郎正体観音
 - 一 虚空蔵堂 1 宇、所建立、年月は不詳。
 - 一 金山 3 町人、奥村正右衛門、早淵七左衛門、吉田五郎左衛門
右 3 人の由緒は別段金山町人のところにある。

以上

7 用語解説

借区(しゃっく)=鉱区の一部を借りること。

幹鍾(みきひ)=主脈のことか？

山師(やまし)=鉱脈の発見や鉱石の鑑定、採掘事業を行う人。

上〃山師(じょうじょうやまし)。「上〃」「上」「中」「下」「下〃」の五段階に位が別れ、給料に差がある。

跡向き(あとむき)=(テゴン子)=鉱脈を背に、鉱石や排石を背負って坑内から運ぶ役。

上〃跡向き(じょうじょうあとむき)=山師と同じく、「上〃」から「下〃」まで五段階あって、給料も差がある。

鎖(くさり)=鉱石・つる。

鍾(ひ)=鉱脈。

敷(しき)=坑口。鉱山の坑内。

湧上り(わきあがり)=鉱脈が露頭している所。

切山(きりやま)・山切(やまぎり)=探鉱。採鉱場。現場。大切。

大切(おおぎり)=坑道の高いもの。人が自由に通行できるくらい大きいもの。

金筋(きんすじ)=金が出る鉱脈。

スイショウレン(水上輪)=水引揚道具。佐渡金山で使用されており、アルキメデスの原理を使う。

砕場(せりば)=汰鉢でユリ、砂金を採る場所。川や水溜まりです。

汰鉢(ゆりばち)=比重選鉱法を用いるための道具。

砂と砂金の混じったものを水中で揺すって、砂金と砂を分離される。直径 80cm、深さ 10cm ぐらいの木製の浅い鉢。

御器掛(ごきがけ・ごきがかり)=黒い漆塗りの椀で、汰鉢と同じように揺すって砂金を採る。主に試掘りや砂金の確認用に使われた。

ルツボ(坩堝)=高熱を利用して物質の溶解・合成を行う際に使用する容器。

カガイ=葛や棕櫚縄で編み上げたものを袋状にし、中に荷物を入れて運べるようにしたもの。運搬用具として、牛馬に背負わせて使用していた。

アマルガム法=華粉に水銀を入れると、水銀と接触した金と結合し、アマルガムを形成する。他の泥粉は水で流す。アマルガムは熱を利用し、水銀を蒸発させて青金とする。

水車の場合、細かく砕かれた鉱石を水車の臼の中に入れ、約 12 匁の水銀を入れ水を注ぎながら杵で更に砕く。すると水銀と接触した金はアマルガムを形成する。大体 24 時間ぐらいで軽い泥は流れ出て、底に少し比重のある泥とアマ

ルガムが残る。これをユリ鉢に入れ、更に揺すり、最後にアマルガムを残す。次に、アマルガムを布に入れて絞ると、余分な水銀は布から出て、金を含んだアマルガムが残る。それをルツボに入れて炭火で焼くと、水銀は蒸発し、雑物は灰へと沈み青金が残る。

華粉・花粉(かふん)=金鉱石を砕き、臼で細かく摺り潰して粉にしたもの。天花粉状のもの。

ズリ=採算に合わない低品位鉱。

ドベ=金銀を取り終わった、カスの泥砂。アマルガム法を用いていた時は、採りきれなかった金分が多かった。青化製錬法が普及したときはこのドベからも金が多く回収された。

玉金(たまきん)・青金(あおきん)=ユッタ後の砂金をルツボの炭火の上に乗せフイゴで火を強くして、金を融かすして丸くなったもの。銀分が多いと青くしているので、青金ともいう。

吹金(ふききん)=フイゴで炭火を吹くので、ルツボで玉金を作ることを吹金と言った。

黒炭(くろすみ)=普通の炭釜で焼いた炭。

白炭(しろすみ)=備長炭などのように、炭釜で焼いて、一本一本取り出し、土をかけて消した炭。黒炭より火力が強く、また一定の火力が得られる。

御座(ござ)=藩主が来た時、宿所となった所。藩主がいる、鹿児島役所。

口屋(くちや)=関所。金山を垣で囲んであり、出入口の検問所のこと。

真米(まごめ)=現在ある普通の米。赤米との区別のため。

御物蔵=藩に関わる蔵。出物蔵は郷士などへ石高を出す蔵。

火入れ=火入れとは石の上で火を焚き、熱いうちに水を掛けて、温度差で石を割ること。

・ 銭貨は、鑄造による穴銭1枚を1文(もん)とする計数貨幣であり、銭1000文を銭1貫文(かんもん)とする通貨単位であった。

貫(かん)=3.75kg。1貫=1000匁。

匁(もんめ)=3.75g。

分(ぶん)=0.375g。

斗(と)=1.8039001。10升が1斗、10斗が1石。

写 真



羽島金山関連史跡位置図(図 16)



火薬庫跡か(写真 30)



(写真 31) トロッコ発着場



(写真 32) 野首坑口



(写真 33)通洞坑口



(写真 34)諏訪鍾鉦脈露頭(羽島南方神社境内)



串木野金山(西山坑)及び芹ヶ野金山(芹ヶ野坑)関連史跡位置図(図 17)



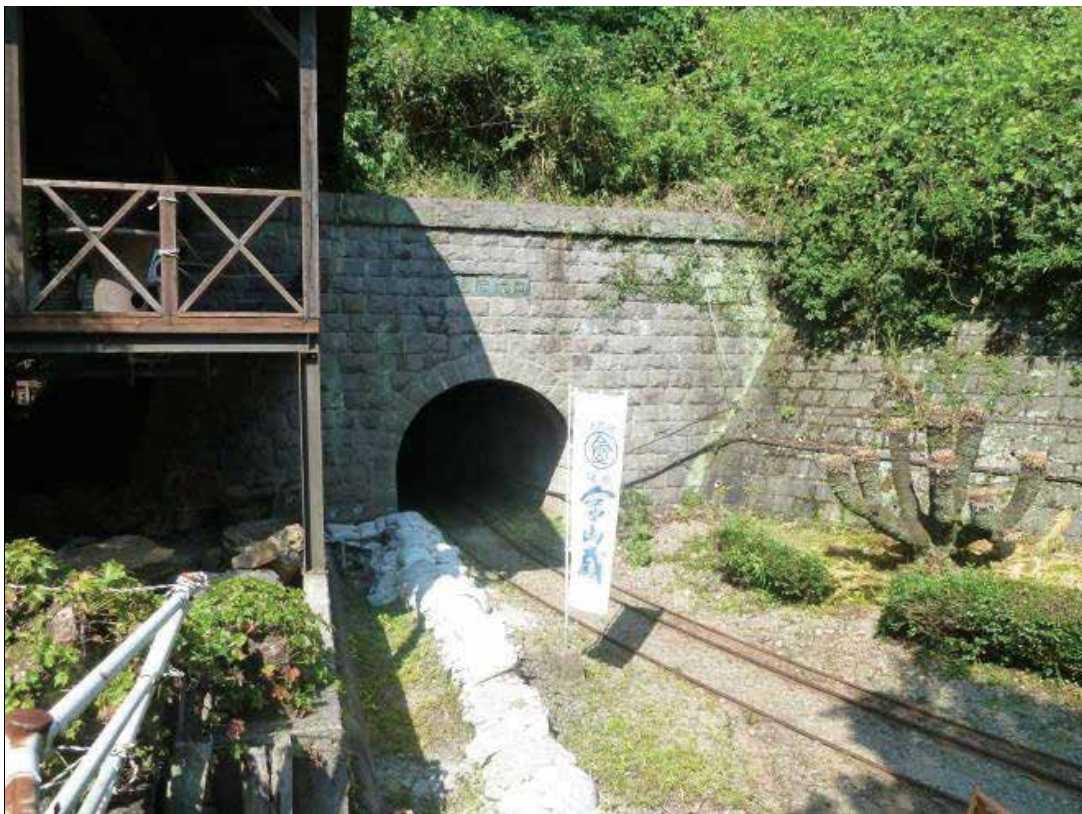
(写真 35) 椿平橋(市指定文化財)



(写真 36) 北口屋橋(市指定文化財)



(写真 37) 新原喜左衛門の墓



(写真 38) 串木野金山(西山坑)通洞坑跡



(写真 39) 芹ヶ野金山事務所跡 (磯庭園へ移設)



(写真 40) 大正 2 年に建設された発電所建屋



芹場金山関連史跡等(図18)



(写真41)吹田屋吉兵衛の墓



(写真42)鉦夫の墓(伝)

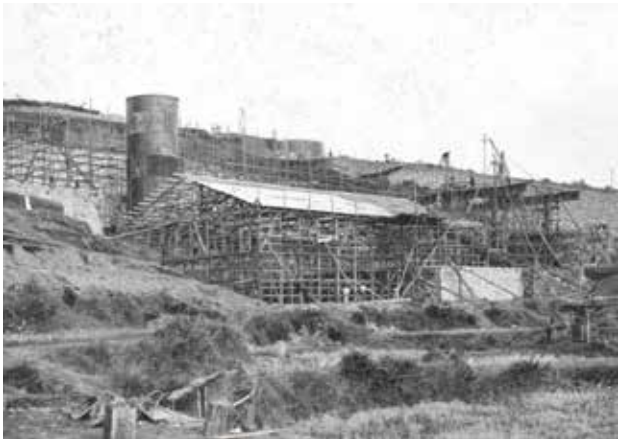


(写真43)鉦夫の墓(伝)

三井串木野鉦山株式会社より提供



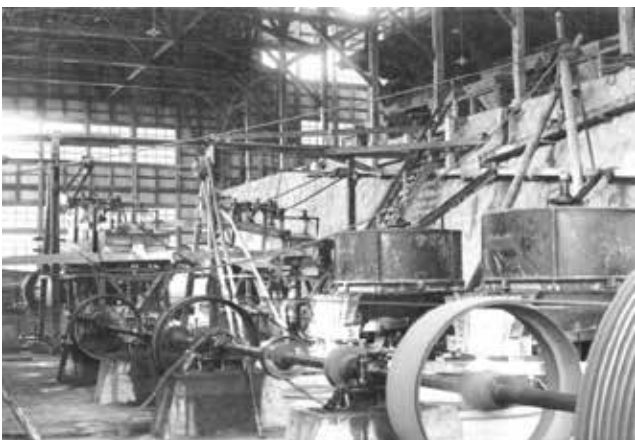
(写真 44) 本格建設工事前の串木野製錬所 (大正元年(1912)9月撮影)



(写真 45) 上屋組立中・ムーアクレーン
組立中(大正2年(1913)2月撮影)



(写真 46) 火力発電所建屋
(大正2年(1913)8月撮影)



(写真 47) チリアンミル試運転
(大正2年(1913)10月撮影)



(写真 48) ムーア濾過機試運転
(大正2年(1913)10月撮影)



(写真 49) 串木野製煉所全景

(大正 2 年 (1913) 11 月 撮影)



(写真 50) カリフォルニア式搗鉦機の試運転
(大正 2 年 (1913))



(写真 51) 大堅坑における団理事長西山坑巡視
(大正 4 年 (1915) 4 月 29 日 撮影)



(写真 52) 軌道による団理事長西山坑巡視
(大正 4 年 (1915) 4 月 29 日 撮影)



(写真 53) 串木野西山手掘作業
(撮影年不詳)



(写真 54) 早川千吉郎 (三井銀行常務) 一行
(大正 4 年 (1915) 12 月 1 日 撮影)



(写真 55) 一坑通洞前馬匹牽引鉦車
(昭和 3 年 (1928) 6 月 8 日 撮影)



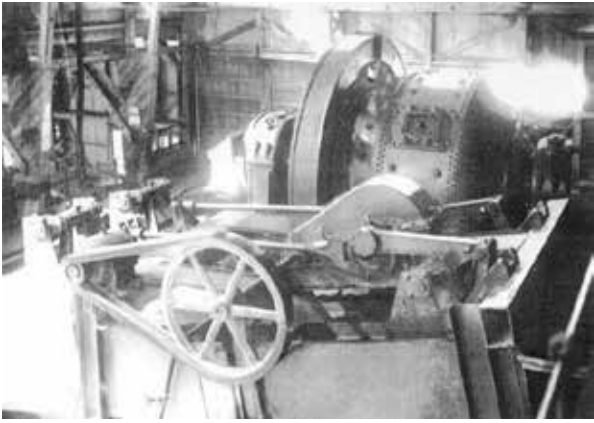
(写真 56) 一坑大壑坑周辺全景 (昭和 3 年 (1928) 6 月 8 日)



(写真 57) 串木野製煉所
(昭和 3 年 (1928) 4 月 5 日 撮影)



(写真 58) ペブルチューブミル
(昭和 3 年 (1928) 撮影)



(写真 59) 増設したボールミルと分級機
(昭和 8 年(1933)2 月 23 日 撮影)



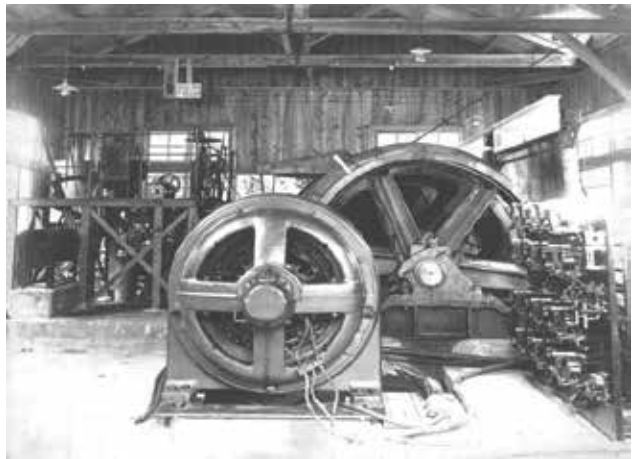
(写真 60) 増設工事中的のパチェカタンク
(昭和 8 年(1933)2 月 8 日 撮影)



(写真 61) 精金所で回収した青金 (撮影年不詳)



(写真 62) 1,300t/日増産起業完成時の
串木野製錬所(撮影年不詳)



(写真 63) 大堅坑巻揚機
(撮影年不詳)



(写真 64) 串木野鉱山西山坑通洞坑口付近
(撮影年不詳)



(写真 65) 串木野製錬所精金所
(撮影年不詳)



(写真 66) 串木野鉱山大堅坑櫓
(昭和 13 年(1938)10 月撮影)



(写真 67) 青化製錬所第二工場(400t/日)の建設工事
(昭和 14 年(1939)1 月撮影)



(写真 68) 三井鉱山(株)串木野鉱業所復興起工神事
(昭和 24 年(1949)11 月 3 日撮影)



(写真 69) 金鉱業整備令により施設を撤去した串木野製錬所第二工場
(昭和 24 年(1949)9 月 11 日撮影)



(写真 70) 串木野製錬所再建工事
(昭和 25 年(1950)1 月 27 日撮影)



(写真 71) 神岡鉱業(株)串木野鉱業所竣工式
(昭和 25 年(1950)5 月撮影)



(写真 72) 串木野鉱山一坑坑内穿孔作業
(昭和 25 年(1950)11 月 11 日)



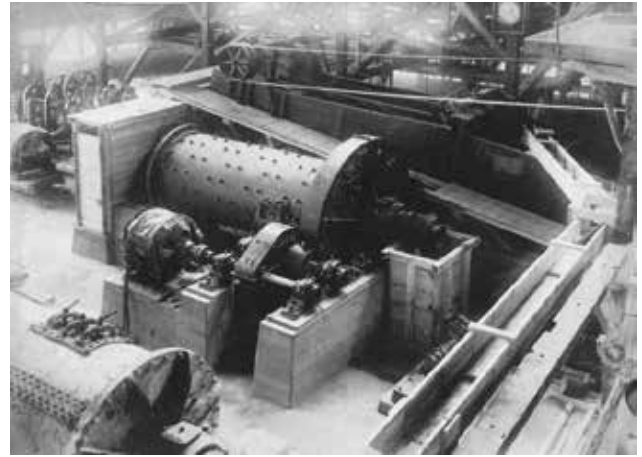
(写真 73) 串木野鉱山一坑通洞坑口出口
(昭和 25 年(1950)11 月 12 日撮影)



(写真 74) 再建された串木野製煉所(昭和 25 年(1950)12 月 18 日撮影)



(写真 75) 新二坑斜坑口
(昭和 25 年(1950)撮影)



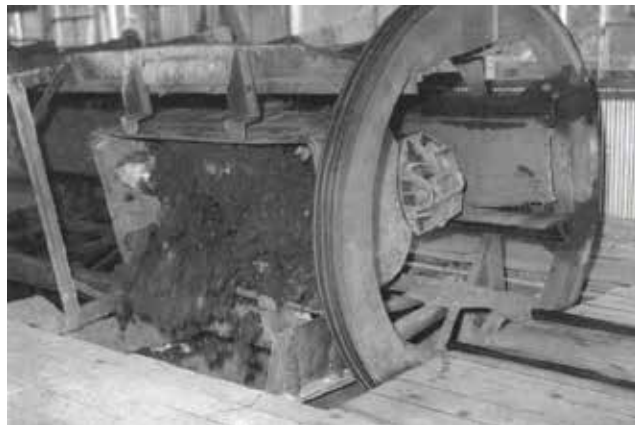
(写真 76) チューブミルと分級機
(昭和 25 年(1950)頃撮影)



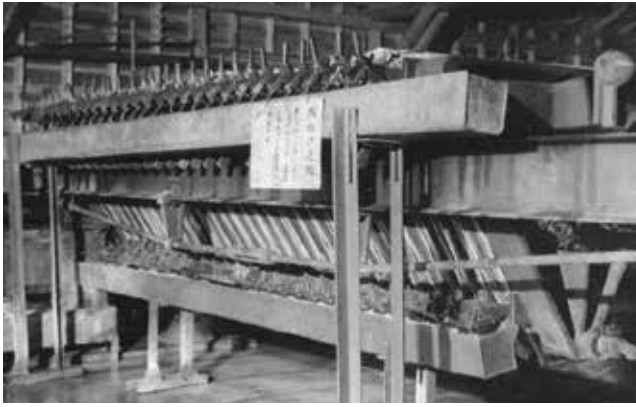
(写真 77) 串木野鉦山 1 号鑛露天掘
(恐らく昭和 25 年(1950)頃の撮影)



(写真 78) 串木野鉦山 1 号鑛露天掘
(撮影年不詳)



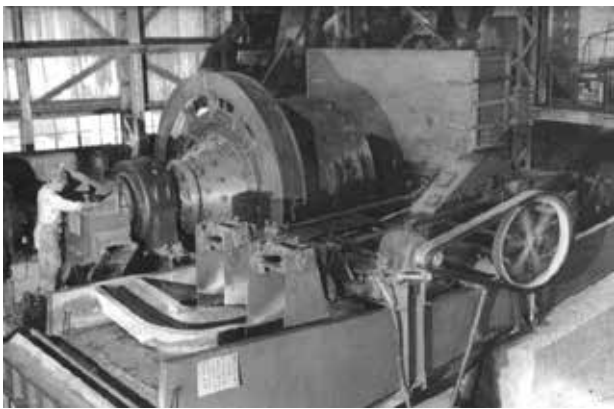
(写真 79) チップラーによる鉦石搬出(昭和 26 年(1951)2 月 3 日撮影)



(写真 80) メリル式圧搾濾過機
(昭和 26 年(1951)2 月撮影)



(写真 81) 串木野製錬所
(昭和 30 年(1955)前後の航空写真か)



(写真 82) コニカルミルと分級機
(昭和 26 年(1951)2 月 3 日撮影)



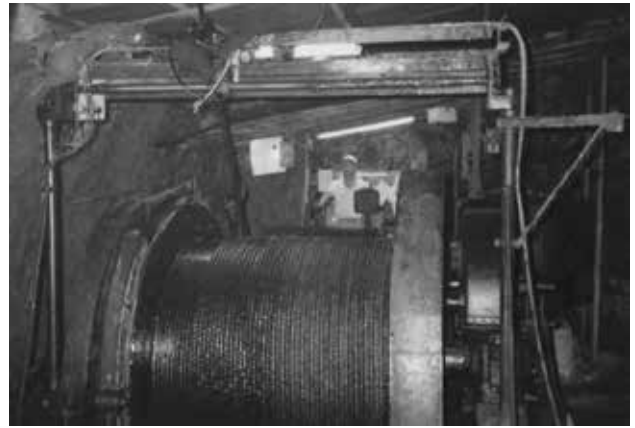
(写真 83) 串木野製錬所手選工程
(撮影年不詳)



(写真 84) 荒川坑での削岩作業
(9 番坑西 50 番採掘切羽)(撮影年不詳)



(写真 86) 三井串木野鉦山(株)新会社独立祝
(昭和 39 年(1964)10 月 1 日撮影)



(写真 87) 荒川坑 1 号斜坑 75kW 巻揚機
(昭和 55 年(1980)頃撮影)



(写真 88) 坑内試錐作業 (撮影年不詳)



(写真 89) 串木野鉦山東部斜坑
(昭和 52 年(1977)7 月撮影)



(写真 90) 荒川斜坑櫓
(昭和 59 年(1984)3 月 20 日竣工)



(写真 91) 三井串木野鉦山(株)製錬所・
リサイクル工場・総合事務所航空写真
(平成 26 年(2014)9 月 2 日撮影)



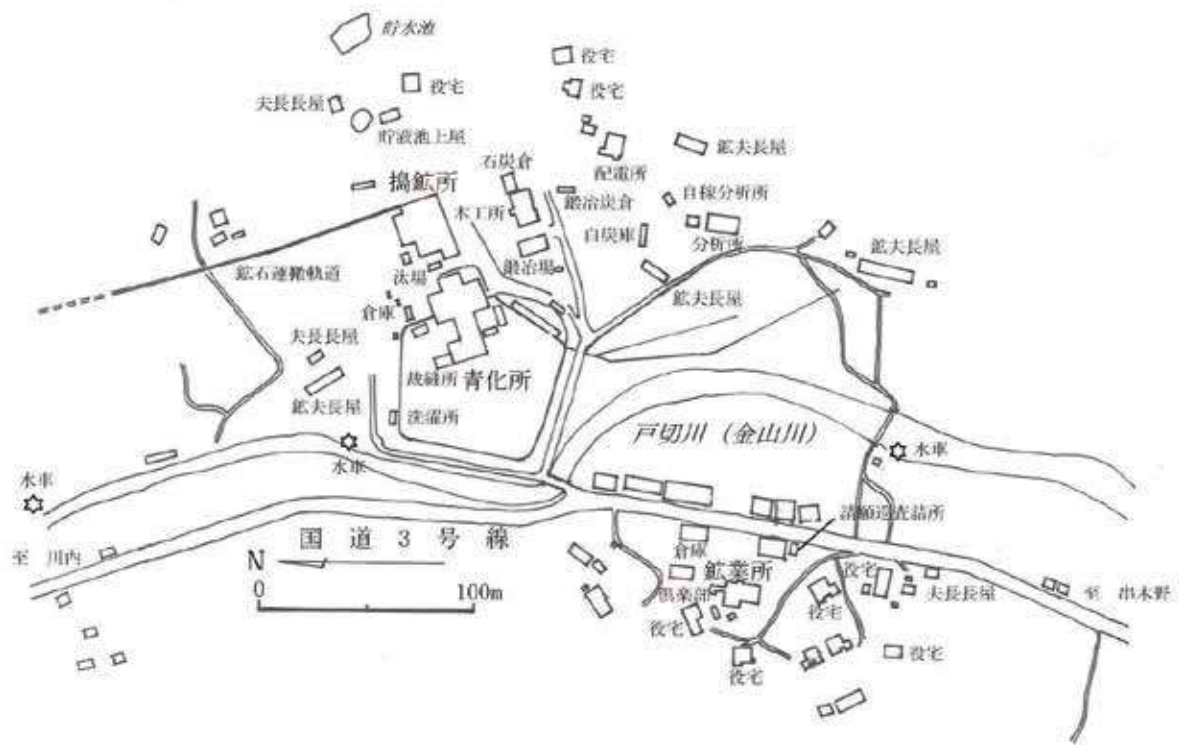
(写真 92) 島津家大田発電所
(平成 27 年(2015)9 月 22 日撮影)



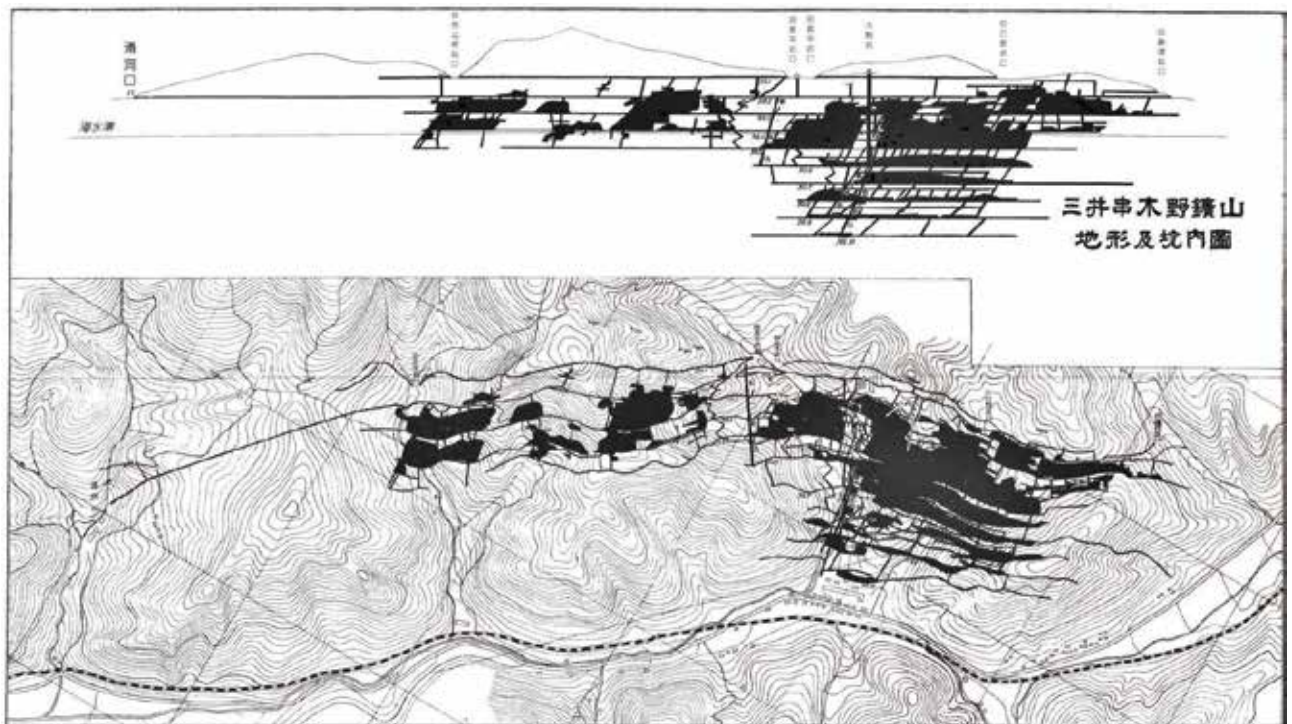
(写真 93) 水車と搗鉦機を描いた絵馬
(平成 28 年(2016)7 月 23 日撮影)



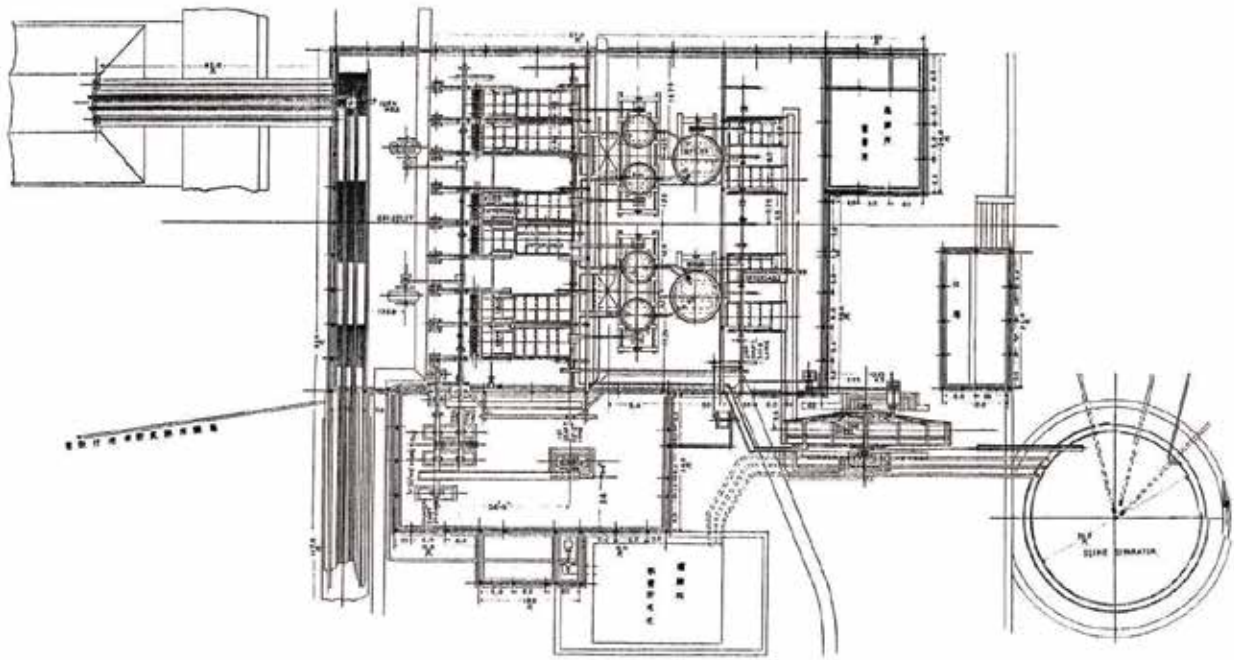
版



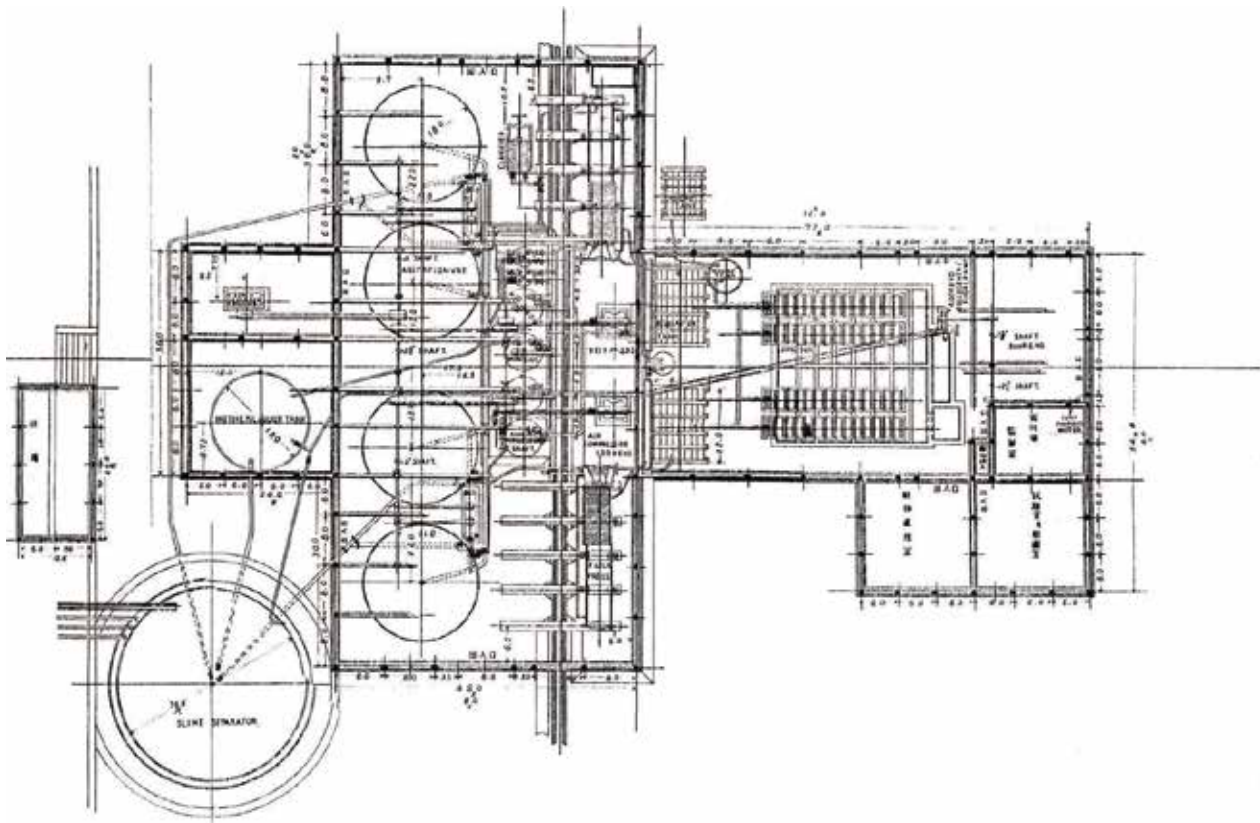
芹ヶ野鉦山製錬所施設配置図(図 19)



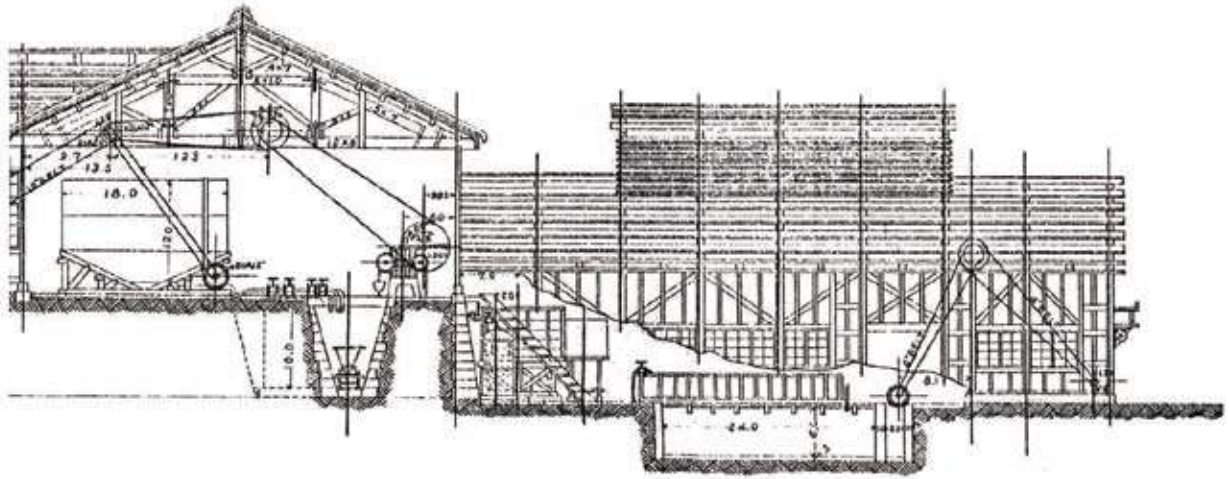
三井串木野鉦山地形及坑内圖(図 20)



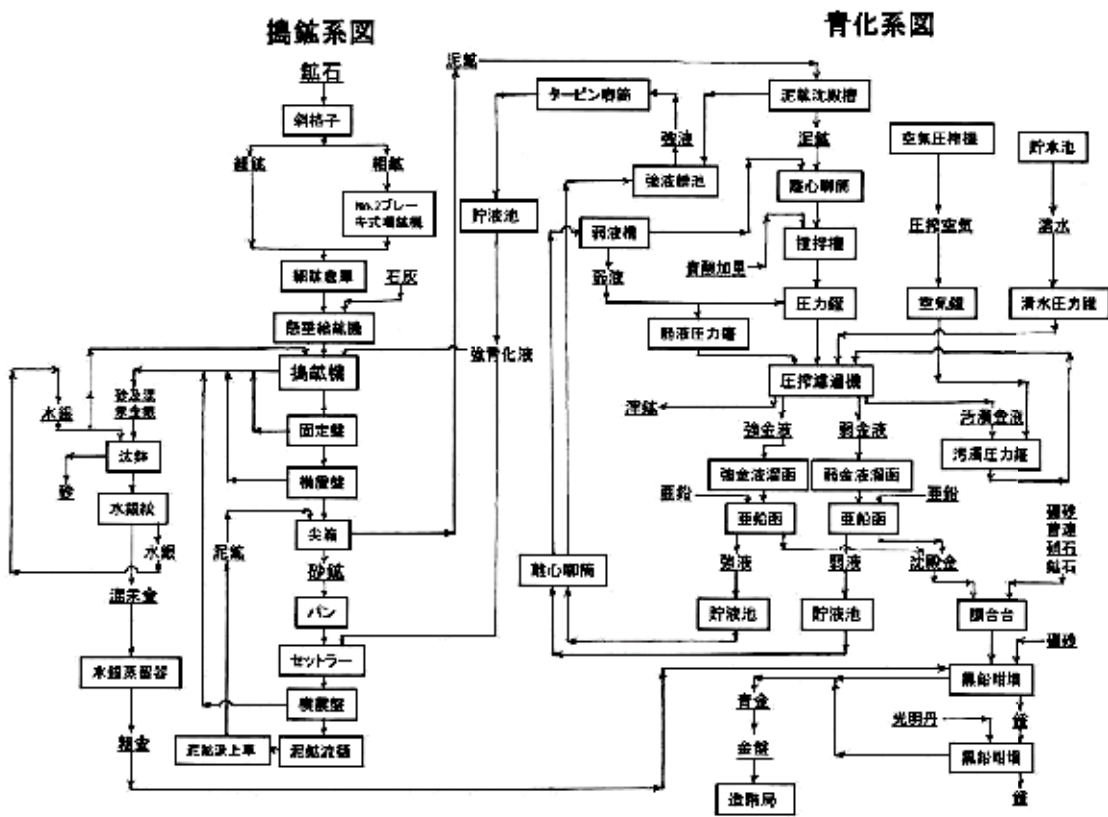
芹ヶ野鉦山製錬所平面図(1)搗鉦系(図 21)



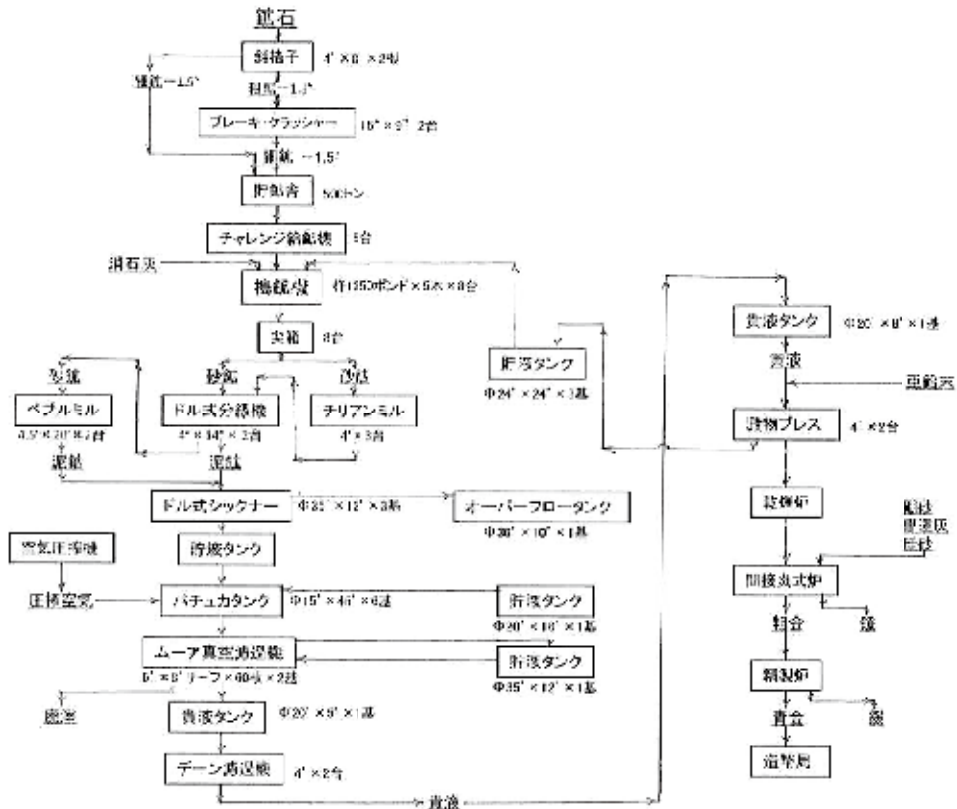
芹ヶ野鉦山製錬所平面図(2)青化系(図 22)



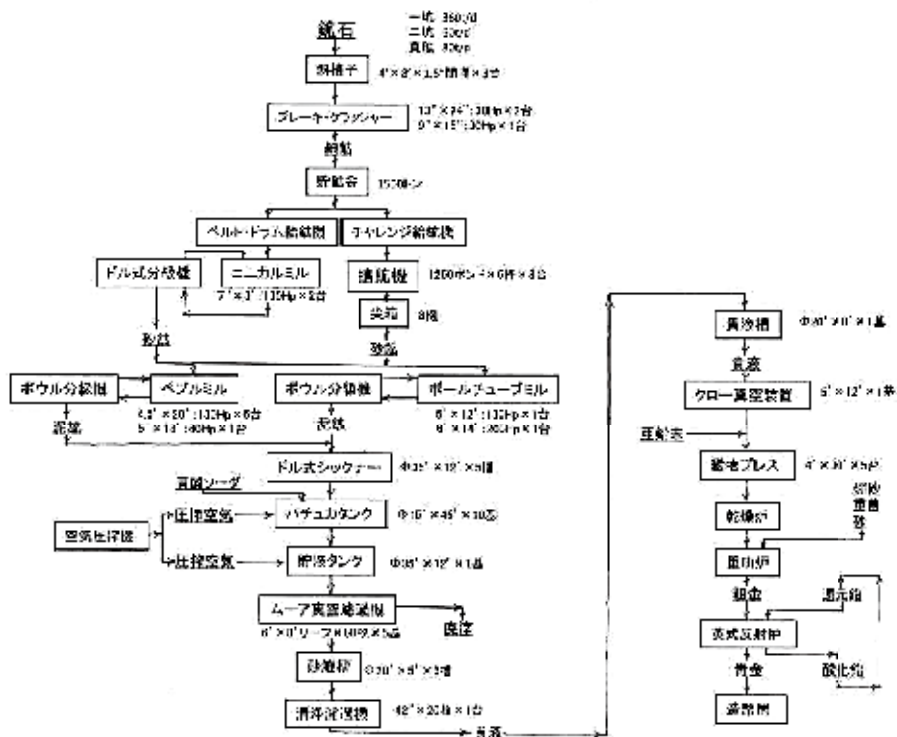
芹ヶ野鉱山製錬所断面図(1) 搗鉱系(図 23)



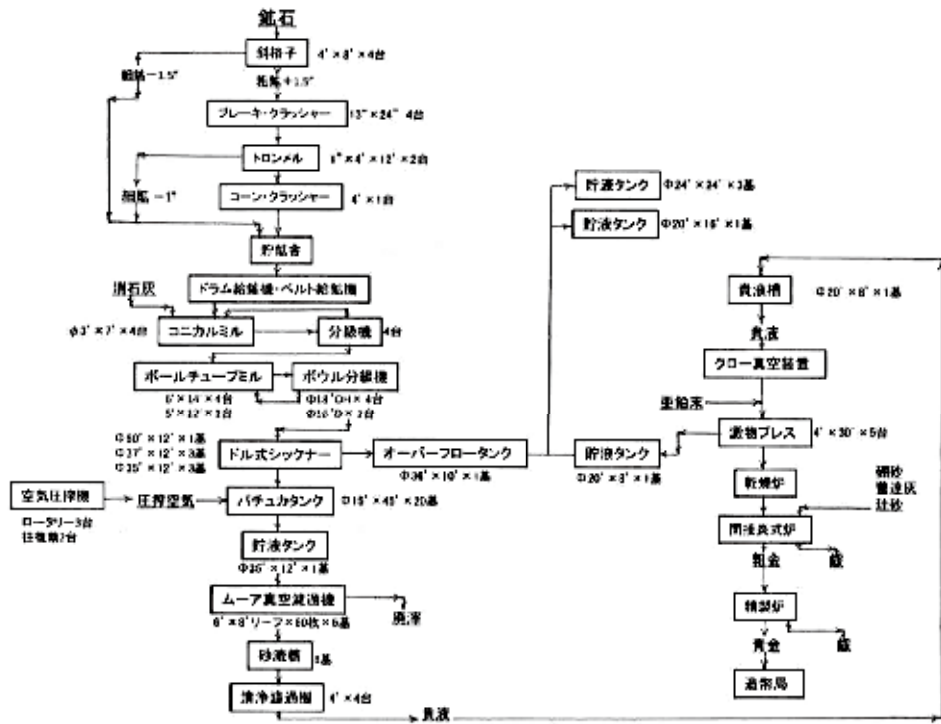
芹ヶ野鉱山搗鉱・青化系統図(図 24)



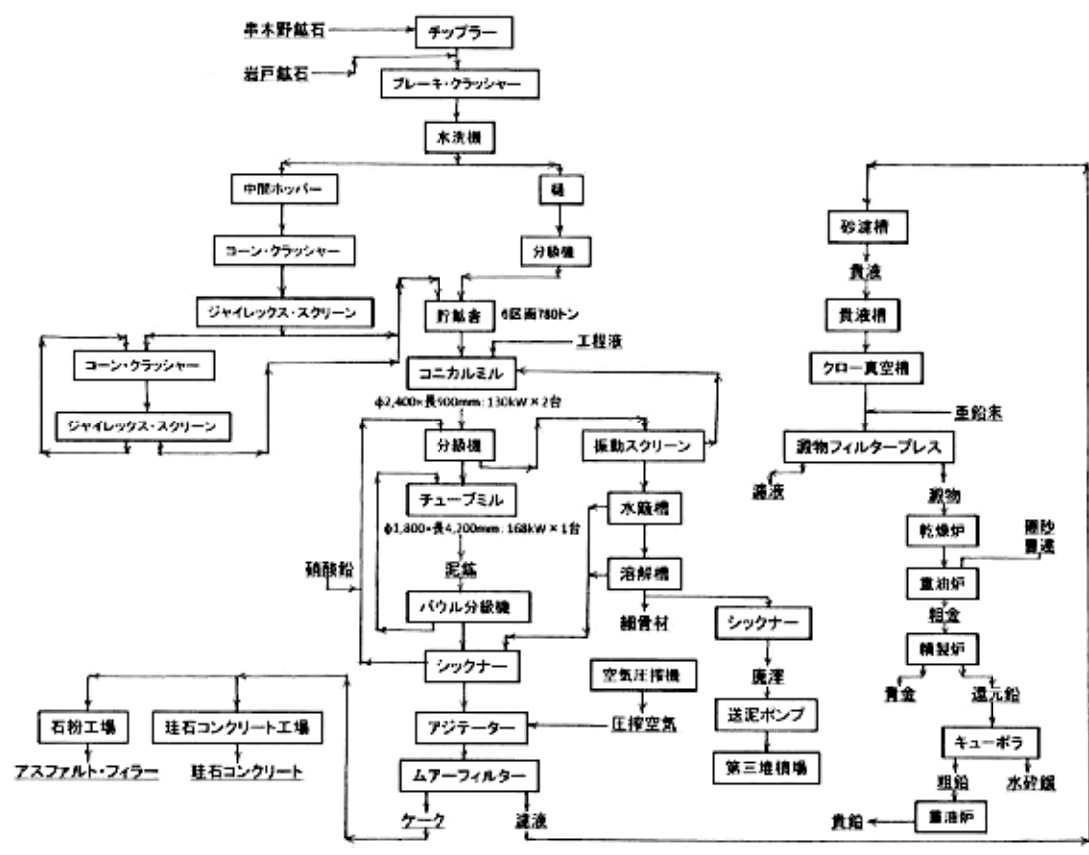
串木野製煉所工程図(昭和3年(1928)240t 日処理)(図 25)



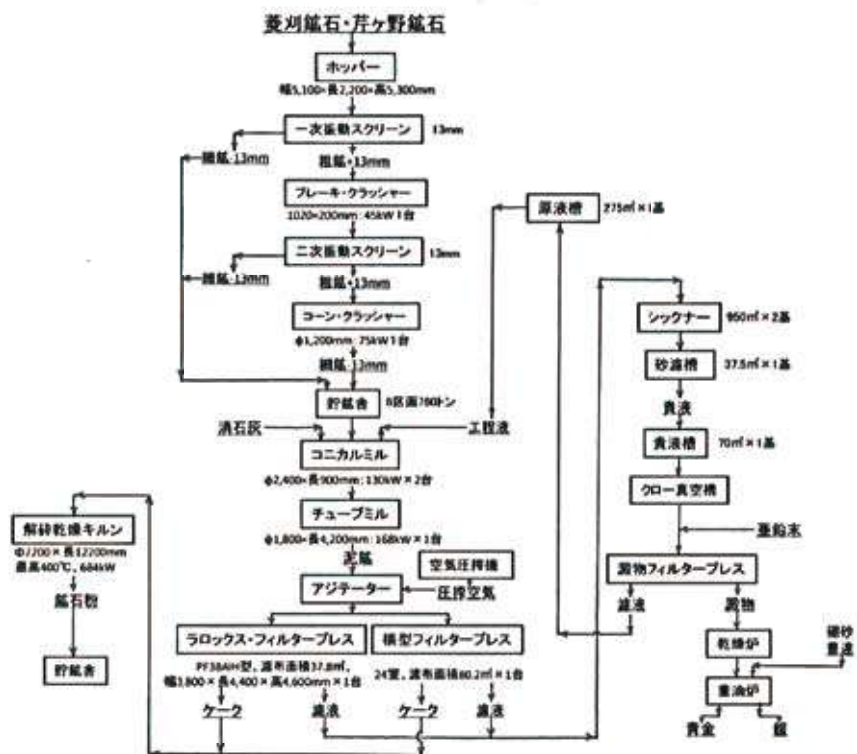
串木野製煉所工程図(昭和13年(1938)900t 日処理)(図 26)



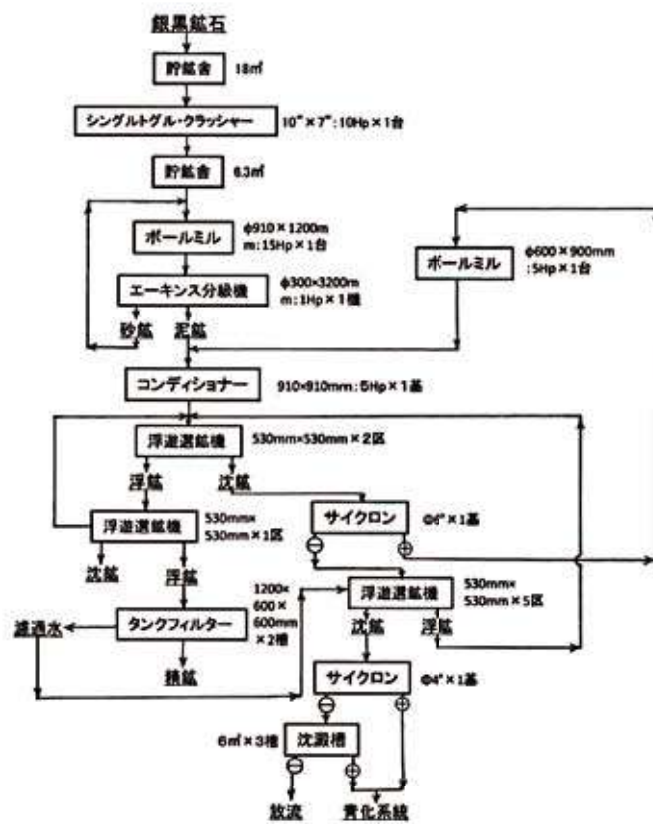
串木野製煉所工程図(昭和13年(1938)900t日処理)(図27)



串木野製煉所工程図(昭和55年(1980)500t日処理)(図28)



串木野製煉所工程図(平成27年(2015)170t日処理)(図29)



串木野製煉所銀黒磁処理工程図(図30)

【参考文献】

- 旭小学校創立百周年記念事業推進委員会 1980『旭小学校創立百周年記念誌』
- 旭小学校創立百二十周年記念誌編集委員会 2001『旭小学校創立百二十周年記念誌』
- 石川 哲 1994『山ヶ野金山古文集』私家版
- いちき串木野市国民文化祭実行委員会編 2015『「シンポジウム金山の歴史」資料集』
- 今村啓爾 1990 鉱山臼から見た中・近世の貴金属鉱業の技術系統、「東京大学文学部考古学研究室紀要」9. 25-74
- 今村啓爾 1997『戦後期金山伝説を掘る—甲斐黒川金山の足跡—』平凡社
- 今村啓爾・桜井英治編 1997 『甲斐黒川金山』塩山市教育委員会
- 岩崎重三 1901『日本鉱石学 第2巻 金』内田老鶴園
- 上野景明・三上徳三郎 1918『本邦鉱業と金融』丸善
- 浦島幸世 1989『日本金山誌 第1編 九州』社団法人資源・素材学会
- 浦島幸世 1993『かごしま文庫⑩ 金山 鹿児島は日本一』春苑堂
- 江口抱琴 1915『鹿籠金山誌』
- 小野義文 2006『串木野市の石造物等』
- 鹿児島県編 1940『鹿児島県史』鹿児島県
- 鹿児島県立串木野高等学校 1997『生きた地域文化の体験学習 旭を体験して』
- 鹿児島県立串木野高等学校 1998『生きた地域文化の体験学習 生福・冠岳を体験して』
- 桂市之助 1911『福岡鉱山監督署管内鉱区一覧』福岡鉱山監督署
- ” 1912 『 ” 』 ”
- ” 1913『福岡鉱務署管内鉱区一覧』福岡鉱務署編纂
- ” 1914 『 ” 』 ”
- ” 1915『福岡鉱務署管内鉱区一覧』福岡鉱務署
- ” 1916 『 ” 』 ”
- 三田尾松太郎 1917 『 ” 』農商務省鉱山局編纂
- ” 1918 『 ” 』 ”
- ” 1919 『 ” 』 ”
- ” 1920 『 ” 』 ”
- ” 1921 『 ” 』 ”
- ” 1922 『 ” 』 ”
- 納屋久 1923 『 ” 』福岡鉱務署編纂
- ” 1924 『 ” 』 ”
- 小野彌之助 1925『福岡鉱山監督局管内鉱区一覧』福岡鉱山監督局編纂
- 納屋久 1926 『 ” 』 ”

〃	1927	『	〃	』	〃
〃	1928	『	〃	』	〃
〃	1929	『	〃	』	〃
〃	1930	『	〃	』	〃
〃	1931	『	〃	』	〃
石井利吉	1932	『	〃	』	〃
〃	1933	『	〃	』	〃
納屋久	1934	『	〃	』	〃
〃	1935	『	〃	』	〃
〃	1936	『	〃	』	〃
〃	1937	『	〃	』	〃
〃	1938	『	〃	』	〃
〃	1939	『	〃	』	〃
〃	1940	『	〃	』	〃
〃	1941	『	〃	』	〃
〃	1942	『	〃	』	〃
〃	1943	『	〃	』	〃

- 霧島市教育委員会編 2013『山ヶ野金山現地調査報告書』霧島市教育委員会
- 桐原忠利 1973『山ヶ野小学校 90 年史、金山 300 年史』山ヶ野小学校史編集委員会
- 串木野市教育委員会 1984『串木野郷土史 補遺改訂版』
- 串木野市社会教育課所蔵『串木野史料二、三、四、五、六』
- 研究会 新東晃一代表還暦記念論文集刊行
- 五味 篤 2017、2018 製錬の歴史・串木野鉍山の技術発達史。「季刊・資源と技術」
第 2 巻 3 - 9 号
- 薩摩町郷土誌編さん委員会 1998『薩摩町郷土誌』薩摩町
- 新町 正 2012「薩摩における鉍山臼についてー山ヶ野金山及び芹ヶ野金山で使用され
た鉍山臼の特徴と分類ー」、『鹿児島考古』42、87-98 鹿児島県考古学
会
- 新町正 2014「薩摩で使用された鉍山臼に関する一考察」『鹿児島考古第 44 号』鹿児島
県考古学会
- 社宅研究会 2009『社宅街ー企業が育んだ住宅地』学芸出版社
- 竹中武夫 1984「金山こぼれ話」『串木野文化 第 6 号』
- 竹中武夫 1991『芹ヶ野金山あれこれ』誠広出版
- 竹中武夫 1998「金山意外史」『くしきの 12 号』串木野郷土史研究会

- 谷口一夫 2007『武田軍団を支えた甲州金一湯之奥金山一』新泉社
- 徳永律編 1994『串木野郷史資料集 3 芹ヶ野金山文書集（上）』串木野古文書研究会
- 新田栄治 2009「山ヶ野金山の開山事情と鉱山技術—関係史料と考古資料から—」『南九州縄文通信No.20 南の縄文・地域文化論考 新東晃一代表還暦記念論文集』南九州縄文研究会
- 新田栄治 2009 「山ヶ野金山の開山事情と鉱山技術」、『南の縄文・地域文化論考』下巻、21-40、南九州縄文研究会
- 新田栄治 2011a 「山ヶ野金山の開山事情と鉱山白からみた鉱山技術」、『鹿児島県霧島市上ノ・山ヶ野金山作業場跡推定地発掘調査報告書』21-36
- 新田栄治 2011b 「田町遊廓が示す山ヶ野金山への社会経済的意味」、『鹿児島県霧島市上ノ・山ヶ野金山作業場跡推定地発掘調査報告書』37-40
- 新田栄治 2013 山ヶ野金山初代山先役・内山予右衛門とその墓碑。「鹿大史学」60
- 日本鉱業史料集刊行委員会 1988 『真金山金山見聞之次第等』43-63、白亜書房
- 橋之口篤實 2002『私たちの野平地区（含む深田上）』
- 萩原三雄 2017a 勝沼氏館跡の金工房跡といわゆる「碁石金」に関する覚書。「武田氏研究」55、20-31
- 萩原三雄編 1992 『湯の奥金山遺跡の研究』湯の奥金山遺跡学術調査団
- 浜屋新編集委員長 1970 『荒川郷土誌』
- 麓三郎 1956 『佐渡金山史話』三菱金属鉱業
- 松永守道 1990『蒲生の金山、鉄山、刀工、砲工』（『蒲生史談会資料』第127）
- 松永守道 1992『蒲生町漆集落史』
- 三井串木野鉱山株式会社 不明『串木野鉱山沿革史 六 労務1』
- 三井串木野鉱山株式会社 不明『串木野鉱山沿革史 七』
- 南日本新聞 2011年11月18日付「みなみネット 串木野金山の歴史を探れ。」
- 森田清美 1996『かごしま文庫 35 さつま山伏』春苑堂
- 森田清美 1996『串木野まぐろ漁業史』串木野市船主組合
- 吉田陞 1997『山ヶ野金山物語』高城書房

いちき串木野市郷土史料集 2 「金山編」

2018年3月 刊

発 行 いちき串木野市教育委員会
編 集 いちき串木野市郷土史編集委員会
印 刷 南日本出版株式会社

